

第 69 回日米学生会議 報告書

The 69th Japan-America Student Conference

Annual Report



*Self and Society:
Sharing Perspectives &
Inspiring Action*

第 69 回日米学生会議

日本側報告書

題字

第 69 回日米学生会議日本側参加者

九州大学 21 世紀プログラム 1 年

下吹越 愛莉

University of California, Davis

Ph.D. Course of Mathematics

Class of 2020

Norman Sheu

目次

第1章	日米学生会議とは	5~10
	1-1. 実行委員長挨拶	6
	1-2. 本文中の略語	9
第2章	第69回会議概要	11~20
	2-1. 第69回会議 テーマ	12
	2-2. 第69回会議 開催概要	13
	2-3. 第69回会議 活動内容	15
	2-4. 第69回会議 実行委員名簿	17
	2-5. 第69回会議 参加者名簿	19
第3章	事前期間中の活動報告	21~74
	3-1. 第68回会議報告会 (12月3日)	22
	3-2. 参加者選考活動 (2月~3月)	24
	3-3. 春合宿 (5月5日~7日)	24
	3-4. 第8回 YFJ ヘリテージ (6月4日)	31
	3-5. 防衛大学校研修 (6月5日~6日)	35
	3-6. 沖縄研修 (6月30日~7月2日)	41
第4章	本会議中の活動報告	75~152
	4-1. 直前合宿 (8月5日~6日)	76
	4-2. 京都サイト (8月7日~11日)	77
	4-3. 愛媛サイト (8月11日~17日)	94

4-4. 三重サイト (8月17日~22日)	123
4-5. 東京サイト (8月22日~28日)	139
第5章 分科会の活動報告	153~256
5-1. 都市分科会	154
5-2. 外交分科会	171
5-3. 健康分科会	187
5-4. 思想分科会	196
5-5. 報道分科会	212
5-6. マイノリティ分科会	225
5-7. 文化分科会	244
第6章 事後期間中の活動報告	257~262
第7章 第70回会議概要	263~268
7-1. 第70回会議 テーマ	264
7-2. 第70回会議 開催概要	265
7-3. 第70回会議 活動内容	265
7-4. 第70回会議 実行委員名簿	267
第8章 後援・協賛・賛助・協力	269~286
第9章 メディアへの掲載	287~297





■□第1章

日米学生会議とは

第1章 日米学生会議とは

1-1. 第69回日米学生会議 実行委員長挨拶

「“顧み”じゃなくて、“省み”じゃない？」その一言で長きに亘った議論は幕を閉じた。と同時に「己を省み、人を知る。～価値観の共有か生まれる可能性～」をテーマに掲げた第69回日米学生会議実行委員会が発足したのである。第68回会議における経験を経て、私たちは次なる会議に理想を抱き、あらゆる希望を胸に船出をした。その時は、その後直面する荒波の数々を知る由もなかった。

実行委員会は1年を通して様々な問いに直面する。「日米」で「学生」が「会議」を今の時代にする意義は一体何なのか？偉大な先輩方と比べ、自分たちには何ができるのか？あらゆる価値観の物差しと自分の存在意義が衝突する。2016年8月に掲げた理想、進むにつれて浮き上がる現実。日米学生会議はこうあるべきという外からの期待、自分は他の実行委員からどのように見られているのかという自問。揺らぐ個々人の思いと、実態を上回る過度の想像。全てが相まって実行委員会を縛り付ける。それぞれが互いを自分の価値観から覗き見、そして判断する。実行委員の人数分、個々人の色眼鏡に沿った実行委員会が出来上がった。そしてその差が、チームとしての空気を乱したのだ。

しかし、私たち第69回会議実行委員会は、「省」の一文字に強くこだわるほど、長く苦しい議論を重ね、それぞれが抱く会議の理想像を実体化する作業を怠ることはなかった。だからこそいつ何時も、自分達の決めたテーマに何度も立ち返り、それを信じて進むことができた。人が抱く思い、発する言葉、全てに理由があり、意味があるのだ。だからこそ、自分の価値観を探り、人の価値観を理解しようと努める大切さをテーマに据えた。その信念を基に、どんな時も第69回会議実行委員は対話へと歩みを進めた。それぞれが等しい価値観を持つ「人」である。互いを尊重し合い、互いに歩み寄った。

日米学生会議は1934年に発足され、80年以上の歴史を誇る日本最古の学生団体であり、宮澤喜一元首相やヘンリー・キッシンジャー氏を始めとする名だたる大物アラムナイを擁する…等、形容する言葉を他団体より多く持つ。それ故に私たちは学生では体験し得ない責務に追われ、更には分裂も繰り返した。しかしそれでもこのチームが方向性を見失わず、最

後まで温かい空気と共に連帯し続けられたのは、この「人」として歩み寄る力があったから、であるように思う。時にはタスクが、時には日米学生会議の持つ歴史の重みが私たちを上回ることもあった。しかし、私たちはそれでも「実行委員会の」という肩書のついたメンバーではなく、「その人自身」として対話を続けたのだ。

このような空気感は 2017 年 4 月から新たに加わった参加者にも波及した。「日米学生会議」という重く輝く名前を前に、初対面の彼らは緊張を帯びる。経歴の輝き、英語のスキル、議論の鋭さ。それらの存在が、人を大きく見せた。「会議」である以上、そのような側面で人を判断してしまうのは非常に簡単である。議論を素早く、声高らかに進めるものは強く、JASC に相応しい人間であるかのような錯覚を覚え、反対に声を潜め、内で思考を溜める者は疎外されてしまうかのように思えてしまう。しかしそうではなかった。彼らは一人ひとりと向き合い、互いを知る壮大な冒険を始めた。次第に張り詰めていた緊張感が解け、代わりに温かな連帯感、安心感が生まれていった。ここでは自分のありたい姿であっていい、だってみんなが受け入れてくれるから。

社会に関して議論をする時、何故か人は知識を先行させてしまうものである。知識で組み立てられた論理は一見正しいもののように見えるが、それだけで問題が解決するとは限らない。意見に対して複雑に絡まる当事者の感情や実情。それらを一つ一つ紐解き、何を問題の本質としていたのか、探る作業が今の時代に必要不可欠だと私は思う。いくら「日米」という強い他の二国関係と比べて特殊な関係性を持っていたとしても、「日米学生会議」という歴史ある会議であったとしても、それらにかまけて机上の空論をしていたのでは意味がない。

「第 69 回日米学生会議」の実行委員及び参加者は、この壮大な挑戦に全力で挑んだ。勿論、3 週間という短い期間では、67 人全員に対してそして全ての社会問題に対して歩みを深めることはできなかつただろう。しかし、当会議での学びは必ずや今後の人生の糧となるだろうと私は確信している。彼らは今後、社会の通説に惑わされず、「人」に歩み寄り、自らの力で物事の本質に迫る力を存分に発揮していくはずだ。それこそが、「第 69 回日米学生会議」の意義であったであろう。そして、私たちの壮大な挑戦はこれからも永遠に続き、私たちの温かな連帯を永続させることを私は強く期待している。

最後に、第 69 回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、財団・企業の皆様、開催地の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、ISC

Inc.の皆様、日米学生会議アラムナイの皆様、その他様々な形でご支援、ご協力頂いた全ての皆様に感謝の意を表し、日本側代表として、ここに第69回会議終了のご報告をさせていただきます。本当にありがとうございました。

第69回日米学生会議 実行委員長
塩崎 諒平

1-2. 本文中の略語

JASC (ジャスク)	: 日米学生会議 (Japan-America Student Conference)
JASCer (ジャスカー)	: 日米学生会議の現役および過去の参加学生
IEC	: 日本側主催団体の国際教育振興会 (International Education Center)
ISC	: アメリカ側主催団体 (International Student Conferences)
EC	: 実行委員会、または実行委員 (Executive Committee)
AEC	: アメリカ側実行委員会 (American Executive Committee)
JEC	: 日本側実行委員会 (Japanese Executive Committee)
デリ、デリゲート	: 日米学生会議参加者 (Delegate)
ジャパデリ	: 日本側参加者 (Japanese Delegate)
アメデリ	: アメリカ側参加者 (American Delegate)
アラムナイ	: 日米学生会議の過去の参加者 (Alumni)
サイト	: 本会議開催地 (Site)
RT	: 分科会 (Round Table)
都市分科会	: 「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」分科会
外交分科会	: 「国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム」分科会
健康分科会	: 「社会の健康と個人の役割」分科会
思想分科会	: 「現代における思想の価値」分科会
メディア分科会	: 「報道の倫理」分科会
マイノリティ分科会	: 「マイノリティとマジョリティ：公正公平な社会の実現は可能か」分科会
文化分科会	: 「個人と社会における文化の意義」分科会
リフレクション	: 参加者が腹を割って会議の感想や反省点を話し合う場



■□第 2 章

第 69 回会議 概要

第2章 第69回会議 概要

2-1. 第69回会議テーマ

己を省み、人を知る。－価値観の共有から生まれる可能性－

Self and Society: Sharing Perspectives and Inspiring Action

第1回日米学生会議。「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念のもと、1934年に4人の日本人学生が太平洋を渡り、日米学生会議を創設した。満州事変勃発による日米関係の悪化を憂慮したが故の行動である。

第69回日米学生会議。創設当時の様相とは異なり、日米は良好な関係を築き上げ、その関係に疑問を呈する者は少なくなった。しかし、2016年11月に行われた米国大統領選挙の結果は、日米関係の重要な転機となる可能性を示唆している。この状況下では、日本も米国も互いの利害得失に議論の焦点を当てがちである。しかし、両国が互いの立場を越えてそれぞれの価値観を共有し、問題と向き合う必要があるのではないだろうか。この姿勢こそ、背負うものが少ない学生が果たすべき役割なのである。

現代社会の諸問題を議論するとき、自分が属する国家や企業など自らが置かれている立場から離れて意見を発することは難しい。時にこれは偏見となり、問題の論点を曇らせる。だからこそ、問題の当事者は何を求め、それに対して自分たちは何ができるのかということ、それぞれが置かれている立場を越えて考える必要があるのではないだろうか。第69回会議では、実際に問題のある現場に赴き、当事者の想いや現地の実情を自らの五感で体感する。こうして新しい価値観に出会い、立場を越え、相対的に問題を再考していくのである。

こうして出会う様々な価値観と接触する中で、苦悩する参加者もいるであろう。新たに出会う様々な価値観の中で、改めて自分を省みた時、自分の信念に対する揺らぎや弱さへの気づきに襲われることがあるかもしれない。やり場のないもどかしさは想像以上に苦しいものである。しかし、第69回会議は、この苦しみに果敢に立ち向かう参加者を歓迎する。そして寄り添い、共に乗

り越えたい。

このように、立場の利害得失を越え、苦しみをも越え、一人の「人間」として、世界を、そして「日米関係」を見つめ直す。第69回日米学生会議は、学生だからこそ担うことのできる役割、すなわち、日米両国の立場を越え、日米関係や世界を再構築する絶好の機会を提供するのである。

2-2. 第69回会議 開催概要

【主催】

一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】

第69回日米学生会議実行委員会

【後援】

外務省、文部科学省、米国大使館、一般社団法人日米協会

【賛助】（順不同）

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団、公益財団法人双日国際交流財団、公益財団法人平和中島財団、一般社団法人日米協会、大阪日米協会、京都日米協会、The Miner Foundation、日本たばこ産業株式会社、ANA ホールディングス株式会社、日本航空株式会社、楽天株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、協和発酵キリン株式会社、住友商事株式会社、日米学生会議同窓会

【開催期間】

会議開催期間：2017年8月7日～8月28日

事業実施期間：2017年4月1日

～2018年3月31日

【参加者】

日本側：35名（実行委員8名を含む）

米国側：32名（実行委員8名を含む）

【開催地と日程】

京都府：2017年8月7日～8月11日

愛媛県：2017年8月11日～8月17日

三重県：2017年8月17日～8月22日

東京都：2017年8月22日～8月28日

《京都サイト》

【後援】京都市

【協賛】三洋化成工業株式会社

《愛媛サイト》

【後援】愛媛県、松山市、西予市

【協賛】第69回日米学生会議 in 愛媛サポート委員会：愛媛大学国際連携推進機構・愛媛県商工会議所連合会、愛媛県商工会連合会、松山商工会議所、愛媛経済同友会、松山青年会議所、愛媛県国際交流協会、松山国際交流協会、今治市国際交流協会、松山容器株式会社

【ホームステイにご協力いただいた皆様】

天野 清子、石村 多賀子、片岡 寛人
木下 春馬、栗田 由美子、栗林 幸
佐々木 和枝、杉原 真紀、武安 友里恵
谷口 敏久、對馬 文代、中田 智津子
中田 陽三、永井 紀之、長野 誠、野本 典英
浜川 知子、東岡 幸江、兵頭 美穂
福本 鮎美、堀内 祥子、前谷 泰三
松本 かおり、三好 祐吾、村上 暢章
山岡 傳一郎、山本 真理子、吉田 真也
渡部 千春

《三重サイト》

【後援】三重県、桑名市、四日市市、津市、
伊勢市、鳥羽市、多気町、皇學館大学

【共催】（ものづくりパネルディスカッション）
国立大学法人三重大学

【協賛】津商工会議所、四日市商工会議所、
伊勢商工会議所、松阪商工会議所、鈴鹿商工
会議所、桑名商工会議所、上野商工会議所、
亀山商工会議所、尾鷲商工会議所、名張商工
会議所、鳥羽商工会議所、熊野商工会議所、
三重県商工会連合会、多気町商工会、JA 全
農みえ

【賛助】株式会社三重銀行、九鬼産業株式会
社、住友電装株式会社、三岐鉄道株式会社、
日本トランスシティ株式会社、伊勢志摩鳥
羽インバウンド協議会、相差海女文化運営
協議会

【協力】三重県商工会議所連合会、神宮司廳、
割烹大喜、海の博物館、三重県立相可高等学
校、万協製薬株式会社、浅井農園株式会社、
蒼築舎株式会社、パイロットインキ株式会
社、みて株式会社、吉田本家山林部、四日市
公害と環境未来館、四日市市立博物館、六華
苑、三重県立四日市高等学校、四日市公害語
り部・野田之一様、桑名の千羽鶴を広める会、
三重県立桑名高等学校、四日市港管理組合、
学校法人津田学園、宮澤 正明、鎌田 雄介

《沖縄自主研修》

【協賛】那覇商工会議所、沖縄都市モノレ
ール株式会社

2-3. 第69回会議 活動内容

1. 分科会活動

【目的】特定の議題に関して、5~7月の事前準備期間、8月の本会議期間を通して集中的に議論を行うことで、学生の知識向上と相互理解、その過程を通じた人格的成長を目的とする。

【分科会一覧】

- (1) 21世紀の都市の在り方と個人の生き方
- (2) 国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム
- (3) 社会の健康と個人の役割
- (4) 現代における思想の価値
- (5) 報道の倫理
- (6) マイノリティとマジョリティ：公正公平な社会の実現は可能か
- (7) 個人と社会における文化の意義

【活動概要】

本会議において活動の中心となる分科会が7つ設けられており、日米各5名の学生が、本会議期間中に30~40時間もの時間をかけて議論を重ねる。学生たちは、議題や開催地に対して理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修「フィールドトリップ」や調査などを行いながら、議論の質向上を図る。特に、フィールドトリップは討論の対象となっている問題の現場や現状を実際に知ることができる貴重な機会であり、現場や現状を知り、議論に必要な多様かつ具体的視点を得るための重要な活動となる。

2. 全体活動

【フォーラム】

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または現地学生を交えたパネルディスカッションなどを通して、参加者のみでのディスカッションとは異なる視点から知識を得たり、社会に対して学生の意見を発信したりする。

【スペシャルトピックディスカッション】

全員が議論できるような議題を定めて、所属分科会以外の学生と議論・交流を深める。

【リフレクション】

参加者が一同に集い、約3週間の共同生活で分科会における議論の対立や人間関係の葛藤から生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことにより参加者間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより、参加者に会議の充実や円滑な運営のために努力している姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。

【ファイナルフォーラム】

最終開催地の東京で行われるファイナルフォーラムでは、主として分科会の議論の内容や活動報告を行い、第69回日米学生会議の成果として現代社会が抱える諸問題に対する学生なりの視点を社会に発信する。



2-4. 第69回会議 実行委員会名簿

日本側実行委員会



塩崎 諒平

東京外国語大学 国際社会学部 ラテンアメリカ地域専攻 3年
コーディネーター：三重サイト
担当：実行委員長・財務・予算・防衛大学校研修



新郷 雅大

東京大学 工学部 システム創成学科 4年
コーディネーター：三重サイト・「現代における思想の価値」分科会
担当：副実行委員長・財務・報告会・春合宿・書記



有田 彩子

同志社大学 法学部 政治学科 4年
コーディネーター：京都サイト・「国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム」分科会
担当：広報・報告会・直前合宿・保健



河崎 涼太

同志社大学 グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科 3年
コーディネーター：京都サイト・「個人と社会における文化の意義」分科会
担当：選考・沖縄研修・交通経理・書記



齊藤 和平

九州大学 21世紀プログラム 4年
コーディネーター：愛媛サイト・「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」分科会
担当：広報・春合宿・直前合宿・報告書



中川 奈津子

慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年
コーディネーター：東京サイト・「報道の倫理」分科会
担当：選考・報告会・沖縄研修・交通経理



藤本 アベリーノ

群馬大学 医学部 医学科 5年
コーディネーター：愛媛サイト・「社会の健康と個人の役割」分科会
担当：選考・勉強会・リエゾン・保健



吉川 久美

慶應義塾大学 法学部 法律学科 3年
コーディネーター：東京サイト・「マイノリティとマジョリティ：公正公平な社会の実現は可能か」分科会
担当：広報・財務・沖縄自主研修・報告書

米国側実行委員会



Yuta Baba

Carleton College, History and Statistics, Class of 2019

コーディネーター：愛媛サイト

アメリカ側実行委員長



Jon Foissotte

Johns Hopkins University, School of Advanced International Studies, Class of 2018

コーディネーター：愛媛サイト・「国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム」分科会

アメリカ側副実行委員長



Erin Norris

Northeastern University, International Affairs and Political Science, Class of 2019

コーディネーター：京都サイト・「マイノリティとマジョリティ：公正公平な

社会の実現は可能か」分科会



Danyi Zeng

Smith College, Anthropology, Class of 2017

コーディネーター：京都サイト・「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」分科会



Ehenneden Idehen-Amadasun

Franklin and Marshall College, Government, Class of 2018

コーディネーター：東京サイト・「個人と社会における文化の意義」分科会



Eric Mueller

University of Wisconsin-Madison, Political Science, Class of 2018

コーディネーター：東京サイト・「現代における思想の価値」分科会



Jennifer Lim

Northeastern University, Communications and Business, Class of 2017

コーディネーター：三重サイト・「報道の倫理」分科会



Kaede Yoshioka

University of California, Berkeley, Chemical Engineering, Class of 2018

コーディネーター：三重サイト・「社会の健康と個人の役割」分科会

2-5. 第69回会議 参加者名簿

日本側参加者

氏名	大学	学部・専攻	学年	分科会
伊藤 江理華	東北大学	医学部 医学科	2年	都市
金澤 つき美	中京大学	総合政策学部 総合政策学科	3年	都市
阪上 結紀	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	2年	都市
戸嶋 寛太	東京大学	教養学部 文科一類	2年	都市
小倉 匠海	立教大学	異文化コミュニケーション学部	3年	外交
古賀 彩	防衛大学校	人文社会学専攻 人間文化学科	2年	外交
古座 匠	東京大学	経済学部 経営学科	3年	外交
岩井 凌太	同志社大学	スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科	4年	健康
長谷川 信寿	学習院大学	経済学部 経営学科	3年	健康
林田 将	九州大学大学院	工学府 航空宇宙工学専攻	修士2年	健康
藤本 ミケイラ	青山学院大学	文学部 フランス文学科	3年	健康
大野 友	早稲田大学	政治経済学部 国際政治経済学科	5年	思想
押切 彩	明治大学	経営学部 経営学科	3年	思想
野間 康平	京都大学	工学部 工業化学科	4年	思想
吉村 彩	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	4年	思想
新井 英貴	京都産業大学	文化学部 国際文化学科	4年	報道
大野 あゆみ	京都大学	法学部	3年	報道
豊坂 竹寿	東京外国語大学	言語文化学部 東アジア学科 中国語専攻	2年	報道
藤井 一樹	国際教養大学	国際教養学部 グローバル・スタディーズ学科	3年	報道
小島 直毅	北海道大学	法学部 法学課程	4年	マイ
佐々木 彩乃	九州大学	法学部	2年	マイ
リー ロイ	国際教養大学	国際教養学部 グローバル・スタディーズ学科	4年	マイ
渡邊 まり	国際基督教大学	教養学部 アーツ・サイエンス学科	3年	マイ
川崎 明宙	京都大学	工学部 物理工学科	3年	文化
下吹越 愛莉	九州大学	21世紀プログラム	1年	文化
松村 謙太郎	東京大学	教養学部 文科一類	2年	文化
諸星 渚	東京大学	教養学部 文科一類	2年	文化

米国側参加者

<u>Name</u>	<u>University</u>	<u>Major</u>	<u>Class</u>	<u>RT</u>
Kitanna Hiromasa	Washington and Lee University	Economics and East Asian Studies	2019	City
Carolyn Johnson	Franklin and Marshall College	History with a focus in East Asia	2017	City
Christopher Koontz	Wake Forest University	History and Japanese Language	2019	City
Ngan Vo	Shidler College of Business at University of Hawaii at Manoa	Business	2018	City
Sarah Bernt	Northeastern University	Political Science and International Relation	2018	Governance
Jalika Ceesay	University of Wisconsin-Madison	Political Science and Asian Studies	2018	Governance
Nicolas Grigsby	Shidler College of Business at University of Hawaii at Manoa	Marketing and International Business	2018	Governance
Eduardo Luis Herrera	Kalamazoo College	Political Science	2019	Governance
Kassandra Diaz	Washington University in St. Louis	Cognitive Neuroscience and Japanese Language	2019	Health
Nicole McNevin	Wheaton College	Anthropology and Urban Studies	2018	Health
Hirotohi Usui	University of California, Berkeley	Chemistry	2018	Health
Emika Otsuka	Carleton College	Political Science and Sociology	2020	Ideology
Carolyn Hoover	Duke University	Public Policy, Global Health and Japanese	2020	Ideology
Jin Tanizaki	University of California, Berkeley	Bioengineering	2018	Ideology
Duo Xu	University of Rochester	English	2018	Ideology
Jacques Chaumont	Williams College	Statistics and Japanese	2018	Media
Xingshen Zhang	University of California, San Diego	International Studies and Political Science	2018	Media
Christina Zhou	University of California, Los Angeles	Biology	2017	Media
Ethan Mattos	Hobart and William Smith Colleges	Public Policy	2018	Minority
Paola Resendiz	Franklin and Marshall College	Government	2019	Minority
Stephanie Spear	Yale University	Astrophysics and Anthropology	2019	Minority
Andrew Fischer	Washington University in St. Louis	Japanese Language and Culture	2019	Culture
Emlyn Mio Lee- Schalow	Rutgers University	Marketing	2019	Culture
EvaMarie Olson	Smith College	East Asian Languages and Literature	2019	Culture



■□第3章
事前期間中の活動報告

第3章 事前期間中の活動報告

3-1. 第68回会議報告会(12月)

■概要・目的

第68回日米学生会議実行委員会が発足してから3ヶ月。第68回日米学生会議報告会兼、第69回日米学生会議説明会を開催した。会の趣旨としては、アメリカで開催された第68回会議の報告を通して、会議にご協力していただいた全ての方々への感謝の意を表すとともに、日米学生会議の社会的意義を広く世間に発信することである。また、第69回会議の会議概要を初めて公式に発表する場でもあった。青山学院大学にて開催された会には、応募を考えている大学生や高校生、日米学生会議のアラムナイなど240名を超えるの方々にお越しいただき、大盛況のもとに終えることができた。

■スケジュール

【日時】2016年12月3日(土) 13:30~17:20

【場所】青山学院大学 9号館 930教室



■プログラムの詳細

▼第68回会議 報告

会議報告として、第68回会議の事前活動や、アメリカで訪れた4つのサイト(ボストン・ワシントンD.C.・モンタナ・サンフランシスコ)の活動報告、また分科会議論を代表して、「個人とナショナルアイデンティティ」分科会によるパネルトークが行われた。当会議の1年間の歩みを報告することを通して、日米学生会議がどのような活動を行っているのか、発表した。



(上) 会場の様子

(中) 全体活動報告の様子



分科会活動報告の様子



第69回実行委員が創り上げてきた会議の構想を発表し、次年度会議がどのようなものになるのか、ご来場の皆様に伝えた。



▼基調講演：茂木 健一郎氏



基調講演では、第38回会議日本側参加者で、脳科学者の茂木 健一郎氏にご講演いただいた。「安全保障」分科会のメンバーとして、ご自身が参加した時のご経験のお話や、現代の日本とアメリカの大学生のおかれている状況についてグローバルな観点からご意見を述べていただいた。

世界的にご活躍されている先輩の興味深いお話を、来場者の皆様はもちろん、実行委員やアラムナイの皆様も夢中になって聞き入り、会場は熱気に包まれていた。

▼第69回会議 概要発表

2017年8月に開催される第69回日米学生会議のテーマ、開催地、分科会、選考試験概要について初めて披露する場となった。

3-2. 選考活動 (2~3月)

■概要・目的

日米学生会議において、28名の参加者は会議を作る主体であり、非常に重要な存在である。11月下旬から2月23日の応募締め切まで、全国の大学生に対して広く広報活動を行い、応募者を募った。

参加者選考は1月から3月にかけて2段階で実施された。1次選考では論述試験を課し、2次選考は1次選考合格者に対して、最終合格を決めるため面接形式の選考をおこなった。2次選考に関して、今年度は京都、東京の2つの会場で、以下の日程で開催された。今年度より海外に渡航している学生を対象に、オンライン選考試験を導入した。

■スケジュール

▼1次選考試験

【募集】2017年1月18日(水)
～2月23日(木)

【形式】書類審査

▼2次選考試験 in 京都・オンライン

【日時】2017年3月10日(金)
～3月12日(日)

【場所】同志社大学 烏丸キャンパス

▼2次選考試験 in 東京

【日時】2017年3月17日(金)
～3月19日(日)

【場所】東海大学 代々木キャンパス

3-3. 春合宿 (5月)

■概要・目的

4月の選考委員会により最終決定した28名の参加者が2泊3日の合宿で初の顔合わせを行う。本合宿において、参加者は過去の会議参加者との交流を深め、日米学生会議の歴史を学ぶとともに、英語でのディスカッションや分科会活動などを初めとする日米学生会議の基礎を身に付け、夏の本会議に向けて最初の一步を踏み出す。

■スケジュール

【日時】2017年5月5日(金)~5月7日(日)

【場所】国立オリンピック記念青少年総合センター

5月5日

- ・日米学生会議 概要説明
- ・アイスブレイク
- ・分科会議論
- ・ようこそ先輩・懇親会

5月6日

- ・Wake-up Talk
- ・英語ディベート
- ・日米中関係についてのご講演
- ・分科会議論

5月7日

- ・Joint RT Discussion
- ・春合宿リフレクション

■各プログラムの詳細

▼日米学生会議 概要説明 (5月5日)

主催団体の国際教育振興会 代表理事 伊部 正信様より激励のご挨拶をいただいた後、実行委員自己紹介や8月までのスケジュール説明、ビデオによる日米学生会議の歴史紹介などが行われた。



(上) 伊部様によるご挨拶
(下) アイスブレイクの様子



▼ようこそ先輩・懇親会 (5月5日)

日米学生会議過去参加者の方々にお越しいただき、会議が現在のキャリアにどのように活かされているのかというエピソードや参加者に向けたアドバイス等様々な貴重なお話を伺う機会を頂いた。また、懇親会でも過去の会議における思い出話に花を咲かせる場面も見受けられ、大変有意義な時間となった。



(上) ようこそ先輩の様子

(下) 懇親会の様子



▼Wake-up Talk (5月6日)

2日目の朝には、目を覚ますために Wake-up Talk を行った。「人間」「教育」「科学技術」「宗教」「平和」の5つの分野の中から、各々が興味のある分野のテーブルに集まり、議論を交わした。



参加者の声

朝から人間について50分語り合おう、とはいかにもJASCらしい、濃い一日の始まりでした。

テーブルを8名ほどで囲み、『人間の定義とは何か』という命題から、『人と人の場にある空気はどう形成されているのか』『なぜ人は自殺するのか』と、思いもよらぬ方向にディスカッションが発展していき、ひとりひとりの真摯な疑問のぶつけ合いに、非常に良い刺激を感じ続けました。(藤井 一樹)

▼英語ディベート (5月6日)

JASCの議論は、基本的にはディベート型討論ではなく、お互いの持つ意見・価値観を共有し、聴き合う「対話」である。しかし、その対話をするにも、自分の持つ意見を論理的に構築し、相手に伝わりやすいように英語で伝えることがJASCでは重要になってくるため、春合宿では、英語ディベートを通してそのスキルを養った。

本プログラムでは、一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会 代表理事の中川 智皓様を講師としてお招きし、レクチャーと実践演習を行った。



参加者の声

私はこれまで、日本語での準備型ディベートの経験はあったものの、即興型のディベートや英語でのディベートを経験したことがなく、楽しみに思う一方で不安もありました。しかし、中川先生のレクチャーは初心者にも大変わかりやすく、ディベート最中だけでなく、普段から論理的に話を進めることができるようになるための要点を簡潔に理解することができました。

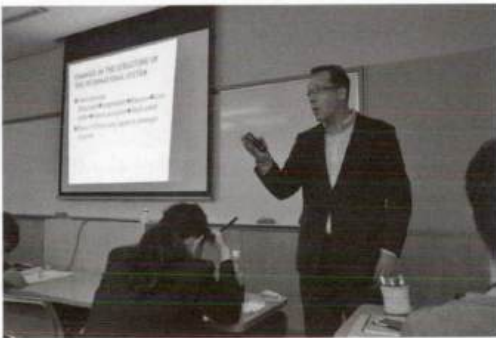
実践演習では、RTメンバーが二手に分かれ、相手チームとのディベートを行いました。準備時間が短く、思うように準備ができませんでしたが、本番を通して「どのように考えていることを簡潔に伝えるか」を意識しながら話す、ということを学ぶことができました。

また、自分がどのように話をするだけでなく、ペアを組んだメンバーと協力し合いながら進められたことも大きな収穫でした。メンバーそれぞれが違う知識を持っていますし、英語力もそれぞれですが、時間の制約がある中で、効率よくそれらを共有し、お互いの不足している部分を補い合いながら課題に取り組むということは今後の議論の中でも大変有用であると考えられます。この英語ディベートプログラムは、自分の能力に歯がゆい思いもしましたが、多くのことが得られた大変有意義な時間でした。

(金澤 つき美)

▼日米中関係についてご講演（5月6日）

1934年、満州事変後の日米関係の悪化を憂慮して創設された日米学生会議。その理念は、80年以上にわたって引き継がれている。JASCのDNAとして引き継がれ、今日でも日本の外交を語る上では欠かせない日米安全保障関係を中心に、国際基督教大学のStephen Nagy 上級准教授をお招きして、日米中関係についてレクチャーを行っていただいた。Nagy先生は、ご講演後も30分以上、教室で学生たちの熱心な質問に真摯に回答してくださいました。お忙しい中お越しいただいたNagy先生には、心より感謝申し上げます。



参加者の声

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」春合宿が始まったときはその理念に共感こそすれ、その言葉の意味を国際関係という文脈の中で真に理解したわけではありませんでした。

国際基督教大学のStephen Nagy 上級准教授のレクチャーは、その言葉の意味を再考する貴重な機会となりました。Nagy先生のレクチャーでは、

- ・日米関係の歴史
- ・緊迫する朝鮮半島情勢の背景
- ・台頭する中国とアメリカの力関係は世界のパワーバランスにどのように影響していくのか、といった点について、示唆に富む知見にたくさん触れることができました。

その中で私が最も気になったポイントは、「中国はこれから軍事・経済的な大国になりうるが、現在の時点では米国のように理念を広げる国にはなることは考えにくい。おのずとその影響力も限られてくるのではないか」という指摘です。その指摘はそもそも「パワーとは何か」という根本的な問いと深く結びついており、力関係が大きく変わりつつある現代だからこそ見つめなおす本質を見抜いた発言であったと思います。その力関係の大きな変化の地理・経済的中間地点にいる日本は、これからどのようにして自らの安全を保障するのか。このように、JASCという将来を担う日米の学生が会議で話し合いを始める前に必要不可欠な前提を多く学ぶことができました。

冒頭のJASCの理念は、いまは僕が会議に参加する意義そのものとなっています。日本を取り巻く世界情勢が急激に変化している中なぜ社会がJASCを必要としているのか。いま世界はどの方向に動いているのか。今年のJASCに参加する学生だからこそできることは何か。Nagy教授のレクチャーは、智慧と一緒に私たちが考えるべき重要な問いも69回目のJASCに残していきました。（大野友）

▼Joint RT Discussion (5月7日)

春合宿では、6時間ほど分科会議論の時間を取った。対面で議論できる春合宿で、一定程度方向性を決めて、先に進んで行ってほしい、という思いから、本年は分科会議論の最後に、お互いの分科会の様子を共有する時間を取った。



7つの分科会から1人ずつ集めたグループを作り、

- ・分科会としての目標
- ・Potential Discussion Topics
- ・フィールドトリップ先候補
- ・7月までのスケジュール

の4点について、発表と議論の時間を取り、お互いの分科会活動をより良いものにする議論を行った。

参加者の声

最終日、7つの分科会それぞれが議論を重ね、お互いの発表がありました。

一つの分科会につき学生5人、残り3か月で私たちは何をするのか。内輪の議論だけで終えてしまうのか？学生の身にしか過ぎない自分たちが話し合っても、それは既に社会で結論が出ていることなのでは？と

すれば、この会議に何の意味があるのか、と、容赦なく突きつけられる現実の課題。しかし逆に、その誤魔化しの効かない疑問を披歴し合ってこそ、自分たちがこの短い期間で本当に何ができるのか、真剣に考えさせられる。

こうした議論の後、全ての分科会が集まって発表をしていくのですが、そこで私が皆から感じたのは『お互いを助け合うこと』の精神でした。

一つの分科会の発表につき15分間時間を取るのですが、発表はそのうちのわずか3分で、残りの12分は全てQ&Aに使われること。ここで大事なものは、ただ発表しているのを聞いて終わり、ではなくむしろ聞いている側が主体になり、全力でフィードバックを返すということ。

私はそれまで、発表の場を『自分が聞いてただ満足する場』として捉えており、『自分がこの場の人たちに対して、今ここで果たして何を提供できるか』という視点に欠けていました。それに気づかされたのは、皆の批判的ならぬ建設的なコメント。『いや、それはできないでしょ』ではなく『こういう可能性がある、こうすればできると思う』と、メンバーの一人一人が真剣に向かい会おうとする姿に、感銘を受けました。プレゼンターが話している一連のワードから連想される、己自身の思考・アイデア。それをひたすら全力で書き留めて、自分が今までしてきた経験からは何が言えて、どんな情報を提供できるのか。ひたすら相手のスタンスに

立ったつもりで全力で支援しようとする
こと、この思考の転換に至ったとき、自分
の中で何かが変わり、大学に戻った直後の授業
でいつもより建設的に発言できている自分
がいました。この Joint RT を通しての成長
だったと思います。(藤井 一樹)



▼春合宿リフレクション (5月7日)

3 日間の春合宿、最後のプログラムは、
Reflection。全員が輪になって座り、1.5 時
間の静かな空間を作り、自分について振り
返る、JASC 伝統の場である。

参加者の声

春合宿最終日、議論をするために集ま
った私たちが、感情を共有しあうことにどん
な意味があるのかわかりませんでした。何
を目的としているのか？どんな作用が生ま
れるのか？そんな疑問だらけのまま、リフ
レクションに臨みました。

しかし、今はリフレクションをすること
が JASC には欠かせないことの 1 つである
と思います。発言者以外は誰も話さない、静
かな空間で、自分と向き合うこと。他にはな
い空間です。

そこで自分の感情を共有することで、共
感することもあるれば、自分なりの考えを発
見することもあると気が付きました。私に
とって、衝撃的な時間でもありました。対話
をするということは、意見が合わないこと
ももちろんあります。そのどちらが正しい
か、優れているのかを考えるのではなく、そ
の意見そのものを尊重し、自分とは違うも
のを認めるというのは容易いことではあり
ません。

けれども、リフレクションを行ったこと
で、少しずつメンバーが歩み寄っていくの
がわかりました。そして、より良い人間関係
が構築されていくことで、今後の対話にも
繋がっていくと思います。リフレクション
は私にとっても、全体にとっても大変意義
のある時間でした。(金澤 つき美)

■春合宿全体を通しての感想①

第69回日米学生会議の幕開けとして緊張
の面持ちで向かった春合宿は、自分自身と
向き合うことの重要性を認識させられた 3
日間でした。

恥ずかしながら私個人の話すれば、目
の前の状況から目を背けてしまうというな
んとも致命的な現実逃避性が未だに抜けて
おらず、そんな自分を変えられればと半ば
自暴自棄になって応募したこともあり、普
段は人見知りなどつゆ知らずな自分が合宿
初日の集合教室で「なんかすごそう」な周り
の同期に話しかけることも憚られたのが正
直なところでした。

(下) アイスブレイク@代々木公園



しかし、実際は、目の前のことから逃げる
ことよりも、向き合った時に露呈してしま
う乙の人間としての未熟さを嫌でも認識さ
せられることから逃げていたのではないかと
春合宿を終えた今思います。分科会の議
論であれ、ご講演の理解度であれ、ディベ
ートでの説得力であれ、同じぐらいの年数を
生きてきたはずの同期が持っている自分に
ないものの落差に自己嫌悪の念を抱き、一
瞬ひどく落ち込みました。それでも、思想分
科会のメンバーはたった2回目程の対面にも
関わらず自分の居場所となってくれ、数
えるほどしか言葉を交わしたことの無い参
加者でも、弱音を吐けば仲間の存在に気付
かされました。

まだ青二才の自分でも、まだ春合宿しか
経験していないとしても、こんな出会いは
滅多にないとわかるほど仲間に恵まれてい
ると感じます。「自分を変える」と覚悟を決
めて参加したからには、自己成長を叶えら
れる絶好の機会だと前向きに捉え、わから
ないことは積極的に喰らいつき、共に支え
合いながら、最後まで悔いのない学生目線

の議論を重ねていこうと誓う次第です。(押
切 彩)

■春合宿全体を通しての感想②

自分にとって春合宿で一番印象に残った
こと、それは『対話』でした。

合宿の前泊でさっそく深夜の3時まで語
り合い続けたこと。またその次の日の夜で
も同じ時間徹夜して語り合ったこと。ルワ
ンダの虐殺はなぜ起きたのか？男らしさ
(Masculinity) や女らしさ (Femininity) は
どう養われているのか？自分がふと感じた
疑問を口にすると、思ってもみなかった応
えがとっさに返ってくる。それに触発され、
また新たな視点からのアイデアが自分の中
に生まれる。日常の中で自然とディスカッ
ションが始まっていくこの土壌、これが自
分の求めていたことだ、と感じました。普段
大学の中でなかなかできずにいたことが発
見でき、JASCに参加した意義がここにあっ
たと、大きな喜びでした。分科会の仲間との
密なディスカッションはもちろん、Joint RT
で行った横同士の意見の交換などからも、
”みんな本当にすごい経験をしてきた人た
ちなのだ”と大きな刺激を受けました。



また、私はじっくりとした中での会話が好きで、夜中にメンバーと公園を周遊しながらお互い自分の大学のことを語り合ったり、部屋で一緒になった仲間と共通の学術的な興味・関心を発見し合ったり、そうした中での小さな語り合いが何よりも良い思い出となりました。残り3か月間、この尊敬すべき仲間たちとより深く語り合い、大きく刺激を受けつつ、将来に繋がる自己へと研鑽を重ねていきたいです。(藤井 一樹)



(上) ようこそ先輩集合写真

(下) 春合宿集合写真



3-4. YFJ ヘリテージ (6月)

■概要・目的

YFJ ヘリテージは年末の Annual Youth Forum と並び Youth Forum Japan (柳井 俊二会長) 主催の年間二大行事のひとつ。毎年の日米学生会議代表の激励会として今年で8年目の開催となった。YFJ は JASC 出身者により創設された JASC への貴重な支援団体の一つである。

2016年には国民投票によって、イギリスがEUから離脱することとなり、2017年にはトランプ政権が誕生するなど、世界各国が内向きになっていく潮流の中で、学生たちは世界とどのように向き合っていくべきか。各界第一線でご活躍中の渡部 恒雄氏(東京財団上席研究員)、羽場 久美子氏(青山学院大学教授)、そして近藤 大介氏(週刊現代編集次長)のご講演を通して、参加者たちはアメリカ、ヨーロッパ、中国の動向について知見を得、来たるべき本会議に向けて準備を進めていった。

■運営組織

【主催】ユースフォーラムジャパン

【公式サイト】<http://youthforum.jp>



■スケジュール

【日時】2017年6月4日(日)

【場所】日本外国特派員協会

(有楽町電気ビル北館20階)

■各プログラムの詳細

▼ご挨拶 柳井 俊二 YFJ 会長(元外務次官)

▼第12回ユースフォーラム結果報告・次回フォーラムの案内

第12回 Youth Forum Japan 実行委員長兼モデレーター 伊達 佳内子(慶應義塾大学 法学部政治学科3年・第67回参加者)からスライドショー(齊藤 和平編集)を利用しながら全体報告、日本代表パネリストの中山 悠太郎(東京大学大学院 教育学研究科 修士2年・第68回参加者)が個別報告を行った。



▼講演及び質疑(40分程度ずつ)

- ①渡部 恒雄(東京財団上席研究員)
「トランプ政権と日米関係の今後」
- ②近藤 大介(週刊現代編集次長)
「習近平の世界観」
- ③羽場 久美子(青山学院大学教授)
「欧州危機 - BREXIT、欧州選挙の行方」

▼学生紹介(第69回会議日本側参加者)

▼レセプション

乾杯: 愛知 和男 特別顧問

来賓ご挨拶

橋本 徹 前日米学生会議同窓会会長

島田 精一 津田塾大学理事長



■参加者の声

▼渡部 恒雄氏のご講演



6月4日、YFJヘリテージにおける最初のご講演は、「トランプ政権の外交と日米関係」と題し、笹川平和財団 特任研究員の渡部恒雄さまからでした。次々と物議を醸す話題が飛び出てくる米国のトランプ新政権の人事や政策に焦点をあて、外交、安全保障、日米関係やロシアゲートの行方など、話題は多岐に渡り、現状と未来の可能性についてご教示いただきました。

政治経験のない、異色の大統領となったトランプ氏。自国第一を掲げ、伝統的な共和党とは一線を画す考えで、大きな「変化」を約束し実行しようとする姿勢は、世界が経験したことのないものです。人格や素質を日々問われ、重責の中で精神的なバランスを保つ難しさも、初めてのことを成し遂げ誇る姿も見えてきます。

米国はもとより、世界は常に変化し、時代は進化を続けます。“Yes, we can!”で当選したオバマ大統領も、変化を掲げました。俳優から政治家へ転向したレーガン大統領もバブッシュからブッシュ Jr. へ父子で大統領になったのも異例です。ならば、なぜ、トランプ氏だけが「異色」なのか。なぜ主要メディアの多くが常に否定的な視線を向けるのか。今回のご講演は私に新たな疑問を提示するものとなりました。

答えはまだ未知ですが、否定的な報道だけで我々がみるトランプ大統領は本当に正しいのかどうか、考えるきっかけとなりました。肯定的な記事を読んでも、私自身、メディアによるプロパガンダでトランプ像を形成していることを気付かされます。自分の信じているものの土台に常に疑問を投げかけ、固執して視野が狭くならぬよう、考えていきたいです。(伊藤 江理華)

▼近藤 大介氏のご講演

奇しくも、天安門事件からちょうど28年経つ6月4日に、長年中国を研究しているっしやる近藤大介さんからご講演をいただ



きました。

日本企業にヘッドハンティングされて北京から東京に来られたという近藤さんの知り合いの方は、北京に比べて東京は田舎で驚いたと話していたそうで、そのことはとても興味深かったです。その人は日本に来て最初に財布を買ったそうですが、電子マネーが普及した北京ではスマホが財布の代わりになるため、財布は必要ないそうです。しかしその方曰く、東京は北京に比べて安静、干净、安全（静か、清潔、安全）という3つのいいところがあり、給料も減るが物価も北京より安いと、東京に来た方がいいと判断したといました。

経済、外交、国際援助などあらゆる場面で世界的に絶大な影響力を誇り、成長を続ける隣国、中国と日本はどう向き合っていくか考えさせられました。

習近平は北京出身です。肉食文化を持ち、歴史的にもしばしば大国の都となった北京人は皇帝思考が強いといます。私は、相手が力にものをいわせてくるなら、こちらも力で、というのは得策ではないと思います。巨大な中国を理解した上で、上手く立ち回りながら、中国から学ぶべきものを吸収し

てきた日本の歴史を、今こそ振り返る時かもしれません。(豊坂 竹寿)

▼羽場 久美子氏のご講演



6月4日(日)のYFJヘリテージ、3人目にご講演いただいたのは、国際政治学者の羽場久美子教授でした。中東地域の情勢不安に伴う移民流入と治安の悪化、そこからつながる2016年のBrexitなど、いまヨーロッパでは急激な地殻変動が起きています。講演では一つ一つの出来事の根本的な原因に迫る鋭い分析と、その底流に流れる大きなトレンドが浮き彫りにされ、聞いている方に緊迫感とリアリティが痛いほど伝わってくる時間となりました。

講演の中で印象的であったのは、マクロン新仏大統領が誕生したことによりポピュリズムの隆盛に一定程度の歯止めがかけられたのではないか、という分析です。しかしもしマクロン大統領の政策が失敗し、経済格差が拡大し続けるような事態が起きた場合、ポピュリズムのうねりは再燃して、ルペン大統領が誕生する可能性が高いという見方も同時に紹介されました。

Brexit から始まったように見えるいまのポピュリズムの流れも、元をたどればはる

か昔から続く一つの潮流に過ぎないのかもしれない。国民戦線の党首が仏大統領選の決選投票に進んだのも今回が初めてではありませんし、移民排斥は人種差別と絡んで20世紀初頭のアメリカにも見られた現象です(1924年の排日移民法)。振り子のように移民受容と排斥を行ったり来たりする旧来までの流れの中で、テロやグローバル化に伴う格差拡大という新しい問題に直面している欧州、というイメージが徐々に浮かび上がってきました。

ヨーロッパで民主主義や国民国家体制が生まれて世界中に広がったように、いまヨーロッパで起きていることは今後も世界中で起きうるのでしょうか。おそらくグローバル化は今後も進み、人・モノ・カネ・情報のボーダーを越えた移動はその規模とスピードを拡大し続けるでしょう。その中で、少子高齢化に苦しむ日本でも今の英仏で起きている事態がやってくることは十分考えられます。

世界情勢を地域的にではなく大局的にみることで、また自分が今いる位置との結びつきを意識することの大切さを、羽場教授の講演から学ぶことができました。(大野 友)

3-5. 防衛大学校研修 (6月)

■概要・目的

本研修の目的は、神奈川県にある防衛大学校での一日の研修を通して、日本の安全保障について見識を深めることにある。

外交・安全保障について議論をするとき、我々は簡単に「自衛隊は～」と発言する。しかし、我々は自衛隊のことをどれほど理解して発言しているだろうか。

そこで、第69回会議実行委員会は、我々と同年代で、将来の自衛隊を率いていく防衛大学校の学生の生活を理解し、議論を通して見識を深めるべく、日米学生会議史上初の1泊2日の防衛大学校研修を企画した。

■スケジュール

【日時】2017年6月5日(月)~6月6日(火)

【場所】防衛大学校

6月5日

- ・特別講義①「習近平政権の現状と中国の国際情勢認識」(国際関係学科 佐々木講師)
- ・防衛大学校ツアー・学生舎見学
- ・特別講義②「中国の軍事戦略」(平山講師)
- ・防衛大学校長 國分 良成様 激励のお言葉
- ・校友会(部活動)見学
- ・学生討議

6月6日

- ・特別講義③「Cyber Capability Building」(井手講師)

■各プログラムの詳細

▼特別講義①「習近平政権の現状と中国の国際情勢認識」(国際関係学科 佐々木講師)

現代における日米関係を考える上で、中国の動きは見逃せない。佐々木講師に上記の題でご講演いただいた。



参加者の声

ここ数年の中国の対外強硬的とも言える態度はどこからくるものなのか。習近平政権になってからの彼への権力の集中は、去年10月の全国人民代表大会で「党の核心」と位置付けられたことが端的に表している。歴代指導者の中で毛沢東、鄧小平、江沢民しかいなかった。我々の世代では前総書記の胡錦濤が領導してきた中国の記憶しかないし、彼の領導時代ではそこまで「強い中国」をイメージさせることはなかったから、余計に習近平氏の元の集団指導体制が強力に見える。対外的な強硬姿勢も、前政権とは違って、明確な国家ビジョンを国民に打ち出して、それを強力なリーダーシップによって実現することで、共産党統治の正当性維持と国内治安の安定を目指すという国内政治のロジックの一環でしかないのではないかと思った。現に中国の国家予算を見て

も、国内の治安維持費用の伸びが軍事費のそれ以上であるからして、彼らが治安維持を最重要視しているのは明らかではあるまいか。

現状の国際情勢が中国に利なしと中国自身が考え、結果として対外的軍事拡張に出るのは、未だに中国はヨーロッパが近代に築いた国際法の体制に正面切って正論を持って異を唱える能わずということ、いやでも自覚しているのだろう。だから国内のナショナリズムを作り出し、世論形成を謀ることで「これがわが人民の意思である」とすれば、アメリカを始めとする民主主義国家を交渉のテーブルに座らせ、自国に少しでも有利な国際政治体制の構築ができると考えているのではないかと思った。しかしナショナリズムを作り出せば、共産党の批判に繋がることは彼らにとっても国内統治の観点から好ましくなくなるというジリ貧の状態に彼らはいるのであるまいか。一旦つけたナショナリズムの火が、巨龍の体を覆い尽くし手遅れになるような事態は周辺諸国にとっても好ましくない。暴れ狂う巨龍の火の粉によって、どういった火事が周りで起こるのか全く予想はできないのだから。(小倉 匠海)

▼学生討論

防衛大学校研修 1 日目の最後のプログラムは、毎年恒例の学生討論。防衛大学生とともに、入浴・夕食を済ませた参加者は、点呼の様子を見学し、その後 2 週間ほどかけて

準備してきた学生討論に臨んだ。

参加者の声①：都市分科会



CityRT の学生討議では主として「沖縄になぜ基地が必要なのか」「国家は何の為に存在するのか」「21 世紀の特性とは」「個人にとっての幸せな生き方とは何か」という話をしました。

特に最後の話題については各人の育ってきた環境により意見が大きく異なり、「多くの選択肢の中から自分にとって納得のできる選択をすることが幸せ」という意見もあれば、「そもそも、環境に恵まれ、幸せとは何かを思考できる時点で幸せ」という意見もありました。

防大生の知識の豊富さに刺激されつつも、議論全体を通じて、防大生・JASCer が同じ土俵に立って議論することができ、彼らも自分たちと同じく、悩み、もがく、等身大の人間なのだなど実感できたこと自体に大きな収穫があったと思います。(戸嶋 寛太)

参加者の声②：マイノリティ分科会

マイノリティ RT の学生討論は、「自衛隊

の中の女性進出」を皮切りに、「自衛隊の在り方」「日米安全保障と憲法九条の関係」「自衛隊に対する一般人のイメージ」「愛国心とは何か」「国に対する帰属感」といった幅広く熱のこもった議論をしました。一緒に食事をし、お風呂に入り、零時すぎまで夜更かし、そういったものから防大生は我々とそこまで変わらない若者と分かったとしたら、学生討論で本音の交流を通し、彼らと私たちの間の根本的な違いが明白になりました。



結局のところ、日本の安危に関わる事件が起こった時、最前線に踏み込むのは恐らく私たちではない、彼らです。日々の生活で国防を常に心得ないといけないのも私たちではない、彼らです。背負っている責任の重さの差から生み出されたのは覚悟の差です。防大生はみな考えが深く、強い信念を貫き通して日々を送っています。同い年なのに、自分と比べて何倍も大人っぽく見える彼らに、思わず尊敬の心に溢れている。(リー ロイ)

参加者の声③：文化分科会



文化RTの学生討議では、「沖縄の戦略的価値とこれに対する国民の認識のギャップ及び反基地感情について」、「安全を保障する側、される側の互いに対する印象、思い、願いなどの差について」、「軍人の精神的支柱としての文化について、古来より兵士が精神的な支え、根拠としてきた文化的要素やその変遷について」主に討議しました。

討議を通して、彼ら一人ひとりの内面性や人間性などに触れることができ、防衛大の大学生というある種、ステレオタイプのような目で彼らを見ていたことに気づかされました。「防衛大の大学生」は、彼らを構成する要素の一部にすぎず、人間と人間の「対話」ができたことが大きな収穫でした。このような対話を、ぜひ本会議でも重視したいと強く思いました。(下吹越 愛莉)

▼特別講義③「Cyber Capability Building」 (井手講師)

国防について考えるとき、現代の文脈ではサイバー攻撃についても考えなければなりません。井手講師にサイバー攻撃に対す

る備えについて、ご講演いただいた。



参加者の声

6月6日。この日は日米において何があったか、ご存知でしょうか？日米間ではミッドウェー海戦があった日です。

講義内容はサイバーセキュリティについてです。ちなみにミッドウェー海戦とは、太平洋戦争中の昭和17年（1942年）の6月5日～7日にかけて、日米の海軍が繰り広げた大規模な戦いのことで日本海軍は空母4隻、航空機約300機等を失うという大きな損害を受け、以後の作戦の主導権をアメリカ軍に譲り渡すこととなります。まさに太平洋戦争のターニングポイントとも言える戦いでした。この戦いにおいても「情報収集と分析」は戦略を練る上でも非常に重要でした。井出海佐がお話して下さった「サイバーセキュリティ」と関連するものです。

最初のコンピュータは弾道計算をするために開発されました。情報利用が進んだこの世界では、旧来の火力や機械力のみで軍事力を測ることはできなくなります。この講義を聞いて国と国とが衝突するとき、もっとも重要な力とは何なのか考えさせられ

ました。軍事でも活用できる教育なのか。政府、企業、個人間の連携なのか。それとも国家を構成する国民の規模なのか。パワーとは一体何なのか。

私は国家間で戦う上で重要な一つのキーワードとして「道徳」があるのではないかと思います。政府をもってしてサイバー教育を行う国もあれば、日本のようにICT分野が人気職でない国も存在します。ただし、このようなサイバー攻撃は将来 e-learning により、ますます個人レベルでの攻撃が可能になるでしょう。そうなった際、「自分のため」に攻撃するのか、「国のため」に攻撃するのか、その動機は何なのか。行動、思考、性格の一つ一つが道徳的でなければ、平和への道はないのかもしれないと思いました。

（長谷川 信寿）

■防大研修 全体を通しての感想①

「部屋を片付けなさい。」これは、母から小さい頃よく言われたフレーズです。部屋は心を表すから、と。私は、自分の内部環境である心の状態と、自分の外部環境である部屋の状態は関係ないだろうと、納得できませんでした。しかし、防衛大学での経験を通して、その二者の関連性に納得しました。

防衛大学の学生の外部環境と彼らの内部環境の関連はとても明快でした。例えば、彼らの生活環境は、むだなものを省き、秩序と調和が取れていて、カオスの対極に位置する状態です。これは、国を守るという使命の元で、整えられた環境の重要性が見て取れ

ます。また、外部環境としての『身体』は引き締まっています。それは単に、筋肉があるとか無駄な脂肪がないとかではなく、国を守るための資本として鍛えられた身体から、魂の主張が見て取れます。それらの外部環境も影響してか、彼らの国防に対する発言はとても聡明で説得力を増しているのです。内部環境が鍛えられて外部環境も変化するのでしょうか、それともその逆でしょうか。



彼らの国防に対する意識はいつから育まれたのか尋ねたところ、防衛大学に入学してからだと返答がきました。「入学前は、特に意見はなかったです。入学するまではガリガリでしたし。実家の個室も散らかっていますしね。」とも。つまり、内部と外部のどれから整頓するかの順序の重要性よりも、その全てを並列に鍛えていくことが防衛大学の制度なのだろう。外部環境のすべてが媒体となって、内部の魂を主張するのです。

個人の外部環境は内部環境を主張するキャリアである。日米学生会議にて、己の思考を磨くと同時に、その魂に相応しい肉体と周辺環境を築けたら逞しい。そのために私は、人と議論する傍ら、身体を鍛え、そして、

部屋を片付けようと思います。(林田 将)

■防大研修 全体を通しての感想②

「無知の知」というソクラテスの有名な言葉があります。自分が何かを知らないということ、知っているということ。その上で、知らないことを学ぼうとする謙虚な姿勢。

「自分はわかっているのだ」と根拠のない自信を振りかざす人間は、それ以上の進歩はありません。

では翻って、僕自身はどうだったろう。NHK スペシャルの特集などを見て、本も読んで、周りの人たちと自衛隊や国防のことを頻繁に話してきました。その中で、「自分はちゃんと関心を持ってこの問題を考えられているから、決して無知蒙昧などではない」、と奢る心がなかったかと言われれば、嘘になります。そのあまり「今の国民の政治や国防に対する当事者意識の低さは問題だ」、などと偉そうに考えたりもしました。

もしも奢る心がなかったなら、防衛大研修の前と後で、「謙虚に考え続けよう」という気持ちに変化はなく、心構えは大きく変わるはずもありません。

ですが僕の場合、ガラリと変わってしまったのです。僕の周りの「自衛隊」「国防」という言葉が、それまでと全く違った色彩と重みを持って、僕の心に訴えかけるようになってきました。知っている「つもり」になって、奢って、無意識に見過ごしていた景色が、急速に意味を持ち始めた瞬間でした。

日米学生会議初となる、1泊2日での防

衛大 学校研修は、単に国防について教授の方々から授業をいただくのみならず、防衛大の食堂で同じご飯を食べ、同じお風呂に入り、同じ部屋で寝息を立て、同じ朝早くに起きる…そんな、普通ならありえない経験の連続でした。



僕たちは決して、防衛大の生徒になることはできません。ですが、僕たちはこの二日間の間間違いなく、1日の長い時間を彼らと共にし、夜遅くまでの活発な議論も通して、等身大の彼らに出会うことができました。もちろん、厳格な整列や清掃の様子も見せていただきましたが、防衛大の皆さんは、僕が思った以上にずっと「同世代」で、そして思った通り、笑顔が爽やかな人たちでした。

「この人たちが、未来の自衛隊を担っていくのだ」、そんな清々しい意識が芽生えた後、帰りに横須賀を他の代表団と共に五人で訪れ、「海上自衛隊基地」の文字を見た瞬間、五人全員が同時に、「ああ」と声を漏らしました。「ああ、『あの』防衛大の皆さんがこれから所属する、自衛隊の基地がある」と。密度の濃い二日間を過ごしてくださった防衛大の方々の事を、外からではなく中から、歪曲された情報ではなく等身大で、「知る」ことができたから。僕たちにとって「自衛隊」

という文字が急に、今までになく、ずしりと重い、大切な意味を持ち始めたのです。

国防の知識や、防衛大についての基礎知識・理念など、学べたことはたくさんあります。ですが、それらあらゆることより、僕はこの、代表団一人一人の心の中に起きた、小さいけれど確かな変化こそが、この研修の何よりの収穫だったのだと確信しています。

自分の足で歩き、自分の目を見て、心で考えること。その積み重ねこそが自分たちを一步前へ導いてくれる確かなステップであり、それこそが、JASCの醍醐味です。

貴重な機会を僕たちに与えてくださった、防衛大の皆様、そして調整を続けてくれたECに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。(松村 謙太郎)



3-6. 沖縄研修 (7月)

■概要・目的

2016年、アメリカ海兵隊普天間飛行場の辺野古移設を巡り、日本国政府と沖縄県で訴訟が起こり、結果日本国政府が全面勝訴した。未だ妥結に至らない両者の関係の一方で交渉を進める日米政府の動向に、日本国政府と沖縄県の溝は深まるばかりである。

「沖縄」・「日本国政府」・「アメリカ」が、互いを尊重できる妥協策を生み出すには、相互理解が必要である。それにあたり、「沖縄」・「日本国政府」・「アメリカ」がそれぞれ求めるものは何なのか理解をしなければならない。しかし、そもそも沖縄県、日本国政府、アメリカにおいて、それぞれの内部でどのような意見が存在しているのか、どのような意見の対立が起こっているのか、把握しているものは少ない。特に沖縄に関しては、メディアに取り上げられる声と、取り上げられない声があることも、原因の一つにあるだろう。今回の日米学生会議のテーマは「己を省み、人を知る。～価値観の共有から生まれる可能性～」である。一瞬で世界中の情報を手に入れられるようになってしまった現代だからこそ、すでに書き手による“加工”がなされた二次情報からだけでなく、現地における一次情報に基づいて、価値観の共有を行うことを重視している。

今回は、①事前学習、②沖縄本研修、③事後研修を通じて、沖縄県、日本全国、アメリカにおける、それぞれの内部の多様な声に

耳を傾ける。

まず、事前学習として、学生は沖縄での意見を理解するための平和学習、基地問題に関する日本国政府、アメリカ政府の意見を学ぶ。次に現地へ赴く沖縄本研修では、沖縄の複数の地域を訪問し、年代、職種、立場の異なる現地の人々の声を聞くことから沖縄の多様な民意を知る。最後に、事後研修では、沖縄県外・沖縄県内・アメリカの学生で議論を行い、沖縄・日本国政府・アメリカの三者がより良い関係を築くために、今、学生たちは何をすべきか、考える。

尚、当研修では、沖縄に関する様々な声を聞き、多様な価値観に触れ、参加者各々が沖縄の基地・平和について様々な視点から自由に考える場を作ることを最大の目的としており、特定の政治的立場を促進させるものではない。

3-6-1. 事前研修

■スケジュール

【日時】2017年6月10日(土)

【場所】国立オリンピック記念青少年総合センター

■プログラムの詳細

▼エルドリッチ研究所代表・政治学博士ロバート・D・エルドリッチ様によるご講演

米国海兵隊太平洋基地政務外交部 (G-7) 次長として日米の防災協力や基地問題など日米関係の改善に携われ、現在も政治学博

士としてご活躍なされているロバート・D・エルドリッチ様をお招きし、在沖米軍基地問題についてのエルドリッチ様の見解をお話しいただいた。

▼平和学習

参加者は沖縄県平和祈念資料館作成の戦争体験のビデオを鑑賞した後、「戦争と平和」をテーマにディスカッションを行った。



参加者の声

日米の架け橋として活躍なさっているエルドリッチ氏は、22年もの間、沖縄問題に取り組んで来られ、アメリカ、日本政府、沖縄の政府、沖縄の地元の方々の様々な視点から見た沖縄問題を誰よりも良く理解されていた。

エルドリッチ氏は、沖縄問題を「is has become a big knot. If you try to pull the knot in a hurry without carefully separating it, the knot gets tighter and tighter: 絡まった靴紐のようになってしまった。無理やり紐を解こうとしても余計に絡まるだけであり、丁寧に一つずつ解決していくべきだ。」と表現していた。

沖縄問題はメディアにより複雑になっていると言った。沖縄に在住した経験から、実際、普天間基地は言われているほどの危険はなく、周辺住民にとって過激な反対運動を行う活動家の方が騒音であること、また沖縄の基地負担に焦点を当てがちだが、むしろ経済面等において基地に依存している面があることなど、バランスの取れていない報道の現実があるという。報道によっては、アメリカ基地を支持してはならないという同調圧力の環境が作り出されている現状があるとのこと指摘もあった。

これまで私はメディアを通してでしか沖縄問題を知る機会がなかったが、今回の講演を聞き、今までの自分の認識はメディアが作り出したマイナスイメージであったことに気が付いた。また、国防の視点から見て沖縄に基地が位置することが大切であることや、人々の気持ちに残る戦争の傷跡、立地的に見て中国外交のカギになっていることから、安全保障や歴史、中国との外交などの点を考慮しながら沖縄問題を解決していくことが重要だと思った。(藤本 ミケイラ)

3-6-2. 本研修

■スケジュール

【日時】2017年6月30日(金)~7月2日(日)

【場所】沖縄県那覇市・名護市・宜野湾市・沖縄市

宿泊：HOTEL StoRK 那覇新都心

6月30日

- ・航空自衛隊那覇基地司令 川波 清明様のご講話及び基地見学
- ・コザフィールドワーク
- ・普天間飛行場見学
- ・第三海兵遠征軍司令官および在日米軍沖縄地域調整官 ローレンス・ニコルソン中将ならびに在沖米国総領事館総領事 ジョエル・エレンライク様によるご講話
- ・元沖縄県知事 仲井眞 弘多様・外務省参与 又吉 進様 ご講演
- ・沖縄タイムス社編集局長 石川 達也様のご講演

7月1日

- ・名護市長 稲嶺 進様のご講演
- ・幸喜ビーチにて海水浴
- ・ヘリ基地反対協議会代表 安次富 浩様と辺野古ゲート前・瀬嵩の浜を散策、及び辺野古の海でグラスボート体験
- ・国際通りにて自由時間

7月2日

沖縄尚学高等学校 勉強会

- ・知事公室基地対策課調査班班長 島袋 秀樹様、沖縄県企画部企画調整課 武村 幹夫様によるご講演
- ・株式会社がちゅん代表 国仲 瞬様によるご講演
- ・高校生とのディスカッション、議論内容や感想の共有
- ・高校生と一緒に弁当を食べる

■各プログラムの詳細

▼航空自衛隊那覇基地司令 川波 清明様のご講話及び基地見学 (6月30日)

南西防衛区域における唯一の航空基地として重要な役割を果たしている、航空自衛隊那覇基地を訪れた。那覇基地司令である川波清明様から自衛隊基地の役割や訓練内容、戦闘機の機能等について詳しくご説明頂き、学生たちは沖縄における安全保障について学びを深めた。その後、自衛隊の方々から早期警戒機 E-2C や戦闘機などを間近で見学させていただいた。



(上) 川波様と集合写真

(下) E-2C の見学



参加者の声

川波那覇基地司令がお部屋に入ってくるまでの部屋の張り詰めた緊張感を今でも鮮明に思い出せる。

沖縄事前研修のスタートは那覇基地司令の川波清明様によるご講演であった。これまでにパイロットとしてのご活躍や教育分野で、または官僚としてのお仕事など豊かな経験をされてきて威厳がありつつも人を惹きつける魅力がありとても素敵な方だった。

「沖縄」というと米軍基地の話が1番初めに出て来ることも多く、恥ずかしい話だが私自身、自衛隊の皆さんの沖縄基地での活動について深く考えたことがなかった。だが防衛大学での研修や沖縄研修に行く前の事前学習を通し中国や韓国、アメリカとの関係から沖縄の自衛隊の存在がいかに大きいのかということに気づいていた。

ご承知の通り沖縄は地理的に韓国や中国と近く、領海・領空における問題が起りやすい地域である。ご講演内容によると平均して那覇では1日2回以上のスクランブルがある状況だという。

私たちが普段安心してこの国で暮らせるのは海や空を自衛隊の方々が守ってくださるからだという事実を再認識できた。私自身、見えていなかった事実が見えるようになる感覚を日米学生会議を通して味わうことが多いが川波様のお話は私の国防への視点をさらに深めてくださるものであった。

その後、航空機の見学をさせて頂いた。本物の自衛隊の航空機を間近で見る機会は初めてでその迫力そして音に圧倒された。

今回の川波様のご講演や飛行場の見学を通して私たちは沖縄の自衛隊の皆さんの活

躍の一部を「知る」ことができたと思っている。このせっきくの機会を活かし今後も積極的に学習をしていき「理解する」ファーストステップにしていきたい。

川波様そして、那覇基地の皆さま、ありがとうございました。(佐々木 彩乃)

▼コザフィールドワーク (6月30日)

沖縄戦の際、激戦地の1つであった、コザ。かつて農村地域であったが、沖縄戦中は米兵が部隊の本部や病院を建て「キャンプ・コザ」と呼ばれるようになり、戦後は米軍による土地収用が行われ、米軍基地の街となった。1970年代には「コザ暴動」などアメリカ統治下での住民不満が顕在化した。現在も基地の街としての面影が色濃く残る。研修では、街を散策しながら住民の方にお話を伺ったり、沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリー館の館長の方から戦後のコザについてご説明いただいたりした。我々は沖縄とアメリカの関係性について考えた。

ヒストリー館の前で



参加者の声

過去のコザと、今のコザ。そして、これからのコザ…

ヒストリートと商店街を訪れ、時の流れの中で、この街に生きる人々の生活が劇的に変わってきたことを想像させられた。

少し話は逸れるが、一般的にはお互いのことをそれほど知らない『お客様と店を営む者』の関係は想像以上に濃く、そして特別なものだと思う。私はかつて父と母の自営業を手伝っていたのだが、そのときに、毎日のようにお店に来てくださった方や、毎朝挨拶をしてくださった方や、私の大学合格を心から喜び、祝福してくださった方や、子と離れて暮らす父の気持ちを共有してくださった方や、最後には涙を流してくださった方もいらっした。

状況はかなり異なっているかもしれないが、コザの街のお店を営む人々と、そこを訪れる人々との関係も、きっと見たり聞いたりして知ることができる以上のものなのではないだろうか。良いときもそうでないときも、コザで生きてきたひとりひとりの暮らしに与えてきた影響は、単に経済状況だけでは測ることができないと思う。

コザについて考えるとき、『今まで』の話だけを考えがちかも知れないが、そこで生きる人がいる限り、そこには『今』のコザと『これから』のコザがあるはずだ。つまり、『遺跡』としての意味だけでなく、そこで現在も生活が行われている場としての意味ももつはずである。

昼間に人通りの少ないコザの商店街を歩きながら、このような商店街はコザだけではないと思いつつも、その未来について考

えさせられた。

その中で、Startup Cafe を見つけた。個人的にも興味をそそられたのだが、ここから何か生まれ、コザのあり方も変わっていくかもしれないと感じた。

過去のコザと、今のコザ。そして、これからのコザ…

またいつか訪れたい街だ。(阪上 結紀)

▼普天間飛行場視察 (6月30日)

まず、在日米軍海兵隊の軍用飛行場である普天間飛行場にて、海兵隊の方々から普天間飛行場の役割や特徴、海兵隊の役割について詳しくご説明いただいた。その後、オスプレイをはじめとする航空機や基地内を見学させていただいた。

▼第三海兵遠征軍司令官および在日米軍沖縄地域調整官 ローレンス・ニコルソン中將及び在沖米総領事館総領事 ジョエル・エレンライク様によるご講話 (6月30日)

キャンプ・コートニーにて、在沖繩米軍のトップであるローレンス・ニコルソン中將、並びに、在沖米総領事館総領事ジョエル・エレンライク様から、ご講話をしていただいた。学生たちは積極的に両人に質疑応答をしながら、沖繩とアメリカの複雑な関係性、また日米同盟の意義などについて理解を深めた。



(上) 参加者はお二方と活発に議論した

(下) お二方との集合写真



参加者の声

6月30日、キャンプフォスターにて在沖縄米軍のローレンス・ニコルソン中将与在沖米国総領事館のジョエル・エレンライク総領事にご講演いただいた。ご多忙の折、若輩の私たちの為に時間を割き、日米安保の相互理解に尽力いただきましたことを先ず深謝申し上げたい。初めて足を踏み入れる米軍基地に皆、緊張し、冷房のききすぎた部屋で凍りそうだったが、お二方とも非常に気さくな方で、歓迎していただいた。沖縄米軍基地の立場、果たすべき役割、将来に対するビジョンなどを語っていただき、日米学生会議参加者にとって、米国あるいは米軍の視点から基地問題を考えるきっかけとなった。

沖縄戦の悲惨な歴史も原因となり、国内の岩国や横田といった他の米軍基地などと比べ、沖縄では米軍兵、米軍基地と市民との分断がなお顕著である。だからこそ、米軍基地の人々が、沖縄への物理的あるいは精神的な負担が大きいことを自覚し、その実態を知ろうとしていることが強く感じられたように思う。

基地を通したビジネス、科学、文化、学生などの交流や、TOMODACHI 作戦など、人と人との繋がりを実感させるものも数多くある。共生の道を模索し続けている、という話に、問題の根深さを実感するとともにその努力を惜しまぬ姿勢に感銘を受けた。特に米軍関連の悲惨な事件、事故にスポットが当たりがちだが、こうした事件に対する基地内での教育は徹底している、と知り、解決への決意を垣間見た気がした。

軍としての強さは維持しつつ、土地の返還などを通して規模の縮小をめざし、最大限住民に敬意を払おうとしている、とおっしゃっていた。より少ない土地で、どのように強さを維持するのかという疑問には、効率を上げることが重要だ、そしてこれにより沖縄だけでなく、軍にもメリットがある、と教えていただいた。

沖縄研修の後、時間を取ってじっくりといろいろなことを考えると、ふと2年前、ワシントンD.C.のスミソニアン博物館にて太平洋戦争の紹介をしているブースを見て、感じたことが鮮明に思い出された。それまでは日本だけが、「欲しがりません、勝つま

では」などのスローガンを抱え、我慢を強いられてきたと思っていたからだ。が、米国民も食料を含めた色々なものを我慢するためのポスターが展示してあり、米国民も第二次世界大戦中、軍人の家族はもちろん、一般市民までも物質的な制限があったことを知った。彼らもやはり自己犠牲のもと、国を守ろうとした事実、そしてそれに気づかなかった自分にも、衝撃を受けた。

今回、事前にいくつかの文献を読み、下調べをしたが、問題は想像よりはるかに根深く、整理がつかなかった。混沌としたまま訪れた基地だが、様々な話を聞き、ますますわからなくなってしまった、というのが率直な感想である。遠く離れた地に住む私にとって報道でしか知ることのない沖縄の実情。今回の訪問で自分がいかに基地=負の遺産、というイメージにつきまとわれていたかを感じさせられた。一方を聞いて沙汰するな、と耳元でずっと言われているようだった。日米のいずれの立場にも思いを馳せ、己の立場だけを主張するのではなく、多角的な判断の必要性和努力により、平和的解決や理解を進める重要性を考えることが大切ではないか。学んだたくさんのかんことを消化できる日がいつか来るよう、自分の目を見たことを忘れず、もがきながらも、ずっと考えていきたい。(伊藤 江理華)

▼元沖縄県知事 仲井眞 弘多様・外務省参与 又吉 進様のご講演 (7月1日)

沖縄県男女共同参画センター「ていりる」

にて、ご在任中数十年も膠着状態であった基地移設を前進させるためご活躍なされた元沖縄県知事であった仲井眞弘多様と、当時沖縄県庁知事公室長を務め、仲井眞県政をお支えになられた又吉進様(現外務省参与)をお招きし、ご講演をしていただいた。ご講演では、お二方から、沖縄の歴史、沖縄の直面する課題(経済・流通・安全保障)、基地問題、次の世代に求めること等についてお話いただいた。また、今回は、仲井眞様にとって、知事退任後初のパブリックイベントのご出席となられた。



仲井眞様のご講演なさっている様子



仲井眞様・又吉様との集合写真

参加者の声

そのひとがマイクを握った時、空気が変わった、と思った。

目の前に座っているのは、かつて沖縄を率い、辺野古移設の決断で悪名を負った元県知事。修羅場をくぐり抜けて来たそのひとは、第一線を退いてなお、独特の凄みを身にまもっていた。

2017年6月29日、沖縄県那覇市。熱気が街を押し包むその日、私たちは仲井眞弘多元県知事と相対していた。三度目の知事選で翁長現知事に敗れて以来、公の場で語ることの無かった仲井眞氏。そんな元知事が、日米学生会議のために口を開いてくれるというのだ。

「裏切り者」、「沖縄を売った男」……。

仲井眞氏への批判の声は計り知れない。その声に押されて、元県知事の実像はまったくと言っていいほど見えなくなっているのが現状だ。事実沖縄に来るまで、私の描く仲井眞氏の姿は、ヴェールをかぶったように曖昧だった。だからこそメディアというレンズを通さず、仲井眞弘多というひとに迫る。生の声を聞き、感じる。それが、非当事者が基地問題に近づく大きな鍵になると、私は信じていた。

講演前から、自分なりに決めていたことがある。それは、「問題がよく分かった」、「お気持ち理解できた」、などという浅はかな言葉は決して使わないこと。

たった一度の講演で、問題の本質を理解できたなどと口にするのは失礼というものだろう。ただ相手の思いを知ろうと努め、受け止め、自分なりに噛みしめること。それが、私に出来る唯一のことだと思っていた。

講演冒頭。まず、仲井眞氏と並んで座る男性がマイクを取った。又吉進氏。かつて仲井眞県政を支え、知事の腹心と言われた実力者だ。「難しい話は、全部この人に説明してもらうから」と仲井眞氏が、冗談交じりに言う。その言葉から、かつての側近への全幅の信頼が窺い知れた。

第二次大戦の敗戦国として、アメリカと対等な交渉の席につけない事実。基地を受け入れる他県のない現実。そして、普天間の危険性を一刻も早く取り除くことが、何にも増して優先されること。辺野古移設計画が、法に則って進められたこと…。

又吉氏は順を追ってそれらを説いた。仲井眞氏が腹心の言葉を継いだ。

「現実の問題への取り組み方が、観念的になりつつある」「原理主義的になっている」仲井眞氏は不安げにそう口にした。日本を取り巻く情勢が厳しさを増す中、理念や理想を掲げるだけでは問題解決は望めない。ただ基地反対を叫ぶのではなく、行政として何が出来るのか、に思考を転換していかねばならない…。

印象的だったのが、二人の視点が一貫して日本全体に向けられていたことだ。日本の現状を俯瞰し、その一部としての沖縄に目を向ける。しかし決して、沖縄を置き去りにした議論はしていない。そんな絶妙のバランスが、私の心を打った。

「県民には感情的な拒否感がある」

講演中、仲井眞氏は繰り返しそう述べた。沖縄戦の惨禍。本土復帰までの苦しい道

程。それらの記憶を背景にした県民感情を、仲井眞氏も又吉氏も、痛いほど知っているはずだ。だが二人は、理解した上でなお、現実的な選択肢の中で最善を模索した。それは、県民の代弁者となるよりも、遥かに難しい道だったに相違ない。

辺野古移設の重い決断。

それは、沖縄県民としてのアイデンティティを持ちつつも、霞が関で働き、国全体を見る目を養った仲井眞氏だからこそ、辿りつけた選択ではないだろうか。

「メディアに叩かれるのを覚悟の上で、政治生命を賭けて決断した」

当時を振り返り、そう語った時。仲井眞氏には微塵のためらいも感じられなかった。自分の取った道に、たしかな自信と誇りがある人の言葉だと私は思った。

ご講演を通じ、基地問題は自分にとって身近になったようにも、また遠くなったようにも思う。問題に向き合ってきた当事者の思いを肌で感じられた。だが一方で、積み重ねられて来た県民の思いと、沖縄を取り巻くどうにもならぬしがらみを垣間見て、自分と当事者との距離をより深く感じたのも事実だ。

そのいずれの感情も、私は大事にしていきたいと思う。足を踏み入れたこの問題に、解決という未来があるのかも分からない。それでも、消化しきれない思いを抱えたまま、沖縄の進む道から眼を逸らさずにいたい。これからも。絶えることなく、ずっと。

(大野 あゆみ)

▼沖縄タイムス社編集局長 石川 達也様 のご講演 (7月1日)

沖縄タイムス社本社にて、沖縄タイムス社編集局長である石川達也様から、基地問題の経緯、基地問題に対する地元メディアの使命やメディアが与える影響等について、お話を聞いた。その後、新聞の制作室にご訪問させていただき、緊迫した空気の中、翌日の朝刊の編集をなされている様子を見学させて頂いた。



石川 達也様との集合写真

編集室を見学させていただいた



参加者の声

6月30日に、沖縄の地方紙である沖縄タイムス社の編集局長、石川達也様にご講演頂いた。沖縄の基地問題においては、本土の多くの人間が知らない沖縄県の人々の想いが数多くある。講演では、沖縄の歴史や日米

の防衛体制の現状や、現地に住んでいるからこそ分かる県民の感情への鋭い洞察から、理性的な考えのみからでは到底たどり着かない沖縄の基地問題についての持論を展開された。

講演の中で最も印象に残ったのは、これまで長い時間基地問題を我慢し続けて来た沖縄県の人々に、これ以上基地の負担を強いるのは不当であるという旨の話であった。沖縄県は戦後、アメリカの軍政下に置かれ、多くの人が非人道的事件の被害にあっていた。その問題は、日本復帰後も完全に払拭される事はなく、基地の規模の縮小においても当時の沖縄県の人々が期待していたような成果を得る事は叶わなかった。そして、依然悲惨な事故も多発している。このような点から、長きに渡って米軍基地に苦しめられて来た沖縄県の人々に、さらに今後数十年に渡る我慢を強いる事となる県内移設には断固として賛成できないという石川様の意見は、沖縄タイムス社への訪問の前に訪れていた移設賛成派の意見に考えが傾いていた当時の私の心を激しく揺さぶった。

また、朝鮮半島での有事に沖縄県の米軍基地から兵力が派遣されず、太平洋にいた戦艦が現場に回されたという事実を振り返り、そもそも沖縄に米軍基地という形で兵力を溜める必要性にも疑問を呈された。そもそも有事に使用されない戦力なら米軍基地が日本にある意味すらないという持論は、少し急進的ながらも示唆に富んだものだった。加えてこれらの論調には、「沖縄の平和

を守る為、戦争に組する報道はしない」という沖縄タイムス社という新聞社としてのスタンスや、石川様の編集者としての強い思いが少なからず現れていると感じた。

日本全体の利益の為に、日本全体の問題である米軍基地の大部分を沖縄に押し付けてしまっているのだろうか。周辺地区の人口密度の都合上普天間に基地があるとより多くの犠牲者がでてしまう可能性が高いという、沖縄県全体に置かれた視点から、辺野古という土地に基地被害を被ってもらうのは致し方ないという考えは、果たして身勝手ではないのだろうか。全体としての利益を理性的な視点からのみで考えたのでは得られない、局所的かつ感情的な意見の存在とその重要性を、石川様の講演の中で再認識することができた。

同時に、移設容認派の意見と比較検討した結果、両者の意見はどちらも否定できないと感じた。こうして、同一の物事において対立する主張は、その物事を判断する価値観が異なるだけで、どちらもそれぞれにとっての正義たり得るという、考えてみれば至極当然の事を強く実感した。(岩井 凌太)

▼名護市長 稲嶺 進様のご講演(7月1日)

名護中央公民館にて、名護市長である稲嶺進様から名護市の海岸への基地移設の現状や、名護市長としての基地移設に対するご意見や名護市民の民意などをお伺いした。



(上) 稲嶺様ご講演の様子

(下) 稲嶺様との集合写真



参加者の声

「はいさい、ぐすーよー・ちゅー・うがなびら」うちなーぐちで、「こんにちは、皆さんご機嫌いかがですか?」という意味だ。稲嶺さんは開口一番に、この言葉で私たちを歓迎して下さった。稲嶺さんはうちなーぐちは日本語とは違う言葉であり、方言という言い方はしないとこだわっておられた。

自分は最近台湾について少し学んだのだが、台湾は「一つの中国」から転換し「台湾は台湾である」という台湾アイデンティティというものが、特に民主化以降生まれた若者の間で育っているようだ。これに対して、沖縄の言語や文化を守ろうという、稲嶺さんから「沖縄アイデンティティ」を少なからず感じた。

このことについて、台湾研究者の野嶋剛さんは「辺野古問題による沖縄の台湾化」を指摘している。野嶋氏によれば、台湾が、中国の一部であるという過去の常識から揺らぎ、台湾は台湾であるという認識が主流化しているように、辺野古問題によって、日本の一地域である沖縄の「沖縄アイデンティティ」が強化されており、その自然な帰結としてナショナリズムに目覚め、自己決定権を一層求める動きになっている。

しかし、野嶋さんの沖縄ナショナリズムという批判は、地方の主体性考慮していない側面がある。確かに、沖縄では日本の他の地域よりうちなーんちゅ(沖縄人)であることへのアイデンティティが強い側面はあるが、そのことと地方自治との関係性を、迂闊にも同一視すべきではない。

そして、この問題の核心はまさに、沖縄アイデンティティに支えられ、そこに生活する人々を想う稲嶺さんの主張する、沖縄県の米軍基地負担軽減や、辺野古への移設反対が、地方自治の権限を超えた、国防という国家そして外交レベルの事案であることなのだということを改めて認識した。

また、稲嶺さんが講演でおっしゃられた米軍基地への姿勢に対して、具体的にどのような政策、外交方針をとって本土との妥協点を探っていくのかという質問が、私たち学生会議の側から多く出たことも、考察すべきことだ。

どこまでが、絶対的な要求でどこまでが妥協できることなのかを知ることはとても

大切な、交渉の基本だ。特に国側は、沖縄がこれまで背負ってきた負担を考慮し、われわれ沖縄に住んでいない人も基地がある生活を想像して、もし自分が住んでいる場所に基地がきたら、もし辺野古が自分の住んでいる場所だったらという想定をいつも持った上で、沖縄問題と向き合っていきたい。(豊坂 竹寿)

▼幸喜ビーチにて海水浴 (7月1日)

海水浴をしながら、沖縄の自然や、沖縄の海の美しさを、五感を通して体験した。

▼ヘリ基地反対協議会代表 安次富 浩様と辺野古ゲート前・瀬嵩の浜を散策、及び辺野古の海でグラスボート体験 (7月1日)

ヘリ基地反対協議会代表 安次富 浩様と辺野古ゲート前・瀬嵩の浜を散策しながら、沖縄の生物多様性を学び、また基地移設に対するご意見もお伺いした。移設現場も視察した。

また、グラスボートでは、サンゴ礁を観察し、基地移設がサンゴ礁に与える影響などをお伺いした。



参加者の声①

薄い青や緑のようにも見える透き通った海、太古の昔から生きているサンゴ、風が運んでくる潮の香り、陸地よりも少し涼しい風…

グラスボートの上で、思わずいろんな感覚を駆使してこの海を味わいたくなり、私はここが辺野古であることを忘れてしまいたくなった。今まで訪れたことのある海の中でもとても美しく、多くの人がそう思うように、私もこの海が好きになった。

"辺野古の海"の"生物多様性"一。

国防的観点からはあまり語られることのない言葉ではあるが、辺野古の海はそれを私に実感させてくれた。

そんな豊かな海の海面には、オレンジ色のブイが浮かんでいる。これは基地建設予定地を示すものだ。この光景を目の当たりにして、頭で考えるよりも先に、「この自然を守りたい」という感情を抱いた。この研修では、基地問題に関して様々な意見をお聞きしたが、もっとも心で感じたのはこの辺野古の見学である。

ただ、気持ちだけでどうにかすることが難しいのがこの基地問題だ。

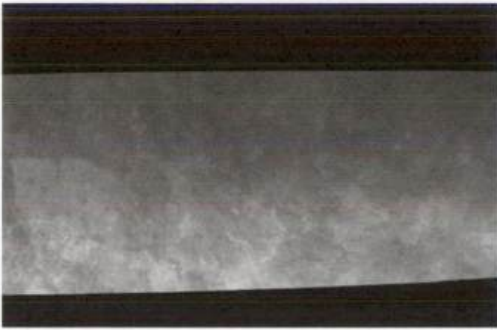
あらゆる側面からこの問題を考えた時に、私の中で何十個もの問いが浮かんできた。その問いひとつひとつに向き合って、対話しながら深く考えていくことは、沖縄問題だけでなく他のあらゆる問題を考える際にも必要であると、信じている。

私の沖縄研修は、まだ終わっていない。
(阪上 結紀)



(上) 建設予定地を示すブイが浮いている

(下) グラスポートからサンゴ礁を観察



参加者の声②

「辺野古基地移設で語られる複雑性」

基地の移設にあたって国防、沖縄県、沖縄県民、辺野古市、辺野古市民、米軍基地、自然保護、騒音、事故問題等の様々な利害関係が衝突している。

ただ私が実際に現場に赴き、「辺野古グラスポート」を体験したからこそ強く感じたことが一つあった。

「綺麗な海、珊瑚礁の上で起きている政府と市民の対立による緊迫感」だ。もちろんだが、辺野古基地移設予定地の報道はテレビ、新聞等を通じて見たことはあった。しかし

辺野古沖にあるブイとフロート（浮具）の外で、巡視船、海上保安庁によってどのように監視がなされていて、どれほど緊迫状況なのかは、実際に赴いたからこそ理解できたことである。

度々メディアで報じられている辺野古移設予定地。自身の目で見ること、ヘリ基地反対協議会の方々の想いを直接伺うことにより、基地移設問題を取り巻く利害関係の複雑性がより一層胸に突き刺さった瞬間となった。

さらに、沖縄研修が終わった現在ですら多くの疑問、葛藤が残る研修にもなった。海上保安庁、巡視船が毎日監視を行うことに伴う費用は莫大だ。これらのお金はどこから発生しているのでしょうか。辺野古基地建設に抗議する船と海上保安庁との対立は現在も続いている。

確かに名護漁協は全漁業権を放棄し、政府から放棄に伴う損出補償額は支払われた。しかし補償額が支払われたからという理由は、市民の基地移設反対の声に圧力をかける正当な理由となり得るのだろうか。そもそも、辺野古の海は名護漁業関係者の方々だけのものなのでしょうか。基地移設による損害費用、補償等を市民に支払えば、沖縄で生活をしている人々の反対の声を無視してでも移設していいのだろうか。私は今回挙げた疑問以上に多くの疑問を抱いた。

ただ、この「辺野古グラスポート」は沖縄研修前に、実行委員が言っていた「簡単に解

「決策を出したい、理解できる、と思わない方がいい」という言葉の意味を理解する一つの重要な経験となった。

将来的にこの基地移設問題はどうかはまだまだわからない。

しかし、辺野古への基地がなされた場合、私達が目にした綺麗な海、珊瑚礁、マリンスポーツが盛んである今までの辺野古は決して元には戻って来ないという事実は大変悲しく感じる。

沖縄研修でのこの貴重な経験に感謝をし、引き続き基地移設問題と真摯に向き合って行きたい。(新井 英貴)



(上) グラスボートに乗る参加者たち

■沖縄尚学高等学校 勉強会(7月2日)

▼レクチャーパート

沖縄尚学高校前半のプログラムは、知事公室基地対策課調査班班長 島袋 秀樹様による在日米軍基地に関するご講演、沖縄県企画部企画調整課 武村 幹夫様による沖縄21世紀ビジョンに関するご講演、株式会社がちゅん CEO 国仲 瞬様による沖縄平和教育に関するご講演であった。



(左) 島袋 秀樹様・(右) 武村 幹夫様

(下) 国仲 瞬様



基地に関するご講演では、沖縄が抱える米軍基地問題に対する県庁としての見解や、本土と沖

縄、そして沖縄県内でも基地がある地域に暮らす人となない地域に暮らす人では感じ方が大きく異なるということをお話しいた。

21世紀ビジョンは、沖縄の目指す将来像を描いたもので、沖縄というと基地負担の軽減ばかりが注目されがちだが、それだけでなく経済的に発展することや、住民にとって暮らしやすい街を目指すという計画について伺った。

平和教育に関するご講演では、修学旅行で沖縄戦について学ぶ学生たちがどうやって自分事として平和教育をとらえ、学んでくれるのか?ということを探求した、これまでとは違う学びについてお話しいただいた。

特に、平和教育に関するご講演は、非常に

印象に残るものだった。私自身は、修学旅行先は沖縄県ではなく長崎県で、原爆に関するを中心に学んだ。その記憶は今も鮮明に残り、自分の戦争に対する考え方に大きな影響を及ぼしているといえる。しかし、国仲様が株式会社がちゆんを立ち上げるに至ったある子供の発言は、あまりにも衝撃的なものであった。戦争教育を真に伝え、子ども自身が考える機会を持たなければ、戦争は自分の知らない誰かの一体験としてしか伝わっていないことも多いのだと感じ、恐怖さえ覚えた。今、戦争を体験していない世代が多くを占めているが、悲惨な戦争だからこそ、それを繰り返してはいけない。そのことを子ども達に真に理解してもらうために、“自ら考える平和教育”が支持されている。平和教育の現状を知るだけでなく、当時私自身がどう感じ、何を考えたかを振り返り、改めて考える機会を持つことができた。(金澤 つき美)

▼ディスカッションパート

【ディスカッションの目的】

沖縄の県内の高校生である沖縄尚学高等学校の生徒のみなさまと、日本全国からの参加者で構成されている日米学生会議の参加者が、議論を通じて率直な意見交換し、「沖縄」を内と外から見つめ直す。

【ディスカッションの内容】

- ①在沖米軍基地に関して
- ②沖縄戦と平和

③「沖縄県と本土との溝」を日常で感じるか、また本研修を通じて感じたか

④10年後の目指すべき沖縄県とはどのような姿で、それに向けて今若者たちは何をすべきか



【本勉強会参加学生】

沖縄尚学高等学校の生徒のみなさま 26名
第69回日米学生会議日本側参加者 32名
第69回日米学生会議米国側参加者 1名

参加者の声：日米学生会議側①

『高校生との対話から掴んだ沖縄問題の希望～TheyからWeへの概念シフト～』

「これは深刻な問題だ。」

二日目の辺野古移設先見学ツアーが終わった際、絶望の確信を抱き、涙したのを今でも覚えている。

研修前から、「沖縄問題」について自分なりに調べ、考えてきたので各アクターの主張やその関係性の構造は頭の中に入っていた。だが、「問題性」の本質は全くもって掴めずにいた。辺野古基地移設問題には、大きく移設容認派と反対派がいて、その中でも多様な意見が存在している。

一言で、「沖縄問題」と言っても、歴史的契約背景、安全保障上の戦略的優位性、日米同盟の存続条件、日米地位協定の権力関係、政治的操作性、米軍による沖縄市民への人命危害、騒音問題、生態系への影響の不確定性、軍用地収入の構造、基地予算・補助金問題、米軍の雇用問題、跡地利用問題、観光産業への影響 etc あらゆる問題が渦巻いている。

それぞれの主張を個別的に見ていくと、それなりの根拠と妥当性はある。でも、全体としては依然として問題は問題のままである。その問題の本質が明らかにされないまま。

三日目を迎える前、二日間のプログラムを通して、ひたすらに問題の原因を探ろうとしていた。様々な人の話を聞きながら、私の中で、一向に対話が進まないことの原因が大きく三つあるのではと推論していた。

- ① 論点の不一致
- ② 主語の不一致
- ③ ゼロサムという前提

「論点の不一致」とは「辺野古基地が必要である」という移設容認派の意見に対しての「辺野古基地は置くべきではない」という移設反対派の反論の仕方に対するそもそもの矛盾である。これは逆の反論も然りである。「事実認識」「必要論」と「規範論」のぶつかり合いはいつまでたっても埒があかない議論にしかならない。

続いて、「主語の不一致」とは「誰にとって」という観点の欠如である。それは「誰に



にとって」必要なのか、「誰にとって」すべきではないのか。これを明確にしないまま議論するから、「(政府にとって)必要である」と「(沖縄市民にとって)必要でない」が同じ土壌において議論が成立しているかのように錯覚し、そもそもの主語の違いによる矛盾構造に気づかないまま吸引されてしまう。

最後に、「ゼロサムという前提」とは「自分たちの主張を通す」ことは「それ以外の主張を否定する」ことであり、両者の意見がいい塩梅に win-win の関係を築くことはあり得ないという前提が意図せずとも暗黙の次元にあるということである。この前提があるとどうしても議論において「協力」ではなく「収奪」の思想に陥りやすく、権力の程度が違えば「支配・被支配」の関係になってしまう。

おそらく「沖縄問題」に関する日本政府、アメリカ政府、沖縄県での対話における進捗の硬直の原因はこれらだろう。ただこれはあくまで「沖縄問題」の原因分析にすぎない。原因がわかったところで、解決できるわけではないのだ。原因の原因、いわゆる原理

レベルでの「起成原因」にまで遡り、そこから糸口を見出していく必要があるのではないか。誰もが疑い得ない原理から始め、少しずつこの複雑な問題を紐解いていく、それが「沖縄問題」に対する本質的なアプローチではないだろうか。

そんなことをモヤモヤ考えながら、三日目の最終イベントである沖縄尚学高校研修を迎えた。高校生との対話はおそらく初めてで、とても新鮮で心地よかった。辺野古基地移設問題や沖縄のこれからのヴィジョンに関してたくさんの議論をした。以前の二日間もいろんな人たちと対話してきたのだが、なんで高校生との対話はこんなに格別楽しいのだろうか。対話している最中、気持ちよい違和感が拭えなかった。なんでだろう。注意深く高校生の言葉を聞く。するとある言葉が多用されていることに気づいた。

それは「私たちは」という言葉であった。その時、自分の中に雷鳴が走った。

「あ、これに違いない。」本質を直観した瞬間である。以前の二日間は、あらゆる人たちと話していて、自分とは異なる立場の人を「彼らは」という言葉でラベリングしている人が多かったと感じた。だが、高校生は違った。沖縄県民のこと、日本政府のこと、アメリカ政府のことを話す時も、常に「私たちは」という言葉を使うのである。高校生も別にすべてのアクターに対して当事者意識を持っていた訳ではないと思う。というか、そんなことはそもそも不可能なのかもしれない。だが、言葉の使用が違うだけでこんなに

も対話しやすいということは私の中で直観した事実である。その直観の裏にはそれを成立させる条件として「沖縄問題」を解決する原理が潜んでいるに違いない。

よく考えると、私が大切だと考えてきた、個別最適ではなく全体最適で考えること、システムティックにアプローチすることなどもその根底には「私たち」すなわち「We」の概念がある。

上記の①～③の原因も「They」の概念が本質的な引き金となっているのではないだろうか。「We」の概念を持って対話すれば解決しうるだろう。

これだ。少し安堵とも言える感覚を味わった。『「沖縄問題」に関わるすべての人が「They」ではなく「We」という概念を持ち、相互に対話すること。』これが「沖縄問題」の原理的な解決策であろう。

非常にシンプルではあるし、目から鱗の発見でもない。ただこのシンプルさをどの程度まで意識して、徹底できるかが大事なのだと確信した。

あくまで、これは原理、理念にすぎないから、『「沖縄問題」に関わるすべての人が「They」ではなく「We」という概念を持ち、相互に対話すること。』を成立させる具体的な社会条件はこれから一層議論されなければならないことである。

「沖縄問題」についての課題は数え切れないくらい山積している。だが、希望がないわけではない。今一度この原理からスタートしてこの問題に協同的に取り組もうではな

いか。

絶望の淵から救い上げてくれた沖縄尚学の高校生達には心から御礼申し上げたい。

沖縄尚学での高校生との対話。

それは、これから共に未来を創造していく仲間同士の確かな信頼が築かれ、淡い希望の光が私たちを照らした瞬間であった。

考え続けることに終わりはない。(野間康平)



ディスカッション風景

参加者の声：日米学生会議側②

バスを降りた先、少々の勾配がつく校内通路に汗をにじませれば、どこか懐かしい学校の佇まいとそわそわとした雰囲気を感じ、学生たちが私を迎え入れてくれた。一般生徒のいない休日の廊下を歩きつつ、訪問以前に意識した目標、「高校生の想いの形成に寄り添い、彼ら彼女らが大人に対し声を発する」ことを再度頭に焼き付けていた。一方で、自身の過去の未熟を省みつつ「高校生がどこまで自身の考えを持ち、対等に議論してくれるのか」と、よぎる不安に葛藤を覚えていたのも事実である。

結果的に一蹴されたこの不安も、瞬時に

解消されたものではなくむしろ私の尽力を駆り立てるものであった。内心、私は少々焦っていた。休日返上で来てくれている生徒たちにできることは。私は沖縄の当事者の前で何を話せるのか。なぜ私の机だけ私以外みな女性なのか。精緻に冷静を装う私は、当然のように議論を仕切り、話を進め始めた。私はすぐに二つの気付きに出くわすこととなる。一つは、高校生三名の秘める想いや考えの深み。もう一つは、机に着く大学生三名を含めた六名の彩であった。そこでは肩書はその意味を薄めていった。いま振り返れば、大学生と高校生の議論という枠組みを越え、六名の個人による対話がそこに息づいていたのではないかと素直に考える次第である。

ここで議論の中身はいかなるものかと問われると、その進行過程のダイナミズムに関わる記憶は甚だ希薄である。議論後に行われた机を超えての意見共有では、三名とも思いを話してくれた。よほど自分の機の議論がうまくいったのか、それとも私の恣意的な視線がぐいと発言を後押ししたのかはわからない。しかし、この時点で私の当初の目標は達成され、同時に目標を通り越した経験的財産を手にしていくことを意識した。さてではどのような議論をしていたの。次にそう問われれば、画面投影に主張された議題の大枠だけを意識しつつ、大方奔放に、赴くままに話を弾ませていたのであると応える。それが何より楽しく、テーマに従い途切れさせるのは損だと直感していた。

一方同時にそうした自由な議論から私の心中にふくらむものは莫大であった。

最も私の心を動かしたのは、彼女らのふるさとへの愛情や愛着心であった。歩いていけば自然と声をかけてくれる街の人々が好き。沖縄らしい自然や雰囲気が好き。「ゆるふわ精神」(沖縄の人々らしさを表現しているらしい)が好き。だからこそ、沖縄の人々が声を荒げて基地などに反対する姿に悲しさを覚える。基地が返還されても、その土地を沖縄らしからぬ商業施設に変えていくことは抵抗を覚える。経済発展を無理に急いで、沖縄らしさが都市化に埋もれることが嫌だ。彼女らの言葉から主張される根源の多くにはそうしたふるさとへの愛があり、日々画面に流れるニュース情報には現れない感情を覚えた。

同時に、ここまでの愛着を持つ彼女らでさえ未だ若いという事実も如実に意識させられた。この沖縄への愛着を何十年も重ね、今に至るまで一生を過ごされてきた方々の姿がよぎる。彼らがふるさとを脅かされかければ、身をもがれる感覚を味わうことになるだろうと共感のような感情が訴える。基地は危険だ、騒音がひどい、野生生物が脅かされるなどの主張は、それまでどこか攻撃的で理解が及ばない部分があった。そうした主張の原点には、理性では測りきれない、愛するふるさとへの心があるのではないか。

「ふるさとを愛する」とは、一度よく考え、言葉に出してみれば単純明快の感情である。



しかし私はどうやらその心を忘れていた。私は幼少より幾度か住居を移しているため、明確なふるさとを意識したことはない。また、学生生活では周囲の多くが既にふるさとを離れ移住を経験している。その末なのかは見当もつかないが、私は失って傷つくふるさとを有していない自分の姿に気付かされた思いであった。同時に、私のような類型は、殊に現代の都市部ではむしろ多数派となったのではないかとも考えた。ここまでをたどれば、基地問題への反発が、理性的な交渉による利益の応酬に馴染まぬ性格を持つとの仮説を浮かばせる方もいらっしゃるかもしれない。

ふるさとがありのままの姿でいてほしいと願う市民が確かに存在する一方で、経済の発展なくしては今後を見据えられぬ沖縄のジレンマ浮かび上がってきた。経済発展を急ぎ、沖縄らしさが失われることに好感は覚えな。ところが、現状のままの沖縄のままでは経済は成り立たない。沖縄の各地で叫ばれる格差問題もそうした実情を露わにしていた。ともすれば、沖縄らしい発展を基軸に着実に歩み続けるしかない。インバウンドや基地返却など、目先の機会を短期的

な利益のために投じることはかえって沖縄のためにならないのではないか。むしろそうした機会のめぐりあわせを沖縄らしさの保持発展に向けた手段と捉えるべきである。沖縄は確かに混沌としていた。感情的に基地へ反対する面も、理性的に外国人向けビジネスを行う面もいまの沖縄なのである。しかしそれでは今後も沖縄は分離し一体感を失っていくことだろう。であればこそ、皆が沖縄らしさに立ち戻り、一体感ある発展のために足踏みをそろえることが求められるのではないか。

長く私情を語ってきた本文も結びを迎える。このように相互理解より生まれた経験は、沖縄の方々の視点に少しでも寄り添う上での財産となった。高校生らが「私たちの話を深く聞いてくれた」と言ってくれていることに喜びを感じたし、同時に私達がこの議論の場にいることが価値たりえていることに誇りを覚えた。そして予想をしていなかったことに本経験は、自らのふるさとへの愛を問いた例のように、鮮やかな自省の場ともなった。

他者を深く知ることで自らを知る。自らに向き合うことで本当の自分が少しずつ見えてくる感覚は辛くも心地よい。私を本当に衝き動かすものとは何か。私にとってそれは、人とのやりとりから生まれる感情に他ならない。私の片鱗を見つけた、人生初の沖縄の夏であった。(小島 直毅)

参加者の声：日米学生会議側③



第69回日米学生会議沖縄本研修において、最後のプログラムがこの沖縄尚学高校でのディスカッションでした。連日、朝から晩まで続く充実したプログラムの数々を終えた最終日、正直に言えば心身ともに大変疲弊していました。それは、プログラムの”量的”な問題ではなく、沖縄の抱えるあまりにも大きな問題に直面し、様々な考え方に触れ、それら全てを自分の中で常に考え続けるということへの”質的な”ものであり、現実の厳しさを思い知らされたことによって生じた疲れでした。

最終日の朝、これほどの重大な問題を高校生と話すことは一体何を目的としているのか？そこに一体どんな意味があるのか？という疑問を隠せずにいました。しかし、沖縄尚学高校でのディスカッションを終えた今、私が感じていることは、このディスカッションは「沖縄の希望」であったということです。

ディスカッションは、日米学生会議参加



者3名、沖縄尚学高校生2名の計5名で、沖縄戦や平和教育について、在日米軍基地について、そして沖縄の未来についてといったテーマを基に、自由に議論をする場でした。高校生、大学生、沖縄出身者とそれ以外の場所の出身者といった立場の違いを軽々と越え、私たちは本音をぶつけ合い、真剣に、真摯に沖縄について語り合いました。本気で語り合うことを沖縄の言葉で「ゆんたくする」と言うそうですが、まさにそのゆんたくをしていました。

高校生たちが、沖縄について深く考え、独自の伝統文化を愛し、沖縄の過去や日本の情勢を学び、そして自分たちがどうやって沖縄を良くするのかについて私たちにもぶつけてきたものに触れたとき、沖縄の未来は明るいという希望を感じることができました。また、日米学生会議参加者同士も、普段はなかなか話せない深部まで議論を進めることができ、日本に暮らすものの1人として、沖縄を真剣に考えることの意義を強く感じました。いつのまにか疲れは吹き飛び、最後の1分まで語りつくし、別れを惜しみながら沖縄尚学高校を後にしました。

沖縄問題は非常に大きく、簡単に答えが

見つかるものではない、という意識は変わっていません。しかし、沖縄の若い世代は非常にパワーをもって、沖縄がもっと素晴らしく、もっとより良いものになるよう取り組んでいます。私も、他人事として目をそむけず、まずは当事者意識を持って考えること、そして未来を担う世代として責任をもって1つのことに取り組んでいくことで、やがて現在抱える問題を解決できるのではないか、そのような考えに至ることのでき非常に有意義でした。(金澤 つき美)

参加者の声：沖縄尚学高等学校側①

日米学生会議ワークショップは、私が沖縄のことについて考えるきっかけになりました。いつも受け身だった沖縄戦のこと、向き合おうとしてこなかった基地問題。ディスカッションを通して、人の意見を聞いて自分なりの疑問や考えを持ち、それを発信することの大切さを学びました。自分の考えが浅はかだと感じ、意見が固まっていなかったとしても、外に出すことで自分のものになって、自分の考えが深まることを知りました。私は、話の中で沖縄戦や沖縄の基地問題について本土の人に知ってもらってどうして欲しいのか、という疑問がずっともやもやしていて、自分の中でまだ答えが出せずにいます。でも、ディスカッションの中で、「沖縄県が沖縄の問題として」でしか本土の人に発信できていないことや、本当に沖縄戦のことを知っているのかということは、これから私たちが考えていなくては

ならないと感じました。そのために、もっと対話の機会を増やしたいです。10年後、沖縄がどうなっていてほしいのか、沖縄戦のことを風化させないためには、どうしたらいいのか。私が、高校生としてできることは何があるのか考えていきたいです。

(沖縄尚学高等学校 2年 親泊 楓香さん)

参加者の声：沖縄尚学高等学校側②

私は、この会議に参加するまで不安な気持ちしかありませんでした。

沖縄県民ではあっても、実際基地の近くに住んでいるわけではなかったの、基地があることでのメリットやデメリットをしっかりと説明できないと思ったからです。

知識があまりない状態で参加して、緊張していたのですが、グループでの話し合いの時に議題についての話だけでなく、そこから様々な問題について話せたことが、すごく良かったと思いました。

話の中で私は本土と沖縄との溝について興味を持ちました。沖縄の学校で平和学習をする時は沖縄戦のことに注目します。アニメなどで広島や長崎の原爆の話を見たりはしても、そこから実際に原爆ドームを見に行くことはしませんでした。本土での平和学習では、事前学習をせずに沖縄に来たという話がありました。どちらも、戦争のことについて触れている事にはなるけれど、その戦争についての学習をしていないので、考え方や見方に溝ができてしまうのではないかと思いました。今回の会議で話し合い、

学んだ事を生かして、どんな問題でも様々な考え方ができるようにしたいです。

(沖縄尚学高等学校 2年 東川平 佳暖さん)



参加者の声：沖縄尚学高等学校側③

私は今回の学生会議の勉強会を通じて、沖縄の基地問題や海外の情勢の認識がどれほど浅はかだったのか知ることができました。

今回、「沖縄の基地問題」について大学生の方々とディスカッションをさせていただきましたが、メディアでも紹介されている本土と沖縄の問題意識の差というものがある程無く、考え方に共通点が多い事に驚きました。同じグループの方全員が予想だにしていなかった。

私は、今まで米軍基地の問題は、テレビや新聞でしか知ることが無く、その水面下で起こっていたこと、本土の方々との意見を知りませんでした。また、高校生から見て大学生の先輩方は、政治や経済、法律など専門的知識や教養が高く、とても柔軟な考え方を持っていてとても勉強になり良い刺激を受けることができました。

沖縄の現状をどのように改善し、未来をより良くしていくにはどうすればいいのか、

今回の日米学生会議の勉強会に参加したことで、まだまだ未熟ではありますが、自分なりの答えを持つことができました。私も大学生になったら日米学生会議に参加し、沖縄に貢献できる人材になりたいです。今回は、参加させていただきありがとうございました。

(沖縄尚学高等学校 2年 福地 佑香さん)

大学生になったら日米学生会議に参加したいと語る沖縄尚学高等学校の生徒



■沖縄本研修 全体通しての感想①

正しいこととは何か？

沖縄で自分は、この問いに正面から向き合っていた。

果たして誰が、基地問題に「正しく」答えられたのだろうか。政治家か、軍人か、メディアか、はたまた名もなき市民であろうか。沖縄では全員が全員、彼らなりの正しさを歴史や記憶、知識の中に模索し、言語化し、発信することに日々尽力している。

しかし、万人を納得させ、実行に移せるような解を誰か描いていたかと言えば、否、と答えざるを得ない。そもそもそのような普

遍的な「正しさ」は存在するのだろうか。

人は何かを正しいと主張するときには必ず前置きをする。「政治的には」「軍事的には」「倫理的には」「個人的には」などなど。正しさとはあくまでもベクトルの大きさであり、ベクトルの方向に正しさは存在しないはずだ。仮に、政治的正しさより倫理的正しさが正しい、ということになったとしても、万人がその正しさに向けて一致団結し、行動を起こすというのにはあり得ないと思う。人間の行動の根源には欲望や感情など一つのベクトルに収束しない不確定な要素があり、人は自分の意見を主張するときも自分の社会的立場や自分の背負う歴史や経験、与えられた知識を媒介にして思考する生き物である以上、この現象は当然なのかもしれない。

それでも、そのような制約や立場を超えてそれぞれの「正しさ」の公約数が出せるのではないか、正しいベクトルの方向は存在しないにしてもベクトル間を調整する正しい方法は存在するのではないか、現状を打破する正解はないにしても現状を漸進的に改善する正解はあるのではないか、そのような困難な問題を前にして、沖縄で僕は立



ちすくんでいた。

沖縄研修前、自分は基地移設について政治的・軍事的に判断すればよいと思っていた。どれだけ理想を叫んでも、軍事的に沖縄県民と日本国民を守るのに基地が必要なのであれば必要だし、物事を動かすには普天間から辺野古への基地移転は沖縄全体のステップバイステップの基地負担軽減のあり方として非常に有効だと思っていた。

しかし、その考えは辺野古を訪れ、揺らいだ。

辺野古の美しい海やサンゴ礁を見たとき、パンフレットの主張ではわからなかった、「自然破壊」の意味が五感を通じて伝わってきた。また、炎天下の中基地移設に反対する住民や船に乗って日々跳ね返されるとわかりつつも移設予定地の柵を越えようとする人々の姿を見て、全体益を語るだけではどうしても無視されてしまう現地の人々の感情的側面などが垣間見られた。

政治的・軍事的に語れない正しさ。正しいことを主張しているのは政治家なのか軍人なのか、彼らを見ていると、その信念は揺らいでいった。むしろ、個人として、地元的环境や人を愛する者として、当たり前正しいことを言っているのは彼らなのかもしれない。政治家や軍人は組織や全体としての正しさを追求し、実行可能な戦略的に正しい方法を行なっているに過ぎないのだろう。

とはいえ、だ。両者の正しさがぶつかったところで個人の正義が全体の方針に勝るこ

とはない。どうしても卵は壁にぶつかり、割れてしまう。割れると分かっている卵は壁にぶつかっていく。

確かに、卵の側が声をあげ続けること自体に意味があるのかもしれない。たとえ政策に反映されなくても、そこに声を上げなければ、消えてしまう彼らの、彼らの先祖の思いがある。だが、声をあげ続けさえすればそれだけで良いのだろうか。いずれ、声は枯れ、方々に届かないくらいの小ささになっていく。不思議なことに自分が基地問題について考えていた時に、沖縄戦や二次大戦について見聞きした話や光景を現前として深く思い出すことはなかった。戦後70年を過ぎた今、まだ20にもなっていない自分には正直戦争のイメージはつかない。昔おじいちゃんから聞いた空襲の話、広島で聞いた被爆者の話と原爆ドームの光景、音や光の形をして入り込んでくる戦争の足跡。しかし、どれも一時的なものとして心を通過し、東京での、2017年の、生活の蓄積にかき消されていた。基地があれば、戦争になった時に真っ先にその基地が狙われ、その周りの住民が真っ先に死ぬ。そのことは頭では分かっている、心では分かっていた。もちろん、米軍基地は戦争を未然に防ぐ抑止力としての役割も果たすのであろうが、基地の周辺に住み、先祖が沖縄戦を経験している住民にとって、米軍基地が身近にあり続けることの心理的負担は東京の一若者である自分の想像をはるかに超えたものであるはずだ。その上で僕は中央官庁で

働き、外交に携わり、政治的軍事的な正しさを信奉し続けることができるのだろうか。功利主義的に壁の側に最後まで立ち続けることができるのだろうか。正直、答えはまだ出ていない。

話が個人的なことにずれてしまったが、卵が壁にぶつかっているだけではダメだと思ふ。壁の側が卵の声に耳を傾けなくてはならない。そしてその声をかき消すのではなく、受け止め、次の世代に引き継がなければならない。知っているのと知らないのとでは、壁の側に立つことを迷ったのと躊躇いがなかったのとでは、たとえ政策の結果が同じだとしても、その政策に託された思いの重さが異なってくる。思いの重さが異なれば、その政策の寿命が異なってくる。政策が二転三転しては、それは政治的にも「正しい」とは言えないのではないだろうか。

結局のところ、立場を超えた対話が大切である、という月並みの結論に至ってしまったが、個人的には、沖縄で感じた当分は消化しきれないような迷いに対し、真摯に向き合っていきたい次第である。(戸嶋 寛太)



■沖縄本研修 全体通しての感想②

沖縄の基地負担は大きすぎるのではない。しかし地元の人々にとって、基地の存在による収入があることも確かだろう。また、地政学的に沖縄に米軍基地があることの重要性は大きい。沖縄の人々の海を思う気持ちと、官邸の国を思う気持ちのはざまで、どこに着地すべきなのか。思考的沈降の果てにある無力感、虚無感に抗いながら、自分に何がでるといえるのか、いや何をなすべきなのかと問うた沖縄合宿だった。

埋め立て予定地となっている辺野古の海周辺の珊瑚を、ポートで案内してくれたお兄さんの、自分の兄弟を紹介するような瞳が忘れがたい。たとえ感情論であろうとも、彼らの海を思う気持ちを無視することはできない。

一方で、沖縄には基地を必要とする人がいるのも事実である。それを自分に教えてくれたのは尚学高等学校の生徒たちだ。生徒たちの話には、本土に籠っていても聞こえてこない声があったのだ。それはメディアによって再構築された物語を通しては見えてこない、沖縄対本土という二項対立では感じることはできない、そこで生活する者たちのパトスの体温である。生きていくために基地による収入を必要とする人がいる。さらに彼らは、基地があることによる国際化や出会いなど、基地のプラス面にも目を向けていた。

株式会社がちゆん代表の国仲さんによるプレゼンテーションも興味深かった。もし

この感想文を読んでいる方がいれば、あなたはこの文章のなかに「沖縄に基地は必要か」という論点と「普天間基地を辺野古に移設すべきか」という論点の意見が混在していることに気づいただろうか。国仲さんが指摘されたように、沖縄問題は騒音問題、米兵による犯罪、辺野古移設など、さまざまな次元の問題が包括されており、それらについてテーマを絞って整理することの重要性を学んだ。

今回の合宿で特に興味深かったのは、名護市の市長を務めておられる稲嶺進さんや、辺野古移設反対運動のリーダーの方から感じた「沖縄アイデンティティ」である。稲嶺さんは講演の最初にうちなーぐちで挨拶してくだり、うちなーぐちは方言ではなく、日本語とは違う言葉だとおっしゃっていた。また、移設反対運動のリーダーの方も、自分が若かったころ、夜に浜辺で三線を弾きながら泡盛を飲んだ話など、沖縄の文化を守る重要性や、沖縄戦という歴史を背負う沖縄の、平和への立場を熱心に話してくださいました。

このことについて、台湾研究者の野嶋剛さんは「辺野古問題による沖縄の台湾化」を指摘している。台湾が、中国の一部であるという過去の常識から揺らぎ、台湾は台湾であるという認識が主流化しているように、辺野古問題によって、もともと日本の一地域である沖縄の「沖縄アイデンティティ」が強化され、その自然な帰結としてナショナリズムに目覚め、自己決定権を一層求める

動きになっているというのである。確かにアイデンティティとナショナリズムには同一ではないが一定の親和性があり、言語や文化、歴史はアイデンティティの土壌である。わたしたち本土の人間は、長嶺さんや基地移設反対運動のリーダーの方、そして翁長知事のオール沖縄の根底にある「沖縄アイデンティティ」の存在をしっかりと認識する必要があるだろう。

最後に少し自分と沖縄の関わりを少し述べてこの文章を締めくくりたい。自分は幼少期から父親に連れられて何度か基地の反対運動などに沖縄で参加したことがある。どこの基地かは忘れたが、米軍基地を遮る有刺鉄線や、ガマを見に行っただのを覚えている。また、小学生の時にとあるプログラムで沖縄の米軍基地に住む海兵隊の家族の家にホームステイしたこともある。そんな自分だから、沖縄の基地問題についてはある程度考えてきたと思っていた。しかし、今回の合宿で自分は「知っているつもり」という思考停止に陥っていた自分と否応なく向き合うこととなった。

そのことに気づかせてくれたのは基地問題に悩む尚学高等学校の生徒たちに他ならない。沖縄はオール沖縄ではない。そこで生活する様々な意見を持った人々の意見を総括することは無意味である。

プラトンは、ことば(ロゴス)をかわすことによってわれわれは普遍的な真理を目指すことができると主張する。そうした試みは徒労かもしれないが、相互理解など不可能



であるとしたり顔をするよりも、泥臭く話し合った果てにたどり着く場所はあるという信念の指し示す道を、これからは進みたい。(豊坂 竹寿)

■沖繩本研修 全体通しての感想③

今回の沖繩研修は、社会人へともうすぐ足を踏み入れようとする私にとって非常に大きな一撃となった。これまでどこか他人事であった社会的課題が、いつの間にか自らの内に深く入り込み、私自身の問題として捉えるようになっていたからだ。

「沖繩問題」というと、普天間はずどこにあるのか、辺野古とはどういう場所なのか、という知識の段階からのスタートだった。これまでニュースでひたすら「日本の課題」として捉えられていることに対し、自分がどれほど無意識でいたかを痛感した。一瞬放映はされるが、その後記憶から失せている。それが自分にとっての「沖繩」であった。

その無関心さは、わずか3日間の訪問により劇的に変化した。短期間に濃縮されたスケジュールの中、立場の異なる人々同士(陸上自衛隊、米軍、元県知事、地元メディ

ア、市長、移設反対の市民グループ)の考え・思いの一つ一つが私の耳に新鮮に響いた。メディアの分科会に所属することもあり、実際の声とテレビや新聞を通しての声はまったく違うものである、という意識は持っていたが、そのことを実際に体験できたのは非常に大きい。

また、私自身の考え・意見も揺らいでいた。当初、移設に対してどこか賛成派であった私は、元県知事・仲井眞さんのお話に無意識にうなずいていた。“現実的に何をどう変えていくのか”そのことに徹底した姿勢は行政的に正しいと思ったし、また尊敬の念も抱いていた。そのことは今でも変わらない。しかし、移設に反対する名護市民の方々の声を聞いた後、私の揺るぎなかった考えにかすかな陰が差し込んだ。理性的な立場、つまり行政の側に立って考えれば、すでに合意の上で成り立った基地の移設を行い、一刻も早く普天間地域における危険性を排除するのが正しいかもしれない。しかし、その上で反対の印を掲げる地元の人々に、“人間として生きる”という、理性以上のものを感じた。それは政治的な意味での合理的かどうか、というよりも、人だったらまずこう生きるだろう、という信念に似たものだ。もし仮に自分がこの場所に生まれていたら、おそらく同じことをしていただろう、とも思う。そうした中で、“正しさの基準”を見失いつつあった私は、沖繩を去った後になっても考えが止まらずにいた。この研修は3日で実質上終わった。しかし、本当は

何年、何十年と続いていく。自分が今後社会を支える側・創る側に回って生きていく中で、それは私たちの課題として受け取られていく。それをどう解決すべきなのか。いやむしろ、解決できない可能性の方が高いかもしれない。しかしその中でも“最善”を追究する姿勢は常に抱いていくべきであり、そのためにも自らに欠けている分野の学問をひたすら行い、その中でともに協力するための人脈も大きく伸ばしていくべきだ。

私にとって沖縄は、社会の中の人としてどう生きるのかの責任感、また意義を教えてくださいました人生の恩人である。(藤井 一樹)



(上) バス移動中の集合写真

(下) 沖縄尚学高等学校勉強会の集合写真



3-6-3. 事後研修

■概要・目的

- ①沖縄本研修の経験を踏まえ、アメリカ側参加者に向けて、在沖米軍基地問題の現状や問題点を知ってもらう。
- ②アメリカ側に共有した後、アメリカ側参加者・日本側参加者・沖縄の方の三者で議論し、沖縄・アメリカ・日本国政府の三者の関係について、現状の問題点を考え、理想の関係性を模索する。
- ③議論の成果を社会に向けて発信することで、日米学生会議を超えてより多くの人に、アメリカ・日本国政府・沖縄県という様々な視点から、「沖縄」を今改めて考える契機を与える。

■スケジュール

- 7月中旬: 日本・沖縄側ディスカッションメンバー決定
- 7月下旬: 京都での発表に向けたディスカッション
- 8月9日 (京都): Okinawa Presentation・アメリカ側ディスカッションメンバー決定
- 8月9日～8月25日: ディスカッション
- 8月26日: ファイナルフォーラム

■ディスカッションメンバー

本会議中、沖縄ディスカッションメンバーとして、「沖縄」「日本」「アメリカ」の3つの視点から沖縄に関する基地や平和についての議論を行い、京都での「Okinawa

Presentation」、及び東京での「ファイナルフォーラム」での発表を担当した。

第69回日米学生会議日本側参加者 2名

伊藤 江理華(東北大学 医学部医学科 2年)

小島 直毅(北海道大学 法学部 4年)

第69回日米学生会議米国側参加者 2名

Andrew Fischer (Washington University in St. Louis, Class of 2019)

Carolyn "CeCe" Johnson (Franklin and Marshall College, Class of 2017)

株式会社がちゆん 社員 1名 (オンライン)

平仲 稚菜平様 (教育旅行コーディネーター)

■各プログラムの詳細

▼Okinawa Presentation

日本側ディスカッションメンバーにより、沖縄研修等の体験をもとに、アメリカ側参加者に向けて、沖縄の歴史や現代の問題点などを共有した。その後、日米の学生全員(67名)で、基地問題に関するディスカッションを行った。



▼約2週間に渡るディスカッション

アメリカ側ディスカッションメンバーも加わり、計5人で、沖縄に関するディスカッションを英語で深めていった。

▼ファイナルフォーラムでの発表

日米の学生が3週間ともに過ごす本会議では、沖縄の議論に加え、各参加者が属する分科会に沿った議論を行った。本会議の終盤にはそれらの議論を総括し、社会に向けて発信する「ファイナルフォーラム」が開催された。

今回、ファイナルフォーラムには、参加者67名に加え、一般来場者約100名が参加し、オンラインでは、日米学生会議に関心のある約5000人に向けてライブ配信された。

沖縄基地に関しての議論の総括も、上記日米学生会議の発表メンバー4名により発表がなされた。



■ディスカッションメンバーの声①

8月の本会議が始まると、沖縄の現状、学んだことをアメリカ側の参加者と共有し、共に考えてくれる仲間を募った。日本の「当事者意識」とからは全く離れた視点を投げ

かけられ、新たに考えさせられることも多かった。

大きく二つの議題に分けられる。まず一つは太平洋戦争の戦勝国としてのアメリカが、沖縄に置いて基地所有権を未だ維持しているのか、という根本に問いかけるものであった。日本は敗戦国なのだから戦勝国に権利があるのは当然、とみる人がいる一方で、条約違反だとする意見もある。「軍事的植民地状態」という言葉を聞いたときは鳥肌がたった。また、時には昨今の北朝鮮情勢や中国との関係を見ると沖縄は基地の存在により守られているのではないか、という意見に、反応できずただただ頷いてしまうこともあった。沖縄を自分たちの足で歩きまわった感想や実感を伝えると、地元の意見の価値、重要性にも焦点を当てる必要があることがわかった。日本とアメリカの「外交的」な関係の方が沖縄だけの決定よりも優先される、という事実。それをどう捉え、当事者にどう寄り添えるかひたすら知恵を絞った。世代間のギャップもあり、なぜ我々が議論をする必要があるのか、という問いも生まれてくる。step by step の努力が建設的な議論を可能にし、自由な関係、open relationshipが必要だから、そう結論が出た。小さな一歩の積み重ねの可能性を皆が信じ、歴史を時に盾に、時に剣にして考える必要性を言葉とともに身を持って考えさせられた。

二つ目の議題はいかに「共生の方法を模索するか」ということであった。世代間で意

見が大きく異なること、一口に県民感情とくれないことは先述したとおりである。高校生とのディスカッションからは「沖縄」という自分の故郷への愛着を切に感じた。同じ地元民が声を張り上げ、争ってまで基地に反対する姿に虚しさ、悲しさを覚える。生まれた時から基地が身近にある彼らにとっては、基地を含めた沖縄全体が「故郷」なのだろう。そう思ってしまう。彼女らの意見の根源にあるものとは、負の部分をも全て含めた全体像を、しっかりと捉えた土台があるのではないか。

ではそれを受け入れる年代まで待つのか、という新たな問いが生まれる。時間が唯一絶対の解決方法であるのか、いやそうではない。基地問題はそれ自身が変数となり、様相を変えていくものだ。地域問題の構造的な「元凶」であることに対し、根本的な疑問が生じることもある。基地問題を冷静に捉えた瞳で多くの世代への影響を及ぼし、基地撤廃という全か無かの答えではなく、「共に生きる」、道を探って欲しい、という結論に達した。

私たちは沖縄を考えるとき日本で唯一の離島県、特異な歴史背景をもつ地として向き合わねばならない。物理的に離れていることはそれだけで障害となりうる可能性があるし、基地問題も選挙や政治的な問題が関わる時、一時的に脚光を浴びるだけのように思う。政治、外交、安全保障、安全など要素が複雑に絡み合っており目先の問題を解決しようとする観念的な手法では上手

くいかない。『理想、理念、と現実としての問題の違い、その中で最適な答えを出し、「民主主義」という方法に賭けて、その是非を広く人々に問うことでしか、前に進むことができない。』

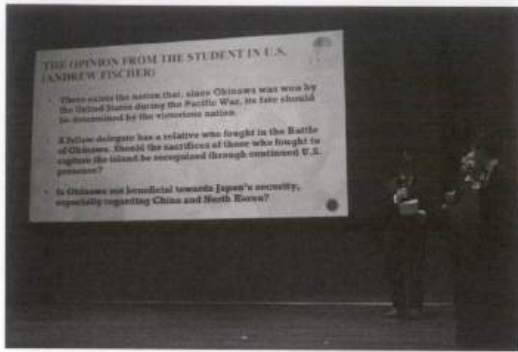
理念と理想の違い、論理と感情の乖離、それは相容れない関係なのかもしれない。それでもまごうことなき「問題」が目の前にあるのであれば不合理であっても前に進まなければならない。これまでも、そしてこれからも、沖縄はいろんな国、地域との関係の最適化を図りながら行動していくのであろう。負のスパイラルに入るのをギリギリのところで避け、解がない中で、暗中模索しながらいかに前進するか。その問いは日米両国の参加者全員に問いとして残り続けるに違いない。(伊藤 江理華)



京都での Okinawa Presentation の様子

■ディスカッションメンバーの声②

I found listening to the Okinawa presentation in Kyoto and participating in the follow-up presentation in Tokyo to be a greatly rewarding experience. As a participant in the presentation given during the Final Forum, I chose to focus on an American perspective, especially with regards to the importance of Okinawa to the American military and the fact that Okinawa was won by the United States during the Pacific War. I emphasized the fact that, while World War II ended over seventy years ago, the current situations of military bases and national defense in Japan are direct consequences of the events during and in response to the war. I chose to express that, while many Japanese people have various problems with the American military presence in Okinawa, the bases there are enormously important for the security of both Japan and other U.S. allies in the region given the impending threats of North Korea and, perhaps, China. With the emergence of these new threats, I am curious as to whether Japanese individuals' opinions regarding Okinawa will change. Although I am not sure what those that attended the Final Forum thought of the perspective that I chose to take, I hope that it widened their understanding of the issues at stake. (Andrew Fischer)



ファイナルフォーラムでの発表の様子

■ディスカッションメンバーの声③

しばしば、「当事者意識を持つ」という。他責的態度への警鐘として用いられるこの言葉は、沖縄問題における日本人、殊に本州在住者に対して向けられることがある。今回私は、自らこの「当事者意識を持つ」という言葉を自身に対し向ける事とした。

理由は2つある。一つは、純粋な社会問題への興味であった。日本は国土の先端にほど国際問題の根強い地域が点在している。筆者が在住の北海道も、北方領土問題を主題とする一舞台。領土問題を共に持つはずの2道県であるが、双方向的に問題意識を共有しているケースは見たことがなかった。

二つ目は、当事者意識という言葉そのものを問い直したいと考えたためだった。筆者は集団への所属意識が周囲に比較して根強くなく、だからこそむしろ集団への自然発生的な所属意識の在り方に興味と憧れを持っていた。

事前研修や本会議を通して、私は十二分に興味を満たすことができた。また当事者

意識も期待以上に持つことができたことと自覚していた。しかし同時に、感情までも当事者そのものになりきることへの難しさを体感したのであった。その契機はまさに議論の中にあった。沖縄在住者として基地問題への反対意識を述べるわかかなさんや、親族が沖縄米軍として従事していたCeCe。彼女らの言葉にはどれも感情を背景に感じさせる力があり、一方で筆者にはそうした感情面が意見から欠如していると痛く自覚させられたのであった。この差異は当然ではないか、結局私は当事者本人ではないのだとの考えが、当時を思い起こす度に思い起こされる。理由は明確で、沖縄問題によって筆者の感情が動かされた経験は非常に乏しかったためだ。ニュースや論文を読み、現地の方々の話を伺っても、問題を「自分ごと」に置き換えて考えるには足りなかったらしい。

筆者はただ情報を論理的に構築することで議論を作り、可能な限り客観的な視点から妥当と考える結果を主張していたにすぎないのかもしれない。確かにこれでは、問題の当事者が感情的に領ける答えを出す努力を想定できていない。初回の議論でそうした学びを得た筆者は、当然のように当事者理解に奔走するのであった。

本会議の後、今回のように当事者本人になることが叶わない議論に意味はあるのかを問い直した。同時に感情面では、議論への参加余地すら失ったことを意味するのではないかと懸念していた。現在の筆者は、意味は存在すると同時に、議論への貢献は十分

に可能であると考えている。なぜか。

その背景は、事前研修にて沖縄県庁にて伺った行政の視点に類似している。市民より賛否の声があがる中、全員の希望に叶う政策ができあがることは稀である。しかし行政は今できることから政策に落とし込んで問題解決を続ける必要があり、多くの場面では受益者に偏りが生じる。だからこそ少しでも当事者の意に沿う政策を施行しようと、行政マンは彼らの声を聴いては当事者意識を磨く。そして時に解決の糸口が見えないジレンマに追われつつ、政策に結晶化していく努力を繰り返す。

社会問題における行政の立場を考えると、賛否どちらの意見にも傾倒しすぎることのない現実案を推進できる特権的な立場であるように思える。沖縄基地問題のように対立の根が深まり拮抗状態にあるからこそ、実行力のある行政の存在は大きくも見えた。一方で気付かされたのは、賛否双方に当事者意識を持ち、かつ人々を巻き込んで問題を解決するカリスマ性を有する存在が民間に不在であることだ。日米間や世代間の差違を体感することで様々な当事者の気持ちを汲み取り、草の根から事を興していくキーマンは現れないのか。人の価値観を知ることで自らの次の歩み出しを考える場となる日米学生会議に、そうした場を創りあげることにはできないだろうか。(小島 直毅)



■□第4章

本会議中の活動報告

第4章 本会議中の活動報告

4-1. 直前合宿

■コーディネーター

有田 彩子・齊藤 和平

■スケジュール

【日時】2017年8月5日(土)～8月6日(日)

【場所】京都宇多野ユースホステル



8月5日(土)

- ・本会議プログラム説明&議論
- ・スキット(寸劇)練習
- ・実行委員 業務説明&相談会
- ・登壇プログラム 打ち合わせ
- ・リフレクション

8月6日(日)

- ・分科会活動
- ・主催団体 国際教育振興会 代表理事
伊部 正信様より激励のお言葉
- ・アメリカ側代表団との対面

■概要・目的

直前合宿は、日本側代表団における最後の事前準備の機会である。本会議のために約3ヶ月間準備を重ねてきた参加者たちは、翌日から始まる本会議、とりわけアメリカ側代表団との対面に胸が高鳴る中、これまでの分科会活動の総括やスキット(寸劇)の発表練習などに勤しんだ。



スキットの練習風景



アメリカ側との顔合わせ後に実行委員自己紹介

— 4-2. 京都サイト —

8月7日 ~ 8月11日



古えより都として栄えてきた京都。碁盤の目に美しく刻まれたその街並みは、東西南北に仏教各流派の総本山を擁し、仏教の要衝として今なお存在感を放つ。さらに、街の中心に御所を据える京都は、東西に横たわる「京の台所」錦市場をはじめ、西陣織や能楽、裏千家等、彩り豊かな伝統文化を包摂し、現代においても日本の伝統文化の源泉として世界中の人々の心を惹きつけてやまない。そのように、観光都市としての側面を持ちつつ、しかし20~25歳の若者が人口の1割を占めると言われる京都では、学術もまた盛んであることを見逃してはならない。静謐な寺社仏閣の周囲には大学や研究機関が立ち並び、iPS細胞の発見によって名を馳せた京都大学名誉教授の山中 伸弥教授はこの街で研究を進めた。第一サイトとなるここ京都では、そうした科学や哲学等他分野に亘る先人を輩出した街としての側面にもスポットを当てつつ「伝統文化」の枠に捉われない、生きた京都を体感することを目標とする。

■サイトコーディネーター

有田 彩子
河崎 涼太
Danyi Zeng
Erin Norris

アイスブレイクで盛り上がる日米の参加者



■サイトスケジュール

8月7日 (月)

- ・アイスブレイク
- ・開会式
- ・分科会議論
- ・スキット

下鴨神社で和風の弁当に舌鼓を打ちました



8月8日 (火)

- ・座禅・茶道体験
- ・神道レクチャー
- ・分科会フィールドトリップ
- ・分科会議論

中国語やフランス語などでも会話します



8月9日 (水)

- ・能体験
- ・外交パネル
- ・沖縄プレゼンテーション
- ・分科会議論
- ・文化紹介プレゼンテーション

畳・木造の部屋に宿泊しました

8月10日 (木)

- ・京都フォーラム
- ・京都レセプション
- ・リフレクション



■宿泊先：京都宇多野ユースホステル

■日本国総理大臣 安倍 晋三氏より開会式に寄せて

第69回日米学生会議が日本で開催されることを喜ばしく思います。

I am delighted that the 69th Japan-America Student Conference is being held in Japan.

日米学生会議は1934年に活動を開始して以来、80年以上もの長きにわたり、両国の相互理解と友情の促進に貢献されています。特に、日米両国の学生自身が、テーマや視察先の設定等の運営を自分たちの手で行い、3週間にわたり、真剣に議論を交わし、充実した時を過ごすことにより、次世代を担う日米両国の若者の絆を強くすることは、日米関係をより強固なものにするための大きな架け橋となっています。

For over 80 years, since its inception in 1934, the Japan-America Student Conference, JASC, has been contributing to mutual understanding and friendship between our two countries. In particular, JASC has strengthened the ties among young people from both countries who lead the next generation, as the participating students of the two countries manage the Conference themselves, including through selecting discussion themes and visiting sites by their own, engage in serious discussions, and spend fulfilling time together for three weeks. This program has served as a big bridge to consolidate further the relationship between Japan and the United States.

本年の日米学生会議のテーマは、「己を省み、人を知る。～価値観の共有から生まれる可能性～: Self and Society: Sharing Perspectives and Inspiring Action」と伺っています。私は、日本と米国の学生それぞれが価値観を共有し、お互いを尊敬しつつ、知的好奇心に満ちた素晴らしい議論が展開されることを期待しています。今回で第69回を迎える日米学生会議自身の歴史が両国間のこのような価値の共有に大きく貢献していることは言を待ちません。

I understand that the theme of this year's Conference is "Self and Society: Sharing Perspectives and Inspiring Action." I sincerely hope that the students of both countries will share values and show mutual respect while developing wonderful discussions filled with intellectual curiosity. It goes without saying that the history of JASC itself, which now celebrates its 69th occasion, has contributed greatly to the sharing of such values between the two countries.

今年の参加者は京都府、愛媛県、三重県、そして東京都を訪問されます。歴史、文化、自由、そして革新性を心に留めて議論を進める上で、もっとも適した場所といえるでしょう。文化、環境の多様性に触れつつ議論を行い、日米両国の学生の間で様々な価値を共有することで、未来への更なる成果をもたらしてほしいと思います。

This year's participants will visit Kyoto, Ehime, Mie, and Tokyo. These are ideal locations for them to develop discussions with history, culture, freedom, and innovation in mind. I hope that the students from both countries will experience diverse culture and environment through their discussions and share different values among themselves, and continue to bear fruit in the future as they have in the past.

本会議のOB・OGの方々は、現在、日米両国において各界で活躍されています。この夏、米国と日本のそれぞれの学生が刺激的な議論を通じて、真の友情を育むとともに、新しい時代を切り拓く旗手として大きく成長されることを期待しています。

Today, the alumni of JASC play active roles in various fields in both countries. It is my hope that this summer every one of the participating students from both the US and Japan will cultivate true friendships through inspiring discussions and grow further as flag bearers to open up a new era.

平成 29 年 8 月 7 日
日本国内閣総理大臣 安倍 晋三

August 7, 2017
Shinzo Abe
Prime Minister of Japan

■各プログラムの詳細・感想

▼開会式@立命館大学 (8月7日)

第69回日米学生会議の幕開けとなる開会式は、立命館大学にて開催されました。式は立命館大学生によるよさこいパフォーマンスで華やかに幕をあげ、元NHK副会長今井 義典氏や京都市長 門川 大作氏、元クラークコンサルティング株式会社社長 クリフォード・H・クラーク氏、関西アメリカンセンター所長/駐大阪・神戸総領事館領事ブルック・スベルマン氏がお越しくされました。基調講演では異文化理解がテーマとなり、クラーク氏より日米の学生が3週間を過ごすにあたり大変意義深いお話をいただきました。



(上) 伊部代表理事によるご挨拶
(下) クラーク氏によるご講演



▼スキット (8月7日)

日米の学生が自国の文化やトレンドを交えて、寸劇を披露し合う毎年恒例のイベントがスキットです。日本側は5月の春合宿からスキット班が組織されて準備を始めますが、アメリカ側は直前合宿のみしか準備をしないのにもかかわらず、毎年レベルの高い寸劇を披露してきます。

参加者の声

「もう一度、はじめから考えよう」

本番1週間前、スキット班のメンバーでそう決めました。スキット班が始動してすでに2か月半がたった時のことです。ストーリーを作っていくうちに、劇の方向性を見失ったため、イチから劇を作りなおすことにしました。

「スキットをやる目的は？」

「何を伝えたい？」

「楽しんでほしいのもそうだけど、アメリカ側参加者に日本のことも伝えたいね」

「どうやったら伝わるかな？」

「どんなテーマがいいのかな」

「社会問題とか、歴史とか、いろいろ考えられるよね」

「ひとりずつテーマ案を持ち寄って、また夜にMTGしよう」

「このテーマはどうか？こういうことが伝えられると思うんやけど。」

「それめっちゃええやん！」

「よし、じゃあストーリーに入ろう！」

「じゃあ、私この場面やるね！」

「OK！明後日までに各自ストーリーを考えてきて、明日の夜またシェアしよう！」

「スキット班以外のメンバーにも連絡せな
あかんな」

「それな！ネクストアクション確認しよ！」

個性豊かなスキットチームの団結力が一
気に高まり、日を経るごとに劇が形になっ
ていくのが肌で感じられました。みんなで
ひとつのゴールに向かっていく感覚をどう
表現して良いかわからないですが、「本当に
このメンバーでやれてよかった」と心から
思います。

また、配役と脚本を発表したのが本当に
直前だったにも関わらず、みんなのアイデ
アと演技力によって、各場面がどんどん面白
いものになっていきました。

自分が心から楽しめたのももちろんです
が、本番での盛り上がり、「楽しかった！
もう一回やりたい！」と言われたことが本
当に嬉しく、今までのハードワークが報わ
れた気がしました。(阪上 結紀)

▼座禅体験@妙心寺退蔵院 (8月8日)

妙心寺退蔵院を訪れ、松山 大耕様より座
禅の指導を受けました。



参加者の声①

「精神と身体は密接に繋がっている」、こ
の考えを基本とした禅の文化から先代の日

本人の考え方が垣間見られます。妙心寺で
の禅の経験では、普段意識をすることのな
い三つ、姿勢、呼吸、精神について向き合
いました。これらを意識することにより、
「心を整える」のみで考えると実行するの
が難しいことが、不思議と自然にできるよ
うになるのです。日々の生活で様々な情報、
人間関係に翻弄される現代の私達にとっ
ては、自分自身と向き合い、目の前で起き
ている物事に対する自身の姿勢を見つめ直
すことも時には必要だと考えます。

「心を整える」または自分に余裕を持つ。
無意識に自身の余裕がなくなっている時
こそ、意識して「禅」を行い、自分と向き
合い、時には目を背けたいくなる自分自身
とも向き合っていきたいです。(新井 英貴)



参加者の声②

Body and mentality is closely related.
From this idea based upon Zen culture, we
can see how Japanese predecessors thought.
Hearing what the diverse Japanese and
American delegates learned from
"mindfulness" made me realize how diverse
opinions can be.

We do not usually concentrate on our

body, posture and breath, so this time when we got to focus on these three became a very valuable time. (Eduardo Luis Herrera)

▼茶道体験@裏千家茶道 (8月8日)

裏千家茶道を訪れ、千 万紀子様によるレクチャー、呈茶を受けました。その後、裏千家で代表的な茶室、今日庵を見学させていただきました。



参加者の声①

日米学生会議のプログラムを初めて見た時、「裏千家今日庵での茶道体験」という文字に胸が躍りました。裏千家茶道に身を置く自分にとって、今日庵はまさしく聖地そのもの。この日、8月8日が、僕にとっての日米学生会議、一つ目の山場といっても過言ではありませんでした。

憧れていた門をくぐり、他の代表団とともに千真紀様によるレクチャーを受けたのち、茶道実演の鑑賞・お菓子とお茶の体験に移りました。レクチャーも実演中の説明も、全て英語で準備して下さった裏千家の皆様のお心遣いに、本当に感謝しています。普段の稽古と同じ動きが、プロの茶人の方々によって為されると非常に洗練されて

目に映りますし、また聞き慣れた用語での説明が英語で行われるのも、とても新鮮でした。

合理性ともてなしの精神に裏打ちされた茶道の美しさは、言語を超えて両代表団の心を近づけました。日本文化の本質に触れる本当に貴重な経験を、ありがとうございました。(松村 謙太郎)



参加者の声②

Seeing and learning from the Chado demonstration was an unforgettable experience. It was amazing to see the intimacy and heart-to-heart connection between the host and guests when they are brought together to share sweets and connect with nature through chado. As American delegates, we witnessed the subtlety of how Japanese culture fosters an appreciation of seasons, nature, and community. When I read the plan of JASC first, the sentence "tea ceremony experience in Ura-Senke Konnichian" made me extremely excited. I started practicing Ura-Senke tea ceremony from April, so Konnichian is a sacred place for me. Today,

August 8th, is one of my most important days during JASC term.

When the same movements as my usual practice were made by professionals of tea ceremony, they looked very refined. Also, I feel it really interesting when explanations of those were made in English, because I got used to hear them in Japanese in everyday life. Now, thanks to that precious event that may not be possible in my lifetime, I get more enthusiastic to do my best in JASC. Thank you so much. (Kassandra Diaz, Jalika Ceesay)

▼下鴨神社参拝 (8月8日)

荒木 直人様より、下鴨神社の歴史、神道についてのレクチャーを受けました。その後は本堂にて正式参拝も行いました。



参加者の声

鳥居をくぐると、参道の両側に、まぶしいほどの緑が広がっていました。糺の森。古代より鎮座し、「枕草子」「源氏物語」にも登場する京都のシンボルです。

糺の森には、どこか吸い込まれるような静けさがありました。騒々しい話し声も靴

音も、吸い込み、包み込んでしまいそうな静謐。壮大な森が生み出す、煩わしい俗世と切り離された空間。その中に、ひとは神を見出すのでしょうか。

下鴨神社の神主さんが、神道の特色について講演。聖典も創始者も存在しない神道。あらゆるものに神が宿ると説く神道。四季の移ろいを、収穫を助ける神の動静になぞらえる神道。理解できた、と一言では言えない奥深さに、たまらなく惹きこまれました。

全員で公式参拝を終えた後、神前を横切る時、私はゆっくりと一礼しました。そのことを、ある参加者に尋ねられました。

「公式参拝は終わったのに、どうしてもう一度お辞儀をしたの？」

なぜ、神前を横切る時礼をするのか。それは私にとって余りにも当たり前の行為で、理由など考えたこともありませんでした。二十年の歳月をかけ、自分の中に育まれてきた神への畏敬が、私にお辞儀をさせているのでしょうか。神道は、私の中にも息づいています。(大野 あゆみ)



▼分科会フィールドトリップ (8月9日)

分科会のテーマに即した場所や機関を、分科会ごとに訪問しました。

参加者の声

ついにプログラムから解放されたその時。自由時間の使い方はその名の通り自由。遊ぶも観光も、食べるも寝るも思いのまま。しかし、自由から意味あるものを創造することもまた人間の素晴らしさなのでしよう。

自由時間も RT メンバーと共に過ごせる限られた貴重な時間。人を考え抜く本マイノリティ RT の議論には当事者意識が不可欠であり、こうした目的に向かい妥協なく大胆に行動を起こすのが我々の常でした。直前をお願いし押しかけるといふ勇氣ある蛮行が功を奏したのか、行政の多様化推進室様と NPO 法人エルファ様に訪問許可を頂くことができました。

筆者が3人の仲間と共に向かったのは、在日コリアンの方々のために介護、子育て、障がい者支援や地域交流を行う NPO 法人エルファ様です。出迎えて下さったのは、活動時間外にも関わらず応対下さったスタッフのお方。人との繋がりを殊に大切にされる彼女の姿勢に心打たれつつ、活動について貪欲に、食い入るように伺うのでした。

当の内容は書ききれないほどに濃密で、表現しきれないほどに情緒動かされるものであったのは間違いありません。生涯に渡り自己のアイデンティティを閉じてきた在日コリアンの方々が、はじめてありのまま



の姿で生きられる場所を手に入れたお話。ありのままに生きる方々に、当団体を訪問する子どもたちが強く勇氣付けられるお話。人との繋がりを通して、「生きよう、必要とされている。」と生きがいを見出すお話。その裏に未だ根付く差別。多様な在日コリアンの方々に寄り添う難しさ。支援を行う自身も在日コリアンであるというお話。彼女の子どもへの愛情と、それ故の差別的な社会への葛藤。

短い時間ながらもお話全てがそのまま、その鮮烈さに気付けば我々は涙を流していました。今回の訪問から、マイノリティ支援や差別の実態などを実践的に学び、目的通り豊富な議論の糧を得たことは確かです。ところがそれ以上に「RTメンバーとの経験から感情を共にする」ことで、熱のこもった議論ができるようになること。そして何より、そうした経験が仲間との友情を無二のものに深めてくれたことは最大の気付きでした。アメドリとの議論の中で、中々相手の考えや感情の動き方が理解しきれないと葛藤していた私。しかし本訪問を終えた後には、どこか心が通じ合うような感覚を抱くことができました。他者理

解を志した本訪問が教えてくれたのは、他者を親身に想う上で重要な一歩となる仲間の心の内だったのでしょ。 (小島 直毅)

▼能鑑賞 (8月9日)

金剛能楽堂に能鑑賞に参りました。金剛龍謹様より地謡、踊りの指導を受け、最後には仕舞をご披露いただきました。



参加者の声①

京都に唯一宗家が在住する能楽シテ方金剛流の若宗家、金剛龍謹氏のレクチャーを受けました。能楽は日本の伝統文化の一つであり、室町時代に観阿弥世阿弥父子が大成しました。

今回のレクチャーでは、簡単な説明があったあと、能の一部を切り取った仕舞と呼ばれる演技方式について、羽衣という演目を題材に稽古を受けました。また、若宗家への質問を行う機会を頂きました。

仕舞体験では、学生が謡と舞に分かれての稽古を行ないました。参加者のほとんどが初心者でしたが、若宗家および若手能楽師の方達の熱心な指導により、完成させることができました。特に謡については日本語の古語ということもあり、アメリカ側参



加者にとって言葉の壁が大きかったと考えられますが、お互いが助け合って理解を進めることができました。

質問に関しては、能における変えてはいけない所と変えるべき所は何かという問いに関して。

「昔のビデオを見ても変わっているのが分かる。一方で新作は難しい。数々の新作が生まれるが消えていってしまう。それは時間をかけて進化してきた古典に勝てないからではないだろうか。」と答えられたところから、能の奥深さを感じました。

また、通訳を務められたベレッキア氏の活動についても感銘を受けました。氏はイタリア出身であるが、能に出会い、若宗家の元で稽古をされています。現在は大学で教鞭をとる傍ら、能楽師としても活躍されており、お話をされていて大層面白い人だと思いました。このように異なる文化の架け橋となって活動することはとても尊いと感じました。(川崎 明宙)

参加者の声②

By participating in Noh through either song or dance, we were able to create a lasting memory of our experience. Also, we

learned that a subtle tilt in a Noh mask can completely change a character's facial expression. For example, a mask can be happy if it is tilted up or sad if it is tilted down. These kinds of small details can truly evoke the imagination of the audience.
(Jacques Chaumont)

▼外交セッション@立命館大学(8月9日)
元外務事務次官の藪中 三十二先生をお呼びしました。日米関係をテーマに基調講演、そしてオープンディスカッションを行いました。



参加者の声

元外交官の藪中 三十二さんから世界情勢の動向、日本の外交の現状と展望に関する講演をお聞きしました。彼の考えは、理想主義でも現実主義でもなく両者を混ぜ合わせているように感じました。実際に現場で長い期間、世界と向き合い、辛酸舐め尽くした人だからこそ生まれてきた考え方でしょう。私が彼のお話から大切であると改めて認識したことは、大きく二つあります。

一つ目は、他国の文脈を理解しようとすることです。国際政治の対外関係において、



それぞれの国々がどのような歴史的背景や国民的精神を持っているかを考えることは、それらの国々の主張や価値観を理解する上で重要であるということです。

二つ目は、自国のアイデンティティ、精神性というものを理解することです。国際関係において自国の固有性、価値とは一体何であり、それらが国際政治的な文脈でどのような意味を持つてくるのか。

これらの二つに関して考察することは、国際社会において、自国の精神性を保ちつつ、他国と協力関係を築いていく上で必ずや必要であると思っています。今回の機会は貴重な経験ができ、私のこれからの人生にとって非常に意義のあるものになりました。(野間 康平)

▼文化紹介プレゼンテーション(8月9日)

アメリカ側参加者有志がアメリカの文化を紹介するプレゼンテーションを行い、その後アメリカの文化について全体で議論を行いました。

参加者の声

本会議が始まり、所属の思想分科会では、日米文化の違いの根源が集団主義と個人主



義に分かれるという話が挙がりました。米国側参加者が日本側のために準備してくれた米国文化についての発表では、まさに米国の個人主義的文化が人間の成長と共にどのように発展していくのかという観点であり、非常に興味深い内容でした。公共交通機関の不足や地理的な要因を踏まえて、アメリカ社会の代表的な交通手段は、車という他人との関わり合いを必ずしも要さないものであることや、学生であっても経済的な面で早くから自立を促される社会であることに際し、奨学金や学生ローンなどの金銭的なサポートが充実していることが私の眼にはとても先進的に映りました。



一方で、高齢になっても自力で生きることが当たり前で、貯金という概念があまりない米国だからこそ実現可能なのではないかということが同時に頭を過ったのも事実

です。個人主義的社会の産物なのか、それともこのような風潮が個人的社会を形作っていったのかという議論は結論を出すには難しいかもしれません。(押切 彩)

▼京都フォーラム@同志社大学(8月10日)

ゲストに、同志社大学副学長圓月 勝博氏、株式会社電通文化事業構想部プロデューサー 各務 亮氏、妙心寺春光院副住職 川上全龍氏、株式会社のぞみ 藤田 功博氏をお呼び致しました。第一部では、『グローバル化の中で大切にしていきたいもの -"京都"を切り口に学生と考える-』、第二部では『京都で大切にしていきたいもの -伝統と革新の間で-』とうテーマのもと、ゲストによるパネルディスカッションを行いました。



参加者の声①

8月10日に京都の同志社大学にて開催されたフォーラムで、グローバル化する世界の中でも変わらない京都の本質や、グローバル化の文脈で京都が世界に与えた、もしくは世界から与えられた影響について議論しました。当フォーラムで焦点となった「京都の本質」について、個人的に最も示唆に富んでいると感じた意見は、京都の本質は

時代を経ても特徴が変わらないという性質ではなく、各時代に各時代特有の特徴があり、特徴が変化し続けるという性質である、というものでした。このフォーラムを通じて、その伝統や文化の特異性を維持し続け、さらに、時代の流れを敏感に感じ、革新を加え続ける京都という都市の魅力の根源をもう一度ゆっくり考え直したいと感じました。(岩井 凌太)

参加者の声②

京都フォーラムのパネリストへの参加表明はとても勇気のいることでした。なぜなら、自分の英語力に自信がなかったからです。しかし、0.1秒の挑戦してみたいや面白そうという心の声を誰よりも大切にしてきた私にとって、この機会を生かさないとこの選択肢以外に迷いはありませんでした。

まず、京都にゆかりのない「私」が、伝統文化の継承と革新という議題に対してどのように貢献できるのか考えました。実際に京都フォーラムを終えて特に印象的だった質問は、なぜ日本人はそもそも伝統文化や伝統的な建物を保存したいと思うのかという問いです。それまで、伝統文化は継承していくべきものだという前提のもとで、何を守って、どこを変えていくべきなのか

という思考で議論が進んでいることに気付かされたからです。

しかし、私はこの歴史を重んじる姿勢こそが日本人の精神性であり、大切にしていくなすべき日本人の感性だと強く感じています。この先、京都にある伝統文化や伝統的な建物という「媒体」を通して何を伝えたいのか、観光客の何に働きかけたいのか、どのように伝えるのか、もっと本質的な部分を考えるべきだと感じました。(下吹越 愛莉)



参加者の声③

It was a privilege to be on the Kyoto Forum's Globalization Panel with such impressive experts. Their valuable input really helped me to expand my own ideas and develop a deeper understanding of Kyoto's culture on a global scale. The most important thing I learned is that tradition and innovation can coexist and that it is the responsibility of each generation to interpret what this means. (Carolyn Hoover)



***** サイトコーディネーター後記 *****

当時参加者であった私が実行委員選挙に臨むとき、そのスピーチの中で「京都サイトを担当して、日米両学生に“日本”を魅せたい。」と言った覚えがある。大学生になり、毎日京都に赴くようになり、京都という土地に魅かれつつあったのは事実だった。ただその時は「町を歩いていると、歴史や“日本”を感じる」そのような感覚的、表層的京都を見ていたにすぎなかった。また京都と切っても切れないのがやはり伝統文化であるが、当時の私は文化については全くと言って良いほど興味がなかった。このようなミーハーな気持ちでコーディネーターとなったわけであったが、後にこの地の深さに引き込まれてゆくこととなる。

京都サイトを担当する中で、今まででは絶対に興味さえ示さなかったようなテーマについて考えるようになった。「何故伝統文化は継承する必要があるのか。」「“日本らしい”と感じる、その感覚はどこから生まれてくるのか」このようなテーマに思考を巡らせることが本当に楽しかった。何百年と伝統を引き継ぎ、京都の地で伝統文化に携わる方々に話を伺う中で、ある時から私は一つの質問をするようになった。「伝統と革新の関係性についてどう思われますか？」京都は伝統の町と言われる一方、最先端の技術、流行も発達した伝統と革新が融合した地であることを踏まえての質問であった。これに対し、異なる方に異なるタイミングで尋ねたにも関わらず、その回答というのは似通ったものであった。「伝統というのは“守る”ものじゃない。時代に合わせて柔軟に変化していくことこそが伝統だ。」言葉ではなんとも表現しきれないのだが、このように何百年、何千年と伝統を引き継ぐところに日本が日本たる所以があるように感じた。また例えば、座禅と茶道には共通して「わび・さび」という精神が通っていたりもするように、文化としてその表現方法は違えど、背景にある精神性は実は似通ったものであるようにも感じた。能では、最も大切なものは能面であり、演者「が」舞うのではなく、「面を付けて踊らせていただいている」という感覚だというお話を伺えたことも印象深く残っている。また京都というと平安時代がその最盛期と言われるが、そのずっと前、千年以上の歴史を持つ下鴨神社にて日本人の精神ルーツとも呼べる神道について学べたことも意義深い。第三サイト三重で伊勢神宮に参拝することもあり、その繋がりを生み出したいという意味合いを込めてでもあった。

ここまで各伝統文化に関するプログラムについて言及してきたが、もう一つ、京都サイトの中心となったのが京都フォーラムである。京都というと第一に挙がるのが文化であろう。しかし、同時に科学や哲学等他分野に亘る先人を輩出した地でもあり、京都フォーラムの大きなテーマとしては「科学×思想」を掲げた。近年科学技術の発展によって我々の生活は豊かで便利になっているが、一方で「人が人らしく生きること」や「自分の頭で考えること」

を軽視しがちであることについて、フォーラムを通して考えてゆきたかった。このような思いのもと企画を進めるが、なかなかゲストが決定しない。実行委員の活動が始まって間もなく、10月には京都フォーラムの構想を考え始めてはいたが、企画書は何十回と書き改め、何十人もの方々にあたった。結局テーマを変更し、翌年の6月頃になってやっとフォーラムの骨子が完成していった。当初考えていたテーマで開催できなかったことは少し心残りであるが、それでも素晴らしいゲスト方、また参加者を含め、フォーラムを開催できたことを嬉しく思う。

また安全保障に関する分科会を担当していたことから、外交セッションを開催させていただいた。「様々な国が複雑に関係を結ぶ現代、何故我々は"日米"学生会議であるのか」「今後も"日米"2国に焦点を当てる必要はあるのか」第一サイトにて、JASCの根幹そのものを考えるきっかけとなる議論の場を設けられたことは個人的に大変嬉しかった。本会議中は、1年掛けてつくり上げてきたものがあまりにも一瞬にして、呆気なく終わっていく毎日に、恐怖していたことだけを鮮明に記憶している。目の前のことに必死だった、というのが、京都サイト本会議中の正直な本音である。

京都サイトコーディネーターをやるのが、自身の考え方、興味分野にこれほど影響を与えるとは思ってもみなかったです。同じく京都サイトコーディネーターであった河崎には感謝してもしきれないです。またこの京都サイトのために関西まで足を運んでくれた塩崎にも感謝しています。そして、我々だけでは絶対に成し得ないことを実現できたのは、日米学生会議アラムナイの皆様、そして京都サイトに協力して下さった皆様のおかげに他なりません。皆様の協力なくして、この京都サイトはあり得ません。第69回日米学生会議京都サイトに関わって下さった全ての方に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

京都サイトコーディネーター
同志社大学 法学部 政治学科 4年
有田 彩子

第68回日米学生会議の本会議が終わって、満身に染み渡る敗北感と達成感、そして期待感に弄ばれる気持ちをなんとか沈め、私は東京から京都への帰途、新幹線の中で今度は自分が創るであろう第69回日米学生会議を、京都サイトを、夢に見ていた。それから京都サイトが決定したのは確か10月の中頃であったか。実行委員長の塩崎と電話をする中、翌日のサイト決定ミーティングを控え、夜中まで資料を作った。全分科会が多側面から楽しめるといふ謳い文句をつけて、満場一致で決定した京都サイトには有田と、自分、河崎がコーディネ

ネーターとしてつくこととなった。

京都サイトコーディネーターとしての初めての仕事は、大学周りである。右も左をわからぬ中、第67回にて同じく京都サイトコーディネーターを務められたルイス・モンタニョ・ミCHELさんに連れられ、相次いで京都大学、同志社大学、立命館大学を回った。「全てのミーティングには準備をしてゆくこと」というルイスディスプリン。それに応えるべく宿泊場所などをまとめた紙を必死で作し、各所を回った。OBでは竹本さんにも非常にお世話になった。初めて訪問した京都大学では、「宿泊場所を貸し出すなんてとんでもない」と怒声を浴びせられたことを昨日のように思い出す。部屋の隅に、まるで犯罪者みたいに体を縮こませながら担当者の方に滔々と説かれた言葉は、愛の言葉であったのだろうか。それとも…。大学周りは厳しく、けどとても暖かで、良いものでもあった。

あれから一年、実はここまでの文章と少し、会議直後にしたためていた。だけれどその先に何を書けば良いのか皆目見当がつかなくて、ついに今日この時間、(いまは香港の安宿のベッドにいる)まで引きずってしまったのだ。プログラムについては有田が詳しく書いてくれているので割愛するとして、ここでは私がサイトを作る中でとっても印象的だったことをいくつか、重い腰を上げつつ振り返ってみようと思う。

実行委員にとって「冬」はサイト作りの大敵であると、いつしか囁かれた。説明会が立て続けにある他、各々の期末試験、それに選考試験に向けての準備が非常に忙しくなるからである。果たして、先輩方に立てていただいたフラグを私たちが丁寧に回収して、気づけば梅の香りが風に薫る、3月がやってきていた。私たちが何も、手を拱いていたわけではない。裏千家に出かけてご講演をお願いしたり、京都フォーラムへの登壇者を探して、方々へメールをしたりしていた。だけれども、3月ともなれば年度末に抱いていたような万能感、つまり私たちはなんでもできるのだ!という感覚が薄れてくる。その代わりに、あと4ヶ月で70余名をホストするのだという責務、重圧が日々、刻一刻と襲ってくるのである。寝ても覚めても京都サイトのことばかり考えていたその頃、一つ印象的な出会いがあった。松山大耕さんとの出会いである。ある日のこと、同志社大学で松山大耕さんのご講演が行われると知って、私たちは嬉々として出かけた。日米学生会議で関わらせていただいたという下心が若干あったのは否めないが、それ以上に以前から耳にすることが多かった松山さん自身に、興味があったのである。果たして、ユーモアを交えて話される松山さんに私たちはすっかり引き込まれ、ご講演後には直接、日米学生会議へのアポイントメントを申し込んでしまった。後日、日米学生会議に座禅の指導を快く約束してくださった松山さんの優しさに感服すると同時に、日々身近な場所にアンテナを張り続けることの大切さを感じた。

有田も書いているように、最後まで鬼門となったのは、京都フォーラムである。会議まで

間も無く、焦りに拍車がかかっていた頃、転機をもたらしてくださったのが登壇者の一人である川上全龍さんであった。「一見さんお断り」というようにご縁がものをいう京都において、見知らぬ人に何かを頼むのはとてつもなくハードルが高い。しかしながら川上さんのお人柄に加えて弊会議 OG の田勢奈央さんのご縁もあってか、川上さんにあったその時から、あれよあれよというまに京都フォーラムの登壇者が決まったのである。数ヶ月分の地を這うような努力が可笑しくなる一方、前述の通り京都におけるご縁の重要性をひしひしと感じた。このご縁を拾ってくださった川上さんには、押し付けがましい企画書を持って訪れた学生らを暖かく受け入れてくださったこと、改めて深く感謝申し上げたい。

本会議が始まり、第一サイトであった京都サイトは瞬く間に過ぎ去った。トラブルはそこそこあったけれど、特段バタついたわけではない。それなりに忙しかったけれども、ただ、蒸し暑い夏の夜に流れ行く鮮やかなひとときひとときを噛み締めて、過ごした。「あっ」というまにという言葉があるけれど、私の場合は感動する暇もなく、「あっ」と口を開けている間に京都サイトが始まって、口を閉じればもうそこは愛媛行きの中車中だったという感があった（考えてみれば間抜けな感じである）。一年分の時間と努力の結晶が散りばめられた時間はそうやって終わったけれど、不思議と後悔はなかった。

思えば、関西で弊会議に関わることは、想像したよりも苦労が多かった。東京であるが故の雑務を負えない代わりに、関西における選考、広報、財務活動等を一挙に引き受けなければいけないからだ（そう思えば、九州や群馬はもっと大変だったろうけど…）。しかし、だからこそ感じられる日米学生会議のダイナミクスに、私は一年の間、魅了され続けた。時には会議の威光を借りつつ、時には自分たちの実力が試されつつ、ともにサイト作りを進めた有田には、心から感謝している。そして、何よりも実力不足な私たちを牽引してくださった竹本さん、今井さん、ルイスさんには今一度、深謝申し上げたい。ありがとうございました。その他、私たちの拙い言葉に耳を傾け、時には叱咤をくださった京都の皆様にも、末筆ながら御礼を申し上げて駄文の締めとしたい。本当に、ありがとうございました。

京都サイトコーディネーター

同志社大学 グローバル地域文化学部 グローバル地域文化学科 3年

河崎 涼太

— 4-3. 愛媛サイト —

8月11日 ~ 8月17日



阿波・讃岐・伊予・土佐の四つの律令国が発展して、今日の四国四県が形成された。この中でも瀬戸内の温暖な気候に恵まれた愛媛は、古くから日本有数のみかんの特産地で、松山城や道後温泉、お遍路巡りを活かした観光産業も盛んである。また、全国各地と同様に若者の県外流出や少子高齢化などの地域課題を抱える中、今治タオルの再ブランド化を始め、新たな発想で地方創生にも取り組んでいる。明治以降の歴史を顧みると、愛媛は、白い雲の先の青い空を夢見ながら勃興期を生き抜いた『坂の上の雲』の主人公、秋山好古・真之兄弟、正岡子規などの文武の偉人たちを輩出している。日米学生会議の史上初めて四国上陸となる第69回会議では、明治の偉人たちの生き様と彼らの生きた時代を振り返りつつ、愛媛の歴史的、文化的特性を活かした若者らしい雄大な地方創生計画を考案し、愛媛の未来づくりに貢献したい。

■サイトコーディネーター

齊藤 和平

藤本 アペリーノ

Yuta Baba

Jon Foissotte



■サイトスケジュール

8月11日（金・祝）

- ・京都より到着
- ・ホームステイ

8月12日（土）

- ・ホームステイファミリーとカレー作り
- ・分科会議論
- ・えひめ丸ディスカッション
- ・Joint RT Discussion

8月13日（日）

- ・西予市卯之町の町並み散策（着物の着付け体験・明治の授業体験含む）
- ・日米西予座談会（35名の地域住民・西予市役所の職員の方と議論・対話）
- ・分科会議論
- ・一日の振り返り議論
- ・西予市長 管家 一夫様よりご挨拶

8月14日（月）

- ・分科会議論
- ・鯛めし・五色そうめんの昼食
- ・坂の上の雲ミュージアム見学
- ・松本 啓治館長ご講演
- ・松山城・道後温泉見学

8月15日（火）

- ・平和について議論
- ・地域医療ワークショップ（愛媛大学医学部 熊木天児准教授・医学生 5名のプレゼン・議論）
- ・分科会議論
- ・フォーラムのプレゼン・パネルディスカッション準備（アンケート結果集計含む）

8月16日（水）

- ・分科会議論
- ・愛媛フォーラム
- ・愛媛レセプション
- ・リフレクション

8月17日（木）

- ・三重に向けて出発

■宿泊先

松山市野外活動センター

■各プログラムの詳細・感想

▼ホームステイ@松山市内（8月11日）

愛媛県内、松山市を中心に30ものご家庭にご協力いただき、日本側・アメリカ側参加者がペアになって、家庭生活を体験しました。ホームステイは、日米学生会議において、毎年恒例の行事で、学生にとっては地元の生活を知ることのできる、そしてご家族にとっては国際的な学生と触れ合う絶好の機会となっています。学生とご家族の皆様は、それぞれ親交を深めており、ここでのご縁が続いていくことが期待されます。

参加者の声①

「The epidemic diseases have been pervading in the nation, and millions of people are suffering...」

国連が取り組むアフリカの疾病問題に関するスピーチを、英語で暗唱をし始める12歳の少女。

スクリプトも見ず、卓上で朗々と演説を行う姿に驚く私とアメリカ側参加者。英語の宿題を手伝う、ということで付き添ったのですが、どうやら、私たちが泊まった家庭はとても水準が高かったようです。

愛媛県松山市にバスで到達したこの夜、日米両参加者およそ70人が各自ペア(2~3人)に分かれ、愛媛県に住まうご家庭に一泊のホームステイをさせていただくことになりました。私ともう一人のアメリカ側参加者が泊まったのは、一家四人のご家庭。地元出身だというご夫婦に、お二人の子どもが出迎えてくれました。

その冒頭の少女が、既にアメリカに単身で渡ったという強者だったのですが、小学三年生の男の子も非常に洗練されており、早朝になってすばらしいピアノの演奏を聴かせてくださいました。無邪気な触れ合いを楽しむとともに、すっかり感心してしまいました。

私にとって特に印象に残っているのが、夕食のとき。みんなが顔を合わせて学校でどんなことがあったか、今日何をしていたか、テレビもなく、顔を合わせて日常を和気あいあいと語り合う一家の光景に、とても魅力を感じました。大学に入って以降、他の家庭におじゃまする経験が初めてであったため、こうした体験がどこか新鮮に感じられ、地元の温かみにも触れ合えて、愛媛サイトでの大変良い一日となりました。

(藤井 一樹)



参加者の声②

私たちが旅行で訪れた土地に滞在する場合、大抵はホテルを利用し「観光客」の目線でその土地に触れます。今回のホームステイは愛媛で暮らす人の目線により近く

「愛媛」を感じられたのではないかと満足しています。

私のホームステイ先は1人暮らしのおばあさん由美子さんのお宅でした。愛媛生まれ愛媛育ちで70年以上も愛媛を見てきた方です。到着が遅れたにもかかわらず有名な鯛飯を食べさせたいと松山市内のお店に連れて行ってくださいました。由美子さんは世界中を旅している経験があり現在もアクティブに英語を勉強し続けられており私にとっては理想の生き方をみた気がしました。ホームステイパディのジャリカもとても楽しんでいる様子でアメリカのことを中心に話に花が咲き鯛飯の美味しさも2倍増しました。

夜遅くにも関わらず近くに住んでいる小学生の女の子が由美子さんのお宅にきてくれ4人で愛媛のことやアメリカのことを沢山話せました。

ホームステイのいいところは人とのかわりが確実に増えるかつ濃厚であることだと思います。また人の小さな呟きや何気ない会話の中に地元への親しみや不満を感じることができます。ホームステイの時間は本当に短かったですが人を通して愛媛を知れた素敵な1泊2日でした。(佐々木 彩乃)



参加者の声③

During our homestay experience, we not only felt the impact of decades of cross-cultural exchange between Japan and the U.S., but were also able to be a part of that process. Whether through a demonstration of hula with the performance of a Japanese instrument or sharing a Japanese meal with a side of garlic cheese bread, we felt that we were contributing to the creation of history, one step at a time. (Nicole McNevin, Stephanie Spear)

▼カレー作り@野外活動センター (8月12日)



130名ほど参加し、野外活動センターの炊事場にて、カレー作りを行い、さらに交流を深めました。



▼えひめ丸ディスカッション@野外活動センター (8月12日)

2001年2月10日、愛媛県立宇和島水産高校の漁業実習船えひめ丸にアメリカの原子力潜水艦グリーンビルが緊急浮上する際に衝突し、高校生4名を含む9名が亡くなりました。このえひめ丸の事故を巡って、日米間の文化の違いが軋轢を生んでいたことに着目し、お互いの価値観を共有し理解し合うべく日米の学生で議論を行いました。

参加者の声①

えひめ丸事件のご講演は私にとって特別なものでした。なぜなら私はハワイで生まれ5歳まで過ごし、その後日本で過ごすことになるからです。そしてこの事件は私がハワイに住んでいた時に起きた事件なのです。だからこそ日本とアメリカの関係を示すえひめ丸事件は私自身の人生を振り返るきっかけを与えてくれました。

この事件を知るにあたって、生き残ることが苦である人がいることを学びました。多くの親しい人を親しい人がなくなった事件からかろうじて生還した人はちょっとした運命の違いから生き残ります。生き残った人々は、なぜ生き残ってしまったのかと悔い、そして普通に生きている人々は、生き残った人々に対して、死ななくてよかったじゃないかと思えないのです。また生き残った人たちをケアする援助者が継続して支援し諦めなかったこと、そして生き残った人がその支援を受け入れることへの葛藤。えひめ丸の当事者となった人々の心

の傷は理解されづらいのです。日本とアメリカの関係を支えるこの事件を知ることは自分自身を知ることに繋がりました。(長谷川 信寿)



参加者の声②

えひめ丸についてのディスカッションを通じて、日米間における責任所在の社会的構造が根本的に異なり、両国がその重大な差異について認識していないことが、相互の溝を深めた問題点の一つではないかと感じました。

事故後のアメリカ側の対応は、大統領、國務長官、国防長官、駐日大使も謝罪しました。それに対して日本側の主張は「事故を起こした潜水艦の船長も謝罪を」というものでした。そこでこの感想文では、船長の謝罪について日米間の社会的文脈や背景から考察します。

このことについて、責任所在という社会的コンテキストが、日米間において決定的に異なることを、ディスカッションを通じ特にアメリカ側の意見を聞くことによって認識しました。

アメリカの謝罪はご都合主義だという論文や記事を多く読みましたが、それ以上にアメリカ社会における謝罪には二つのポイントがあると思います。一つ目は、アメリカ社会においては事実がどうであれ、謝罪した人に責任が発生するという社会的文脈が存在することです。これは自動車事故において「どんなに自分が悪いと思っても謝ってはいけない」と教えられることから顕著です。

二つ目は、アメリカ社会において組織の中で誰かが過失を犯した場合、その責任は組織のトップが取らなければならないという考えが存在し、命令系統、指揮系統がはっきりしている軍においてはよりそれが顕著であるという習慣です。この社会的習慣ゆえに、アメリカ側は日本側がなぜ船長の謝罪にこだわるのか理解できなかったと考えられます。

これに対して日本側が船長の謝罪にこだわった理由は、日本の謝罪における形式主義的側面が最も考えられます。特に芸能人のスキャンダルにおいて顕著だと思うのですが「世間様をお騒がせして申し訳ありません」という種の謝罪を見ると、常々この人は一体誰に向かって謝っているのか不思議に思います。しかし、日本ではそうでもしないと「不誠実だ」とバッシングを浴びてしまいます。

日本からの再三の要求に屈してか、罪悪感からか、船長は一年半後に除隊して来日し、謝罪しています。これはこの問題を考

えるうえで大変興味深い事実です。除隊後の船長による謝罪によって、もはや軍に関係する責任は発生しません。つまり船長は「私的な謝罪」を行ったのです。事実、除隊後の船長は一回の公演で多額の謝礼を受け取るなど、社会的地位を失うどころかむしろ安定した退役後の生活を送ったようです。アメリカ社会の謝罪による責任発生というシステムを考えると、もし彼が現役の時点で公式に謝罪を行っていたら、彼はえひめ丸事故を起こした張本人としてこのような老後の生活を送ることはできなかったかもしれません。

異なる社会と社会の軋轢には、必ず相互に理解することが難しい文化的、社会的、宗教的背景が存在します。個人同士でも起こるこの種の相互不理解から生まれる問題を解決するのは難しいです。しかしこのディスカッションを通じて、粘り強く対話を続けることの大切さを痛いほど認識しました。(豊坂 竹寿)

▼Joint RT Discussion@野外活動センター (8月12日)

分科会議論が中心を占めている日米学生会議ですが、他の分科会がどのように議論を進めているのか、どのような内容の議論をしているのか、などについて共有する時間を設けて、よりスムーズに分科会議論が進むように、また、他の分科会のメンバーと色々な議題について議論する機会となるよう Joint RT Discussion を企画しました。

▼卯之町の町並み散策（8月13日）

日米西予座談会では、西予市にお住いの地元住民の方、市役所の方のリアルな声を伺い、地方の方の価値観と生活の現状を理解することを目的としました。そこで、議論を行う前に「学生たちも西予市の町並みや観光名所を体験しておくことで、より具体的な質問ができたり、住民の方の視点を理解しやすくなったりするはずである」と考えて、町並み散策をプログラムに盛り込みました。

当日は、日米の学生67名が、西予市の誇る伝統建築物群と史跡を思い思いに散策しました。宇和民具館では、生活の変化に伴い今では見られなくなった生活道具をはじめ、昔の街の賑わいを思わせる看板や商売道具など約5,000点の収蔵展示品を見学し、西予の昔の生活に学生たちは想いを馳せました。

▼着物の着付け体験（8月13日）

西予市が打ち出している体験型の観光資源を学生に実際に体験してもらい、西予の観光・生活について、日米西予座談会の前にさらに考察を深められるように実施しました。



参加者の声

成人式とは、日本の社会から成人として認知される、通過儀礼と言えます。女性はその祭典に相応しい和服で華やかに着飾ることが多いのですが、和服に身を包む男性は少ないです。私が20歳の時、和服を着ることに対するハードルは高かったです。武士の凛々しい姿と比較すると、私の和服姿は隙だらけで頼りないと感じました。また、日本の社会に適応できていないような疎外感を感じました。そのような意識から逃れられず、私は和服を着ることができませんでした。

海外に出てみると、自国の伝統衣装を身に纏った経験を伝えられないことは恥です。単にその個人の教養の低さを指摘されるだけでなく、その個人が背負う国の発信力に関わってきます。自分の国の伝統に泥を塗るわけにはいかないのです。

今回の愛媛訪問にて、幸運にも和服を着る機会がありました。母国のためという大義を得て初めて、私は成人時の自意識を捨てることができました。次は、自国の伝統を世界に発信していく大使としての役割を担いたいと思います。（林田 将）

▼明治の授業体験（8月13日）



明治時代は、鎖国をしていた日本が近代化に向けて走り出し、社会が大きく変化し始めた時代でした。四国で最初に出来た小学校である開明学校の椅子に座ると、タイムスリップしたような不思議な感覚になりました。西洋の新しい知識を積極的に取り込むと同時に、「日本らしさ」を失わないため、日本独自の文化やマナーを含め、「和魂洋才」の教育が行われました。「時報板」を叩く合図とともに、明治時代の小学校授業体験が始まりました。短い間でしたが、国語、数学、修身、歴史、音楽、5つの授業を受けることが出来ました。昔は教科書の値段が高く、一人一冊持つことはできなかったそうです。そのため、沢山の「掛け図」を壁に貼って、生徒みんなが見えるように授業をしていたそうです。

その時代の小学生は、どのような気持ちで小学校に通っていたのだろうか。「蝶々」を歌いながら私はそう思いました。義務教育が常識になった現代においては、学校は行かないといけないからこそ受動的に通っている子どもが多いのではないのでしょうか。比べて、明治時代の小学生が初めて「学校」という場に行き、ワクワク、ドキドキした気持ち、未知に対する好奇心と知識に対する探究心が教室の床から天井まで溢れ出し、百年たってもそれを肌で感じる事ができる、そんな体験でした。

明治時代の小学生のような初心を備え、私も日本に関して、日米の未来に関して学習し続けるつもりです。(リー ロイ)

▼日米西予座談会@米博物館 (8月13日)

日米の学生たちは、昼食を食べながら、西予の生活などについて地元住民の方々にお話を伺いました。西予市役所・西予市商工会のご協力により、35名もの住民の方、市役所職員の方などにお集まりいただき、大変盛況でした。「西予の方々及び日米の学生の生活はどのようなものか」「将来についてはどのように考えているか」などについて西予市の住民の方と日米の学生とで話し合い、お互いに良い刺激となりました。



参加者の声①

第二サイトである愛媛県といえば、多くの人が思い浮かべるのは坂の上の雲や坊っちゃんに代表されるような歴史の舞台の印象ではないだろうか。勿論それらも愛媛県を語る上欠かすことのできないのは全くその通りなのだが、都心から離れた地方の実情を知るには、普段聞く機会の少ない地元の人々の話を聞くというのは非常に有効であり、貴重なことである。まさにそういう機会を西予市で得ることができた。

西予市は愛媛県南西部に位置する人口4万人ほどの市で、松山市から車で2時間ほどのところにある。日米西予座談会と称し、

地元の歴史ある学校の旧校舎の中で、地元
の住民、働いている方々などを迎えて、西
予市の現状や展望についての率直な思いを
伺った。

私たちの席におられたのは、洋服店を営
むご婦人と、西予ジオパーク職員の女性
の方のお二人であった。ご婦人は西予市に長
年お住まいのようで、西予市の産業につい
てお話いただいた。当市の主要産業が農業
中心の一次産業を基盤としており、稲作を
中心としてそれらのブランド化によって、
市の発展の促進を図っているとのことであ
った。しかし全国的な農業従事者人口の減
少、それと農家の方々の高齢化と相まって、
後継者不足が課題であることを教えていた
だいた。そこで質問として出てきたのは、
労働者不足を補うためにどのような方法が
良いか、外国人労働者を受け入れること
についてどう考えているかということであ
った。

ご婦人は、まずは日本の若い人たちがこ
ういった地方で働いて住んでくれることが
重要で、そうするように行政も働きかけね
ばならないとし、また外国人労働者の受け
入れは考えたことはなかったそうである。
まずは自分たちの国の中の人たちで問題解
決に取り組まねばならないという姿勢は、
この国の外国人労働者の受け入れについて、
本質的に考えることに一つの良い示唆にな
ると感じた。また、ジオパークの女性職員
の方からは、西予市が数億年前の地層の観
察に適した場所であることを教えていただ

いた。それに加えて西予市は自然が豊か
であるので、ジオパークにて子供達に自然教
室のような形で教授をなさっているそうだ。
確かに非常に豊かな自然を抱えた市である
ことが、少し町を歩けば見聞することがで
きる。お二人とも西予市の魅力を自然の豊
かさ、歴史的景観が保存されていることを
語っていたが、それらを守るため交通は不
便であり、そのことが若い人たちがこの町
へ訪れることを難しくしているのかもしれ
ないと仰っていた。しかしまたその不便さ
も田舎の魅力であるのかもしれないとも仰
っていた。町としても増加する高齢者の対
策と若者の呼び込みを図るために、分散し
た病院やスーパー等のインフラ機能の集中
を計画しているとのこと。そこで問題とな
るのは古い景観と自然を、利便性の高いイ
ンフラとどう両立させるのか、また移住を
望まない住民の方々はかえって公共施設の
利便性を失うことになりうるということ
である。

どのようにして双方のバランスを保つべ
きであるのか、非常に悩ましいところでは
あるが、古い景観をより観光資源として有
効に活用し、増加する外国人観光客にこの
町を観光してもらうには、道路の標識や案
内板に他言語の併記をするなど、まだまだ
できることは残されているともお二人とも
仰っており、私もこれから増加する外国人
観光客にいかにも町を訪れてもらうように
するか考え、対策を講じることは、町の持
続的な安定のためにも必要性がかなり差し迫

ったものがあるのではと感じた。上記以外にも議論したことは多くあるが、特に印象に残った議論をここに挙げた。そしてこういった議論を、なかなかすることがない人々々々できたのは非常に感慨深いものがあった。西予市には確かに歴史を感じる建造物や酒造、著名な政治家や社会運動家が宿泊した旅館などが残っており、多くの可能性が秘められており、それらを如何に活かして未来にも残していける町づくりをするのか、それは西予市だけに留まらず、日本全国の諸都市が抱える問題を考えることに繋がっているように感じたし、それは我々の故郷を守るといふ差し迫った危急の課題に他ならないと感じた。(小倉 匠海)



参加者の声②

We had a very fruitful discussion with local people in Seiyō. There are several issues happening in this agricultural rural area. First of all is the population problem as young people tend to move to bigger cities for better education and jobs.

Second is the disconnect between local government and local citizens cause the

facilities are built without citizens' feedbacks. We really appreciate this chance to understand the issues from local people's perspectives. (Ngan Vo)



▼坂の上の雲ミュージアム 訪問・松本 啓治館長のご講演 (8月14日)

坂の上の雲ミュージアムは、建築家・安藤 忠雄氏によって設計され、平成18年(2006年)に完成した。松山市の推し進める坂の上の雲まちづくりの中心として建築され、市民の交流の場としても活用されています。日米の学生たちは、坂の上の雲の世界観に触れ、明治の日本人の生き様に想いを馳せた。





参加者の声

坂の上の雲ミュージアムでは、学芸員の方からレクチャーを受けた後、館内を見学し、そして館長による講義を受けました。レクチャーでは、坂の上の雲ミュージアムが設立した経緯や、司馬遼太郎の傑作『坂の上の雲』の大まかな概要を学びました。

こうして本館への関心を高めた後、館内を見学しました。館内では、小説『坂の上の雲』の執筆に関連した資料や、舞台の時代背景を分かりやすく説明したパネル、また実際に触れて体験することもできる展示など、様々な工夫がありました。館長もおっしゃっていたように、「文学作品を、いかにして目で楽しめる展示にするか」ということが意識された、あらゆる人が楽しめるミュージアムだと感じました。

館長のお話では、本館が位置する松山市でのフィールドミュージアム構想についてお話いただきました。坂の上の雲ミュージアムを中心として、周辺に様々な文化施設を設立し、松山市全体を屋根の無い博物館のように形作るというプロジェクトです。『坂の上の雲』という小説が、いかに松山の市民のアイデンティティと深く結びつい

ているか、松山にとって大切な宝であるということ学びました。

文学が、まちづくりを牽引する現場を肌で感じ、改めて文化・芸術の持つ力の大きさを学んだミュージアム鑑賞でした。(諸星渚)

▼松山城・道後温泉散策 (8月14日)

文化と歴史が色濃く残る松山の魅力を実際に体感すべく、学生たちは松山城・道後温泉を楽しみました。



参加者の声

松山のフリータイムで私は道後温泉に行きました。実はホームステイ先でも一度行っていたのですが、無類の温泉好きの私にとってそんなことなど微塵も関係ありませんでした。

みんなが改修前の本館に行く中、私は唯一の男性だったこともあり一人近くの「椿の湯」へと向かいました。地元の人が多く利用するこの温泉は、観光客の多い本館とはまた違った落ち着きや懐かしさがあり、湯船に浸かりつつ、心身ともに束の間の休息を味わいました。

朝から晩まで集団のプログラムが詰め込まれた本会議の期間中において一人で過ごすこのような時間は非常に珍しく、一人で浴槽に浸かってぼーっとしていると、空白を埋めるかのようにそれまでのJASC中の他愛もない思い出が心の中に湧いて出てきました。別にそれらの記憶の一つ一つを言語化し、意味づけすることなどしませんでした。湧いてでてくる記憶のイメージそのままに自分を浸らせていると、湯船から上がった時には自然と心が洗われていました。「心は記憶の中にあり、イメージを滋養とする」。道後温泉でのひとときはある作家が言っていたこの言葉を身にしみて感じた時間でした。(戸嶋 寛太)

▼平和についての議論 (8月15日)

8月15日は終戦記念日。1934年のJASC創設時の理念が「日米間の平和の一翼を学生も担うべきである」であることもあり、本年も平和について議論を行いました。

はじめに、長崎出身で九州大学法学部2年の佐々木 彩乃より、原爆に対する長崎の視点をプレゼン形式で共有してもらいました。



文
和

などを取り扱い、日米の価値観の相違を理解し合うとともに、平和を求める心を確認し合いました。

参加者の声①

第二次世界大戦開戦、広島・長崎への原爆投下…そして終戦。3週間24時間共に過ごし、議論しあう仲間と言えども、日米どちらの学生にとっても非常に重く、慎重さを要するテーマであると言えます。また、私はアメリカのカレッジで現代社会の授業を取った経験があった為、日本とは異なった視点での教育を知っていました。それもあって、この時間がどのようなものになるのか、複雑な気持ちを抱いていました。

この議論は私のJASC経験の中でも、決して忘れることのできない時間と言い切れる、そんな時間になりました。かつて敵対していた国で育ち、違う教育を受け、違う環境の中で育った私たち。しかし、私が拙い英語でまとめることのできない感情を話す時、アメリカ側参加者も一生懸命に耳を傾けてくれたのです。決してお互いを否定せず、静かに、1つ1つ言葉を選びながら、じっくりと語り合う…それがどれほど大きなことか身をもって体感しました。

平和とは何で、未来の平和のために何ができるのか?この時間を共有することのできた仲間感謝し、考え続けます。(金澤 つき美)



参加者の声②

「原爆投下が戦争を早く終わらせ更なるアメリカ兵士の死者数を減らしたこと、ソ連との覇権争いという今後の文脈の中での投下はアメリカの存在感を高めたという意義があった」アメリカでこのように投下を正当化する議論があることは知っていましたが毅然とした態度で言い切る姿に驚きました。広島原爆資料館を訪ねたことのあるその米国側学生はその凄惨さを知るがゆえに、発言に対して最大限に心を配ってくれましたが、自分はその発言に対して発言を返せませんでした。日本での原爆、あるいは核廃絶を唱える文脈では、唯一の被爆国として、という被害者としての感情面での主張が多い一方で、結局核保有国たるアメリカに安全保障を託しているという矛盾を改めて実感することになったからです。その被害者としての面も、もし日本が当時原爆を保有していたらアメリカに使っていたのではないかとしたら、彼女が毅然とした態度で意義があったといったように日本人も毅然とした態度で原爆は落とされるべきでもなかったし、これから核が廃絶されなくては行けないと言い切れるのか、

ますます混迷が深まっていきました。(古座匠)

▼地域医療ワークショップ@野外活動センター (8月15日)

地域医療は待ったなしの深刻な状況にあり、地方の現状を知るために重要な要素です。愛媛大学医学部 熊木 天児准教授と医学生5名をお招きして、ご講演いただいた後、地域医療の現場の課題やアメリカの医療システムとの相違点などについて、議論を行いました。



参加者の声

地域医療というと、皆さんはどんなイメージを浮かべるのでしょうか。

このワークショップにおいて、愛媛における現在進行形の医療の形と、これからの課題や目標を、愛媛大学医学部の熊木天児先生と医学生の皆さんから教えていただきました。

三重県の片田舎で育ち、今は都市部の大学で学ぶ私は、実際の問題として捉えられるような捉えられないような、そんな複雑な気持ちのまま、トピックに向き合うこととなりました。

都市部にばかり医師が集まる理由は何か。なぜ慢性的に医師は不足しているのか。こうした問題は医療に限らず、広く都市問題、経済問題から政治的な課題に到るまで影響を及ぼしているように感じます。

人は、誰もが一生に少なくとも一度は医師と関わらなければなりません。その医療アクセスへの距離が住む場所により変わるという事実はとてつもなく不平等だと思います。住む場所が違うために助かった命と助けられなかった命がある。そう考えると、地域医療への貢献など考えてもいなかった私にとっては目を開かせる内容でした。

昨今、地方の医師不足が叫ばれ続けて久しいです。多くの自治体や地方の行政が奨学金制度や地域医療枠の入学試験などを導入し、なんとかしようと、打開への道を模索しています。こうした奨学金で学ぶ先輩や同期がたくさんいる私にとってはとても身近な話題でしたが、多くの JASCer にとって、特に米国側の学生にとっては初耳であったことだと思います。まずはその現状を知り、その上で打開策を見出す方法を考え続ける必要性を感じました。(伊藤 江理華)



第69回日米学生会議 愛媛フォーラム @愛媛大学 南加記念ホール ～愛媛の現状を知り、未来のビジョンを語ろう～	
13:00 ～ 13:05	実行委員挨拶・愛媛サイト概要説明
13:05 ～ 13:40	来賓挨拶 原 昌史 愛媛県副知事 野志 克仁 松山市長（代読：松山市産業経済部部長 大崎 修一） 大上 博基 愛媛大学 学長特別補佐
13:40 ～ 14:40	学生パネルディスカッション ① 日米学生会議 学生発表 12分 ② 愛媛大学 学生発表 8分 ③ パネルディスカッション 30分
14:40 ～ 15:00	休憩・バッファー
15:00 ～ 16:00	会場の皆様と学生でグループ議論 ① パネルの感想や自分の意見を共有 ・未来のビジョンについて語り合う 40分 ② 会場全体に議論したことを共有 20分
16:00 ～ 16:10	愛媛大学アカペラサークル [オレンジ] パフォーマンス「にんじゃりばんばん」「世界に一つだけの花」
16:10 ～ 16:20	閉会の挨拶
16:20 ～ 16:30	集合写真撮影

第69回日米学生会議 愛媛レセプション @愛媛大学 学生食堂	
16:50 ～ 17:00	主催者挨拶：（一財）国際教育振興会理事 富川 秀二
17:00 ～ 17:05	乾杯の挨拶 サポート委員会代表 愛媛県 経済労働部 観光交流局長 宮本 泉
17:05 ～ 18:20	ご歓談
18:20 ～ 18:30	閉会の挨拶

▼愛媛フォーラム@愛媛大学 (8月16日)

5泊6日間、愛媛に滞在した日米の学生が見た「愛媛の魅力や課題」について、愛媛の皆様が発信する場として、愛媛フォーラムを開催しました。開催前には、NHK松山放送局のニュース番組「ひめポン！」のオープニングコールを日米の学生全員で行いました。ご来場者・メディア関係者等合わせて65名が観覧に訪れ、会場は大いに盛り上がりました。



目的：日本全国、アメリカ全土から選ばれた学生67名が、5日間愛媛県に滞在して、ホームステイ・西予市の住民との交流・松山市を観光・平和についての議論などを行いました。自分の目で現場を感じた学生たちが、現状を分析し、未来のビジョンを語った上で、ご来場いただいているみなさまとも現状と未来について語り合うことで、愛媛のみなさまがビジョンを描く参考となる場、及び学生が愛媛のみなさまの意見を聞く場となることを目指します。

【第1部】学生パネルディスカッション

《司会》

- ・日米学生会議 in 愛媛担当実行委員
九州大学 21世紀プログラム 4年 齊藤 和平
- ・日米学生会議 in 愛媛担当実行委員
群馬大学 医学部 医学科 5年 藤本 アベリーノ



Part A：日米学生プレゼンテーション

日米の学生67名に対して行ったアンケートを分析して、以下2名の学生が「私たちからみた愛媛のいいところ」について日英両言語で15分間プレゼンテーションを行いました。

- ・吉村 彩 (国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 4年)
- ・EvaMarie Olson (Smith College, East Asian Languages and Literature)



内容要旨

- ・愛媛サイトにおける活動報告
- ・アンケート分析結果報告
- ・ホームステイで一番楽しかったこと：
 - ご家族との会話 61.5%
 - 観光やお子さんとの遊び 20.5%
 - 家庭でのお食事 15.4%
- ・西予市：住民の方々との対話が印象に残っており、新しさと伝統が共存していた。
- ・松山市：慌ただしい都市の後ろに、山の頂と木々が見えていて、その2つがとても美しく融合していた。また、地元の方々が町を素敵にしようと努力している姿に感動した。
- ・結論：以下の4つが愛媛の魅力だった。
 - 伝統と新しさとの融合
 - 自然と都市
 - 強いコミュニティ
 - 外からのものを受け入れながら、地元の文化を大事にしている



Part B：愛媛大学学生プレゼンテーション

愛媛について語る時、現場の学生の意見を聞くことも重要であると考え、愛媛大学の学生に、自身が普段行っている地域の文化を保全していく活動について、プレゼンテーションをしていただきました。

- ・豊坂 奈巳（愛媛大学 法文学部 人文学科
観光まちづくりコース 3年）

題目「山と木と人の暮らしが育む文化遺産」

～内子町小田の「森林文化」をめぐるサスティナブルツーリズムの可能性～



Part C：学生パネルディスカッション

Part A と B を総合しながら「愛媛の魅力と課題」についてパネルディスカッションを行った。

- ・愛媛大学学生パネリスト：豊坂 奈巳（愛媛大学 法文学部 人文学科 3年）
- ・日本側パネリスト：大野 友（早稲田大学 政治経済学部 国際政治経済学科 5年）
- ・アメリカ側パネリスト：Ethan Mattos (Hobart and William Smith Colleges, Public Policy)
- ・アメリカ側パネリスト：Emlyn Mio Lee-Schalow (Rutgers University, Marketing)
- ・モデレーター：藤本 アベリーノ（群馬大学 医学部医学科 5年）

議題

- ・ 質問1：愛媛での滞在を経て、地方での暮らしに対する印象は変わりましたか？その暮らしは魅力的なものですか？
 - Ethan: 大街道は、若い人、観光客、エンターテインメントなどに溢れており、一方で松山城や道後温泉などの伝統的な観光名所とそれらが共存していた。
 - Emlyn: 都市に生まれ育った自分の視点としては、愛媛はたくさんの自然に囲まれていて、深いコミュニティのつながりがある、素敵である。
 - 大野: 日本人としては、みかんの印象が強かったが、来てから新しく色々素敵なものがあることを学んだ。ホストマザーは、愛媛独特の文化というものはない、ということをおっしゃっていたが、外から見ればたくさんある。
 - 坂の上の雲ミュージアムや道後温泉など、地元の方々の努力によって文化を作り上げているところが印象的だった。
 - 豊坂: 松山の城下町をどこからでも見ることができる。個性を生かした地方住民を筆頭に作り上げる姿勢がある。
- ・ 質問2：あなたにとって、地方に移住したいと思わせるものはなんですか？
 - Ethan: コミュニティが密で、自分の好きなことでコミュニティを積極的に作っている、という点で、自分の大学での生活は愛媛の生活に似ている。ホストファミリーにとっても歓迎していただいて、非常に印象に残っているが、そうした「人とのつながり」が魅力なのでは。



- Emyln：仕事の機会とリラクゼーションとのバランスが、住む場所を選ぶ上で重要な要素である。地方ではゆっくりできるので、自分にとってはそこが魅力的。
- 豊坂：都市ではなく、地方で一生を過ごしたい。故郷の地方活性化のために貢献できたらと考えている。



- ・ 質問3：国内の他地域と比べ、愛媛の強み・特徴はなんですか？
 - 大野：自分は長野県と宮城県で活動してきたが、愛媛には独自の歴史と文化が生きていると感じる。宮城県女川町では、人口の10%が亡くなられたが、起業家支援などを充実させて人を呼び込もうとしており、NPOなどの人と人との活動も盛んである。新しいものを打ち出す女川町と対照的に、古き良き歴史と伝統はやはり愛媛の特徴・魅力である。

- ・ 質問4：海外出身者にとって、ガイドブックに載らないような地域を訪れたいと思うには、どのような条件が必要ですか？

- Emyln：自分はよく観光旅行に行っているが、有名なところに行って写真を撮って、というのではなく、普段出会えないような人から興味深い話を聞くのが好き。今回も、西予市に行った時、酒蔵の方が時間をとって酒蔵の歴史などについて説明してくださったのが印象に残っている。人とのつながりからそういったガイドブックに載らない場所に連れて行ってもらう機会が生まれるので、地元の人と話せる機会が重要であると思う。



《会場からの質疑応答》

- ・ 質問5：松山城や坂の上の雲ミュージアムに行って、歴史についての興味が広がった。愛媛県の歴史を知ること、どのようないいことが生まれるのでしょうか。

- 大野：学生にとっては、明治時代の人の努力した姿を感じることで、勉強するモチベーションを高める役割があると思う。また、松山は歴史だけでなく自然など他にも色々な魅力があるので、それらとの融合の中でさらに新たな意義が出てくると思う。
 - Emlyn：愛媛に実際に足を踏み入れて地元のことを知ることで、歴史をもっと知りたいと思うようになった。
- ・ 質問6：住民の幸せと観光の促進とのバランスはどのように図れるでしょうか。
- 豊坂：地元の方が何を求めているのか、しっかり理解することを前提にして、そこから観光と両立する姿勢が重要だと思う。
 - Ethan：北京オリンピックで、大きな施設を次々と作ったが、オリンピック後にはあまり使われておらず、もったいない。長期的な目線に立って、観光・まちづくりを行なっていく必要を再認識している。また、みきゃんのマークを頻繁に見て印象に残っているので、マスコットの使用も有効なのでは。
- ・ 質問7：松山市を訪問して、モダンと伝統が共存している、という点で京都と似たような感覚を得た。松山市の観光都市としてのこれからの可能性はどうでしょうか。
- 大野：高松の方が人口は多いけれど、四国と言われて思いつくのは松山なので、これからも観光都市として発展していくのではないかな。
 - 豊坂：京都と似ている、と言われて驚いた。自分にとっては、日本の古い文化が根付いている街、というイメージが強い。これから、松山の観光的発展はきっと起こっていくはずである。というのは、目に見えない無形の文化が多く存在しているからである。目に見えない文化を伝える、ということができていけば、さらに良くなっていくと思う。

【第2部】来場者のみなさまと議論

形式

- ・日米学生会議の学生2名、地元の皆様3名程度でグループを作って座る。
- ・最初の40分間で、2つの議題について対話・議論を行う。
- ・最後の20分間で、議論した内容を共有。



議題

議題1：国内の他地域と比べ、愛媛の課題、また強みはなんですか？

議題2：もしあなたが愛媛県知事で、一つ政策を実現できるとすればそれはなんですか？



参加者の声①

2017年8月16日、愛媛フォーラムが開催され、会議参加者、愛媛大学の学生によるプレゼンテーションとパネルディスカッションが行われました。私とアメリカ側参加者のEvaMarie Olsonは、米の学生が見た愛媛のよいところ。というテーマでプレゼンテーションを行いました。五日間の滞在は、松山市のご家庭へのホームステイ、住民の方との地域の課題や暮らしについてのディスカッション、行政の方から愛媛のまちづくりについてのご講演など、様々な視点から愛媛を知る機会でした。愛媛フォーラムでのプレゼンテーションを通して、この経験をじっくり振り返り、愛媛の魅力について考えることができました。学生参加者に答えてもらったアンケート結果も踏まえて見えてきたのは、古くからの文化や遺産を大切にしつつ、新しいものを次々に取り入れてまちづくりを進める愛媛の方々の姿勢、そして地域コミュニティの強さと暖かさでした。かねてより関心のあった地方創生やまちづくりの重要性を再認識する貴重な機会だったと思います。(吉村 彩)

参加者の声②

地域学生として登壇したあの日は、一生忘れない。

私達が作成した観光マップを手に取り「感動した!」と言ってくれた、ある JASC 実行委員の一言から、私の挑戦が始まった。

大学では英語に触れる機会がなく、JASC 参加依頼が届いた際には、会議名から伝わるプレッシャーから正直、参加に悩んだ。

小さな集落で活動をする私達にとって、国外で活動する学生は、かけ離れた存在であり、どこかしら劣等感を感じていた。しかし、後日大学を訪れた実行委員に素敵な言葉を頂き、即座に参加を決意した。何よりも県外の学生が、私達の活動に興味を持ち、評価をしてくれたことに胸がいっぱいになった。

当初、発表は同時通訳を頼む予定であったが「無謀な挑戦で、下手な英語の発表になるとしても、自分の言葉で伝えたい」という気持ちで英語の発表にも挑んだ。

本番までの1か月間は、JASC の方々が発表原稿の翻訳を快く引き受けてくれたり、発表練習では学部を超えて多くの教授や愛大生に助けてもらったりと、非日常な日々を過ごすことができた。参加を決意したことで、これまでにない経験や出会いを恵んでくれ、更には自分の限界を決めつけずに挑戦する楽しさを教えてくれた JASC に心から感謝している。

愛媛大学 法文学部 人文学科 観光まちづくりコース 3年
豊坂 奈巳

参加者の声③

Ehime was the place which gave me the clear vision of what "human warmth" is. From discussion, I felt the strong bound of local community. Also, I was surprised that people in Ehime tend to come back to their hometown even if they go out for a while. With its astonishing scenery, local culture that people cherish, the relaxing atmosphere and attractive people, I definitely agree that the place will continue attracting people, and I caught a glimpse about what a "fruitful life" is. (Ethan Mattos)

西予市職員より西予市プログラムに寄せて①

未来を創る若者へ

第 69 回日米学生会議 in 愛媛の分科会を、文化と歴史のまち愛媛県西予市を起点に実施していただき、誠にありがとうございました。

会場となりました宇和米博物館は、昭和3年（1924年）に建造された旧宇和町小学校を移築し、平成3年（1991年）に開館されました。端から端まで見通すことができる109mの廊下には圧巻された方もいたのではないのでしょうか。市では当施設に新しい価値を見出すため、平成28年（2016年）より建築家、地元有志とともに共創をテーマにイノベーションを起こそうと奮起しており、実行委員の齊藤和平さんから日米学生会議の会場利用についてご提案をいただいたことは、まさに渡りに船でした。

さて、日本の労働人口は近い将来5000万人を下回り、今後は国内外を問わず異なる国籍、価値観の人々とも一緒に仕事をするグローバルな人材になることを求められています。また、オックスフォード大学の調査では日米を問わず、10年から20年の間に50%近い職業がAIによって無くなるとされています。このような状況の中で社会を生き抜くには、自らが価値を創造できる人材になることが求められており、まさに、日本人とアメリカ人、そして個人と個人の価値観をお互いに理解することを目的に開催された日米西予座談会は、未来を創る人材育成の手段であり、そのような現場に携わることができ感恩戴徳の思いです。

自分自身の大学生活を振り返ってみると、20世紀の日本は「教える」ことを目的とし、マニュアルの再現能力、処理能力、知識技能を中心に学んできたように思い返されます。しかし、激動、不確実性、複雑性の増した21世紀では思いもよらないリスクが日常化し、変化に対してチャンスをつかみ取る人材育成こそが、現代の大学教育のあるべき姿となっており、その手段として日米学生会議への参加を促すことも重要な施策と考えられます。

参加された20歳前後の学生の皆さんは、今後の激動の時代を創造する立役者になります。先人が築き上げた伝統を正しく受け継ぎ、現代に活かし、新しいものを創造することができる不易流行の精神を持った人材になることを期待しております。そのためには、日米学生会議のような機会を通して、国籍や国境の問題だけではなく、宗教、歴史、ジェンダー、所得格差など複雑な問題を理解し、多様性に対する寛容力を身に着け、困難に立ち向かう力を学生時代に培い、その能力、考え方を他者に繋ぎ、広げていただきますようお願いします。

西予市総務企画部総合政策課
政策調整係 清家 祐一

西予市職員より西予市プログラムに寄せて②

第69回日米学生会議 in 愛媛の分科会に参加された皆様、お疲れ様でした。協力させていただいたスタッフ、参加した地域住民は、若い皆さんが熱心に議論している姿を見て、大変刺激を受けました。

皆さんが、2017年夏、西予市で30度を超える猛暑の中、宇和町卯之町の町並みを見学し、エアコンのない木造校舎で西予市民と熱心に語り合った体験を忘れずに、いつかこの西予市に、再び足を運んでくれることを願っています。

今回、西予市と日米学生会議の「つながり」は、実行委員の齊藤 和平さんと、会場となった米博物館のリノベーション事業や、西予市のまちづくりに意見や提案を下された、山岸さんという2人のつながりから始まっています。私自身、人と人のつながりの大切さを改めて実感させられた機会にもなりました。

若い学生の皆さんには、是非、日米学生会議でできた「つながり」をその枠だけに留めることなく、次の「つながり」へと広げ、未来を創ってほしいと思っております。

西予市産業建設部経済振興課
町並み推進係 都築 卓郎

参加者の声①：愛媛サイト総合

愛媛で過ごした時間を、どう表現すればよいのか。率直に言って、感想文という形でまとめることは極めて困難でした。それほどまでに色々な感情や気づきにあふれた時間だったためです。

まず、愛媛に到着してからの行程を振り返りたいと思います。到着してすぐに迎えてくれたホストファミリーは、ホテルではわからない「本当の」生活を経験させてくれました。それに続く西予市の訪問と市民や職員の皆様との対話は、東京や京都などの大きな観光地では見られない日本のリアルな姿を垣間見せてくれました。松山市への訪問中に坂の上の雲ミュージアムを訪れ、坂の上の白い一朶の雲のみを見つめて登っていった、明治の若者の姿と自分たちを重ね合わせることができました。その他、えひめ丸の事故から生まれたハワイとの交流や8月15日の終戦の日に合わせた平和学習など、日米の学生が当事者意識を持って学ぶべきトピックに関して理解を深めました。それらの経験の総まとめとして、フォーラムではパネルディスカッションや愛媛大生のプロジェクトに関する発表を通して愛媛県の未来に関して議論をしました。

それらの経験は私たちの人生にどのような足跡を残すのでしょうか。例えば、個人的に

元々関心のあった地域活性化の現場を見ることができたこと、アメリカ人学生と本音で平和に関する議論ができたこと、坂の上の雲に登場する人物から大きな勇気をもたらえたこと。後にも残るであろう経験は、数え上げればきりがありません。しかし愛媛という未知の土地に足を踏み入れ、そのままの姿で自分がその場所に受け入れられたという感触を持ったことが何より嬉しく、「この場に来てよかった」と心から思うことができました。

たとえば、ホームステイ後のカレー作りであるホストマザーが私のことを「友お兄さん」と呼び始めました。それにつられて子供たちも「友お兄さん」と呼び出したとき、この家族に心から受け入れられた気持ちがしました。たった数時間の関わりの中で両手を広げて受け入れてくれる温かさに触れ、JASCは単なる議論や友情を超えた何かをそれぞれの人生に残してくれるのだと気づきました。

それと同時に、愛媛の氷山の一角しか見られなかったという不足感もあります。そこに住む人に触れ、現地の人にしか聞くことのできない話を聞き、新しい気付きがあった土地にこれほどの期間しかいられないことがとても残念でした。でも、JASCが大きな物語の始まりだとすると、これほど良い始まりはないと思います。「また、絶対に戻って来る」。そう固く心に誓い、私たちは次の目的地、三重へと旅を続けていきました。(大野 友)

参加者の声②：愛媛サイト総合

I found our stay in Ehime to be both enjoyable and informative. The Ehime prefecture demonstrated a perfect balance of modernity and tradition, blending the beauty of Japanese nature and culture with urban revitalization, as we saw in our visit to Matsuyama City where we were able to explore a newly renovated shopping arcade, but also traditional sites such as Dogo Onsen and Matsuyama Castle. After my visit I feel as if I gained a greater appreciation for Japanese culture that could not be experienced in urban areas such as Tokyo. (Ethan Mattos)

***** サイトコーディネーター後記 *****

私にとって、愛媛サイトは話があがった時から特別な意味を持っていた。何を隠そう、愛媛松山は『坂の上の雲』の3人の主人公、秋山 好古・秋山 真之・正岡 子規の故郷である。生の時、NHKドラマで見た『坂の上の雲』に心が震え、小説8巻もあつという間に読んでしまったほど、私は『坂の上の雲』の大ファンであった私は、3人の主人公の生まれ育った愛媛において日米の学生が気づきを得られる企画を考えてそれを実現できる機会を前にして、並々ならぬ情熱を沸かせていた。

もう一つ、私のモチベーションを高めたのは、地方の問題を扱うことで、少しでも各自治体や地元住民の方のためになりつつ、日米の学生が「日本の地方の現状・問題」に対して認知的になり、問題を解決するきっかけにつながる機会となりうる、ということであった。自分自身は福岡の大学に通う身として、地方には地方なりの魅力も課題もあると感じられるが、東京やアメリカの都市圏に住む学生が、その地方の現実を実感する機会は少ない。「問題が認知されていないこと」それ自体がさらに地方の問題の解決を遅らせている要因の一つとなっているかもしれない、と考えると、今回の愛媛サイトの企画で日米の優秀な学生に地方の現状と問題を見せることは、非常に有意義なことであると考えていた。

しかし、頭で考えることと、地元の方にご協力いただいて実際に実施することとの間には、大きな隔たりがあった。愛媛県の中でも松山は人口60万人を擁する都会であり、もっと地方の現状を知るために、新居浜市・今治市・宇和島市などを訪れた。しかし、会期がほぼ完全にお盆休みとかぶるため、プログラムに対して協力を得ることはかなり難しかった。それでも、捨てる神あれば拾う神あり、地方創生事業に携わる友人を経由してつながった西予市の皆様は、好意的に私たちの活動を聞き入れてくださり、本会議でも訪問させていただくことが決定した。お盆中の日曜日という日程にもかかわらず、35名もの市役所職員の皆様、地元住民の皆様にご参加いただくよう働きかけていただいて、広報・企画・会場準備など何から何までお世話になった西予市職員の皆様には、感謝してもしきれない。

他にも、愛媛県国際交流協会・松山国際交流協会にご協力いただいて、ホームステイファミリーを30家庭探し出し、愛媛県庁と松山市役所には資金面や松山城プログラムの面で大変お世話になった。愛媛大学からはパートナー学生3名を採用し、ともに企画準備・運営を行ったが、度重なる出張のたびに家に泊めてくれて、車も出してもらい、医学部地域医療学講座の熊木准教授や医学教育センター長の小林教授を紹介してくれて、そこからプログラムが大きく前進するなど、本当に多大なる貢献をしてくれて心から感謝している。

本会議では、事前に想定しきれていなかった点について、当日バタバタとしてしまったけ

れども、すべてのプログラムを無事にこなすことができたのは、ひとえに支えてくださった周囲の方々のおかげである。一年間全力で準備してきた6泊7日はあっという間に終わって行ったけれども、「ホームステイであたたかくもてなしてくださったご家族の皆様とのひとときがとても楽しかった」「西予市で地方住民の皆様の声聞くことができ、分科会議論が深まった」「西予市の現状を見て、日本の地方が抱える差し迫った課題に自覚的になった」「平和についてアメリカ人と話すことに関して複雑な感情を持っていたが、アメリカの学生たちが私たちの言葉にならない感情に一生懸命に耳を傾け続けてくれて、忘れられない時間になった」「住む場所が違うことで助かる命と助からない命があることに気づき、地域医療に対する目を開かせてくれた」「愛媛フォーラムのプロフェッショナルリズムに感動した」と伝えてくれた学生たちの声を聞いた時、すべてが報われた気持ちが出た。しかし、素晴らしい感性と思考と人格を持ち合わせた学生たちだったからこそ、プログラムが素晴らしいものになったのだ。参加者のみんなにも深く御礼申し上げたい。

愛媛サイトは、自分が主担当として作り上げただけに、感慨も一入であった。しょっぱなから予想以上のお盆渋滞に巻き込まれて到着が遅れ、ホームステイファミリーの皆様にも多大なるご迷惑をおかけしてしまったにもかかわらず、最初に入った時には、温かく拍手で迎えてくださって、その優しさにゆうた（馬場 雄太）と肩を抱き合いながらわんわん泣いた。えひめ丸事故についての議論も平和についての議論も、とても真摯に向き合ってくれた日米の参加者の姿を見て心が熱くなった。西予市の住民の方もお盆中の日曜日にお越しいただき、地元の皆様には表現しきれないほどたくさんお世話になって、ありがたかった。愛媛フォーラムに向けて、実行委員もパネリストも、みんな一丸となって頑張っ、最高のフォーラムを開催できて胸がいっぱいになったし、愛媛大学のみんなにバスでお別れするときには、胸が裂けるかと思うほどに愛おしさを感じた。たくさん、振幅の大きな、はじめましての感情が自分の中に芽生えて、愛媛サイトだけでも感情がとても豊かになったように感じられる。

愛媛サイトの企画・運営を通して痛感したこと、それは「自分一人の力だけでは、大きな企画を成し遂げることはできない」という、書いてみれば至極当然なことであった。今までも色々と学生を巻き込んで企画をしてきたが、愛媛サイトの企画はお金と責任のかかる社会人の皆様にご協力いただくことの難しさに向き合い続ける日々であった。未熟な私たちに対して、叱咤激励しながらご協力くださった愛媛の皆様、心より深く御礼申し上げます。

『坂の上の雲』第1巻あとがきには、以下の一節が綴られている。

「このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽道家たちの物語である。

やがて彼らは日露戦争というとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつっこんでゆく。

楽道家たちは、そのような時代人としての体質で、前をのみ見つめながらあるく。

のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶の白い雲が輝いているとすれば、そのみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。」

明治人の途方もない努力とエネルギーに比べれば、たった1年間私が費やした努力はちっぽけなものにすぎないけれども、坂の上の雲の3人の主人公たちが踏みしめた伊予松山の地で、「日米の学生と愛媛の皆様にとっての一朶の白い雲」のみをみつめて、坂をのぼっていくのだと、僭越ながら心の中で主人公たちと自分を重ね続けて、全力で愛媛サイトを作り上げた。たくさんの失敗と心がいっぱいになる喜びを噛み締めたこの経験を糧に、私も明治の先達の生き様を受け継いで、人生をかけて「自分にとっての一朶の白い雲」のみをみつめて、坂をのぼっていかう。

愛媛サイトコーディネーター
九州大学 21世紀プログラム 4年
齊藤 和平

愛媛サイトコーディネーターとしての仕事は完全にゼロからのスタートだった。愛媛県を訪れたこともなければ、観光名所や歴史、文化を含めての知識も無い。我々は漠然と「地域創生」のテーマを掲げながらも、具体的なプログラム案すらまとまらず、ただただ進展のない話し合いに明け暮れていた。

愛媛サイトが前進し始めたのは、年末の愛媛県訪問で県庁の国際課のサポートを得られてからである。絶景で知られるしまなみ街道や、松山市の坂の上の雲まちづくり構想や美しい天守閣が残る松山城、今治タオルのブランド化など様々なプログラムのアイデアを得ることができた。こうして、愛媛サイトへの気持ちは不安から期待へと変わり、アメリカ側参加者のみならず、日本側参加者にとっても有意義なプログラムにしよう決意した。

本会議では愛媛の本当の良さを感じてもらいたいという思いから、プログラムに直接体験を多く盛り込むように工夫した。松山市の街を大街道から松山城や道後まで自分たちの足で歩き、西予市の地域住民と直接対話を交わし、地域住民の自宅にお邪魔してホームステイをした。愛媛サイトの集大成「地域創生フォーラム」では、参加者一同が愛媛で学んだり感じたりしたこと、地域の問題などについて提案を出したり、地域住民の方々とディスカッションをしたりした。

地方サイトの成功の鍵は、地元でのサポートにあると思う。愛媛サイトは愛媛県庁をはじめとし、日米学生会議のアラムナイ、愛媛大学の学生サポーター、そして地元の多くの方々の尽力があってこそ成り立ったのである。協力いただいた方々には心より感謝申し上げたい。

一年準備してきた愛媛サイトもたったの6日間で終わってしまった。しかし、その6日間

で体験した愛媛の記憶や新しくできた人のつながりはここで終わらない。

愛媛サイトコーディネーター

群馬大学 医学部医学科 5年

藤本 アベリーノ

《愛媛サイトでお世話になった方々との写真》



愛媛サイト全般にわたってお世話になった

愛媛県庁 村上 暢章様 ご家族と

右上：愛媛県庁 国際交流課 村上 暢章様



西予市プログラムで大変お世話になった

西予市役所のお二人と

左：総合政策課 清家 祐一様

右：経済振興課 都築 卓郎様



西予市プログラム会場：宇和米博物館

指定管理者 一般社団法人 Zenkon-nex

代表理事 齊藤 正様と



共に企画・運営を行った

愛媛大学パートナー学生の3名と

左：萩原 彩・中：尾崎 美和・右：福永 晃

— 4-4. 三重サイト —

8月17日～8月22日



東西を海と山の豊かな自然に囲まれた三重県では、古来よりそれと調和するように人々が生活を営んできた。雄大な自然の中に佇む伊勢神宮や熊野古道伊勢路は、悠久の歴史を紡ぎ、自然崇拝、アニミズムの精神を育んできた。安倍首相に「日本の原風景」と言わしめた志摩の美しいリアス式海岸には、自然と寄り添うように海女文化が根付く。稚貝は取らないなどの種々の厳格な自主ルールを持つその伝統は、持続可能な資源活用という現代に通用する知恵をも秘めている。他方、北に目を向けると、日本有数の規模を誇る中京工業地帯が広がる。四日市は戦後の急速な工業化ゆえに60年代、四大公害病の一つ・四日市ぜんそくを引き起こすが、現在ではそれを克服し、公害問題を抱えるASEANなどから四日市の事例に学ぶと視察が訪れる。自然と人間、古代と現代が交差するこの地で、日本の精神のルーツや文化を探り、その上で現代が抱える様々な問題に向き合う。

■サイトコーディネーター

塩崎 諒平

新郷 雅大

Jennifer Lim

Kaede Yoshioka

■サイトスケジュール

8月17日(木)

- ・バスにて扇芳閣へ移動(13時間)

8月18日(金)

- ・皇學館大学 神道・伊勢神宮レクチャー
- ・雅楽と舞 鑑賞
- ・伊勢神宮内宮・おはらい町 散策
- ・分科会議論

8月19日(土)

- ・分科会議論
- ・海女レクチャー
- ・海の博物館 見学
- ・海女小屋訪問・海産物試食
- ・相差地区ガイド
- ・タレントショー

8月20日(日)

- ・ファイナルフォーラムリハーサル
- ・フィギュア博物館 訪問
- ・相可高校 日本料理体験
- ・ものづくりパネルディスカッション
- ・ものづくりの精神性 議論



8月21日(月)

- ・環境と公害未来館 見学
- ・公害認定患者 野田 之一様 ご講演
- ・桑名の折り鶴 体験
- ・三重フォーラム
- ・四日市港ポートビル

8月22日(火)

- ・東京へ新幹線で移動

■宿泊先

扇芳閣(8月17日~20日)

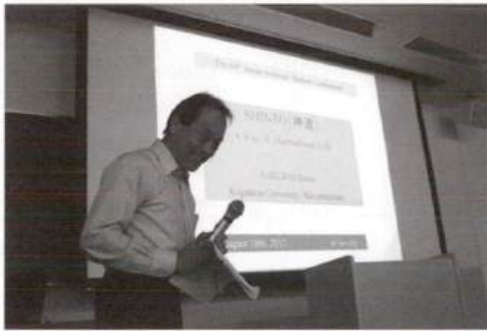
プラトンホテル四日市(8月20日~22日)

■各プログラムの詳細・感想

▼皇學館大学 神道・伊勢神宮レクチャー・ 雅楽と舞 鑑賞 (8月18日)

午前中は皇學館大学において、当大学教授の櫻井 治男様、神宮司庁の音羽 悟様に神道や伊勢神宮についてのレクチャーをしていただきました。

その後、皇學館大学や高校の学生たちと恩師弁当を食べ、祭式教室にて当大学学生による雅楽と舞を鑑賞しました。教室の雰囲気もあいまって、東の間古代にタイムスリップしたような錯覚に陥りました。



参加者の声

日本人は12月25日にクリスマスを祝い、その一週間後には神社に新年の祈りをささげる。日本人の無宗教を言い表すときによく言われることですが、このことの示すように、神道のことを本当に真剣に考えたことのある日本人はどのくらいいるのでしょうか。

我々の祖先は山を神として祀り、信仰していました。ただ鳥居が、山と人間界を隔てていました。その後大陸からやってきた仏教との融合や、キリスト教の受容など、神道は様々な宗教や思想を呑み込み吸収し



ていき、国家神道という洗礼を受け、戦後民主主義のなかで現在の形になった、自然宗教です。

神道というのは、宗教であると同時に、知らず知らずに私たちの生活の中に根付いている文化です。神道の講義を聞いて自分が一番感じた驚きはそこにありました。神道を宗教として信じることと、文化として神道を受容すること。日本社会の精神的構造を自分がどれだけ知らずに生きてきたのか、多くのことを考えさせられました。(豊坂 竹寿)

▼内宮・おはらい町 散策 (8月18日)

午後からは、一部の学生が公式参拝・御垣内参拝をした後、伊勢神宮内宮とおはらい町を自由散策しました。午前中のレクチャーだけでは感じられない、実際の内宮の雰囲気を存分に体感しました。



参加者の声①

物語には主役と脇役がいます。物語を引っ張って行くのは主役であり、それに華を添えるのが脇役であることが多いとされます。一般的に言う主役の人気の高さとは別に、脇役をより好む通な人が多いことも知られています。

我々日本人の中では、通な人が多いのしょう。例えば、太陽系における主役は太陽ですが、日本人に最も人気がある天体は月と言っても過言ではありません。月を表す表現の多さ、古文に現れる月への想いの数、そして福沢諭吉が訳したとされる"I love you"に突如現れる月の存在からして、日本人の月への想いは特別です。日本人の心に響くのは、太陽という主役が沈んだ後に寄り添ってくれる、この世を仄かに色付ける存在の趣深さ、なのかもしれません。

私達が訪れたおかげ横丁は、月のような存在でした。伊勢神宮という主役の脇で佇む、旅人の憩いの場です。神道という、様々な人の信念や邪念を見守ってきた歴史を司る重き大木の横で、そこを訪れた人々の心に温かな色彩を灯す軽やかな止まり木。脇役の存在が、我々に憩いをもたらしていました。

では、おかげ横丁を照らす伊勢神宮の光とは何なのでしょう。日本人が持つ精神のルーツと呼ばれる神道の魅力なのか、神宮独自の式年遷宮の不思議なのか、はたまた日本神話の最高神である天照大神の輝きなのか。

この主役には、我々を魅了するどれほどの引力があるのか。脇役で見つけたある茶屋にて赤福を頬張りながら、そう想いを馳せました。(林田 将)

参加者の声②

As a likely attraction on the top places to visit, Ise Shrine turned out unexpectedly ordinarily beautiful. The most enjoyable part of walking through Ise Shrine was contemplating the juxtaposition of sunlight through the trees and the symbolism of rebuilding the shrine every 20 years. As well, coming from a city life, the nature of the surroundings resonated. (Duo Xu, CeCe Johnson)

▼海女レクチャー@海の博物館(8月19日)

海の博物館学芸員の方から、海女文化についてのレクチャーを頂きました。その後、各自が自由に博物館内の展示を見学しました。古くから伊勢神宮にお供えする海産物を鳥羽市の海女さんたちが取っていたなど、伊勢神宮との関連も知ることができました。



▼海女小屋訪問@相差かまど（8月19日）

相差かまどの現役海女さんたちと、海女小屋で交流しました。サザエやアラメなど、彼女たちの取ってきた魚介類を小屋の真ん中にある囲炉裏で調理して出させていただきました。実際に海女さんが海に潜る姿こそ見ることはできませんでしたが、実際の暮らしの一部であるかまどの中で海女さんたちとお話できたのは貴重な体験でした。



▼相差地区ガイド（8月19日）

相差海女文化資料館と神明神社を鳥羽市役所の方に案内して頂きました。海女文化の根付く相差地区だけに、当神社に祀られている神様は女性の守り神である石神さんであることや、海女さんのいる家の軒先には海難を避けるおまじないであるセーモンドーマンが描かれた重しの石が置かれていることなどを学び、いかに海女文化が現地に根付いているかを体感しました。

参加者の声

海女漁は日本の古書にも記述があるほど、3000年を超える長い歴史があります。海女は素潜りという独自の方法で、サザエやアワビ、海藻などを獲ります。また、獲りすぎを防ぐために、地域ごと貝の大きさなど



によって漁獲を厳しく定めています。

私達は日本一の海女の数を誇る三重県鳥羽市を訪れました。女性の願いを必ずひとつは叶えてくれる「石神さん」と呼ばれる、古くから地元の海女さん達が大魚と海の安全を祈願する「石神社」を参拝してきました。石神さんに向かう途中の家々の前に、星型と格子状の印が書かれた石が置いてある事に気がつきました。「セーマン」「ドーマン」という魔除けの印で、星形の印は一筆書きでたどると、同じ場所に戻ってくることから、海にもぐっても必ず戻ってくる、格子型の印は、出入口が分からず悪魔が入りにくいという意味が込められているそうです。海女さんが頭につける手ぬぐいにも刺繍します。海という自然相手の海女の仕事は様々な危険も伴います。しかし、道の途中で出会った若い海女さんや、海女小屋で新鮮な海の幸を振舞ってくれた海女さんの話を聞いているうちに、また、大貝が獲れた話をする海女さんの元気で明るい姿に、非常にやりがいを感じられる仕事なのだと伝わって来ました。現在は高齢化や後継者不足に悩まされている海女漁。今後も、日本の変わらぬ伝統文化として継承して欲しいと思いました。（藤本 ミケイラ）

▼タレントショー（8月19日）

夜には、参加者が有志で出し物・パフォーマンスをする、タレントショーを開催しました。



文化分科会の書道パフォーマンス

参加者の声

なかなか皆が優れたタレントを持っていました。書道パフォーマンス、能、バイオリン演奏、ウクレレの弾き語り、女装ダンス、歌を歌い、フラダンス、ルービックキューブを一瞬で揃える美声披露など、どのパフォーマンスもクオリティが高く面白かったです。こうしたパフォーマンスは皆を元気づけ、全体の士気を上げます。またエンターテイメントというのは「間」が非常に重要となります。トークにしてもダンスにしても、いい演技には「間」というものがつきものです。

今回のタレントショーは多くの人がこの「間」というもの、そしてこの「間」から生まれる場づくりや空気というのを感じ取りました。優れたパフォーマンスをこの日米学生会議で観られるとは最高な体験です。私自身もマジックをさせていただき最高の経験をさせていただきました。またこうした

パフォーマンスは国境を超えた感動を与えることができると再認識しました。この場を借りて感謝します。ありがとう。（長谷川信寿）

▼料理体験@相可高校（8月20日）

高校生国際料理コンクールでも優勝したことのある相可高校調理部のみなさんと一緒に、三重県の食材を使った料理体験をしました。卵焼きを作ったり、巻き寿司を作ったりしましたが、予想以上に苦戦する参加者を高校生が見事なサポートをしてくださり、大変和気藹々とした雰囲気が進められました。昼食には自作した巻き寿司以外にも、JA三重様に提供していただいた松坂牛のしぐれ煮などもいただきました。



参加者の声

バスが角を曲がると、ずらりと並ぶ白い制服が目に入りました。

目の前にそびえ立つのは、青空に映える真っ白な校舎。三重一と言われる調理師学校・相可高校への到着。バスを降り、拍手の渦に包まれると、じんわりと胸が温くなりました。

「料理のプロ」となる高校生たちと取り

組んだ、だし巻き卵と太巻き寿司の調理。作りながら、料理は最高の国際交流だ、と感嘆せずにはられませんでした。

共にキッチンに立つだけで、心の距離は縮まります。出会って一時間と経たないのに、教室のそこかしこで笑い声が弾け、卵がうまく巻けるたびに歓声が上がります。太巻きに包丁が入り、“の”の字の切り口が現れると拍手が起きました。そんな和やかな雰囲気が、たまらなく愛おしく感じられました。

実習後の昼食。私たちの前に、色とりどりの料理が並びました。

これだけの料理を、昨日から作ってくれたのか。私は胸に、下準備の様子を思い描きました。英語で説明出来るかな、とほのかな不安を抱きつつ、出汁を取り、野菜を刻む生徒たちの姿…。それらを想像するだけで、途端に、眼の前の料理が何よりも尊いものに思えました。

余韻に浸る間もなく、別れの時は来ました。生徒たちが廊下に並び、拍手で送ってくれます。そのさまは何だか卒業式のようで、気恥ずかしくもあり、また寂しくもありました。

もう少しでいい。ここで時間を過ごせたら。心残りの思いを乗せて、バスはゆっくりと動き出しました。(大野 あゆみ)

▼フィギュア博物館見学 (8月20日)

多気町の万協製薬社長の趣味であるフィギュア収集が高じてできたフィギュア博物

館に訪れました。数々の日本アニメやアメコミのキャラクターフィギュアを前にして写真を撮り、忙しい本会議の息抜きとなりました。



▼ものづくりパネルディスカッション@三重大学 (8月20日)

三重大学メープル館にて、前日までに三重で学んだ日本の精神性が現代の諸産業にいかように根付いているかを探るため、各方面からゲストをお呼びしてパネルディスカッションを行なっていただきました。浅井農園株式会社代表取締役 浅井 雄一郎様 (農業)、蒼築舎株式会社 CEO 松本 憲司様 (左官職人)、パイロットインキ株式会社執行役員生産部長 太田 義之様、文具事業部長 印田 孝雄様 (製造業)、みて株式会社代表取締役 森口 英則様 (茶×サービス業)、吉田本家山林部代表 吉田 正木様 (林業) といった各方面からゲストの方をお迎えしました。パネルディスカッションの後、参加者や現地の学生を交えて、意見交換も活発に行われました。



参加者の声①

「ものづくり」とは何か。対訳すれば“Manufacturing”だが、そうした途端にどこか違ったニュアンスを醸し出す。そんなこの国特有のコンセプトを元に、各“ものづくり”に携わる最前線の企業の方々---ボールペンのパイロット・インク様、農産物の浅井農園様、日本茶のみて株式会社様、森林材木の吉田本家様、漆喰技術の蒼築舎様、を交えてパネルディスカッションを行いました。日本人の精神性を考える上でふさわしいサイト三重の、最後の締めくくりとして行われたことから、JASCの中で最も印象に残る経験となりました。

“日本人は直接手で触れたものを大事にする。”ものづくりという観点において、県内鳥羽市にて海女さん文化に触れたこと、また伊勢神宮を訪問したことからも、この考えにたどり着きました。貝を採集するのに特別な道具も使わず、至って原始的な方法で素潜りする海女さん。そして彼女らが獲ったあわびが、そのまま伊勢神宮に奉納されます。またその神宮においても、捧げられる刀剣や装飾品等は、全て一から職人によって手作りされるのだそうです。もっ

と“効率”を重視すれば、機械化であれより便利な道具を使うことであれ、できることがあるはず。その上で未だに、ひとりひとりの手によって得られるもの/作られるものに価値を置き続けている。イギリス産業革命から想起されるような、“作られるもの”という結果自体、量産を重視した“manufacturing”と違う点が、ここにあるのだ、と私は実感しました。

伊勢神宮を通して、“もの”は神にささげられるもの。その“もの”にはひとつひとつ細心の注意が払われ、一切のぬかりがあってはならない。それゆえ、他者に委ねず自分の手でどこまでも、心が納得するまで完成を試みる。「ものをつくる」こと自体に神聖さ・大義があり、それが日本人の生活そのものに溶け込んでいるのではないのかと。「お客さまは神様だ」というと別の話になり得ますが、いずれにしても、神道的な世界観から培われ、数千年と受け継がれてきたその捧げる精神が、今の日本企業がかけるものづくりへの思いに繋がっているのではないかと、と各業界の方々の意気込みを目前にして、私には思えました。それがときとして“働きすぎ”として批判されることも



ありながら、世界の消費者が日本製のブランドを一定に信頼する過程へと至ったのは、その“働き”と“生活”の一体化にこそあるのではないのでしょうか。労働時間と賃金の割合をただ気にする資本主義的な観点(manufacturing)からすれば、“そこまでしなくてもいいのに”と思えることでも、生活の一部(ものづくり)となりきったことでは、あるいはその基準が通用しないのかもしれない。今回のパネルを通し、自分の身の周りにある日本製品をもう一度見直してみたい、と強く願いました。(藤井 一樹)

参加者の声②

技術の日本と長く称されるその背景には、何が息づいているというのだろうか。繊細な技術力、選び抜かれた材料、職人の勘、ものをつくる発想力。これら製品開発への投資は、どれも欠かせない製造業の基盤でしょう。一方で製品をつくる上で必要な要素にはおさまらない、あるいはそのさらに奥に眠る何かに気付かされたのが本ものづくりパネルでした。それは、ものをつくる人々の中に燃える美しい精神性でした。代々に渡り技術を後継してきた誇り、ものを使用する人を細部まで想定する徹底的なこだわり、ものをつくることに対する情熱と美德の追求。他の誰でもないその職人が熱意やこだわりを持って丁寧に製品を形づくるからこそ成し遂げられる、精神性の粋がそこには伺えます。

もの一つ一つにも生まれた過程が存在します。その過程は、決して製鉄や機械作業か

ら始まることはありません。職人の頭脳や心が動いて初めて、ものはその形を与えられ始めるのではないのでしょうか。そうしたものづくりの原点にさかのぼることで人々はものの内に職人の想いを感じると共に、ものづくりに熱いロマンを覚えるのではないのでしょうか。(小島 直毅)

参加者の声③

Because economic development and urbanization was heavily prioritized it became something that Japan is proud of. But in the past, this became an issue because of the pollutants that were produced. This helped us understand that innovation considerate to the environment is important to preserving the world that we live in. (Jin Tanizaki, Stella Zhang)

▼四日市公害レクチャー (8月21日)

四日市公害にまつわるビデオを鑑賞した後、公害裁判の原告団の1人・野田 之一様から当時の様子やお気持ちを、一問一答形式でお話しいただきました。その後、公害と環境未来館内を四日市高校の生徒さんと学芸員の方に案内していただきました。



参加者の声

現在の日本は非常に高度に工業化がなされ、日本人なら誰でも今その恩恵を受けずに生活することはできないでしょう。

工業化とは即ち、其れまでの伝統的な手工業とか、農業に基づいた社会からの脱却を、時に強制的に行わせるものです。四日市は日本の4大工業地帯の一つ、中京工業地帯の代表的工業都市であり、戦後復興の要として、高度成長を支えました。しかし現地の住民の人々に与えた影響は多大なるものでした。1960年代から70年代の超工業化の流れの中で、大量の工場の排煙の中に含まれる二酸化硫黄などの有害な化学物質によって、住民は重い喘息に苦しみ、また多くの人々がその症状により命を落としました。

我々は四日市が見つめ、立ち向かってきた現実を見つめ、被害にあった人々がどのように乗り越えてきたか、また今乗り越えようとしているのかを学ぶために、四日市公害未来館を訪れました。最初に実際に被害を受け、訴訟と症状を勝ち抜いた男性から話を聴き、またどのような経緯を四日市が辿ったかを紹介する映像を見ました。映像の中で印象に残った証言（男性も仰っていたが）で、その症状において生々しかったのは、「息を吸うときは吸える。だが吸った後に息を吐くことができない苦しさは耐え難い。」如何なる苦しみか、想像もつきません。しかし生きながらの苦しみのなかでこれほど苦しいものがあるだろうかと思ってしまう。そして男性が経験した裁判

の長きに渡る戦いの中で、国を動かし、会社に対して公害問題の責任を認めさせる執念と言えるものに突き動かされるものがありました。私は当然ながら四日市ぜんそくの当時の被害や訴訟を知っているわけでもないですが、最近でいえば、注射器の共用や非加熱性血液製剤の使用によるB型肝炎やC型肝炎で長く苦しんできた方々が、国や製薬会社に対して賠償を求めた裁判を起こして、勝訴したことを思い起こさせました。如何に国が発展すること、その名のもとにあらゆることが行われようとも、其れが個人の不幸を招くようなことであれば全くの不正義であると言わねばなりません。個人の幸福と国家の発展は表裏一体のものであり、切っても切り離せない。数十年前の出来事でも現在での出来事でも共通するのは、決して国家の正義が、国家を構成する国民の正義と踏みにじることによって成り立たないということ、それを体現する勇気ある人々の行動でした。そして素晴らしいと感じたのは、地元の小学生がこの公害問題を多くの人々に伝え、教訓を未来に活かすために、当館でとても詳しく説明を、しかも英語で行なっていました。彼らの、正確な知識を、熱意をもって伝えようとする姿勢には学ぶものが多かったです。

世界でも多くの環境問題が未だ深刻なものであり、解決の糸口を模索し続けています。私が同じ大気汚染ということで思っていたのは中国の大気汚染問題でしたが、未だ根本的解決には至っていない現状で、学

ぶべき国と市民の関係性、違いが努力して成し遂げるべきことについて、四日市の教訓を通りすぎるわけにはいかないでしょう。

(小倉 匠海)

▼折り鶴体験 (8月21日)

桑名市の六華苑にて、桑名市の高校生たちと桑名の連鶴を折る体験をしました。



参加者の声

幼少期から日本で過ごしている人にとっては当然のように作ることでできる折り紙の鶴を親しみのない友人に教えることは、まったく容易なことではありませんでした。

まず、折り鶴の英語で何と言うかというところから始まり、折り方は言葉よりも手が覚えている感覚だったので、実際に順を追って口に出しながら折っていると自分までわからなくなっていくという奇妙な矛盾にぶつかりました。

もちろん、外国の友人にとっては最終形態がどうなるかなど見当もつかないことで、私が困っているのを見てさらに不安にさせてしまったことが振り返ると申し訳ないです。私も連鶴を折るのは初めてで、数ミリつながっているだけの紙1枚を交互に折っていくことは神経を使い、緊張しましたが、

一緒に手順をなぞりながら折ったはずの友人がなぜか惜しい完成形になったり、一方で、途中まで教えた後は黙々と取り組み人一倍早くゴールに辿り着いた友人も出てきた時には場を和ませたりしました。折り鶴が普及する機会はなかなかないでしょうから、日本のユニークな文化として知ってもらえた良い親睦の時間だったかと思います。(押切 彩)

▼三重フォーラム (8月21日)

NTN シティホールにて、三重サイトでの学びを外部に発信するため三重フォーラムを開催致しました。基調講演には、伊勢神宮の式年遷宮をテーマとしたドキュメンタリー映画「うみやまあひだ」の宮澤 正明監督、鎌田 雄介プロデューサーをお招きして、式年遷宮に秘められる日本の精神性についてお二人の考えることや制作秘話についてお話しいただきました。



三重県での活動報告を実行委員で行った後、桑名高校の生徒による琴の演奏と桑名市の紹介寸劇を鑑賞しました。



その後、三重県知事・鈴木 英敬様と参加者学生によるパネルディスカッションが行われました。三重県出身者からイスラム教徒の学生まで幅広いバックグラウンドを持った学生が三重県で感じたことを披露してくれました。



参加者の声①

このフォーラムでは三重県で体験したり、学んだことを発表するほか、映画監督のご講演を聞いたり、鈴木英敬県知事と、私を含む4人の学生が登壇しパネルディスカッションをするなど、盛りだくさんでした。

米国側の学生は、それぞれ独自の視点から「神道」という枠を通して人々の生活や文化、経済が繋がる cycloism といったユニークな考えを発信していました。彼らは海女文化を学ぶセッションやものづくりパネルでも興味津々で、三重出身の私は、この



上なく嬉しく思いました。

仲間に地元を知ってもらう絶好のチャンス。今回経験したことの多くは生活の一部に含まれているものです。しかし、身近すぎるために、見えない、捉えられない、わからないものがありました。今回の訪問では嫌というほど気付かされることとなります。神道やアニミズムを通してみる三重。異なる価値観がある場所として、私の地元として。登壇して一体何を言おうかと随分と悩みましたが、結局、わからなかったことはわからないまま、言わないという選択肢をとることとなりました。これでよかったと思っています。いつか、理解できる日が来ることを願うばかりです。(伊藤 江理華)

参加者の声②

The Mie site was very insightful into very unique aspects of Japanese culture. From visiting and learning about the Isejinguu shrine and the impact of Shintoism on Japanese culture, to visiting Ama-san at their huts and enjoying delicious seafood with them, Mie was truly a

site of rich Japanese culture.

It really struck us that high school students were heavily involved in every experience we had here at Mie, whether it be in the form of a guided tour, or casually making "Renbazuru", a type of origami unique to this area. Seeing how eager the younger generation is to step in and help in preserving and sharing local culture, gave us a glimmer of hope that should be made an example to all. (Emyln Lee-Schalow, Sarah Bernt)

▼レセプション (8月21日)

フォーラム会場の近く、くわなメディアライブにて、三重県でお世話になった方々をお招きして、レセプションを行いました。参加者それぞれが、お世話になった方々に感謝を述べつつ、三重県で感じたことを思い思いに伝えていました。



▼四日市ポートビル 夜景鑑賞(8月21日)

最後のプログラムとして、四日市のポートビルで夜景鑑賞をさせていただきました。三重県でのプログラムは大変タイトだったので、最後に綺麗な夜景を鑑賞してみんな

心を洗われたような清々しい気持ちで東京に向かうことができました。



参加者の声：三重サイト総合

第3サイトでは、三重県に滞在しました。私にとっては、出身地に近いということもあり、何度も訪れている土地であったが、日米学生会議としての訪問では新たな発見に驚くこととなりました。

伊勢神宮訪問、海女文化体験、ものづくりパネルといったプログラムは一見違うことを学ぶように思われたが、一貫してものが生きている、神が宿っているとすする神道の考え方、そしてその考え方がどのように地域に、そして文化に根付いているかを感じることができました。

また体感するだけではなく、日本人の価値観とは何か？私の中の日本人らしさとは何か？といった自分自身を振り返り、考えるきっかけを得ました。三重フォーラムでは登壇の機会を頂き、三重県での経験を基にした自分の考えを報告すること、そして他の参加者の価値観を共有することで今後の自分への課題発見にも繋がりました。私にとって三重サイトは4サイトの中でも印象に残る良いサイトでした。(金澤 つき美)

***** サイトコーディネーター後記 *****

日米学生会議はなぜ開催する必要があるのだろうか。その問いの答えを探すために、この一年間、どれ程時間を費やしただろう。各代の実行委員が悩むこの問いに、私たちも同様苦しんだ。そんな時、米国大統領選挙にてドナルド・トランプ氏が当選した。JASCer で溢れる私の facebook は、悲観する声で埋め尽くされていた。「自分たちが信じてきたアメリカはこれではない。」「アメリカって結局何なんだ。」アメリカそのものを見直し、そして苦悩する文章が次々とフィードに現れた。「己を省み、人を知る。～価値観の共有から生まれる可能性～」第 69 回会議のテーマである。今こそ日本を省み、アメリカと向き合うべきだ。日米関係の本質を学生から追い求めていこう。実行委員全員で必死に考えて導き出した会議のテーマと、日米間、そして世界平和の希求という、日米学生会議が 83 年もの間保持してきた命題がこの瞬間、繋がりを持ったのであった。

「日本の精神性のルーツを探る」

目に見えない“日本らしさ”に対する挑戦が始まった。三重県のプログラムは日本を省みるこの会議の核にきつとなるだろう。私と新郷はそう信じ、サイト運営を開始した。「神道」に対する学問的な学びから、何故日本人は議論の時静かになりがちなのかといった日常の疑問まで、日本人らしさについて徹底的に新郷と語り合った。学問的な知識を駆使して思考を深めることができる新郷とは異なり、常に経験が入り口となる自分は、三重県への出張は本当に貴重な時間であった。伊勢神宮は勿論、各地の市役所や商工会議所を始めとした多種多様な方々に対して自分が思う日本人らしさをぶつけた経験は本当に忘れられない。どことなく感じる雰囲気の違い。非常に穏やかで温かいが、どこか芯の通った強さを感じさせ、日本人らしさについて活き活きとお話しされる三重県の方々。とても新鮮で、私はその魅力に大いに惹かれていった。

この「人」の魅力を何とか参加者のみんなに伝えたい。人はいつだって現実だ。人から感じられるものもいつだって本物なのだと思ふ。だからこそ、「人」から発せられる言葉、雰囲気に興味を持ち、そこから参加者全員に“日本人らしさ”について考えてもらう機会を多く創りたかった。

三重県にて参加者がどのような学びを得て、どのようなことを感じたのかということについては他の感想文をご参照頂きたい。しかし、三重県のプログラム全体を通して言えることは、本当に地元の方々やご講演いただいた方々との距離が近かったということだ。ご講演いただいた方と共にご飯を食べ、共に議論をし、海女さんと同じ目線で笑い合い、三重県の学生と共におかげ横丁を回り、共にご飯を作る機会さえも頂いた。フォーマルな形の学びだけ

ではなく、このような些細なやり取りから“日本人らしさ”を考えるきっかけになったことを私は心から願っている。“日本人らしさ”という壮大なものまで考えが至らなかったとしても、三重県の方々が持つ、自分たちとはどこか違う雰囲気を感じ、そして何かを考えるきっかけとなってくれたのではないだろうか。

最後になりましたが、この素晴らしい三重県のプログラムを創り上げるにあたりお世話になった三重県全ての皆様、特にいつも自分たちに寄り添い、共に進んでくださった三重県庁の八太様、青木様、山根様、大平様、森田様、そして自分と共に三重サイトを担当した実行委員の新郷に心から御礼申し上げます。この一年間を振り返り、自分が持てる全ての力を三重県のプログラム創りに注ぎ込むことができたか、と問われたら、はいと答える自信は、正直どこにもありません。今一度振り返ると、後悔の念が沸々とこみ上げてきます。それでもこのプログラムを成功させることができたのは、三重県のプログラムに携わって頂いた全ての皆様が共に前へ進めてくださったお陰であると心の底から思っています。本当に、ありがとうございました。

三重サイトコーディネーター

東京外国語大学 国際社会学部 ラテンアメリカ地域専攻 3年

塩崎 諒平

83年の歴史の中で日米学生会議初の開催である三重県では、「日本の精神性のルーツを探る」をサイトテーマとして掲げました。

なぜ、日米学生会議という国際交流団体において、日米に関係が深い広島長崎や沖縄ではなく「三重県」で、「日本」について探ることをテーマにしたのかと言いますと、それは、国際交流やグローバル化の重要さが叫ばれる中で、とにかく留学して海外を見てこいであるとか、様々な文化の人と話すことで価値観が広がるであるとか、そういう巷に溢れた言説にずっと違和感を覚えてきたからです。いくら外を見て、外と交流しても、そもそも自分のことを理解していなければ、自分の中の変化に気づけないし、そもそも外国人と対等に渡り合うなど到底無理だとずっと思っていました。だからこそ、国際交流団体であり、海外に興味を持っている学生が集まる日米学生会議がこのテーマを掲げる意味があるのではないかと、いまこそそれを証明するいい機会じゃないかと奮い立ちました。

特に、三重県には日本人の心のふるさとと言われる伊勢神宮があるので、そこをサイトの軸に据えようと考えていました。というのも、神道と聞くと、日本人は「国家神道」を思い浮かべ、軍国主義と結びつけて忌避する傾向があると思います。そこら中に神社があつて、自然と手を合わせる習慣がついているはずなのに、それと同じところであるはずの神道をた

だよく理解したいという気持ちから知ろうとすることがなぜ「右」と見られてしまうのか。そもそもなぜ、宗教を知ろうとすること自体、ある種危ないこととして捉えられているのだろうか。日本を理解する上では避けては通れないはずなのに、なぜかみんなそこを逆に忌避してしまう。学生だからこそ、そういう社会的な圧力を度外視にして、自分たちの心ゆくまで深掘りのできる絶好の機会だと思いました。

実際に三重での会議開催が決まってから、プログラムを作っていく上で協力をしていただけないか様々な方々とお会いしてサイトの理念を説明する中で、三重県の方々も似たような思いを持っていることを実感しました。いかに伝統的な海女文化の精神を残しつつ、それを世界に伝えていくか、あえて誤解を恐れずに言えば、神道的、日本的な考え方は現代においてどのような意味を持ちうるのか。ただ海外に出て行こうとしている人たちだけが目を世界に向けているわけではなく、そうしたことを常日頃から考えている方々がこんなにもたくさんいる、ということがとても心強く感じられました。

実際に慌ただしい本会議の4日間のみで自分たちの精神のルーツを探ったり、深く問いかけたりすることは難しかったと思います。しかし、参加者一人一人が、自分なりに新たな発見をして、それをなんとか思考の糸口にしようとしている場面に何度も遭遇しました。そうしたことの積み重ねによって、今回の三重県での滞在の経験が種となって、いつか世界中で大きな花が咲いていくことを願ってやみません。

また、三重サイトを作り上げていく中で、本当に多くの方にご協力いただきました。ご協力にとどまらず、その過程からも本当に多くのことを学ばせていただきました。全ての方々をここで書ききることはできませんが、特に日米学生会議につきっきりで担当してくれました、三重県庁国際戦略課の八太様、青木様、山根様、大平様、森田様に感謝申し上げます。皆様のご協力なしではこのプログラムは絶対にあり得ませんでした。心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

三重サイトコーディネーター
東京大学 工学部 システム創成学科 4年
新郷 雅大

— 4-5. 東京サイト —

8月22日 ~ 8月28日



世界最大のメガシティ首都東京。江戸開府から400有余年、東京は日本の政治経済の中核として、国会や行政官庁、国際機関、外国公館、企業の本社などが集中している。また、上野、浅草に見られる下町情緒あふれる街並みや古き良き日本のものづくり文化も継承させつつ、アニメなどのポップカルチャーや現代日本の最先端技術を世界に発信している。2017年夏は、新たな米国大統領の登場により、アジア太平洋地域における安全保障や経済連携の在り方について、重要な転換期となる可能性を秘めている。政治経済をはじめ、日本の各分野で時代の先端を行く東京で、第69回日米学生会議の活動を総括して、分科会の議論や成果を社会に発信する。

■サイトコーディネーター

中川 奈津子

吉川 久美

Ehenneden Idehen-Amadasun

Eric Mueller

■サイトスケジュール

8月22日(火)

- ・一中節

8月23日(水)

- ・分科会議論
- ・外務省レセプション
- ・第70回会議実行委員選挙 立候補開始

8月24日(木)

- ・ハピネスパネル
- ・ダイバーシティパネル
- ・VR体験

8月25日(金)

- ・フリータイム
- ・アメリカ大使館ワークショップ
- ・アメリカ大使館レセプション

8月26日(土)

- ・ファイナルフォーラム
- ・ファイナルレセプション



8月27日(日)

- ・第70回会議実行委員選挙
- ・フリータイム
- ・teamLab レクチャー
- ・teamLab Jungle 体験

8月28日(月)

- ・ファイナルリフレクション
- ・アメリカ側参加者とお別れ

■宿泊先

東京セントラルユースホテル

■各プログラムの詳細・感想

▼一中節（8月22日）

都一中様にご演奏と、ご講演をいただき、日米の学生も都一中様と一中節を唄いました。



参加者の声

講演者である12代目都一中氏は自らの神髄として萬歳一その場の誰をも一中節を通じて良い気持ちにする一ということをおっしゃられていました。実際の三味線演奏に至る前のお話やたまたまいから既にそれが体現されていて、言葉にせずともにじみ出る雰囲気というか伝わるものというものがあるのだなと改めて実感しました。言語や文化の壁を越え続けなければならないJASCの活動の一つの指針となりました。

また一中節という具体的に打ち込むことを通じて、日本文化の特徴や教養をもつことなど、広く文化という抽象にまで敷衍して深みのあるお話をされるお姿には感銘を受けました。講演中、日本文化の特徴を「水墨画における余白のように、鑑賞するものの想像力や感性を喚起させ取り入れる」と答えた日本側参加者がいましたが、都一中氏の講演自体も、参加者を個々にインスパ

イアし文化に関する日米双方向の意見を酌み交わさせた、という点で芸術そのものではなかったのではないかと思います。（古座匠）



▼外務省レセプション（8月23日）

ホテルルポール麹町にて、日米学生会議をご後援して下さっている外務省のご厚意により、レセプションを開催していただきました。学生たちは美味しい食事を囲みながら、国際的に活躍されている方々と歓談しました。



参加者の声①

将来、なんらかの形で日本の外交に携わりたいという思いがあったからこそ、僕はJASCに参加しました。そのため、このレセプションで、新進気鋭の若い方から往年の名外交官まで、様々な外交官の方々から知

見を教えていただけたのは、自分には勿体無いほど貴重な経験だったと思います。

外交に携わる人間の必須条件は、「ジェネラリストでありながらも、プロフェッショナルな得意分野を持つ人」、そして何より、「学びに貪欲である人」だとこれまで様々な方から教えていただきましたが、今回のレセプションで話して下さった皆様は、未熟者の僕が投げかけるどんなお話にも、持ちうる全ての知識と情熱をもって、答えてくださいました。日本の伝統文化から新幹線の機械構造まで、皆様の教養の引き出しの多さに僕は今回もやはり圧倒されましたが、それ以上に、僕という一人の人間と話して下さるその姿勢は、自信に満ち溢れているながらも驕らず、スマートでした。JASC 中も、そしてその後の人生も、こんな風に人と触れ合い、世界と関わって生きて行きたいと決意を新たにしました1日でした。(松村 謙太郎)

参加者の声②

It was memorable time talking to wonderful alumni. I am thankful to realize all the supports to allow us to gather at one place. With that in my mind, I would like to keep working hard for the rest of the conference as well. (Christina Zhou)

▼ハピネスパネル (8月24日)

ハフィントンポスト日本版編集長の竹下隆一郎様をお招きし、日米のメディアのあり方や、日本の過労死の問題など幅広い観

点からご講演いただきました。



参加者の声

8月24日に、HUFFINGTON POST 日本版編集長である竹下 隆一郎さんにご講演を頂きました。ここでの学びは大きく分けて二つありました。

第一に、長時間労働の是正が歌われて久しい今日でも、日本には様々な形で長時間労働がまかり通っている事や、転職が珍しいものではなくなってきたと言われる中でも大企業になるほど離職を困難にする雰囲気社内には流れているというお話を聞き、改めて日本の体質のようなものを感じられた事は大きな学びでした。

第二の大きな学びは、大手新聞社と比較して、HUFFINGTON POST はより主観的な意見も記事に盛り込むというお話を聞き、主観的で偏りのある意見を取り入れることの意義を考えさせられた事です。そこで私がたどり着いた答えは、より客観的な記事を通して事実関係を知る必要はあるが、それと同時に、そのトピックに対する考えをブラッシュアップする為には、より主観的な意見を HUFFINGTON POST のようなメディアから収集することも重要である、

というものでした。(岩井 凌太)

▼ダイバーシティパネル (8月24日)

「無国籍」の著書である陳 天璽様から多様性をテーマにご自身の経験と日本の現状についてご講演いただき、陳 天璽様、日米の学生パネリスト4名、学生モデレーター1名でパネルディスカッションをしました。



参加者の声①

「私の本名は朴ヨンギ、在日韓国人として日本に生まれ育った」、この簡単な自己紹介を躊躇っているのが22歳の私、新井英貴です。

幼い頃からの幾つかの差別経験、ヘイトスピーチ等により、私は自分自身の背景を隠し続けているのです。

このパネルへの参加は日本社会における少数派として生きる上で苦勞していること、自分が抱いてきた想い等を大多数に発信する初めての場となりました。少数派が声を上げてみることの重要性を頭では理解しているが、行動が伴わない私にとっては、非常に貴重な小さくて大きい一歩でした。

現在、世界中で社会的少数派への排他的な運動が行われています。対して人権を守るための運動も起きています。日本も同様

に多様化に向けての動きが高まっている現在の社会。これらの問題解決のための具体的な方法は提示出来なくとも、社会的少数派側の見解、現状を発信することにより、これらの問題を少しでも知る、興味、関心を抱く人が増えた場となったことを祈ります。(新井 英貴)

参加者の声②

Mr. Takeshita's presentation on the state of the modern Japanese workplace, parlayed into his own experiences working in the Japanese mass communication industry was an engaging look at topics of great importance in today's society, highlighting what he believes to be several cultural shifts between the older generations in Japan and people our own age. Of particular interest was his perspective on the importance of journalistic integrity in the age of the internet, especially given the national discussion following the most recent American presidential election. Following his lecture, the delegation had the privilege of attending the diversity panel, which seemed to offer several varied perspectives on the various qualities of the lives led by individuals from certain groups in both Japan and America. Hearing about the experiences of Mrs. Chin, as well as those of four of our fellow delegates was a unique opportunity for the delegation to access

insights to which we may not have otherwise been privy, and it certainly offered food for thought in the ensuing discussion period. (Nicolas Grigsby, Christopher Koontz)



▼VR体験 (8月24日)

第62回日米学生会議のアラムナイである米本 大河様にお越し頂き、VR体験をさせていただきました。参加者は最新のテクノロジーを心から満喫いたしました。

▼米国大使館ワークショップ (8月25日)

日米学生会議をご後援いただいている米国大使館のご協力のもと現役の外交官2名をお招きしてワークショップを行いました。

当日は、質疑応答のセッションの後「the U.S. Japan Security Partnership: Examining Changes in the Regional Security Environment」と「the U.S. Japan Security Partnership: Examining Changes in Japan's Defense Policy」の2つのトピックに分かれ、お二方を交えてインタラクティブにディスカッションを行いました。



参加者の声①

8月25日には米国大使館でワークショップが開かれ、二人の現役の外交官の方からのご公演と、その後円形に座った形で質疑応答が行われました。

個人的に印象に残ったのは、女性外交官のプライベートなお話です。将来海外で働いてみたいと漠然と思っていた自分にとって、色々な国に住むということ、家族を持つときには乗り越える必要のある課題など、普段聞くことのできないリアルなお話は大変貴重でした。

また、中国、日本、アメリカの外交問題についての質疑応答を聞いていて、日米の友好関係の長さとお重さを実感しました。それと同時に、これからアジアの国々との関係も築いていく必要があり、アメリカだけでなく、アジアの国々ともこんな風に国と国とが繋がってほしいと思いました。

ワークショップ全体を通して、米国大使館を代表して話しているという迫力があり、将来自分が働くときもご公演頂いた二人のように、しゃんと背を伸ばして自らの仕事に向き合っていきたいと思います。(吉村 彩)

参加者の声②

In a lecture by a diplomat, I talked about

the attitude of doing work for the nation and the people, not specific political parties and regimes. It was a very valuable experience to know how to face diplomats' occupation.

Also, by seeing the photographs and diagrams of the trends of US Consulates, Legislative Embassies, and Embassies since Harris on the corridors of the embassy, I realized again that the relationship between Japan and the US has a long history.

It was an important factor in thinking about Japan-US relations in the future.
(Paola Resendiz)



参加者の声③

Through our visit to the U.S. Embassy, I found myself questioning my assertions about certain security and domestic issues between the U.S. and Japan alliance. Due to the small group discussions, I was able to listen to various perspectives from both sides, American and Japanese delegates, that challenged my own way of thinking.

This discussion truly provided me with an insight that I will further like to

communicate to other people who have less knowledge about these perspectives on the U.S. and Japan alliance issues. (Andrew Fischer)

▼米国大使館レセプション (8月25日)

ワークショップの後、米国大使館のご厚意によりレセプションを開いていただきました。米国大使館 首席公使 Joseph M. Young 様 (右から2番目)、広報・文化交流担当公使 Margot Carrington 様 (最左)、米国先端政策研究所(CAP)の上席研究員グレン・S・フクシマ様 (中央左) からご挨拶をいただきました。



参加者の声①

大使館レセプションで一番印象に残っている出来事は、アメリカ人の方の外交官との会話です。その方は、他国との外交において、確かに相手国のことを知ることも重要なのだが、それに加えてアメリカ、すなわち自分の国のことを知ることの重要性が日々の実感としてあるとおっしゃっていました。

私はこの言葉を聞いた時、国という大きな単位だけではなく、人間と人間の身近な



関係のあり方にも共通する部分があると感じました。人間の体の構造というのは不思議なもので、リアルタイムで客観的に自分自身を、自分の目で観測することはできません。だからこそ、他者との関わりの中で、自分という人間が形成され、時には変容しながらも更新されて行くのだと思います。

人間と人間を繋ぐ道具として言葉がありますが、相手に自分自身を正しく伝えるためにはまず、自分の考えを自分が理解する必要があります。自分のなかで曖昧なものは、相手に理解されません。これは、国と国の関係にも当てはまると思います。そのことをよく表す言葉に、「日本の外に出て初めて、日本のよさがわかった。」があります。ある国の、一つのまとまりの中での暮らしでは気づかなかったことが、日本という枠を抜け出し、他国の人との関わりを通して初めて、自分の常識が世界の常識ではないことを知ります。

しかし、このことに気づくための前提として、日本のことについてまず自分が知っている必要があります。そのようにして、多様な価値観があるのだと知り、自分の価値観が必ずしもみんなの正しいとは限らな

いと気づく過程で、いろんな考え方を尊重する姿勢も自ずと身についていくのではないのでしょうか。

彼の言葉は、私にそんな考えを抱かせてくれました。(下吹越 愛莉)

▼ファイナルフォーラム (8月26日)

3週間の本会議期間にとどまらず、5月の春合宿以降議論を重ねてきた各分科会に加え、7月の自主研修以降沖縄、日本、アメリカの学生で議論を重ねてきた沖縄の問題について最終成果発表であるファイナルフォーラムを、青山学院大学青山キャンパス本多記念国際会議場にて行いました。

基調講演には、日米学生会議第22・23回参加者のグレン・S・フクシマ様にお越し頂きました。また、第54・55回参加者の乗竹亮治様をモデレーターに、第32・33回参加者の富川 秀二様をパネリストにお招きし、第69回参加者を交えてのパネルディスカッションも行われました。



分科会発表の様子

参加者の声①

第69回日米学生会議の締めとなるファイナルフォーラムは想像していたよりも早く、

また突然にやってきてしまいました。このまま集団での生活が果てしなく続いていきそうな気分さえもしていたにも関わらず、です。しかしこのファイナルフォーラムという存在が日米学生会議を2つの側面から、より意味のあるものとしてくれました。

私たちは3週間、1つのラウンドテーブルに所属し、仲間とそれぞれのトピックについて議論を重ねました。3週間という長い期間をかけて話し合うために常に建設的な議論が行えるわけではありません。相手の意見に違和感を覚え納得できないこともあれば自分の意見に対して厳しい指摘があることも経験します。確かに、その場で何を言われようと聞き流すこともできるかもしれませんが、ファイナルフォーラムでグループとして発表する以上、違う意見を全く無視することは不可能なのです。「相手の考えの理由は?」「その理由を得た経験何であるのか?」互いに歩み寄り己との相違点を見つけつつ理解しあっていく、そんな必要性を私たちに持たせてくれたのがファイナルフォーラムでした。



佐々木も登壇し、アラムナイと現役学生とでパネルディスカッションを行った

またさらに、ファイナルフォーラムは私たちが3週間の日米学生会議全体を振り返る機会でもありました。他のラウンドテーブルの話を聴きながら、議論の流れを回想したり、各サイトの思い出の写真を見ながら忙しい中で忘れかけていた記憶を蘇らせたり、ゆっくりとした時間の中で「自分にとっての日米学生会議」の意味を感じられました。急に隣に座っている友人との別れを実感し急に胸が締め付けられるような寂しさを覚えたのもこの時でした。

ファイナルフォーラムは私たち JASCer に日米学生会議の素敵な記憶をいつまでも留めておくための時間でした。(佐々木 彩乃)

参加者の声②

We had so much discussion time with our own roundtables, so being able to present and show the rest of the delegation everything we had worked on was really rewarding. On the flip side, we were able to see our friends present on their roundtable topics, which was not only enlightening but made me really proud of the delegation as a whole. The journey to final forum and final forum itself were two experiences that changed us as people. (Kitanna Hiromasa)

▼EC選挙 (8月27日)

第70回日米学生会議実行委員を各候補者のスピーチ後、選挙にて決定いたしました。

▼teamLab レクチャー (8月27日)

日米学生会議第64・65回参加者でいらっしゃる竹内 正人様をチームラボ株式会社様からお招きし、「デジタルアートの未来」をテーマにご講演いただきました。



▼teamLab Jungle (8月27日)

3週間を締めくくる最後の夜に、チームラボ株式会社様からご招待いただき、チームラボジャングルに参加させていただきました。

参加者の声

なんだっただらうあの空間と熱狂的な雰囲気は。チームラボ主催の体験型アートイベントは第69回日米学生会議の無事終了を、激アツな渋谷の夜と、わずかな違和感を添えて祝ってくれました。密室の空間の中に詰め込まれ、何が起こるのか全くわからない状況。そこでは、人間の発明した偉大な「予測」という機能が解体していました。すると突然、空間に光が走り出したのです。まさに、スターウォーズ的世界観に放り出されたかのように、思わず口から「May the force be with you.」という声が漏れていました。

そこからは、もう相手方の思うツボでした。バランスボールみたいなボールがたくさん投げ込まれたり、ちり紙の雪が降ってきたり、やりたい放題やってきました。「予測不可能性」と「操作不可能性」につけ込み、裏ルートで、こちらの感覚器官に直接訴えかけてきたのです。主体は完全に溶解、自由意志という言葉は空想的産物と化しました。私たちは、ただただ「踊り狂う何か」としてこの世界に存在していました。

一時間長の時間が矢のように過ぎ、私たちは現実へと戻され、主体性が回復を遂げました。終わった後すぐ、友達と感想を共有しあいましたが、ついさっきまでの感覚や状況がうまく説明できませんでした。「文脈のアート」から「感覚のアートへ」とかいういかにもなワーディングでこの体験を片付けたくありませんでした。ただ、このモヤモヤが最高に心地よかったです。おそらく、人間そのものに根ざした「何か」がそこにあるのでしょうか。その「何か」はこれから人生を進めていく中で自ずと明らかになってくるでしょうから、ここではまだ言語化しないでおこうと思います。(野間康平)



▼ファイナルリフレクション (8月28日)

参加者全員が輪になり、各々、三週間の会議を振り返りました。各々にとって、様々な苦難や喜び、思い出が詰まった三週間。参加者は思いを共有し、参加者全員が心を通じあわせました。途中ティッシュを配り合うなど、涙の音が途絶えることがない時間でした。

▼別れ

三週間の最後の時間でした。各参加者は抱きしめあい、別れを惜しまました。



参加者の声：東京サイト総合

世界有数のメガシティ、東京。徳川幕府の成立以来日本の政治経済の中心地であり続けたこの地で、69回目を迎えた日米学生会議は幕を下ろしました。

それまでに訪れた3都市とは打って変わって、東京では都会的である意味で人工的な生活様式や文化を感じる機会が多くありました。およそ6時間弱かけて三重から移動した私たちの目にまず飛び込んできたのが、都市特有の雑音と見る者を圧倒する威風堂々としたビル群です。無数のネオンライトで彩られた景色、機械仕掛けの正確さ

で運行する新幹線、その正確さに組み込まれるように先を急ぐ人々。それまでの2週間で歴史を振り返る機会が多くあり、悠久の時を想うマインドになっていた私たちは、21世紀の日本という時代を切り開く圧倒的なエネルギーにまるで飲み込まれそうになる感覚を味わいました。

東京サイトの特徴は、レセプションの数の多さです。外務省や米国大使館など多くの支援団体が関わっているということがそれらを通して分かったこと、またそこで出会う人との交流がとても刺激的で学びも多かったのが収穫でした。その他にも東京に集う人の多さと多様性をフルに活かしたパネルディスカッションやレクチャーが多く催されたことも大きな特徴です。例えばハフポスト日本版編集長の竹下隆一郎氏、日本において無国籍というアイデンティティを持ちその研究も行っている早稲田大学准教授の陳天璽氏、チームラボでアートディレクター（カタリスト）を務めている竹内正人氏など、それぞれの分野で時代の先端にいながら研究や報道など多様な活動を行っている人々と交流する機会に恵まれました。このような刺激とそこからつながる深い思考が、一人の参加者として感じた東京での経験をよく表していると思います。

個人的に、どうしても忘れることのできないセッションが一つあります。一中節と日本の伝統芸能の魅力をユーモアたっぷりに語ってくれた都一中さんのレクチャーです。時代の最先端を切り開く大都市東京で、

なぜ日本の伝統芸能？とレクチャー開始時にはかなり懐疑的な気持ちで臨みましたが、終わって振り返ってみるとあのセッションこそ東京で、時代の先端を圧倒的な速さで切り開くことを期待されている場所で行うべきものなのだとわかりました。学生との対話を中心に、終始幸せそうに日本の伝統文化について語る都一中さんが投げた問いに、このようなものがあります。「教養のある人とは、どんな人のことですか？」もちろん答えは一つではありません。私の解釈も一中さんの解釈とは異なっていました。しかし一中さんが「知らず知らずのうちに目の前の人のことを幸せにしてしまう人のことだ」と答えたとき、どんなに時代が変化しても変わらない人間の目指すべき本質がよく理解できたように思います。成長を追い求めるこの場所で忘れてはいけないものは何か。その問いに対する都一中さんの答えだったのではないのでしょうか。彼の言葉はこれからの時代を創ろうとする我々の心に深く響き、忘れることのできない時間になりました。

3週間にわたって開催された日米学生会議は、ここ東京で幕を閉じました。ファイナルリフレクションで思いのたけを語った学生は、終了後それぞれの道へ進みます。別れを惜しみつつ、いつの日か人生の道が互いに交わることを強く期待して、56人の学生会議参加者は次の目的地へと旅立って行きました。(大野 友)

米国大使館レセプションにて



悩みに悩んだ末、実行委員に立候補！



グレン・S・フクシマ氏と対話する参加者
@米国大使館レセプション



***** サイトコーディネーター後記 *****


参加者に何を見て、何を感じてほしいか、第69回のテーマを具現化できるのはどこか。この議論の末に決定される他サイトとは異なり、毎年開催される東京サイト担当としての最大の困難は「なんでもあり」であったことのように感じる。経済、教育、政治、文化、科学技術、ありとあらゆる側面で中核を担うこの都市で、与えられた期間は1週間。「参加者の知的好奇心と探究心を刺激し、議論の生まれるプログラムを作りたい。」外交、多様性、幸福、等をキーワードに据え、迷ったときはそこに立ち戻りながらこの雑多で可能性に満ちた当サイトの運営を行った。参加者にとってはファイナルフォーラムを目前に控え、体力的にも精神的にも常に圧迫された状態の中、日々新しいことに触れ続ける体験は相当に目まぐるしいものだったと想像するが、この夏を締めくくるにふさわしいサイトとなっていたことを願うばかりである。

このように我々学生のみでは成し得ないことを実現できたのは、ひとえに毎年多大なご支援をいただいている日米学生会議アラムナイの皆様を始めとした、外務省、米国大使館や多くの企業の皆様、快くご講演を引き受けてくださり、会場手配等に奔走して下さった各方面の皆様のお力添えのおかげです。心より御礼申し上げます。

東京サイトコーディネーター
慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 2年
中川 奈津子

東京サイトの企画運営にあたり、一番苦心したのはサイトのテーマ設定であろう。東京は、政治・経済の中心地として、メディアや現代文化の発信地として、また、企業や人が集中する中で多様性や生き方にどう向き合わなければいけない場所として、様々な特性を有している。そのどれもが重要であるため、どの側面を強調して日米の参加者に伝えたいか、コーディネーター同士で何度も議論を重ねた。結局、多岐にわたるトピックを東京では取り上げたが、多様性や生き方について着目したことは、価値観の共有をテーマにする第69回ならではのプログラムと言えるだろう。沢山苦労もあったが、東京サイトにて無事会議を終了することができたこと、末筆ながら関係者の皆様に深くお礼を申し上げたい。

東京サイトコーディネーター
慶應義塾大学 法学部 法律学科 3年
吉川 久美



■□第 5 章
分科会の活動報告

第5章 分科会の活動報告

“Approaching the City from a Multidimensional Perspective” Roundtable

「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」分科会



コーディネーター
齊藤 和平



コーディネーター
Danyi Zeng



伊藤 江理華



金澤 つき美



CeCe Johnson



Christopher Koontz



阪上 結紀



戸嶋 寛太



Kitanna Hiromasa



Ngan Vo

ヒト・モノ・カネ・情報が集中する都市は、社会の動きがダイナミックに見られる空間であると言える。日米両国の都市を俯瞰すると、日本は人口が東京に一極集中し、地方との格差が拡大する一方、連邦国家として成立したアメリカは、各州が独自に地方分権を推進し、全国的に主要都市が散在している。日本の最大都市東京は、都市圏として3,500万人を超える世界一の人口を擁しており、育児・介護問題が深刻化している現状に鑑みても、住みやすい地域とは言い難い。

本分科会では都市について、都市工学や都市行政などの理論面に加え、地域のソフトパワーによる課題解決なども含め実践面からも捉え直す。また日本の国全体としてマクロな視点から、いかに東京と他の都市が連携しながら共存共栄するのか、一方ミクロな視点にまで掘り下げ、人間はどこにどのように住み、働き、生きていくのかを考え、より良い都市の在り方とより良い個人の生き方を調和できるような都市づくりができるのか、その可能性を考察する。

■はじめに

「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」という抽象的で漠然とするテーマにどう切り込んでいくか。都市は世の多くのことに関連があり、次々と興味深い問いが生まれてくる。かきよせてもかきよせても広がっていかうとする議論をどうにか皆でまとめ、前に進んでいくこととなった。平坦な道であったとは言えない。議論し、喧嘩して離散し、相談し、疲れ果ててまた戻ってくる。その繰り返し。まさに波乱万丈。それでもどうにか這いつくばってFinal Forum までたどり着いた。そんな都市分科会の軌跡、是非読んでいただきたい。

■事前準備期間

▼参加者が定めた分科会の目標・方向

数回の議論をへて、「より良い都市とは何か」を根幹として進めていくこととなった。より下の階層へ各自興味のあるトピックを選び、学びを共有した上で議論する形を取った。日米がともに意見を出せること、事例を出し合えるトピックかどうかを重視し、優先順位をつけて行った。また、多角的に問題を捉えるを目指し、最終的に出た結論を文章の形にして残し、広く社会に発信したいと考えた。最終的に、日米の学生が考える「より良い都市」とそれを実現する具体的な「アクションプラン」を作り、提言することを目標とした。

春合宿にて



▼議論をどのように進めたか

話したい議題が多かったので、それに優先順位をどうつけるか議論した。その方法として、5点満点で、いくつか項目（後述）を作り上げ、デリがそれぞれ投票していくスタイルを取り「評価シート」を作った。

項目は、①価値観を共有できるか、②より良い都市とは？を考えられるか、③皆が話しやすいか（専門知識を必要とし過ぎないか、等を話しやすいかの基準とした）、④社会へと還元できるか、である。その後、それぞれのトピックの関連性をマインドマップにし、一目瞭然で関わりがわかるようにした。なお、マインドマップを使う方法は、本会議でも採用された。

RT Paper についてもアドバイスをしあい、準備を重ねた。その議論はまず、書き手からの内容共有があり、他メンバーがGoogleドキュメントにコメントをしていく。書き手がコメントに返信し、それを各ミーティングまでの課題とした。オンラインミーティングでは、

第1回オンラインミーティング



こうしたコメントを元に、より深い議論を進めていった。その他、朝の登校前の定例ミーティングに加えて、お互いをよく知ろうと、何度か長時間ミーティングを試みた。効率性は考慮せず、時間に縛られることなく自由に議論ができた。また、それぞれの内面、人柄を知る良い機会でもあった。米国側とのジョイントでは、各自 RT Paper の内容を共有して、どうすべきかを議論した。時々、練習のために日本側だけで英語でミーティングをしたが、どうしても母国語に頼ってしまう部分があったことは反省点である。

こうしたコメントを元に、より深い議論を進めていった。その他、朝の登校前の定例ミーティングに加えて、お互いをよく知ろうと、何度か長時間ミーティングを試みた。効率性は考慮せず、時間に縛られることなく自由に議論ができた。また、それぞれの内面、人柄を知る良い機会でもあった。米国側とのジョイントでは、各自 RT Paper の内容を共有

▼Discussion Topics (例)

1. 少子高齢化→「官と民はどのように連携すべきか」など
2. 都市の定義→「皆が考える都市とは何か」など
3. 防災・スマートシティ→「どのようなスマートシティが理想か」など
4. 都市の景観→「官民連携の障壁になることは何か」など
5. 個人の生き方→「将来何がしたいか、何のために生きるのか」など

▼議論の内容例

都市の定義に関する議論では、「都市とは何か」について長い間皆で検討した。都市の定義は非常に難しいが、人口構成などの学術的アプローチを RT Paper に書いたメンバーがいたため、この議題を採用した。だが最後まで定義を求めて迷走していたのもまた事実である。

議論がうまくいかなかった例としては、「都市の交通」についてがある。内容としては、都市の交通について、どんなものがあるのかの具体例をあげる。そして、それらが何を目的にしているのか、どういう問題があるのかをミーティングの前にあらかじめ列挙しておく。より良い「交通」とは何か、そうするためにはどうしたら良いのかを考えた。事例としては、交通とITとの関わり方、次世代の交通の役割と人々の意識、など。

問題点は、議論はしやすいテーマであるものの、各自が経験していることがバラバラすぎて、暗礁に乗り上げてしまったことだ。結論は求めてはいなかったが軸がなく、交通のどの部分に焦点を当てたいのか、わからずじまいであった。沢山発散した議論であったという点ではよかったのかもしれない。これを機に、「価値観系」の議論、すなわち個々人の異なる価値観を共有できる議論、個人によって「どうあるべきか」が変わりうる議論、と「アイデ

ア系」の議論、すなわち解決すべきことが明らかな問いに対し、具体的な解決方法を考え出す議論のふた通りがあることを認識した。これはその後も議題によって進め方を検討するきっかけにもなった。本会議において、この反省は生かされたと思う。

・RTにおける課題解決

沖縄自主研修時に行ったRTリフレクションで、みなが壁にぶつかっているということが発覚した。具体的には、タスクをこなす方だけに皆の意識が向き過ぎていたのではないか、肝心の議論が薄っぺらくなっていないか、ということに正面から向き合うこととなった。こなししている、ちゃんとやっているという自負が強く、停滞期だったのではないか、というそれぞれの思いが明らかになり、メンバーみんなでどうしたいかを考えるべきという結論に至った。それぞれが課題に思っていることを書き出し、解決方法としてコーディネーター抜きで「デリだけミーティング」を開き、問題などを議論した。JASCという「良いもの」が決まっていない世界でどうこれから進んでいくのか、とことん話し合いをした。

■FTについて

▼三重県庁 訪問

【日時】6月2日（金）

【場所】三重県庁 県土整備部 都市政策課 都市計画班 松本 一彦様

【何を聞いたか・何をしたか】

1. 三重県が目指すより良い都市とはどんな都市か？
2. 大都市・名古屋と地方都市・三重の違いはどんなものがあるか？
3. 今、三重県はどんな問題を抱えているか？

という質問を中心に三重県という都市の在り方についてお話していただいた。

【FT後の議論・考察】

都市について考えていると、どうしても便利で豊かであること、発展しているかどうかを重要視しがちである。しかし、必ずしもすべての都市が発展する必要はないということ。三重県が目指しているのは、そこで暮らす住民にとって必要なものを過不足なく提供し、豊富な自然環境の中でのびのびと暮らしてもらうことだった。三重県庁の方々、本当に



三重県民に寄り添うことをめざし、多くの政策を行っている。県庁の方が仰っていた「身の丈に合う発展」ということも大変印象に残った。机上でどれだけ都市をよくするか考えるだけではなく、住民の声に耳を傾けながら、共に問題解決をしていく地方の姿勢に感銘を受けた。（金澤 つき美）

▼伊勢神宮 外宮参道発展会 山本 武士様 訪問

【日時】8月2日（水）

【場所】伊勢市

【何を聞いたか・何をしたか】

山本 武士さんに伊勢神宮の外宮前の景観整備について伺った。まずは、そもそもの伊勢市の歴史を具体的に教えていただいた。古くから「お伊勢参り」という 信仰の場としての都市形成が進んでいた場所であることを学んだ。景観とは＝表現すること、その場所の精神、生活が滲み出るもの。という考え方をなさっていることを知り、景観整備のステップを伺えた。知る→共有する→表現する、というステップだそうだ。「何がこの町の宝なのか」「この町に暮らせる幸福、誇りとは何か」をまずは「知る」ことから始まる。次に「外宮さんのこと講演会」「外宮さんちびっこ博士グランプリ」「ワークショップ」などのイベントを通し、人々と「共有する」というステップ。さらに「和紙行灯」、「浴衣で千人お参り献灯」などの形で表現することに重きを置いたことを学んだ。だが、特に重点をおいた部分は、観光客でもなく、住民でもなく、豊受大神に焦点を当てました。CS (Custmor Service) ではなく、KS (神様満足度)、という話は非常にユニークで、伊勢ならではの特徴と言えるであろう。



【FT 後の議論・考察】

信仰、歴史、文化、いろいろな要素が詰まった伊勢市は今や全世界から人が集まる場所となった。その中で伊勢市の人々は住まいとしての伊勢、伊勢神宮のある場としての街をどのように捉え、景観へと反映しているのかを知ろうと、足を伸ばした。特に式年遷宮から数年がたち、「おかげ横丁」などの観光名所のない外宮への参拝客数が減少していることが課題となっていた。そのなかで、地元の商工会議所などが中心となって新たな方法を考えて実践していることを知った。顧客満足度ではなく、神様満足度という考え方は想像もつかなかったもので、非常に興味深く、また伊勢ならではの精神ではないかと思う。（伊藤 江理華）

▼小布施 訪問

【日時】7月31日（月）～8月1日（火）

【場所】長野県小布施町



【何をしたか】

1. 小布施町の視察
2. 日米学生会議OBであり小布施町特別職主任研究員である大宮透さんへのインタビュー

【何を聞いたか】

1. 小布施町ののまちづくりの歴史
都会的田舎としての小布施の発展と危機感や、混在性をテーマにしたまちづくりの取り組みなど。

2. 大宮さんのパーソナルヒストリーと現在のライフスタイル

JASCでの、アメリカのNPOの強さに対する衝撃経験や、東京と小布施の二居住生活について伺った。また、なぜ「小布施の」「まちづくり」に関わるのかについては「感謝の連鎖」であると仰っていた。

【FT後の議論・考察】

得てしてマクロな議論になりがちな都市分科会の議論において、小布施に行ってまちづくりの一事例を見て、感じ、考えたことは、以降の議論において軸足を定める上で大変有用だった。個人的には、上の世代に「まち」というつながりを通して良くされた想いが「感謝の連鎖」という形で次世代のためのまちづくりを行うモチベーションになっているという話が強く印象に残った。これは当たり前のロジックではあるが、頭では理解していても心では分かっていなかった。また、大宮さんの都市と地方を行き来する生き方自体にも、故郷を持たず地方に憧れる反面、日常を東京の喧騒と鮮麗の中で過ごす自分にとっては深く反響する部分があった。（戸嶋 寛太）

■本会議

▼参加者が定めた分科会の目標・方向性

日本側参加者はそれまで、「What is a good city? (より良い都市とは何か?)」という疑問に答えることを主軸に、事前準備を進めていた。それを元に、アメリカ側と価値観の共有をし、相互理解を深め、都市に対する新たな視点を構築することを目標とした。その際には

社会提言をしたいという最終的目標もあった。アメリカ側と合流してからも、同様に異なる価値観の共有を目標としたが、限られた時間の中で、議論だけでなく社会提言を行うことは困難であると考え、相互理解を促すような議論をすることが分科会の最終目標となった。

▼議論をどのように進めたか

第1サイト・京都にて、どのように議論を進めていくのか話し合った。都市という広いテーマを扱うに当たり、それぞれの興味分野が大きく異なっていたので、まずデリ1人ずつが1つのトピックを提示し、その回でファシリテーターを務め、議論を行っていった。

第2サイト・愛媛の終盤からは、再度それぞれの興味分野・トピックをグルーピングし、それをもとにデリでペアを作った。そのペアごとに各回の議論におけるクエスチョンを事前に作成し、議論はそのクエスチョンにそれぞれが回答することを中心に進めていった。

第1サイト：京都 下鴨神社にて



▼議題

1. 軍基地を作ることにより、都市の景観や交通には影響があるか？
2. 都市をイノベティブにするには？
3. テクノロジーは都市での働き方にどんな影響を与えるか？
4. どのような公共政策があれば、より効率的に事業を行うことができるか？
5. 地方創生に対するアメリカと日本の価値観の違いは？
6. 地方創生はどのように行われるべきか？
7. なぜホームレス問題の解決は都市再生に不可欠なのか？
8. ホームレス問題における、日本とアメリカの状況の違いとは何か？

▼議論の内容例

議論を開始当初はより良い都市とは何か？についてただお互いのアイデアを共有するだけになりがちで、「議論」ということをしていなかった。その問題に気が付くきっかけとなったのが、愛媛サイトで、卯之町を訪れ、地方創生の問題に触れたことである。その時の議論では、実際に地方創生の何が問題なのか？を主軸に、テクノロジーをどの程度地方に導入

すべきか、や、地方は都市化を進めていくべきなのか？という点について白熱した。特に、田舎ののんびりとした生活が良いと考える参加者もあり、意見の分かれる議論となった。

特にアメリカ側は地方創生をプラクティカルな文脈で捉え、古びた家や景観の Revitalization に焦点を当てているのに対し、日本はもっと目に見えない部分での人口や文化の保護に焦点をあてて revitalization を論じているのが興味深い分かれ目でもあった。その中でも一致したのは、アメリカでも日本と同様に地方の過疎化が進んでおり、政府や地方自治体が官民連携により住民の意見を吸い上げた対策をとっていかなくてはならないということである。

また、日本側参加者は事前準備期間に沖縄米軍基地を訪問しており、軍と都市の関係性についても活発な議論を行った。軍になじみのない日本側参加者からは、軍の悪い面だけが見えがちだが、アメリカでは軍があることによって都市交通が発展するといったメリットも十分にあること等を共有し、アメリカにはない自衛隊の都市における在り方についても、アメリカ側参加者の考えを聞くことができた。

▼コーディネーターに対しどう感じたか？

日本側、アメリカ側のタイプの違う2人がいたことで、その時々に必要なサポートを受けることができた。

日本側コーディネーターは準備期間から積極的に分科会のコーディネートを行っており、分科会としての団結力がどこよりもあったのはそのおかげだと思う。参加者か、ECかということに関係なく、お互いがそれぞれのやりたいことを分科会で行うことができ、とてもよい雰囲気だった。

▼議論の過程

京都：議論の進め方を話した後、各自の興味を持つ分野について議論した。

愛媛：議論よりは、アイデアの共有をするだけの時間が長くなってしまい、うまくいかなかった。議論とは何かを再度見直す。そこで、「議論の余地のある、意見の分かれる」質問を毎回作ることで、お互いの考え方を聞きあい、分科会として1つの答えを出そうという新たな指針を作成した。

三重：指針にそって議論を進める。三重サイトはあまり時間がなかったので、早急に Final Forum でのプレゼンテーションを意識して議論を進めた。

東京：Final Forum の限られた時間の中で、どのように自分たちの考えを伝えるか、活発に意見を交換することができた。分科会として、よい Final Forum を迎えることができた。

■分科会としての結論

都市 RT では、都市のハード面とソフト面の両方に焦点を当て、様々なトピックについて話し合ってきた。その中でも特に議論が深まった以下の3つについて結論を提示する。



A: Zoning

【議題】「交通機関が乏しい地域に軍の基地を建設すれば、その都市を活性化することができるか、懸念すべき点はあるか」

【結論】

- ① 軍の基地は周辺住民にストレスを与えうる
- ② 景観・交通・ガバナンスなどの観点においてメリットよりもデメリットが上回る

B: Business

【議題】「都市をイノベティブシティにするために何ができるか」

【結論】

- ① (ソフト面) 信頼をもとに、企業や人が安心して最新の技術やアイデアをシェアできるような雰囲気を作る
- ② (ハード面) 創造性を発揮できるようなオフィス空間を構築する

【議題】「政府はビジネスにどの程度関わるべきか」

【結論】

- ① 規制はイノベーションや生産性を阻害しうる
- ② 企業はそれ自身の決断によって経営を行い、その成否は市場によって決められるべきである

C: Regional Revitalization - 日本とアメリカの違い

- ① 文化：長い歴史を持つ日本が文化に対して保守的である一方、アメリカは比較的寛容である
- ② 自然：自然に対する尊敬の念も畏怖もある日本は自然と共生しようとしている。アメリカは自然より開発を重視する部分がある一方、より多くの緑を求める



③ ビジネスチャンス：日本は東京にばかり集中。アメリカは日本より分散している。

【議題】「どのようにして Revitalization が達成されるか」

【結論】

- ① 官民連携が必要である
- ② 世代、地域を超えた連携が必要である
- ③ JASC のように、1つのテーマに関して意見を交換することも有効である
- ④ 観光業と Revitalization について
 - (ア) 観光客よりも住民を優先すべきである
 - (イ) 歴史・環境・コミュニティをベースにして観光業を行うべきである
 - (ウ) 世界に向けて情報発信すべきである

■分科会メンバーの声

▼伊藤 江理華

分科会を選ぶ際、どの分野も、語れるほど知識がなく、決めかねていた。結果、自作のあみだくじを作り、選んだのが「都市」分科会であった。当時のノートを見返すと、今でもページ全体に手書きのクジが残っている。選んだが最後、全力で取り組もう。そう思ったが、議論を積み重ね、最終的にファイナルフォーラムへ「発表」という形でたどり着く道のは、想像以上に厳しかった。

“City”という広すぎるテーマにどう方向性をつけ、どう進んでいくか。そもそも「都市」とは何なのか。明確な定義づけの難しさと、切り口があまりにも多いことが、分科会のテーマを混沌とさせ、何度も暗礁に乗り上げることとなった。もともと大の苦手だったディスカッション、そして、常にゼロか満点か、だけの思考回路だった私にとって、この答えのない議論がいかに大変だったかは筆舌に尽くしがたい。

分科会内で、問題はたくさんあった。人間関係、時間の使い方、議題、方向性、浮かび上がった課題など枚挙に暇がない。だが今、こうして思い返して考えると、避けては通れなかった。というより、避けずに、議論をぶつけ、苦悩する時間があってよかった、と思う。当時の私にこんなことを言ったら追い返されそうだが。

苦しい時間を過ごした時、もっと事前準備をしておけば結果は変わったのだろうか、何をしていたらもっと貢献できたのだろうか、と何度も「自主リフレクション」をすることとな



った。辛さのあまり、他の分科会メンバーに泣きつき、なりふり構わず助けを求めた。定義すら定まっておらず、答えのない議題を考え続けること。それは私にとって極めて大きな挑戦であり、いやでもこれまでの everything or nothing の考え方、常に何かしらの答えを求める考え方、を変えさせるものとなった。完璧であったとは言えない分科会の時間だが、メンバーと一緒に過ごした時間を通し、私はこれまでの自分と比較して随分と人間臭くなったと思う。時間が経つにつれ、どんどん外側の「タイトル」が剥がれ落ち、ただヒトとしての「私」となっていく変化が新鮮であり、一方で、自分をこれまで何重にも守っていたそれらがなくなっていくことが怖くもあった。これが、JASCを通して、素の自分を見つけよう、飾らず、守らず、そのままの自分を探そう、と欲していたことへの答えなのかもしれない。

メンバーは大変仲が良く、いつでもホッとできる仲間だった。最後の最後でみせた団結力は忘れられない。ズカズカと他人の領域まで入り込む私を寛大に受け入れてくれたこと、無茶な振る舞いの数々を爆笑と共に許してくれたこと、何より、お互いに目を背けず、向き合いきれたことに、心から感謝したい。

▼金澤 つき美

21世紀の都市の在り方と個人の生き方分科会。当初、この分科会を希望していたのは、大学での専攻である行政が都市とは切っても切り離せないものと考えていたからだった。しかし、議論が始まってみると、容易には理解できない複雑な構造、数多の要素が絡み合ってきた、非常に大きな「都市」というものに、違った形でア



プローチする必要性を感じた。最も大きな迷いが生じたのは、そもそも都市とは一体何なのか？という疑問の答えが見つからなかったことである。社会学や経済学、都市計画に関する文献を読み、自分なりに消化できるまでかなりの時間を有したが、新しい学びに関するアプローチはどのようなものかを考えることができた。

議論においては、分科会メンバーそれぞれが都市の様々な部分に興味を持っており、新鮮さを感じた。そこで、私の視点は行政からの見方をしていることが多いことなど、普段ない気付きを得ることができた。一方で、ほとんど毎週議論をしていくうちに、議論というよりは意見の共有になってしまうことや、ゴールの見えない議論を続けてしまうということが出てきた。アメリカ側と合流して議論をするようになって、そのようなことは度々起こり、8人で議論をすることの難しさを痛感した。それは未だ今後への課題として残っている。

本会議中、日本側のみ日本語の議論から分科会全員での英語の議論になることで、英語が最も大きな障壁になると想定していたが、それは違っていった。私の拙い英語に対するもどかしさは何度も何度も感じたが、日本側参加者の助けを借りることや、理解しようとしてくれるアメリカ側参加者のおかげで、乗り越えることができた。それ以上に、相手が違う国で、全くと言っていいほど違う環境で育ち、そもそも前提に考えていることが異なることが多く、一つの言葉でも、そこから考えるものが全く違っていることで齟齬が生じたり誤解を招いたりすることに、相手の考えがどのように生まれているのかを考えることの困難さを知った。

JASCのメンバーから、本会議から学んだことももちろん沢山あったが、RTという少人数で信頼しあえる仲間と真剣に議論しあい感じたことや考えたことが非常に多かった。環境もバックグラウンドも違うJASCにおいて、こんなにも素敵な仲間巡り合えりとは予期していなかったことだった。City RTの皆に大変感謝している。

▼阪上 結紀

「びーすちるどれん」はすっかり私たちのアイデンティティに染み付いている。良いときもそうでないときも、約半年間共に歩み、居場所であり続けてくれた分科会。変で、真面目で、あったかくて、時々素直になれなくて、でも最後には本音を打ち明けることができ、また一緒に走り出せる分科会。JASC69は終わってしまったけれど、長い人生の中で、私たちのつながりはまだはじまったばかりであると信じたいし、そうなるようにしていきたい。

議論のみならず人間関係なども含めた上で、10人もメンバーがいる分科会として、もっと言えば学生会義の分科会として、何がベストなのかどうかは今もわからないし、わかったところで簡単にはそれを実現できないとも思う。それでも、1つ明確に定まった目標や目的があつて無いような中で試行錯誤しながら日々「better」を追い求めて挑戦し続けてこられたのは、このメンバーだったからだと思う。

「都市」というトピックについて、個人の生き方まで含めてあらゆる面から考えられたのは非常に刺激的であった。冬の論文の授業では都市がテーマであるし、日々自分が東京で暮らすなかで、都市について考える機会はまだまだたくさんある。

個人としては、メンバーのひとりとして自分を顧みた時に、「あのときの判断・行動が正しかったのか」と思い当たることがある。皆のおかげで深刻な結果にはならずすんだが、メンバー全員のことを考えることができなかった。自分の考えをはっきり言わずに、自然な流れで自分が理想とする方向に持っていこうとした結果、意図をうまく伝えることができず、



余計な混乱を招いてしまった。私が気づけなかったところに気づき、後からケアをしてくれた他のメンバーには本当に感謝している。

JASCという特殊でハードな環境の中で、身体も精神も複雑に、刻一刻と変化する。急に変化したり、なかなか復活できなかつたり、隠していたのが一気に表れたり、人のことまで考えられなくなつたりする。そんな中で、分科会として過ごせた時間は思っていたよりずっとずっと短く、儚くもあった。だが、その中で得たものは、皆の人生に影響を及ぼさないことがあり得ないくらいに、大きかった。

最後に、自分が信じる道を突き進もうとする私を受け入れ、一緒にここまで来てくれたみんなと、本当はもっとずっと一緒にいたいし、何かをやっていたい。それくらい、大好きだから、これからもよろしくお願いします。

▼戸嶋 寛太

「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」。やたら名前の長いこの分科会は、正直第一志望ではなかった。それでもこの分科会になったのは今振り返ると、何かの引き合わせとしか思えない。

もともとヒッチハイクや旅行が好きで、日本の地方と呼ばれるところに行ってその土地の人に触れ合った時の「あたたかさ」に強い関心を持っていた。地方創生と都市化の文脈において、地方においても都市においてもその「あたたかさ」を持続・発展していく術を漠然と考えたかった。

正直、この問いに答えは出なかった。それでも、自分が行政などの制度面でのアプローチよりも、もっとミクロなコミュニティデザインという方法に興味があること、街にいる人ひとりひとりが主体的にまちづくりに関わるにはどうすればいいのか、まちに対して疎外感を感じている人がどのように参加感覚を持てばいいのかという問題に取り組んでいきたいことが分かった。また、議論をする中でそもそも上記のような問題意識を持つに至ったのは自分が転勤族であり、故郷を持たないことによるまちからの疎外感や恒常的な寂しさを感じていることが原因なのだとすることに気付かされた。自分の興味関心や問題意識の根底を知ることにより、今後の学びへの大きなモチベーションとなったことは一つの大きな収穫であるし、もともと外交官になりたかったという夢が大きく揺らいで変わろうとしているのには



Life-changing Experience としての JASC の凄みを感じるばかりだ。

一方で、議論についてはただただ「都市」というテーマの広さに驚愕した。環境問題や景観、イノベーションシティ、都市の定義、など自分の想像と知識を超える議論に対し、徒手空拳で立ち向かうのには疲れる部分が多々あった。それはみんなにしても同じで、都市という幅広いジャンルに対して何を議論していくべきなのか、というのには最後まで苦労した。その中でも右に左に揺れては互いにぶつかりながら、「より良い都市とは何か」という軸をもとに、なんとかファイナルフォーラムにまで持って行った City RT のメンバー全員を本当に誇りに思う。最初から最後まで何もかもがうまく行ったとは思わない。最短経路で進んでは来なかった。それでも、この経験を 10 年後 20 年後懐かしみながら一緒に振り返ることができる家族のような存在ができたことが一番の収穫ではないだろうか。凡庸なまとめではあるが、心からそう思う。

■分科会コーディネーターによる総括

▼齊藤 和平

技術の発達によって 20 年前とは通信・移動手段が大きく変わった現代、地域共同体の持つ意義は急速に減退した。特に都市のような地縁の少ない場所において、他者とのつながりに渴望した人々は、昔ながらの地縁に基づいた地域的なつながりではなく（彼らはその都市においてはそもそも昔ながらの地縁をもっていない）、同じ組織に所属してできるつながりや、SNS やイベントを通して似たような興味・関心・価値観を持った人と交流し、つながりを深める、というような過程を経て、共同体の形成を試みる。そうした背景の中から、私の中に生まれてきた問いは、「現代における新たな共同体はどのように形成されていくのか」というようなものであった。昨年 9 月に分科会を決めた時にはぼんやりとしていた考えであったが、本会議が終わった今、都市分科会に対する私の興味を集約すると、この表現が適切であるように思える。

しかし、分科会の議題は 1 人の構成員の疑問だけで決まるのではない。9 月から一緒に分科会準備を進めてきたアメリカ側コーディネーターの Danyi の意向は、多様な参加者の背を取り込むことができ、いろいろな社会現象が起こる場として「都市」を議題として扱いたい、というものであった。参加者それぞれが興味を持って発言でき、かつ新たな視点を持つことができる議論が期待できるのでは、という論理に同意し、また、共同体についても、より大きな単位である「都市」のマクロな観点がまた異なった視点をもたらすのでは、と、未知のものに対するワクワク感に期待を膨らませ、「都市分科会」が誕生した。

元来好奇心旺盛で、新しいことにも全力で挑戦するのが好きな自分の特性を活かして、本や記事を読みながら、分科会説明文を完成させていったのが10月から11月。2月から3月の選考においては、選考書類で私の分科会を志望してくれる学生がいると素直に嬉しく思い、また、選考しながら「入ってくれる4人と一緒に、楽しく有意義な経験と場、そして一生ものの人のつながりを作っていきたい」という想いも芽生えていった。



余談ながら、そうした想いが芽生えた背景には、第68回会議における苦い経験があった。「自分の全力を尽くしてアメリカ人と英語で議論できるか試したい」という想いが強かった第68回会議参加者の時代、私は分科会議論の方向性がまとまっていかに苛立ちを覚えて、ある分科会メンバーに心ないことを言ってしまった。「他の人の意見を聞いて、みんなで納得しながら前に進んで行く」ことが、すべての分科会メンバーにとって居心地の良い場を作る上で必要条件であることくらい、メンバーの心情を考えればすぐにわかるはずなのに、「正しいことをしっかりと主張することでこそ、相手も納得してくれる」と、無意識のうちにそう信じてしまった自分は、そのメンバーの意見だけならまだしも背景も含めて否定してしまった。

その後も分科会それ自体は難しかったものの、アメリカ人の議論をまとめる能力の高さや論理構成力などに感銘を受けながらそれなりに進んでいった。多くのことに気づかせてくれた第68回会議は非常に貴重な場であったことは間違いない。けれども、元来寂しがり屋で人とのつながりを何よりも重視する自分にとって（これに気付いたのもこの件であったのは皮肉である）、その人を傷つけてしまったという感覚は、第68回会議の思い出全体をうす暗く覆い尽くすくらいには、重くのしかかっていた。

であったからこそ、第69回会議の私の分科会のメンバーには、一生もののつながりができる第69回会議の、その大きな部分を占める分科会で、人間関係を壊してほしくなかった。自分の苦い経験を踏まえ、どんな意見であれ、「相手の気持ちを思いやる」ことが、あたたかい家庭のような、一生つながっていたいと思えるような場を作るのに必要なことであると信じて、分科会メンバーにも4月の第1回ミーティングからそれを伝えていった。

結果として、春合宿からメンバーがリフレクション中に「City RTはいつも安心して帰ってこられるあたたかい場」って言うてくれて、私にとってはそれが本当に嬉しくてぼろぼろ

泣いていたし、本会議が終わった今も分科会メンバー同士で仲良くチャットをしたりしていて、そういう些細な瞬間に City RT をやってよかったなあとしみじみ感じるのである。もちろん、メンバー間でお互いに理解できないことがあったり、ネガティブな感情になったりしたことも色々聞いていた。しかし、お互いを思いやることを忘れず、いいつながりを作り続けてくれた分科会メンバーには、心から感謝している。それぞれなりに頑張って City RT を素敵な場にしてくれて、本当にありがとう。

さて、分科会の議論内容それ自体については、それぞれかなり異なった興味・関心をどのように満たし続けるのか、分科会全員で模索していった。それぞれが生まれ育った町における経験を共有・比較しながら、都市における公共施設の理想の在り方を考えていたり、地方や「地方創生」という言葉に対するイメージや解決されるべき課題、およびその解決方法を共有・議論したり、と、議論内容は多岐にわたった。それがゆえに、分科会メンバーはそれぞれ専門外の議題にも食らいついて、興味を持って真剣に楽しく議論していた。春合宿の時のまだ様子がわからず受け身だった状態から、自分たちで考えながら場を作っていこうとする真摯な姿に変わっていったことは、自分で分科会を運営しながらも心動かされるものがあった。



分科会メンバーそれぞれが得たものは、それぞれの感想文に委ねるとして（得てして報告書には多かれ少なかれ綺麗事が並んでしまいがちであり、本当の想いはそれぞれと呑み交わしながら聞きたいものである）、「現代における新たな共同体はどのように形成されていくのか」という私の疑問に対しては、仮説の通り興味・関心・価値観でつながっていく事例として、チームラボの展示・坂の上の雲ミュージアムから始まるまちづくりなどを見学するなどして、実践の場を見ることができたことで新たな気づきが生まれた。対外的にはうまくいっているようにアピールしていても、実際にはそこまでの効果が感じられないことも多いであろうことは、仮説としては予想できたが、実際に経験することで、チームラボの展示は予想以上の盛り上がりを見せる一方で、坂の上の雲ミュージアムのまちづくりについては、本当にまちづくりにつながっているのか疑問に感じた部分もあった。

また、本会議で訪問した西予市では、昔ながらの町並み（宇和米博物館を中心に）を活かして、その中で地域住民とよそ者がつながりを作ろうとしていた。これまでしてきた昔ながらの町並みを打ち出すだけでなく、「麦博米博」と称してビールのイベントを開催したり、「爆笑ビジネス漫談」と称して、コミュニティビジネスの勉強会を開催したりと、「面白い！」

と思う興味・関心の心をもとに、地方自治体と民間団体が力を合わせて草の根で人のつながりを作っていこうとしている事例を実際に見ることができて、その必死さと熱意、根気よく続けていく姿勢に感銘を受けたとともに、「本当に人口減少を食い止める」という目標を達成するには、もう一段上の抜本的なレベルの施策が必要だとも感じた。

一方で、思想・ビジョンを掲げて、そこに人が集まる事例も知ることができた。石川県小松市で廃寺となっていた西園寺を、県内で障害者更生施設や授産施設を運営している佛子園が、障害者福祉施設の領域を超えて老若男女すべてにとって優しい施設として再生させた「三草二木 西園寺」の事例では、「老若男女すべてにとって優しく」といった思想・ビジョンを掲げて人を集めていた。これは、思想・ビジョンの持つ力を認識する機会となった。

こうして、分科会以外の第69回会議運営も含めて、この一年間は人のつながりについてたくさんの時間を費やして知識を得て考えてきたけれども、依然として人のつながりに対する興味は尽きず、人に寄り添って人の幸せに貢献したい、という想いも、人と仲良くしていきたい、という欲求も消えることはなかった。いくら大変な思いをしても、消えない想いは自分の軸たり得るだろうと思う。これからも仕事や環境が何であれ、これからも人に寄り添って優しく接して、Men for Others の精神を貫いて生きていきたい、と想いを新たにしつつ、都市分科会に関わってくださった皆様に心より御礼申し上げ、第69回会議都市分科会を一度締めくくりたい。これからも時々分科会メンバーで集まって、生涯続く我々の物語に追記を加えながら、人のつながりを紡ぎ続けていきたい。



“Governance and Diplomacy in an International Context:
Terrorism in the 21st Century” Roundtable

「国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム」分科会



コーディネーター
有田 彩子



コーディネーター
Jon Foissotte



小倉 匠海



古賀 彩



Sarah Bernt



Jalika Ceesay



古座 匠



Nicolas Grigsby



Eduardo Luis Herrera

現代国際社会では、紛争や戦争だけでなく、貧困や、組織的犯罪、予測不能な国家の行動により、不確実性が増し、安全かつ安心して暮らせる社会が失われつつある。南シナ海で領有権を主張する中国や、ミサイル開発を進める北朝鮮の行動は、全世界に不信感を与えている。また、非国家主体による影響力が近年増加している。いつ、どこで起こるか分からないテロリズムは国際社会に多大な脅威を与えている。アラブの春以降、中東地域では戦闘状態が続き、ISILはその混乱に乗じて存在感を増しているが、アメリカはイラク、アフガニスタンにおける失敗を契機に中東介入を消極化させている。テロリズムの根本的解決策として軍事行動には限界がある以上、人間の安全保障の観点から、一人一人の人間レベルで生存、生活、尊厳を守ることも重要となる。内乱状態のためテロ活動の温床となったアフガニスタンでは、地雷除去、インフラ再建など新たな安全保障対策が講じられている。当分科会では、従来の伝統的安全保障を再考するとともに、多様なテロリズムをはじめ、新たな危機、脅威にどのように対応すべきか安全保障政策を考察する。

■事前期間の流れ

▼春合宿

【目標】テロに対し個人、国家はどのように考え、行動することができるのか

【対策】個人：個人教育、コミュニティ（共同体、家族）

国家：安全保障（警察、軍事、外交）、教育（宗教など）、ODA

【原因】宗教、教育、経済、貧困、思想、政治システム

▼当時考えていたスケジュール

取えて、現状の各国の対策を見てから原因に迫るという、逆方向の考え方で進めることを考えていた。

【5月】各人が個人的に興味を持っているトピックについて議論

【6月】予防対処

【7月】テロの深層をなす原因を深掘り

▼しかし実際は…

（しかし実際はRT PaperやFTの準備によってスケジュール通りにはそんなにいかず…笑）

テーマはあまり決めず、分散型の議論をしていた（気がする）

- ・（小倉）テロと革命の違い/テロは自分たち自身に原因がある
- ・（古賀）テロと国家（政府、軍隊）との関わり合い

▼6月後半

問いの解き方ではなく、問いの立て方に焦点充て始める。（Issue Driven）Issue=本当にアプローチすべき問題で、問いを立てられれば、あとは解くだけ。「テロ×○○（興味分野）」という形で各人の興味分野をだして、それをイシュー化することを試みた。

■事前準備～本会議議論の流れ及び総括・考察（古座 匠）

分科会に関して自分たちが直面した困難に関しては「RTについての振り返り」という章で古座が個人的に言及している。簡潔にまとめると、議論しているトピックの抽象度をそろえるのが難しく、問いの設定という点で最後まで難航したこと、日米学生の課題設定について思考するときの瞬発力が違う、ということである。ここでは具体的にどう議論が詰まったか、どう打開しようとしたかの思考過程について焦点を当てつつ、完全に日本側参加者目線ではあるが分科会議論を振り返っていきたい。

外交・テロ・安全保障に関する分科会は(70th 本会議でこそないものの)多くの年で存在してきたし、これからもこのトピックが扱われていく可能性が高い、一方でこのトピックに関しては議論の進行が実に難しい。というのも、外交、安全保障という言葉に相對した時に、その行為・状態を実現する主体である各国の政府にフォーカスするのがまずは自然な成り行きだと思う。ただこれは学生間議論において大きな罫になる(と感じる)。



日米双方の学生ともに政府の外交政策に対する提言をできるほどの背景知識・それらに堪える英語力を日本側学生が持ち合わせていないこと、政府という主体が、マクロすぎるものが主な理由に挙げられる。ここでさらに政府への提言、という方向性に対する構造的な問題点を挙げるとすれば、(実際に本会議中に使っていた言葉を使うとするならば)「自分ごと」感が皆無であることだ。就活っぽいたえを使うなら、政府というマクロでぼやとした主体に対する「コンサル」を行うのではなく、自分たちの再定義した「安全保障」、あるいは到来してほしい「平和な世界」という概念を実現するために具体的に起こせる「新規事業」- 自らが具体的に想起できるサービス、ムーブメント、(革命?) - を立案したい、という方向にもって行きたいという思惑が日本側、少なくとも自分にはあった。

そこで思い描いた仮説のシナリオ。例えば、①テロを削減したい→②テロと貧困・差別に因果関係があるのではないかと→③貧困や差別の削減に寄与できるサービスなどを例えばビジネスとして行っている NPO の事例などをリサーチ→④日米が関与することで意義が生じそうなものをピックアップ or 創出、の流れをたどることで、政府への「コンサル」ではなく「自分ごと」にもっていける可能性があるな、と。ただ残念ながら先行研究を漁るうちに②の部分において貧困がテロの原因ではないという計量論文が大量に手に入ってしまったことによりこの案は頓挫することになる。有効な仮説、議題となりうる部分を含んだストーリーを失った状態で本会議に臨むことになった。しかしアメリカ側はやはり正面から日米政府の安全保障に対する取り組みについての議論から入ってくることになる。

京都サイトでは時間的に余裕があったため、お互いに何に興味があるのか共有しようという流れに乗って、各自が自分の RT ペーパーで調べた(自分が最も興味のある)テーマについてぎっくばらんに話していた。当然議論は発散するがそのことに対しては全くネガティブに捉えていない。69 回会議のテーマにもあるように、「己を省み人を知る 価値観の共有か

ら生まれる可能性」の下に集った自分たちが、分科会としてのアウトプットだけにとらわれず、まず自分のスタンスを表明する作業は不可欠だった。



就活生の新卒キャリア選択のごとく、平行線をたどる二項対立にウンウンうなることになる。ちなみに激しく蛇足だが、院進願望ひしめく自分はまだまだ就活を始める気はない(2017年12月原稿執筆時点)。

ファイナルフォーラムという結論からいうと、「コンサル」「マクロ」「トップダウン」vs「新規事業」「ミクロ」「ボトムアップ」どちらかではなく、わかれた議論双方を取り入れて発表という案もあったが発表尺など現実的な問題が交錯し前者にフォーカスすることになる。この決定が最終的に行われたのは東京サイト、ファイナルフォーラムの目前であった。

以上は簡潔な分科会議論のフローの再現である。特筆すべきなのは「二項対立」が生じたときに文字通りアメリカ側 VS 日本側という形になった事である。ここを乗り越えたうえでどう論点を設定し上質なアウトプットまで持っていくのが理想であったが、その前段階の VS 議論がメインパートになってしまったのは当初の目標からすればやや足りないがこのパートにおいて相手を説得するためにロジックを練ったのは特に日本側参加者にとっては大きな成長機会だったとも捉えられる(中途半端だと自分の論微妙だなとどこか信じきれない。ゆえに英語することなど到底叶わず、気持ち、ロジック両面で伝わらない)。

「後者」の方向性にもっていく具体的な策と展望としては「安全保障」の定義という時点で「人間の安全保障」といった前述の二項対立の後者側により親和性の高い概念にあえて着目する。これによってソーシャルキャピタルといったこれまた後者(ミクロ)的な手段を用いるという方向性に希望を感じていた、と記憶しているが果たしてその議論をメインストリームに乗せてファイナルフォーラムまでもっていくことはできなかった。

この意味において、分科会議論で日本側参加者が構築した論理を相手に隅々まで伝えきれたかどうかという尺度でいうとまだまだ足りないことは多い。時間も足りなかった。

ただ自分の言いたいことをメインストリームに乗せられれば勝ち、というゲームをしていたわけではない。チームとして、個人だけではなしえないアウトプットの総和を生み出せたか、その中で個人個人はどう自分なりの形で貢献し、成長できたかという尺度で見たときに、特に「二項対立」議論時に臆さず切り込んでいく、果敢な姿勢を日本側参加者のおぐりん(小倉)、古賀ちゃんは取り続けていた。自分たちのロジックと英語のレベルだけでは越えられない立ちはだかる抽象度の壁に最後まで食らいつくモチベーションとなったこと、それは分科会議論時間外でもしきりに思考のブラッシュアップを続けていたこうした仲間がいたからに他ならず、アメリカ側参加者もそれを認め、こうした投げだしたくなる議論をぎりぎりのあんばいで投げ出さず、日本側の言わんとすることに耳を傾けようとする努力を見せてくれた。自分も分科会議論時外でも意見が食い違っていたアメリカ側参加者に対してフォローしたり誤解を解いたり、ささいな不満のガス抜きをするなどはささやかに進んでいた。

これらの努力は文字にすると陳腐であたり前に思えるのだが、長時間続けようとする想像以上に非日常感満載で神経を使う。必然的に嫌悪感や語気の強まりにもつながる。そうなる場の雰囲気が陰悪になりそうなところを、自戒してより傾聴する努力を続けチームとしての正の方向への進行を目指す。その努力を一か月経た先で、一見胡散臭いきれいごとのように感じられた「己を省み人を知る 価値観の共有から生まれる可能性」といった本会議のテーマをずしりと重たく真に痛感する人間に変わっていたのだから不思議なものである。

■フィールドトリップ (イスラム法学者) 考察・感想 (小倉 匠海)

テロリズムという言葉が頻繁に使われるようになったのはいつ頃なのであろうか。言葉の期限そのものははっきりしている。1789年のフランス革命のあと、ジャコバン派のロベスピエールが行った恐怖政治をフランス語で la Terreur と読んだのが最初だとされる。しかし現代に生きる我々、特に2000年代近くに生まれ育った我々学生にとっては、テロといえば2001年9月11日に起きた同時多発テロという言葉が、脳裏にあの二つの巨大なビルが一瞬で崩れ落ちる瞬間とともに、深く記憶に刻まれている。現代において、“テロ”という言葉は1789年の頃より、はるかに重く複雑な意味を内包している。そしてあのテロから我々は、かなりはっきりと、テロに何かしら関わりあるものとして、イスラム教というものに多くの眼目を注いできている。それは畢竟イスラム教は即ちテロリストを生み出す宗教という、きわめて短絡的、差別的かつ危険な思考を生み出す結果となってしまったこともまた事実である。しかしだからこそ確かな観察眼をもって自らで調べ考えることを諦めてはならない。特に現代社会をより深く理解するには自他の宗教に対する理解が不可欠であることは言うまでもない。

我々は2017年6月26日月曜日、池袋要町（私の通学圏で驚いた）のあるバーにて、著名なイスラム法学者を訪ねることができた。日本国籍を持つイスラム法学の専門家という肩書きは日本において非常に新鮮に映る。彼こそ私たちの分科会のテーマと密接に関連する、テロと国際政治の関係性に何かしらの興味深い示唆をもたらし得る人物であろうと思ったわけである。

イスラム法学者としての彼の立場から我々の質問に対してどのような意見が飛ぶのか。そもそも参加者にイスラム教徒がいないから我々にあるイスラムの情報はシーア派とスンニ派に代表されるような宗派争いであるとか、アルカイダのような過激な主張を唱えるテロリストたちの主張のみで真実多くの一般的なイスラム教徒たちの主張ではない。

我が分科会のメンバーの一人、古賀がシーア派とスンニ派の宗派争いの原因について聞いたところ、そもそも日本人がイメージする宗派争いというのが、ヨーロッパにおけるカトリックとプロテスタントの宗教戦争に見られる殲滅戦であり、現在イスラム世界で宗派争いに見えるのは宗派争いではないと喝破した。そしてテロリズムとの関連性について、イスラム神学の立場から、全ての政治的傾向を持つ集団や人々にテロ行為を起こす要因があり、日本でもイスラムに限らないあらゆる可能性に言及していた。

この質問は日本のテロ行為の可能性について質問したものなのだが、そもそも日本でテロリストがテロ行為を起こす可能性について、彼自身もあまり深刻かつ喫緊の問題として捉えることは、現在の日本の社会状況から（移民難民の少なさ等）を考へても、難しかったのではないかと思った次第である。

むしろ彼の話の中で重点的に話されかつ、私も多く記憶しているのは、西洋近代的価値観、及びそれに付随する政治や学問に対する批判だ。彼が言っていたのは民主主義、自由主義、国民国家、人権のような近代的価値観は西洋の価値観に過ぎない。私はスペインのある街で闘牛場を壊してモスクを建設する法案を通過させたイスラム系地域政党の例を挙げ、多様な意見を集約させる役割を持つ民主主義が、宗教的に異なる基盤を持つ者同士では必ずしもそうならない例があるとして、同氏にどうすべきか解決を求めたが、そもそも彼は民主主義を尊重すべき価値とはしていない。彼が掲げるのはイスラム法（シャリーア）に基づくカリフ制国家の再興であり、そもそも民主主義というものに意見の形成に寄与しないとしている。これほどヨーロッパ、殊に戦後アメリカ的な政治思想と価値観に俗した日本と日本人にとってあまりに大きい衝撃的な言葉ではないだろうか。彼の宗教的価値観は置いておいても、我々は近代的な価値観について当たり前に受容し過ぎて盲目である。普段のニュースを見ると、我々の近代的な社会を脅かすテロリストが我々の社会の外部的要因に過ぎない、外から来た敵と決めつける危険性がある。しかし我々の住む社会が当たり前にする価値観の中

にテロリズムを生み出す可能性が含まれているのではないか。アメリカのトランプ大統領は対テロ戦争を西洋の文明の正義の戦いと言ったが、その態度に自らの信条や価値観を顧みよという姿勢は見られない。我々の分科会のテーマに与えられた重要な示唆としては、我々が当たり前としてきた考え方や価値観に一步引き下がってみる重要性であり、それによって現在の国際政治の置かれている環境にどのような影響を与えるのか慎重に考慮しなければならないということだ。

■フィールドトリップ（防衛大学校研修）考察・感想（古賀 彩）

防衛大学校生として日米学生会議に参加し、防衛大学校生として日米学生会議参加者を受け入れる。両者の繋ぎ目として、自分に何ができるのか、ずっと模索していた。防大研修においては、会議参加者だけでなく、他の防大生も心から楽しみにしていることを知っていたので、尚更この研修を成功させたいという思いが強かった。

この研修を通して、会議参加者は、防大を直接訪れることで、防大と安全保障について五感を通して学ぶ。また、防大生は、一般大学生との交流を通して教養を深め、防大生の実情を知ってもらう。今年は、初の一泊二日が実現し、より会議参加者に防大生のリアルを感じてもらえることが出来たと思うし、防大生としても刺激の多いものだったと聞いている。研修の構成としては、防衛学教官陣による特別授業、フィールドトリップ、学生舎見学が三本柱になっている。私は自分の課業の関係で特別授業には参加していないので、後者2つについて書く。

まず、フィールドトリップについて。防衛大教授でテロを専門にされている宮坂教授のもとに伺った。宮坂教授は、国内のテロ対策として、装備・機動力の点から、軍隊ではなく警察が動くべきであるとしつつも、海外で日本人が多数囚われたような時は、自衛隊が動けるような体制が整えられることを望むということだった。また、そもそもテロの原因について、テロの一般化ができないため、なぜ起こるのか—貧困なのか、教育なのか—などといった問いに対する一般解はないとした。そこで、宮坂教授は、原因を3種類に分けてテロを考察する。すなわち、素因（社会環境）、主因（人間心理）、誘因（主因を導くファクター）である。後者2つに関しては人間の精神的な問題であるので、アプローチは困難であり、素因に関しても何かこれだと特定することはできない。テロ対策として一番効果的なのは、市民が身近に起きる異常事態を正しく認識し、即時警察に通報することだという。英国では至る所に監視カメラが設置されているが、それでも人の目に敵うものはない、ということだった。宮坂教授はテロを専門にされているが、テロを研究すればするほど、テロにどう対処すればいいのか分からなくなると仰っていたのが印象に残っている。現在、個人に焦点を当てるミ

クロ的な視点が注目されてきているが、そのようなより精密で具体的な対策でない解決できない問題なのかもしれない。

次に、学生舎見学について。参加者が学生舎内で学生と完全に同じように過ごすことはできなかったものの、食事、入浴、点呼など、防大生とほとんど同じリズムで行動した。外部の団体が防大に泊まって研修するのは初めてのことであったので、双方にとっていい経験になったことだと思う。会議参加者は防大生のリアルを五感で感じ、より防大を身近に感じてくれたのではないか。この研修のメインは会議参加者と防大生が合同で行うディスカッションであった。それぞれのRTがRTの特徴に合わせて持ち寄ったものと、沖縄米軍基地に関するトピックを扱う。Governance RTでは、「海外で邦人が捕虜となった場合、自衛隊を派遣すべきかどうか」「沖縄から米軍基地を撤退させるべきか」「憲法9条を改正すべきかどうか」について話し合った。一般大生と防大生とが一つのことに対して議論することはそうあることではなく、他のRTでも有意義な時間であったと聞いている。また、個人的に仲良くなった学生も多くいて、この度協力してくれた防大生は、来年度以降も是非参加したいと言ってくれた。

防大生として、参加者として、会議参加者を防大に受け入れられたことは、心から嬉しいものであった。会議参加者、防大生が相互を少しでも身近に感じるようになってきたならこれ以上のことはない。

■分科会メンバーの声

▼小倉 匠海

日本が近代国家としての歩みを踏み出して、150年、元はといえば阿片戦争で清国がイギリスに敗れるという、ウエスタンインパクトが契機となって、国内での安全保障上の脅威の論議が活発になったことを思い起こせば、日本は開国以来、常に外側からの脅威と圧力に感化され続けた歴史を歩んできたと言ってもいいのではないか。日清、日露の戦争しかり、日中、太平洋戦争もまた然りである。それはまた、国家安全保障を考えることなしに、我々は我々自身の歴史の中で紡いできた活動の本質に、迫ることはできないということ自明のものとしているのではあるまいか。先の戦争の終結から七〇余年が経ち、周りに戦争を経験した人々はめっきり減ってしまった。戦争は日本人にとってますます遠いものになりつつあるのかもしれない。しかし奇怪なことに、戦後七〇年平和国家と銘打



って国際社会を歩んだ日本は、常に戦争と隣り合わせで国際社会を歩んできた、かつての敵国である米国と、軍事同盟を結んでいるのである。

普段あまりに自明としていることで気づかなかったが、ふと思案にふけると実に奇怪である。全く性格を異にする敵国同士であった国家が、七〇年もの間同盟を堅持し続けてきたのである。

先ほど日本の近代の歩みを考えることは日本と戦争の関わりを考えることであると言ったが、では戦後七〇年の歩みと、戦争はどう関わりがあるのか。それは日米同盟に裏打ちされた戦後日本の“平和主義”をどう捉え、向き合うかを考えることであると思う。

私は今回、日米学生会議参加に際し、米国側参加者である学生たちに対して、日米関係について質問する機会を得ることができた。それらはこれまでの、そして将来の日米関係について考察する際に貢献する重要なヒントを得た。

戦後日本の安全保障体制が、先ず戦争で疲弊した経済を復興させることを第一の目的として構築されたことを念頭に置かねばならない。日本は経済復興に専念し、軍事的安全保障政策は日米安全保障条約を基軸にして米国の軍事力に依存する。その安全保障の観念は米ソ冷戦の中で生み出されたものだ。二つの大国の互いの軍事的均衡によって戦争を回避しつつも、イデオロギーを背景にした勢力争いとしての代理戦争が高頻度で起こりうる時代であった。その中で日本はいかに生き残るべきか、新憲法公布時やサンフランシスコ講和条約の締結時に首相であった吉田茂が、米軍の駐留を、独立後も認める日米安保条約を秘密裏に締結したことで、日本人全体の空気感として、経済成長に専念することで平和も自動的に促進されるとぼんやりと思い込んでしまったのだ。実際に経済は飛躍的成長を遂げ、冷戦が終わるまでその恩恵を享受し続けた。しかしそれを享受する裏に、常にアメリカの軍事力に依存する体制が構造的に組み込まれていたことを本当に理解するには、戦後から冷戦終結までという比較的長い期間に失われた、国際社会の現実を捉える感覚を取り戻さなければならないのである。その国際社会というのはおおよそ生々しく、時に残酷なものではあるが。

私は、(当時5歳であったがはっきり覚えている)テレビのスクリーン越しに見た二つの巨大なビルが見るも無残に崩れ落ちる様を見た時、今思えばあの時から世界も確実に変わり、日本も変わることを強制的に迫られたのだと思う。唯一の超大国として冷戦後君臨すると思われたアメリカの神話が終わったことが気付かされた。当然日本も旧態依然の冷戦構造下での日米同盟を基軸としての国家運営のあり方を根本的に見直さねばならなくなった。だから9.11から今現在の日本の安全保障政策の起点となった。テロリズムという新しいファクターが、国民国家を根本要素とした国際社会の様相に衝撃を加えた。この新たな“力”の主体(それまでの究極の力の根源たる国家とは違った)を、どう捉え、向かい合うべきなのか。我々



日本人、そして日本は如何に行動すべきか、日米同盟にはどういった意義づけがなされるのか、そして日米学生会議に集った両国の学生がこの難題に向かい合った時にどういったことを導き出すのか。こうしてみると、途方もなく大きく感じるような歴史の流れ、こうして考えた時我々が生きている世界（日常生活とも言えるか）決して無関係ではなかった。我々が日々暮らして

いる中で、何気なく享受する“安全”も、広い世界でとめどなく（歴史の連続性に裏打ちされた）行使される恐怖によって裏打ちされているのかもしれないのだ。その恐怖の本質、我々学生が正面から向き合って思考することは、決して無駄ではないと思った。なぜなら、より具体的な、日本と米国という主体に焦点を当てれば、我々は軍事同盟という、恐怖に裏打ちされた安全を互いに保障し合うことを承認しているからだ。もしこれからの日本がアメリカと共に世界の平和に貢献しようというのなら、間違いなく私というひとりの日本人は、否応無しに主体的に恐怖と向き合わねばならない。その恐怖とは、北朝鮮か中国か、はたまたISのような個々のテロリズムの集合体か、様々な可能性が考えられる。しかしどのような最大限予測しうる（全てが予測できるわけではないことは前提である）主体との、如何なる形態の接触（軍事的なものも含め）を持とうとも、絶対的な超大国がない現在、日本単独で対処することにどれほどの現実があるのだろうか。それは同盟国であるアメリカも同じであろう、では互いの長所を生かして、より多角的かつ現実的、効率的な対処法を模索する他にない。日本のなすべきことは、時ここに至り、大きな変化の波に打たれても、確かな信念をもって、信頼するとした同盟国アメリカに堂々と向き合い、変化を恐れない姿勢を示していくべきなのではないか。

米国学生との討論では、多くの議論を戦わせたが、最も印象に残ったやりとりを一つ書き留めたい。日本との同盟関係の中で一体日本が有事（ここでいう有事はかなり広意義）の際、どれほどの主体的な決定権が残され、それに基づいて行動できるのかを議論した時、私ともう一人の日本側学生は、決定権もそれに基づく行動も限定的であると主張した。なぜなら相対的な国力や選択肢の多さは米国は比較にならないほどで、最終的にそれらを行使すると決定するのはアメリカだからだ。それに対して米国側の学生は、日本も独立国であり、主権を持つことから正当な手続きをもって決定された日本側のあらゆる事柄は、アメリカも最大限尊重する義務があり、互いの協力もその決定の尊重をもって行われるのだから、決定権と行動の主体性は日本にもある、と主張した。私はこれを聞いた時、これこそ戦後から続く日米

関係の本質があると思った。つま米国からすると、日本の意思を尊重するのは、独立国として当たり前ではないか。だから我々の、尊重した意思も尊重されねばならない。それこそ平等な関係性である。思った以上にこの関係性の根は深いと思った。互いに国民レベルでも、力の軽重を捉える感覚が、同盟という名のもとに覆い隠され、麻痺しかかっているのではないかと思った。それは寧ろ日本よりも米国側においてより深刻ではないのだろうか。互いに協力を深めることがかえって、力(国力と個人の信念に基づいた行動力どちらもあると思う)に裏打ちされた均衡の関係性と可能性を考えることを忘れてかけさせていると思った。

少し戻ろう。私はこういう時こそ日本、そして日本人がもう一度互いの関係について過去を振り返ることで、本質を見極めることを働きかけ、堂々と接すること、確固たる意思と信念をもってアメリカに向き合うことが重要ではないかと考える。今確かに同盟は新たな段階の信頼関係の元に築かれるべきであり、そのために我々日米の学生はここに集まり、互いの理解を真に求めて難題について議論したのではないだろうか。そこにこそ分科会議論の真の意義があると思った。真の平等の関係とは互いに胸襟を開いて本音を恐れずぶつけあい、互いの存在価値を高いレベルで認め合う努力を恒常的に続けなければ実現しないのである。表面的な言葉の羅列ではない、文字通り真剣なやりとりが、三週間という短い間でもできたことを誇りに思う。この場を借りて集まった分科会メンバーに感謝したい。そしてこれからの日本と米国両国の将来に思いを馳せることができたのは幸運であった。私たちの議論が少しでも多くの人々に少しでも影響し、互いの関係の新しい高みへ繋がることを確かに期待しつつ、本報告書の最後とする。

▼古賀 彩

JASC が終わって、もう4カ月。あの日々、あの時間は私のそれまでの一今でも、といってもいい一の人生とは異質に濃厚で、今でも、あの日々があったことが夢ではなかったのかとすら思う。JASC といって思い出すシーンは様々であるが、その中でも、「衝突」というテーマであれば、私はRTを真っ先に、そして唯一思い出す。

RTは本会議の40時間を占める。すなわち、同じ議題を同じ人達で40時間も話し、何かひとつの結論を導かねばならないということだ。議論とは、それぞれの意見をぶつける場であるので、そういう意味の「衝突」は勿論あった。しかし思うに、Governance RTでは、それぞれがそれぞれの意見を尊重し、全体としてひとつの結論へ向かおうとするベクトルは常に作用していた。ゆえに、議論そのものに関する「衝突」は、「衝突」と見える「協力」であったと思う。それでは、私が思う純粋な「衝突」は何か、というと、特に2点挙げたい。ひとつは、言語の「衝突」、もうひとつは、文化の「衝突」である。



言語の「衝突」を感じたのは、最初の RT からであった。もともと英語で議論する経験がなかったが、なんとかなるだろう、と思っていた。私以外の日本側メンバーに留学経験があることにも安心してた。しかし、そういった温い楽観は、全て最初に打ち砕かれた。日本側全員が米国側メンバーの言っていることが理解できないということが度々発生したのである。その度、“C”を使ったり、ゆっくり、優しい英語を使ってほしいといったようなことを伝えたりした。しかし、それにも限界はあり、恐らく米国側の意見を全て汲み取ることができた日本側はいなかったと思う。会議中、何度もそういう場面があり、都度議論が止まり、米国側の少し日本語ができるスタッフに仲介してもらっていた。米国側の学生にとっても、自分の言っていることが上手く伝わらず、日本側が言っている英語もよく分からずといったところで、個人主義が根ざしている国民性を考慮せずとも、ストレスは相当あったのではないか、と思う。

このように、日本側の言語的な disadvantage は無視できないものがあつたが、だからといって議論の足でまといであつたかということそんなことはなく、寧ろ、議論を実質的に進めていたのは日本側だった。日本側は idea で議論に貢献し、確実にひとつひとつ歯車を設置していった。この点をポイント付けすると、米国側と日本側では数段違つたという実感がある。日本人には従来欧米列強に対するコンプレックスがあり、何でもかんでもそっちの方が上だと考えがちである（勿論、私自身にもそのような意識があるのを自覚している）が、事実として日本人が勝てるという体感を得られたのは、今後の人生の中でも重要な布石だと思う。誤解をしてほしくないのだが、米国側が何もしなかつたというわけではない。確かに日本人は歯車を設置することには長けていたが、実際その歯車をどう動かすのか、すなわち、日本側が提示した足場となる意見を、より具体的・実行的なレベルに落とし込む過程では米国側の貢献が大きかつた。これが両国の実行力の差なのだと感じた。

いずれにせよ、議論を通して、両者のどちらも欠けては最後の結論に至ることはなかつた。この感覚が日米間の個人レベルで存在し続けてほしいと思う。

もうひとつの「衝突」。文化の「衝突」。これを特に意識し始めたのは、三重サイト、ファイナルフォーラムで何を発表するのか本格的に決めないといけない頃のことだった。もともと、米国側は議論中に席を外して何十分も帰って来ないなどということがあつた。しかし、ファイナルフォーラムが迫り、議論が止まろうがどうにかこうにか前へ進まないといけない

といけないときでも、日本側は残ってどうにか先行きを見つけようとするのに対し、米国側は帰って何もしないのである。日本側からすれば、こちらはこれほど努力しているのに、どうして米国側は何もしないのかと苛立ちを禁じ得なかった。しかし、米国側としては、考えても分からないのだから、これ以上続けても意味がない、リフレッシュが必要だということだった。勿論、だからといって後に彼らから特別なアイデアが出てくるわけではなかったので、米国側の方法が必ずしも効果的ではないとは思いますが、その諦めのよさが生きる場面はあるのだろうと思う。また、日本人の勤勉性というか、粘り強さというか、そういうよく言われる特質が対照的に浮かび上がり、なるほど確かに私たちは日本人であるのだなという感じがした。とはいっても、RTとしてこういう状況が長く続くはずはなく、東京サイト、ファイナルフォーラム目前に日本側が米国側にぶち切れた。米国側は、ずっと残っていても意味がないではないかと最初は対立したが、米国側のある学生が間に入って来て、最終的に日本側の努力を認めてくれた。そこで初めて、RT Time の後に毎日日本側が数時間残ってうんうん唸っていたのを知り、無きながら sorry と言ってくれた学生もいた。そして、ファイナルフォーラムでRTとしてひとつの結論を発表して終わることが出来た。異なる文化/価値観のもとでも、「衝突」し、対話すれば、お互い分かりあうことができると、経験として得ることができた。

もともと私はJASCに「衝突」を求めていたこともあって、このようなRTでの「衝突」は非常に面白く、興味深いものであった。「衝突」を通して得られたものは余りにも大きい。まさに化学反応であったと思う。あの時ぶつかり合った仲間たちは、今どこで何をしているのだろうか。次会うときが楽しみで仕方ない。

▼古座 匠

JASCについて自分が個人的に語るべきことは「JASCについての振り返り」という個々の参加者がJASCを自由に振り返る章で全て語った。それはここに書いた文章から更に1ヶ月後に書くことになるので、ここに書いた文章はJASC中に落ち着いて思考を整理する時間がなかった時を経て、思考の整理が徐々に始まった時期の文章ということになる。ちなみに思考が整理されたから文章にしたのではない。逆因果百パーセント、文章にすることで思考が整理される。報告書はJASCの経験を外部に発信するという貴重な役目を負っているが、個々の参加者の思考を整理し深化させる最上のきっかけにもなる。その証拠に報告書の締め切りは申し訳ないことに何度も引き伸ばされ皆時間をかけて製作にあたった。編集を担ったピースこと齊藤くんへの感謝は尽きない。では見ていこう。

分科会だが、JASCの掲げる「アカデミックな議論」というものにどれほどまで真摯に向き合えたのかはわからないままだった。外交や安全保障といった大風呂敷を広げに広げたトピックに対して日米参加者双方の問題意識のすり合わせが本当に最後の最後まで難しく平行線をたどった。抽象と具体の度合いのバランスを行き来して、良質な問を構築することがいかに難しいか。これを五月の日本側準備開始から本会議最後にいたるまで一貫して痛感することとなった。主な原因としては、外交や安全保障といったトピックに対する参加者側の「アカデミック」な親和性が乏しかったことが挙げられるが、なんとかそれを乗り切って早期に分科会として掲げる問題設定を行うことを後回しにして（行えなかった）しまったことは後悔すべき点であったと同時に、自分、ひいては分科会としての実力不足であったといえる。



JASCでは往々にして「超抽象的」なトピックに対して、とにかく「さあ議論を始めましょう」というシチュエーションが訪れるし今後のJASCでも訪れるだろう。参加者同士が即席の要素強めでブレインストーミング的に自らの興味を展開し反応し合うのは楽しいが、サロンの議論は発散し続けてしまう。分科会議論は長いようで短い。分科会議論として打ち込むべき良質な問題設定をとにかく早急に行い、その解に近づくための議論を顔をとつき合わせて圧倒的熱量で行う方が分科会全体を通じたアウトプットの質、議論の生産性も増してよいと思う。

ちなみに所感だがアメリカ側参加者の方が上記の問題設定という点では優れている気がした。とりあえず問題設定を行おうとするその発想力のようなもの、そのための筋肉が日本側より発達している気がした。個人的にはああ、その勘所で思考していくのね、という感覚はつかめるのだが普段使っていない筋肉感満載でとてももどかしかったのを覚えている。これはおそらく教育システムの差異が影響している可能性もあるが、個人的には自分の、設定された問題に向かうスピード感と処理に用いる筋肉はかなり発達している気がする。まさに「イカ東（いかにも東大生）」といった感じで悲しくなったのだが、問題と仮説を構築するタイプの「アカデミック」な力は、特に院に進み論文を書く中で、さらには社会に出た後も大いに必要になってくると感じる。だが先ほど述べたように、JASC中に感じたのは「普段使っていない筋肉」といったもどかしさであったので、才能ではなくこれから鍛えることができる力であるという直観を得たのは良かった。

■分科会コーディネーターによる総括

▼有田 彩子

まずはじめに、分科会メンバー一人一人に心からありがとうと言いたい。個性溢れるこの分科会メンバーと共に活動できたことを誇りに思う。当分科会は安全保障分野の中でも、特にテロリズムに焦点を当て議論を進めた。議論の進め方、テーマ・議題設定、結論への導き方、これら全てを考え、決定するのは各々の分科会に委ねられているという点で、この分科会という場に意味を持たせることは非常に難しい。その点で当分科会は問題設定を重視した。どのように問いを立てるかによって、その後の議論の進め方や結論もおのずと決まってくる。分科会に設けられた壮大なテーマのもと限られた時間内で議論を進めるうえで、問題設定に注目したことは非常に効果的であったように思う。またフィールドトリップでは普通はお会いできないような有識者、専門家のもとを訪れ、直接質問をぶつけることができ、個人的にも大変貴重な経験ができた。このように事前活動を過ごしてきた当分科会であったが、本会議1か月前に日本側参加者が1名脱退することとなった。「JASCは人生を阻害するものであってはいけない」というべき論と、「最後まで分科会メンバー全員で活動し終えたい」という正直な気持ちとが真っ向から衝突した。「仕方ないね。」そんな言葉で片付けられるような、そんな気持ちでこの4名を選んだつもりはない。だが我々は日本側参加者が1人足りない状態で本会議を迎えることとなる。分科会メンバーの活動を委縮させるのではないか。分科会へのモチベーションが下がってしまうのではないか。このように思うことは今となっては分科会メンバーに対して大変な失礼にあたるのだが、当時は本会議を迎えることが不安で仕方なかった。しかし、本会議が始まってその心配は全くの不要であったことに気づく。第一サイトで初めてアメリカ側参加者を含めた分科会議論に参加した際、日本側参加者の議論に臨む姿勢に、素直に、感動した。言葉で表すと「勇姿」、それが最もしっくりくる。積極的にC(clarify)やT(translate)を挟み議論にくらいついていく姿、英語でわからない時は日本語を使ってお互いが助け合う姿、(分科会として当然のことなのかもしれないが)3人の勇姿が、数々のJASCの思い出の中で、強く目に焼き付いていることに疑いはない。第三サイトでは一切睡眠時間も取らず、夜中議論し続けたこともあった。またファイナルフォーラム前には発表の方向性が決まらず、各々が非常に苦しんだように思う。この分科会が各々のメンバーにとってどのような意味を持っているかはわからない。また(来年度は政治・安全保障に関する分科会がないことを鑑みても)多くの専門家がいる中で、何故私たち学生の身分であるものが政治・安全保障に関して議論する必要があるのか、もっと熟考すべきであったように思う。ただ、この分科会という存在が私を救ってくれたことは計り知れない。本会議中は分科会議論に入れられないことも多々あり、その度に議論の進捗を教えてくれた。また疲

れた顔を見せた時は必ずメンバーが声をかけてくれた。メンバーを支えるはずが、逆に支えてもらう側となってしまった。何十年後かに、またこのメンバー全員がそろう日が来ることを楽しみにしながら、筆を置くこととする。末筆となるが、大変ご多用の中我々のために時間を割いてくださり、深い学びの場を提供していただいた方々に改めて御礼申し上げたい。



“Health: Roles and Responsibilities within Society” Roundtable

「社会の健康と個人の役割」分科会



コーディネーター
藤本 アペリーノ



コーディネーター
Kaede Yoshioka



岩井 凌太



長谷川 信寿



Kassandra Diaz



Nicole McNevin



林田 将



藤本 ミケイラ



Hirotohi Usui

現代社会において、個人は健康を追求する権利があり、社会は個人の健康を保障する責任がある。WHOでは、健康を「身体的、精神的、社会的に良好な状態」と定義付けているが、健康な社会を達成するために何をすべきであろうか。日米両国において、保健の問題といえば、従来は生活習慣病の予防や社会保険制度の改正が議論の中心であったが、最近では厚生労働省の医療計画に精神疾患が新たに加えられるなど、問題が多様化し、複雑化しつつある。先進国では、近年の目覚ましい科学の進歩により、出生前診断や人工妊娠中絶、尊厳死等の生命倫理問題が出現している。開発途上国では、感染症対策や公衆衛生、母子保健の需要が依然として高く、乳児死亡率、周産期死亡率ともに世界最低水準を誇る日本は、国際社会に対して積極的に貢献することが求められている。

当分科会では、個人や家庭といったミクロな単位から国や地域といったマクロなレベルに至るまで、社会全体の健康を維持するために、政府や民間団体だけではなく、我々個人がどのような役割を果たすべきか、傍観者としてではなく、当事者として見直し、具体的な対策を打ち出すことを目指す。

■事前準備期間の議論・活動

▼分科会メンバーが定めた目標

「健康」とはどのような状態であるかを明らかにした上で、現代の健康問題に対する具体的な対策を打ち出す。

▼全体の概要・流れ

本会議直前まで海外に留学していたメンバーもいた当分科会では、春合宿、自主研修、直前合宿を除いて全員が顔を会わせて議論する機会がなかった。また、メンバー同士の時間の都合が付かず、オンラインミーティングも10回以下と限られていた。しかし、その中でもそれぞれのアイデアをワードやプレゼンテーションにまとめてオンライン上で共有し、各自が空いた時間にフィードバックし合うなどの工夫によって、お互いの興味関心の深化と論理の構築を図った。



▼春合宿

「健康」とは何か、その定義について議論を重ね、健康の要素の因数分解を図った。議論の過程で、特に社会的健康と精神的健康の棲み分けについての共通見解をまとめるのに苦心したが、社会的健康の範囲を他者との交流から生じる事象に限定することで、全員の納得解にたどり着いた。さらに、健康の各要素は相互に関わり合っているという前提の上で、メンバー全員が共通して精神的健康に一際大きな関心を見出した。

▼オンラインミーティング

各自の興味・関心分野から健康問題にアプローチする方法についてのプレゼンテーション・ディスカッションを行い、互いのアイデアや論理のブラッシュアップに務めた。

▼各メンバーの興味・関心領域

【岩井 凌太】

日本人の自己肯定感の低さと精神病的罹患に関連性を見出し、教育・身体活動という観点からこの問題にアプローチする方法を模索した。

【長谷川 信寿】

現代の日本で大きな問題となっている精神病の一つ、うつ病の対処療法としてのマジックを持つ可能性を追求した。

【林田 將】

二つの宇宙開発機関、NASA・JAXA の健康を数値化する方法を参考にしつつ、精神的健康を含めた全ての健康の要素を数値化する方法を考察した。

【藤本 ミケイラ】

グローバル化の進展によって欧米化した日本人の食生活に問題意識を持った上で、食育が義務教育の一環として浸透した日本では比較的食生活の悪さから生じる健康問題が少ないという事実に注目し、食育の重要性の解明を図った。

▼防衛大研修

健康には様々な種類の健康があるが、各種の健康は相互に/関わり合っている、と私たちの分科会では結論が出ている。防衛大学での研修では、特に精神的健康と身体的健康の関連に重きを置いて、意見が交換された。防衛大学の学生は、国を守るという使命に対して聡明な考えが確立されている。その使命に基づいた彼らの身体は、単に筋肉があるとか無駄な脂肪がないとかではなく、国を守るための資本として鍛えられている。逆にその身体という作品からは、彼らの精神の主張が見て取れる。つまり、精神と身体は深く関わりあっているように見える。防衛大学研修で私たちは、『異なる種の健康は互いに影響し合う』という仮定の具体例を見つけ、それ以後の議論の基盤となる考えとなっていくた。

▼フィールドトリップ：英国スチュアートロード診療所 澤 憲明さん

NHS という、日本やアメリカとは大きく異なる医療制度を持つイギリスという国で日本人医師として働く澤さんに、現場で感じる NHS のメリットとデメリットやイギリス的価値観からみた日本・アメリカの医療制度についての見解をお訊きするための FT を行った。

この FT では、医療制度の背後にある各国の価値観の違いや権威主義について詳しくお話



を聞くことができた。そして、日米という二カ国を考えた際にも、集団主義と個人主義など大きな価値観の違いと、そこから生じる「求める医療制度の差異」がある為、単純に両国の医療制度を見てその良し悪しを比較することはできないという澤さんの見解は、私たちの RT ディスカッションの結論にも大きな影響を与えた。

■本会議中の議論・活動

▼分科会の目標・方向性

我々の健康における分科会ではまず目標や方向性を設定するのに苦労した。WHO では、健康を「身体的、精神的、社会的に良好な状態」と定義づけているが、健康な社会を達成するために何をすべきだろうか。身体性、精神性、社会性の3つの観点それぞれ重要ではあるが、我々はより深い議論をするため精神的健康に重きを置いて話を進めていった。



▼議論の過程

第1サイトの京都では、事前に書いたRTペーパーを詳しく説明を入れながら発表し、「健康」という幅広いテーマの内、各々が興味を持つ分野を把握した上で議論トピックを決定した。また、日本とアメリカの異なる視点から捉えた「健康」であるとはどのような状態なのかを話し合い、健康の定義を定めようと試みたが、人が所属するコミュニティー、文化、宗教、国といった単位で考えた時に、健康である状態の基準自体がそれぞれである為に議論が難航した。

第2サイトの愛媛では、主に日本とアメリカの社会保険制度について意見交換を行ったり、2国の学校教育における食育の比較をし、幼少期の食に関する学習が、その後の正しい食の選択や肥満にどう影響を与えるのか議論した。

第3サイトの三重では、Final Forumでの分科会プレゼンテーションを意識し、発表するテーマを絞った。都会と田舎、郊外に分け、それぞれの医療施設へのアクセシビリティを比較した。

最終サイトの東京では、日本とアメリカそれぞれの医療サービスにおける問題点を挙げ、各国に合った解決策を考えた。そして議論を重ねながら重要な部分をまとめ、Final Forumに向けて、アイデアに磨きをかけた。また、時間制限のある発表の中で、如何に医療についてわかりやすく説明できるか試行錯誤を重ね、プレゼンテーションを完成させていった。

▼ファイナルフォーラム

Final Forum での分科会発表では
 "Accessibility to Health Services"をテーマ
 に、日本とアメリカにおいて、医療サービス
 へのアクセシビリティを妨げる要因となっ
 ているものは何か、という問いを掲げ、Coverage
 と Accessibility という点から2国を比較した。



■分科会としての結論

健康の定義は国や文化、個人によって差があるものの、健康を追求する権利は万人にあるため、ある集団内の各個人が健康を実現するために必要な要素は Coverage と Accessibility であると結論付けた。集団内のどれほどの人数が必要な医療サービスを受けられる制度があり、各個人がどれほど容易に医療にかかる事ができるか、である。

米国では、Coverage は実現できておらず、Accessibility も地域や文化によって実現できていない。一方、日本では Coverage に関しては実現できているが、それがために都心部での過剰な Accessibility は実現が難しい事が分かった。都心部では患者数の過多により受診までの待ち時間が伸びており、郊外では病院や医療機関までのアクセスの悪さが問題となっている。そこで私達の議論はいかにこれらの問題を解決するかが焦点となった。



保険制度や社会基盤、文化などの社会経済的問題が複雑に混ざり合うため、日米において2つの要素を同時に満足することは難しい。今後は、都心部と郊外をつないで患者の移動支援を促すサービスのような、同時に2つの要素を解決する制度が始まることに期待したい。

■分科会メンバーの声

▼岩井 凌太

三週間に及ぶ RT ディスカッションを通じて得た最も大きな学び、それは、日米の学生が持つ感覚の類似点と相違点における生育環境への依存度の大きさを実感できたことだと感じている。日本で育った人間とアメリカで育った人間の持つ感覚が異なる。今の時代そんなことは誰でも知っているであろう。それでも、何かを通して二次的にその事実を知っている

事と、その事実を実感した経験がある事では雲泥の差があることを、JASC を通して実感することができた。病院まで車で二時間かかるのが当たり前。学校の給食は身体に悪いものばかり。このような自分の感覚とはかけ離れた事を、つい数分前まで共通の感覚があるからこそ盛り上がる「冗談」を言い合っていた友人の口から聞いた時、彼らとの「違い」を意識し、驚いたのをよく覚えている。

一方で、RT ディスカッションを始める前から健康における精神的要因や、その精神的健康状態の決定要因における人々の文化的背景が持つ影響力に一際大きな重要性を見出しているメンバーが日米双方に多くいた。そのことから、「健康」の中で一人の人間として大事にしているポイントや、私たちの価値観の差異における生育環境や文化的背景の違いの影響力の大きさについては類似した感覚を有していることもあるという事を知ることができた。これは、このような相違点や類似点は、「健康」という世界各国で一定程度普遍的な意味や価値を持つ概念がトピックだったからこそ知ることができたと感じている。

こうして日米両国で育った学生の類似点と相違点を実感した経験は、自分とは異なる環境で育った人との関わり合いにおいて、その「違い」を意識し、尊重する姿勢をもつ為の重要な学びであったに違いない。

▼長谷川 信寿

「社会の健康と個人の役割」と聞いて何を連想するだろう。個人や家庭といったミクロな話題から、国や地域といったマクロな話題まで非常に広いトピックである。あらゆる年齢の全ての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する未来を志向するためにも、私は健康の分科会に所属してよかった。人が幸せに生きて行くためには考えなければならない分野である。

初回の分科会の時間。私はすぐに「答え」を出そうとしない分科会という印象を受けた。議論のプロセスを楽しんでいたように感じる。お互いの意見を尊重しつつ、疑問に思う点、それはおかしいと思ったところには食いつく姿勢は他団体よりも強い気がする。皆がお互いに議論の流れや皆の意見を俯瞰する姿勢を持ち多様な意見を持ち寄ったのは非常によかった。

中頃あたりでは、皆の強さや弱さをお互いに認識し始めたように感じる。どんなパーソナリティなのか。私たちの班はその弱さを卑下することは一切なかった。むしろその弱さを補完しようと試みるもの、自分の強さをより引き出す仲間がそこにはいた。そういう意味では私達は素晴らしいチームワークを発揮していたと感じる。

日米学生会議も終わりに差し掛かり、ファイナルフォーラムに向けて準備をし始めた。私が個人的に驚きを隠せなかったのはアメリカ側のスライド作成の仕方である。彼らがどれほどこのプレゼンに馴染んでいるのか。横から凝視しなくとも一瞬でわかる。正直ファイナルフォーラムへの準備が間に合わないのではといった不安は大きかったが、そんな偏見は完全に払拭された。そんな小さいところでも日本とアメリカの教育システムの違いを私は感じていた。

分科会を全体通して振り返って見ると、三週間程度の短期間に自分の成長を感じられた。それは最初に私が人や議論に圧倒されていたことが大きいかもしれない。本会議のテーマが「己を省み人を知る」ということであったが、私の場合は人を知ることで、己を省みていた。自分にはないものを人に提供し、人に喜んでもらう。皆がその精神を持っていたと強く思う。今後はこの議論やその経験をもとにアクションを起こしたい。理論より実践。手足を動かすことで、学びを深化させられる可能性をこの分科会では学べた。

▼林田 将

本会議では、人の主張の理解と自分の意見の主張の両立が困難なことに気づく。自分の主張が定まっていないと、他人の主張が必要以上に正しく感じられる。また逆に、自分が強く信じる主張があると、それと異なる他人の意見を必要以上に聞き捨ててしまう。このような二つの軸のダイナミクスの中で、私たちは議論を重ねた。

本会議は京都で始まった。会って間もない分科会のメンバーは、何となく互いの主張を模索し、強く主張することはしない。自分の主張よりも、他人の意見により、注目を傾ける。議論の目的を意識することなく、議論のメンバーと知り合うというアイスブレイクの間である。

互いに打ち解けあった後の愛媛では、比較的強く主張できるようになる。その分、他人の主張に強く反対意見をぶつけることも出てくる。議論の目的は、自己主張に近づいているのかもしれない。

三重に入ると、急に個々の主張は弱くなる。何かしらアウトプットを出さなければならないファイナルフォーラムが頭によぎり、それぞれの主張を取り入れた発表をしようと皆が他人の意見に耳を傾ける。互いの人間性が分かってきた後なので、強くアピールする必要性が下がったことも影響しているだろう。

最終サイトでは、二つの軸のダイナミクスが機能する。ファイナルフォーラムに向けて、皆の意見をよく聞こうとすると同時に、まとめ切れないカオス状態を収束させるための筋の通った意見を強く主張する者が場を仕切る。この最終段階になって、参加者の議論の目的が、

『より良い発表をする』という明確なものになる。

日米学生会議という議論の場では、ただ単に議論の方法を学ぶだけではなく、議論がどのように発展していくのかも学べる機会だった。

▼藤本 ミケイラ

「社会の健康と個人の役割」分科会。春合宿で初めて顔合わせした時から、アットホームで過ごしやすい雰囲気を持つ分科会だった。本会議でアメリカ側が加わってもそれは変わらず、各々とても個性的で自由だったにもかかわらず、皆、相手の意見に耳を傾け、チーム全体としては非常にまとまりがあった。

メインテーマ「健康」について、日本、ましてやアメリカの医療制度、医療そのものに関して特別な知識がない私は、この分科会に何をオファーできるのか悩んだ。より身近なスケールで健康を考えた時、健康状態を左右する最大の要因の一つは、私たちが毎日摂る「食事」ではないかと考えた。そして、趣味である料理の知識を生かし、食生活や食育の面から健康についてアプローチした。分科会の他のメンバーもそれぞれの興味や得意分野から、「健康」を自分なりにアプローチしており、非常に興味深いトピックばかり議題に挙がった。

本会議では、数々の議論の中で、特に日本とアメリカの食生活や食育についての比較、意見交換がとても刺激的だった。アメリカ側の学生が、日本の学校教育において、食育の一環として家庭科の授業が設けられていることや、日本人が普段食べているお弁当の栄養バランスの良さに大変感心していたことに驚いた。日本の食事情を客観的に見ることができ、非常に新鮮だった。また、日本側のメンバー全員が関心を寄せていた、精神的健康、メンタルヘルスについての議論も興味深かった。日本側でも本会議以前に議論を重ねていたが、アメリカ側の意見を聞くと、また精神病についての見方がガラッと変わった。ラテン系のバックグラウンドを持つアメリカ側の参加者の一人が、そもそも精神病の概念自体が、自身の文化になく、そもそも認識されていない病気だという発言が印象的だった。健康、病気に対する認識や基準が、それぞれの国や、文化、所属するコミュニティによって異なることに気づき、自分の健康に対する価値観が大きく変化した。認識や基準がそれぞれ異なるのは当然のことのようだが、如何に自分が狭い視野で考えていたことに気付かされたことは、分科会を通じて最大の収穫となった。

分科会という少人数のグループ内で「健康」という一つのテーマを、アメリカと日本の国ごとの視点や、全く異なるバックグラウンドを持つ個々人の視点から、これほど深く議論することができ、素晴らしい経験だった。そして、意見を言いやすい環境、家族のような雰囲気を作ってくれたメンバーにも大変感謝している。

■分科会コーディネーターによる総括

▼藤本 アペリーノ

分科会活動を充実したものにするために必要不可欠なものは意見や価値観の衝突である。全員が初めから共通の視点を持っていたら、わざわざ集まってディスカッションする必要などない。ぶつかり合う議論を突き詰めて辿り着く本音の対話こそが相互理解への第一歩なのだ。

私はコーディネーターとして、分科会の中の意見の衝突を大切にしたい。余談だが、分科会コーディネーターは分科会活動に対して3つのスタンスを取ることができると思う。分科会活動に積極的に参入するタイプ、議論のファシリテーションや知識提供を行うタイプ、そして議論に一切関与しないタイプだ。私は当初、ファシリテーションや知識提供だけに自分の役割を留めておこうと考えていた。しかし、分科会のメンバーの強い要求があり、実行委員ながらも議論に参加させてもらった。振り返ってみて、これには正と負の作用があったと感じる。プラスの作用として、構成を意識しつつディスカッションを進めていくことができたこと、議論のトピックに対して多角的な視点からの意見を提示することで議論に幅をもたせることができたこと、分科会メンバーとコーディネーターの間に一体感が生まれたことである。一方で、私は実行委員である限り、分科会活動よりも実行委員としての仕事が優先され、担当サイトに入った時から急に分科会活動に参加できなくなってしまった。立場上の事情があったとはいえ、メンバーから頼りにされていただけに、期待を裏切ってしまう申し訳なく思う。さらに、より多くの文献やレポートを読みこみ、知識を蓄えていれば、ディスカッションに一層、味を加えることができたのかも知れない。

結局、分科会活動全体に対しては達成感よりも悔いの方が強く残ってしまったように思われる。それでも、分科会活動を通じて一つだけ、何にも代えがたいものを得ることができた。それは、それは、互いに協力し合い、励まし合い、笑い合える最高の仲間との出会いである。実行委員の仕事で、分科会をないがしろにしてしまっていた私をいつも優しく迎え、頼ってくれる仲間たちの寛大さには常々心を打たれた。そして思う、分科会活動の究極の目的は、何か答えを出すことではなく、人を知り、自分を知る、そして、人と人との関係を構築することにあるのかもしれない、と。

“Modern Ideologies: Analyzing the Actions of Individuals and Communities” Roundtable

「現代における思想の価値」分科会



コーディネーター
新郷 雅大



コーディネーター
Eric Mueller



大野 友



押切 彩



Emika Otsuka



Carolyn Hoover



野間 康平



吉村 彩



Jin Tanizaki



Duo Xu

近代産業革命以降、あらゆる分野で専門化・分化が進み、自分の専門外は興味も持たない「精神なき専門人」も増えた。しかし、世界は複雑化し、もはや一つの分野に精通しているだけで十分な時代は終わった。例えば、グローバリゼーションは世界経済の効用最大化を目指して推進される反面、地域文化を侵食していると言われる。しかし、この問題を考えるには、経済学が前提とする効用概念に馴染まない価値の可能性を考察する必要がある。

また、現代の価値観の限界も見えてきている。人間の生活を向上させる目的で発展してきた科学技術だが、AI やクローン技術は人間の本質を再考するよう迫り、逆に人間を疎外しつつある。はたしてこれ以上の技術発展は幸福につながるのか、人々は疑い始めている。

このような、全体を捉えることが困難を極め、行くべき道も容易に定まらない現代に、万学の源である思想は大きな力を持つ。各分野の知見に依拠しつつも、その枠にとらわれず様々な分野を横断して問題を捉え直す。そして、既存の価値に対する違和感を大切にそれを疑い、あるべき姿を構想する。当分科会では分野の枠にとらわれず、そうした思想の新たな価値に光をあてる。

■はじめに

▼本分科会の意義

進行し続ける経済的格差、予測不能な金融危機、加速する難民問題、蔓延する疫病、目処の立たない環境問題、流行化する政治危機、頻発するテロリズム etc… 現代がなんとも形容しがたい不穏な空気に覆われていることは明らかだろう。この混迷の原因は、現代を形作っている近代的なもの（自由や民主主義、資本主義 etc）にあるのだろうか？はたまた近代から現代へと移行する中で人々の考え方や価値観、また社会の設計が根本的に変わったのだろうか？上記で挙げた社会問題（メガトレンド）に対する解決策や取り組みは至る所で考えられ、実行されている。しかし、中々効果が目に見えないのが実情である。これらの問題を抜本的に乗り越えるには場当たりの対処法ではなく、よりラディカルな思想や考え方が必要ではないだろうか？近代的なものの概念が生まれた背景を知り、人間と社会を根源的な次元から深掘り、理想の未来を描き、現代の問題に立ち向かう。このような時空間を超越したダイナミックな運動が今、緊急的に求められているのではないだろうか。本分科会において、マクロ的には上記のようなことを皆で考えることを、またミクロ的には分科会一人一人の生き方や考え方を見つめ直すことを目的とする。

■事前準備活動

初めての分科会メンバーの顔合わせの場である春合宿で分科会の方向性を決定し、その後の毎週の定例オンラインミーティングで議論を深めた。自主研修の沖縄・防衛大へは、安全保障についての基本的な知識を課題図書により補い、その後のミーティングの議論を通じて各々の関心事項を明確にして臨んだ。

▼春合宿

春合宿ではRTメンバーで話し合う時間が十分に与えられ、この期間中におおまかな分科会の方向性や、トピックを決めることが出来た。思想という広く、曖昧なテーマのもとでどう分科会進めていくか、話し合いを重ねた結果、「対立構造にある信念同士のあるべき関係を問い直す」という分科会目標に辿り着いた。日々の生活の中で個々人の感じる違和感は多数存在するが、その違和感の背景には、こうあるべきだ、こうしたい、というその人自身の信念が存在する。そしてそれは、存在する思想を個々人が自分の違和感や経験を通して解釈したものなのではないか。しかし、高次においては同じ



思想を共有する者同士であっても、その具体的な現実解釈が違うことによって信念の対立が起こりうる。分科会の期間を通じて、「参加者が日々の生活の中で感じるその違和感や、その背景にある新年の対立とは具体的にどのようなものなのか」「その対立は克服すべきものなのか」「すべきであるならば、どのような方法があるのか」といったことを探ることを目的とした。具体的な議論の進め方は、メンバー個人の違和感や興味に関連したトピック(各論)から理解を深め、それを抽象化した形で、信念対立の克服の方法論(総論)を構造構成主義という理論を通じて議論することとした。

▼定例ミーティング

週一回のオンラインミーティングを開催した。「信念の対立をいかに克服するか」という問いを総論、「信念対立が具体的に表れるトピック」を各論として定義し、毎週一つずつ取り上げていく形で議論を進めた。テーマごとに担当を決め、課題図書の選定とそのレジュメ、議論したいポイントを準備した上で、全員でそのトピックについて話し合った。当初の目的の達成に関しては、一つ一つのテーマが予想以上に時間を要し結論までは至らなかった。

▼ディスカッショントピックと課題図書

総論：信念対立の克服

課題図書：「自由はいかにして可能か」

信念の対立について理解する第一歩として「自由とは何か」を読んだ。自由とは、ただただ個人がもつ欲望や信念を貫き通すことではない。個人が思うままに欲望を貫けば、必ずそこには衝突が生まれるからだ。個々人の欲望・信念の対立を克服することが自由を実現することに必要である。信念の対立には、それが形成されるに至った背景を考えることが必要だと筆者は主張する。この考えは、今後思想分科会の議論でも重要なものであり、ほかの人の違う意見を理解できないとするのではなく、なぜその意見を言うのか、背景の経験や性格を考えることで同じ土俵で議論することができるという結論に至った。

各論：女性の働き方 (担当：押切 彩)

課題図書：「働く女子の運命」

現代を生きる女性はワーキングマザーとして家庭と仕事の両立を目指すことが増え、その選択肢を増やすための制度や政策も現れ始めた。その一方で、内助の功という表現があるように「女性は家庭」という考えも根深い現在の日本。女性の側でも同じように、働きたいのか、それとも家庭に専念したいのか、幸せについての葛藤がある。女性のあり方が変化する

中で、どのように個々人が自分の幸せを定義できるのか。また、現在取り入れられているのは欧米の女性進出をロールモデルとしているが、日本と欧米の雇用形態の違いから、うまく機能しないのではないか。

こうした問題意識を出発点として、それぞれのメンバーの家庭のあり方という身近な部分から、在宅勤務制度は広がるのか、日本人の働き方のメリットデメリットなど、働く仕組みについても広く理解を深めた。

各論：個人的アイデンティティの形成と教育（担当：吉村 彩）

課題図書：「学校と社会」

自分が何をしたいのかを考えることのできる教育はどのように実現できるのか。をテーマにデューイの思想を学んだ。学校は生徒が活発に生活し、学校内での学びと社会とがつながっていることが必要だとするデューイの主張は概ねメンバー全員が賛成した。しかし同時にOECDによる問題解決能力において日本の順位はそれほど低くないことや、教育の理想とされてきた北欧の教育の課題などにも焦点があたり、教育の評価の難しさについても議論が及んだ。

各論：社会でのコミュニケーションのあり方（担当：大野 友）

原発産業内では原子力技術の開発が喜ばしいこととされるが、それが社会全体での利益にかなっているのか。トランプ大統領は民主的プロセスによって選ばれたが、果たしてアメリカ国民は自国の大統領に自信を持てるのか。参加者の一人である大野友が、普段のニュースに接して疑問に思っている事象を解くカギはコミュニケーションの欠落にあると感じていることを手がかりに、“Social Design for Lively Communication”をテーマに議論を深めた。

熟議民主主義とは何か、直接民主主義の可能性とその実践例の検討（高知県大川村）といった政治分野におけるコミュニケーションのあり方から、グーグルジャパン東京本社やル・コルビュジェの建築、フーコーの環境管理型社会などの、空間のあり方とコミュニケーションの関係についてまで話は広がった。特に、空間のあり方とコミュニケーションの関係については、小布施町の話などの具体例を検証しながら、どのような空間が人々の日常的なコミュニケーションを活発化させうるか、という議論を重ねた。

▼防衛大学校研修・沖縄研修

課題図書：「安全保障とはなにか」

防衛大学研修、沖縄県週に向けて、日本の安全保障に関する課題図書を1つ選び、議論を進めた。防衛大学研修については、防衛大学の学生とお互いの興味のあるトピックや、話したい議題についての連絡を取り合った。私たちの分科会では、その中から最終的に以下の3つの質問にまとめられた。一つ目は、「現在の安全保障の思想を理解した上で、沖縄基地のあり方はそれとどの程度合致しているのか」、もう一つは「そもそも国を単位として考える時になぜそれを守る必要があるのか、国防とはそもそも何か」という問いである。最後の問いは、「それぞれの防衛大生が何を専門にしている、興味関心はどんなところにあるのか」という学生個人に迫った問いである。防衛大生からは、そもそも普段自衛隊はどのようなイメージを持たれているのか、自衛隊が必要であると思うか。などの質問があった。

■本会議中の議論

本会議は、日本側、アメリカ側が事前に準備してきたテーマについて議論するのと、本会議最中に決めたテーマについて議論するのとの半々程度の比率で行われた。初ミーティングでは、「現代における思想の価値」という分科会テーマそのものへの問いについて議論した。そもそも思想とはなんなのか？なんのために思想について議論するのか？（思想について議論することの意義や価値とは何か？）といった疑問が生まれてきた。そして、思想とは時代を通じてある一定以上の影響力を持つような普遍性を志向した（実際に普遍的であるかは重要ではない）考え方やイデオロギー（社会通念）のことであり、大きく人間と社会の本質や未来を洞察する上では、欠かせないものものだという認識がとれた。二回目以降は、できるだけ具体的なトピックを扱った。「女性の社会進出」を扱った議論では、日米における「労働観」や「家族観」、「結婚観」、「大学教育」の違い等、多岐にわたる側面から議論した。特に、「労働観」における日米比較の際に、「individualism」や「collectivism」といった集団的価値観がその根底にあるのではないかとといった仮説を考えるのが個人的に興味深かった。その後も「教育」にフォーカスした議論（善い教育とは何か？国や民族によって最適な教育に違いはあるのか？）や、共同体や集合知に関する内容の議論（あらゆる専門が有機的に結合されるような共同体はどのようにデザイン



すればよいか？集合知の活用はいかなる可能性があるか？）をした。

ここで、少し議論する際に生じた障壁について話を譲ろう。英語母国語話者と第二外国語として英語を身につけたものが議論するのはやはり難解を極める。何も工夫をしなければ。初ミーティングでは、日本側でも英語が得意な人と、不得意な人とで議論の理解度に関きが合ったように思える。しかし、幸いなことに私たちの分科会には英語も日本語も流暢な人（米国長年滞在の日本人）が二人いた。彼ら（彼女ら）に言語的な問題による理解度の違いが生まれているときは、サポートしてもらおう（途中で議論を中断して、議論の流れを通訳してもらった）ことで全員の理解度をある程度そろえたまま話し合うことができた。

そして、話を戻す。具体的なトピックを満足いく段階まで議論した後、ファイナルプレゼンテーションにむけての準備が始まった。ファイナルプレゼンテーションでは、「私たちが話し合ってきたことを報告する」といった報告会というニュアンスではなく、「聴衆に何を感じてどう動いて欲しいか？」といったプレゼンの観点から内容を構成した。私たちが、本会議中議論してきたことは、具体事例が多かったのだが、「聴衆には、生き方や考え方について根本的に振り返るきっかけになって欲しい」という理念のもと、かなり抽象度高めの内容に設計した。思想（より普遍を志向した価値観）はどのような過程で育まれるのか？また、それは人間や社会（環境）にどのような影響を及ぼすのか？また、そういうことについて今考えることの必要性や意義とは何か？といったことについてプレゼンテーションをして、私たちの分科会が一夏かけて議論してきたことの集大成とした。

■総括：思想分科会の4か月を振り返って

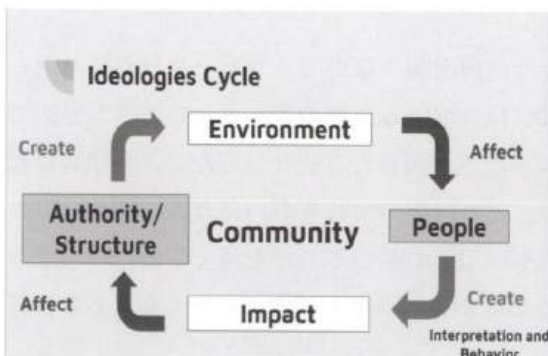
思想分科会は、信念対立の克服のために持つべき心理的態度や認識としてどのようなものがあるか議論をしてきた。メンバーが全体として到達した結論は以下の二点にまとめられる。

- ①お互いの信念の間にある「ずれ」の存在とその程度や特徴を認識する必要がある
- ②その間のずれを埋めていくには「己を省み相手を知る」ための丁寧で誠実な議論を積み重ねていくことが重要である。その際に、分科会の議論を通して考案された Ideology Cycle というツールが理解を助ける

一点目は、5月の春合宿から本格的に始まった準備期間のなかでメンバー全員が繰り返し感じてきた。同じ言語で話しているはずなのに、持っている知識の差が大きいことが原因でまったく話がかみ合わなかったり、理解度に大きな差が現れたり、といったことが頻繁に起こった。お互いのことを深く知る前の段階では、その理解のすれちがいは曖昧で輪郭のぼやけた「わからない」という心象に過ぎなかったものの、お互いのことを深く知っていくうちに段々と知識と理解のレベルに差があるということがはっきりしてきた。たとえばある分科

会メンバーが頻繁に口にしていた「実存主義」という言葉の定義にずれがあることから議論が漂流したり、「脱構築」という言葉の定義が共有されていなかったりしたことが原因で、ある特定のメンバーの間だけで議論が進むという事態が起こった。分科会議論での例が示すように、物事に対する知識・理解レベルやその見方の違いが、相互不理解を生み出している原因になっていることは往々にしてある。しかもそうした差に気づくことは、均一性を前提とする日本社会ではかなり難しい。したがってその差をまず認識し受け入れることが相互理解、ひいては信念対立の克服に到達する道の最初であることがわかった。

では、その差を埋めるのに必要なことは何か。信念同士の間横たわる違いの種類や当事者によって大きく異なるものの、共通して恐らく言えることは「互いの言動や行動の原因を知ろうとする誠実な態度」だろう。本会議中のある晩、メンバー全員がある部屋に集まって心を開いて自分たちの想いを話し合ったことがあった。日米学生会議における意気込みや分科会の参加目的、興味のあることや将来の目標など、一見して議論には直接関係のない話題が中心だった。その中には分科会を通して徹底的にイデオロギーと社会の関係を思索したい人、チームビルディングをしたい人、大学講義で得た知見をファイナルフォーラムで発表したい人など、話すうちにそれぞれの目的が表に現れてきた。その日を境に、単なる学術的な議論に終始するのではなく、互いの違いを飛び越えてメンバー同士が相互理解に達しようとする努力ができるようになってきたと思う。そのような文化が分科会の中で徐々に作り上げられていく中で、お互いの関係性も変質していった。ファイナルフォーラムで発表した Ideology Cycle という思考ツールはイデオロギー・人間のありかた・社会のそれぞれが相互に影響をし合い創造していく仕組みを示したものであり、それは単に抽象的な議論から生まれたのではなく私たちの実体験から始まっているのである。



■分科会メンバーの声

▼大野 友

「現代における思想の価値」という名を冠した分科会に参加することで私は何を得られたのでしょうか。他の分科会、他のメンバーでは決して得られなかったものとはいったいどのようなものがあるのでしょうか。分科会活動を振り返る中で、そのテーマについて考えを巡らせてみたいと思います。

主な議論のテーマとしては、その名が示す通り、現代社会はいかにしてイデオロギーを生み出し、社会を形作り、最終的に私たちにた影響を及ぼすのか、といったものが挙げられます。いつの時代も、人々の間に共有される思想は時代のうねりを生み、体勢を変革させ、次の時代を創り出す巨大な原動力となってきました。マルクスに端を発する共産主義は20世紀後半の世界を大きく二つに分けて戦争の一手手前まで行き、植民地獲得競争に後れを取った工業国は全体主義というイデオロギーを国内に敷くことで連合国に全面戦争を仕掛けるに至りました。現代において支配的なイデオロギー（思想）はどのようなものがあり、それは現代社会においてどのような役割を果たしているのか。分科会では、様々なバックグラウンドを持つ日米双方の学生が積極的に議論に参加しました。

言うまでもなく、そのような環境では数えきれないほどの気づきが得られます。イデオロギーと人間の関係を示したループ状の図を政治学専攻の学生が提案したかと思えば、経営学専攻の学生からは女性の社会進出に関して鋭い知見が数多く出されました。議論が最も盛り上がった場面は、「多様性を認めないというイデオロギーは、多様性を尊重する価値観の中で受容できるか」という問いから生まれました。モラル相対主義（moral relativism）と倫理多元主義（moral pluralism）という二つのイデオロギーが侃々諤々の議論の末に発見されたとき、私たちはその矛盾に立ち向かう力強い武器を手に入れました。

3週間続く熱い議論。もちろん、その道には大きな困難も待ち構えていました。「この時間は、基本的に君たちのものだ」とRTコーディネーターから告げられた時、海図のない航海に突然放り投げこまれた感覚に陥りました。分科会の目的や到達点、運営する方法まで一から自分たちで築き上げていかなければならない。しかも、そのうち4人はつい数日前生まれて初めて会った、よく素性の知れない人達。運営方法や議論のスピード、話し合うべきトピックについて一つ一つ合意を取った上で進めることは非常に困難で、大小の衝突数多く経験しなければなりません。それに加えて個人間の英語力の差や認識方法の違いなど、配慮すべき点は一人では到底抱えきれないもの。リーダー一人にずっと頼るのではなく状況をよく見て自分の役割を的確に判断し、ある時はリーダー役となっているメンバーを支え、またある時は自分が積極的に議論をリードするなど、高いレベルのチー

ムワークが求められました。長時間の RT Time を前にした少し憂鬱な気持ちは、きっと忘れることはないでしょう。

そうした困難を乗り越えて迎えた8月26日のファイナルフォーラム。チームメンバー全員が力を合わせて取り組んだことで前日までにほとんど完璧な仕上がりを見せていたプレゼンテーションは、大ホールという会場にも臆することなくさらに輝きを増しました。「イデオロギーと人間の相互作用」という抽象的なテーマにもかかわらず質問の手が多く挙がったのは、きっと妥協することなく徹底して議論した結果なのだと確信しました。

分科会を通して得られたこと。チームワーク、メンバーを気遣う力、初めて会う人と丸裸の状態での議論する知的体力、思想に関する知識と理解。数え上げればきりがありません。しかし、JASC が終わって3週間が経とうとしている今ははっきり言えることは、「学術的議論を超えた心の絆」が何よりも大切だったということです。私はRTメンバーとのリフレクションの中で「みんなと家族のような関係になりたい」と思いを打ち明けました。大学時代という二度と戻ってこない貴重かつ濃い時間を3週間も共有する仲間との関係が、希薄なまま終わってよいはずがない。そんな思いから打ち明けた3週間後、その言葉通り家族のような関係を築くことができたと思っています。Once a JASCer, always a JASCer. そんな言葉を信じて、分科会で得られた貴重な経験と仲間との思い出を胸にこれからも JASCer として精一杯生きていきたいです。

▼押切 彩

日本側の分科会メンバーと4か月過ぎし終わった今でも不思議に思う。それまで知り合う由もなかった者同士が、初めて5月に顔を合わせ、1週間も経ったころには顔を見ないぐらい仲良くなっていた。一見、まったく違うタイプの人間たちで、所属も工学部やら政治経済学部やら。無理やりにも引き合わせられなければ、こんな素晴らしい人たちが存在することにも一生気づかないままであつたらう。

コーディネーター含めた私以外の4人は全員、互いの意見に耳を傾け、尊重し、且つ自分の意見もしっかりと提示した。自分の知識に驕ることなく、多様なトピックに喰らいつき、柔軟に物事を理解する姿勢があった。私にはすぐに理解しがたい話に突入したときは、いつでも噛み砕いて分かり易く教えてくれた。本当に優秀というのはこういうことを言うのかと感銘を受ける場面に幾度となく出会った。そのような仲間にも恵まれ、尊敬の気持ちを保ちながら、教育/女性活躍/構造構成主義/ソーシャルデザインについて幅広く話し合った。本会議では、自分の英語力に常に不安はあったが、相手の言わんとすることを理解しようとする姿勢はアメリカ側参加者も変わらず、だからこそバイリンガルに頼り切りではなく、拙い言

語力でも積極的に発信することで自分の殻を破れたような気がする。

もちろん、議論の衝突だけにとどまらず、人間関係のすれ違いも多少あった。周りに気を遣って自分の中のもやもやを隠す人もいたが、そのようなミスコミュニケーションさえも打破できたのは、自分の気持ちを吐き出す勇気や、もらったアドバイスを素直に受け止める心を持っていたからだと思う。

「所属は思想の分科会でした」とJASCで自己紹介をすると、随分と難しそうだねという反応が返ってくることが多い。実際、「思想」というワードから想像するのは〇〇主義や横文字の小難しいものであるし、今でもそのような類の言葉は正直よくわからない。それでも、JASC69の思想分科会に入れたのは人生の財産になるであろうし、そんな分科会を作れるコーディネーターになりたいと邁進するのみである。

▼野間 康平

分科会について何を書きたいのか、伝えたいのか。そもそも分科会とは何なのか？私にとってどういうものだったのか？そういうことについて考えたく頭を悩ましていたが、何も出てこなかった。半年以上も所属していた分科会の価値を明確に言語化できないなんてことがあっていいのだろうか。万策尽きたかのように見えた矢先、あるイメージが頭の中にふと浮かんできた。それは、見覚えのある光景だった。

何が浮かんだかは言うまでもない。私にとっての分科会の価値は、大野 友、押切 彩、新郷 雅弘、吉村 彩（敬称略）一人一人の人間であり、またその結合体が生み出す知的ダイナミズムであり、彼らの考え方、生き方から影響された刺激の総量であった。そんな閃きもあって、この場は、手短であるが、一人一人との出逢い、学びの振り返り、そして感謝の気持ちとこれからの期待を伝えることに徹する。

大野 友。洋画フォレストガンプのチョコレートボックスの名台詞が好きと聞いた時、彼とは人生観や死生観といった根本的なところで通じるところがあるに違いないと確信していた。その予想は間違っていなかった。彼とは何かの話題について話すと必ず、その物事に対する自分の考え方や捉え方といった「価値観」にまつわる話に帰着するのだった。私はそれがなんとも言えないくらい心地よく、楽しかった。「一回しかない人生を私は何に使いたいのだろう？」そういった問いはなぜかいつも私の中心課題であり、恐らく彼の中心課題でもあったろう。「一つしかない自分の命の意味や役割ってなんなのだろう」と考え悩みながらも、「今」という一瞬一瞬を懸命に生きている彼の姿には多くのことを学ばせてもらったのだと思う。本当にありがとう。どこまでも夢想家であれ。そして、どこまでも「今」を喰らえ。お互い成長した姿で未来に出逢い、またそこで夢を語ろう。

押切 彩。彼女のノリは本当に好きだ。私のくだらないジョークに付き合ってくれる彼女はなんて優しいのだろうかと常々思っていた。プライベートはお茶目な反面、公的な場では目上の人などに丁寧な礼儀作法を行える彼女は、私なんかよりも随分「大人力」が高かったように思う。しかし、私が彼女から一番刺激を受けたのは本会議も大詰め of 次期実行委員選出選挙の時だった。お世辞やフィルターを抜きにして彼女のスピーチに一番心を動かされたのだ。その堂々とした振る舞い、流暢な英語、聴衆へのアテンション、熱い思い、明確なヴィジョン。半年前彼女に初めて会った時は、まさかあんなスピーチができる人だとは思っていなかった。元々の才能なのか、この半年間での成長なのかはわからないが、現時点での彼女は間違いなく次世代を引っ張っていく女性リーダーの気質とスキルを持ち合わせていると思う。彼女からは多くの新しい視点ももらった。本当にありがとう。未来を創る一人として、強く、そして優しい女性として輝いて欲しいな。死ぬまで、応援してるよ。

吉村 彩。彼女はほんとに分科会というチームに欠かせない存在だった。チームのもつ知的資産を有効活用するような知識経営的視点からも、チームの活気度、エネルギーという単なる定性的観点からも彼女の存在がチームにもたらした影響は大きいと思う。個人的に印象に残っているのは夜遅くまで民泊を借りて話したことだ。「自己の欲望」や「存在意義」にまつわる話だったかな。「私が心の底から求めているものはなんなのだろう?」「私が組織にいる意味ってあるのかな?」そんな問いが彼女の素直さと思考傾向を媒介として現れてきた。その時の彼女の苦悩しながらも、確かなものを求めて真剣に考えている姿勢や表情が忘れられないのだ。彼女との関係は哲学的課題と現実的問題が複雑に絡み合ったあの深夜の対話を超えて急激に親密になったように感じている。日常的に感じる感覚や感情に対して真摯に向き合い、恥じることなく人と対話する姿勢には心から尊敬している。上記の問いに対して、いつか分かった時には、報告してくれると嬉しい。自分だけが気づく、小さな問いに対して真剣に対峙し続ける人生を送ってください。ずっと応援してる。

新郷 雅弘。彼とは話があうだろうかと察知したのは出逢って間もない頃だった。理由は単純、この世界の根本的な部分に絶望していたからだ。「永遠に真理に辿り着けないのではないだろうか?それなら生きている意味はあるのか?」彼にまとりつくのは肉体の有限性に対する真理への道のりの無限性という埋めることのできない大きな壁に対する悲劇的感情である。日々真理と向き合いたいと思いつつも、命が朽ち果てるまでにその景色は見えないのだろうかという不安と闘っていた私は、同じようなことを考えていた彼に出逢い少し安堵したことを覚えている。関係が深まるにつれ、抽象的、理念的な話だけではなく、具体的な人生の意思決定、選択の話もするようになった。「これから数年間何をして生きていこうか?」そういった話をする際も必ず、世界の根源的な部分とは接続していた。彼に出逢えた

ことを心から嬉しく思う。彼は思想家なのか、芸術家なのか、起業家なのかわからない。ただ必ずやいつか何らかの分野で人類に新しい価値や考え方を吹き込んでくれるに違いない。生命が尽きるまで、絶望の中にあるであろう希望に向かって共に歩み続けよう。

以上、私の人生に多大な影響を与えてくれた素敵な4人のメンバーに心からの感謝と敬意を表して本報告書を締めくくりたい。

▼吉村 彩

どのように思想というものを学校で教えるべきなのか。もともとはこの問いに興味があった思想分科会に入った。しかしこのトピックに関してはほぼ議論しておらず、代わりに全く予想外のものが得られた分科会だった。

8人という大人数での議論は、チーム内での衝突やモチベーションの喪失が起こるかもしれないという不安もあった。しかし実際は、分科会の時間以外にも集まって議論の方向性や内容について夜通し話し合った。分科会の1人ひとりが、その空間を良くしようとし続けたのだ。今までどんなことを感じて人生を歩んできたのか、興味のあること、嬉しかったこと、恥ずかしかったこと、すべてではないが話すことができるメンバーだったと思う。分科会の議論だけでなく、ひとりの個人としてお互いに興味を持てるチームにいたことがとても嬉しかった。

同時に分科会が始まる前から不安だった自分の知識不足、能力不足には予想通り直面した。JASCが終わった今振り返ると、臆病な自分に気づかないほどの言い訳をして逃げていたように思う。思想分科会での議論は、分野が難しく、理解するだけで精一杯だった。だからなかなか自分が思考するまでに至らず、発言ができないことが多かった。これは私が終始思っていたことだ。

けれど今、あの時議論を途中で止めて、わからないということが怖かったのではないのか。思考停止の状態の自分をさらけ出すのが怖かったのではないのか。議論に関心が持てなくなった自分を認めるのが嫌だったのではないのか。と思う。思考が止まっている中で、その状況を変える行動を自分は取っていなかった。知識や議論の経験が無いならせめて気合で頑張ると考えていた自分が、議論に集中すらできなくなっていることを認めるのが怖かったのだ。きっと。今、ゆっくり振り返ることでやっとそう感じていたことを認識できるほどに、自分は巧妙に言い訳をしてあの一ヶ月を過ごしていた。ではあの時どうすればよかったのか。なんでもいいから発言すればいい。わかんないといえればいい。何か一言でも発言すれば、理解度も関心度も大きくなる。この夏一回しかなかった日米学生会議という場は、本当に貴重で、大好きな人たちに囲まれていた。何かを投げたら必ず返してくれる環境だったと思う。だか

らこそ、その機会を最大限に生かしたかったと後悔している。今後また、こんな状況になったとき、うまく言い訳する自分に気づいて、全力でぶつかれるようにしたい。

後悔はあるけれど、この夏思想分科会に所属することができて本当によかったと思う。

■分科会コーディネーターによる総括

▼新郷 雅大

報告書に書く文章ということで、色々考えたけれども、思想のみんなが大好きすぎて何も客観的なこと書けないという結論に至った。たまにはいいかなと思って、諦めた。論理的一貫性も、諦めた。

この文章を読み直すのはいつになるのだろうか。その時はみんなどうなってるだろうか。今思うと、一夏って本当に短くて、夢のようだったけど、それでもこの分科会メンバーは確実に出会って、本当に居心地が良くて、出会わなかった自分を想像するのが怖いくらい。

3月22日に選考合宿が終わった日が懐かしい。その日から、自分の選んだこの4人が出会って、何を一緒に見て聞いて、お互いで議論していくのか、楽しみで仕方なかったのを覚えている。

自分なりの一人一人の他己紹介。

・最初に渋谷の居酒屋であった時、「いつも吉村と呼ばれているので、吉村って呼んでください」という謎の自己紹介をかました。圧倒的マイペースなのに、めちゃくちゃ優しく、ミーティング中全然しゃべんなくて心配してるのに、本人いわくめちゃくちゃエクサイティングしてるらしい、クールなのかワームなのかわけわかんないやつ。ほんとに優しすぎるから、毎回いじりすぎちゃって、それでちょっとむすってするのに気づいて、心の中で「あ、ごめんなさい」っていつも謝ります。ごめんね。

・ムードメーカーで普段は思想の他のメンバーを縦横無尽にいじり倒す。やたらと自分のこと卑下するくせにやたらとプライド高くて、でも本当に頑張り屋で、一番着実に成長した。春合宿のNagy先生の講義を受けた後の落ち込んでた顔が懐かしい。自分が発した一个一个の言葉を本当にしっかり真摯に受け止めてくれて覚えててくれるから、こっちもちゃんと向き合って真剣に言葉を選ばなきゃって襟を正されます。

・まじで思想の良心で、忙しいのにいつも議論を引っ張ってくれて、終わったら颯爽と次の別のミーティングに消えていくのに、なぜかお酒めっぽう弱くて、飲み会の席では飲む前から酔っ払い。ちなみに酔っ払うと幼児化する。本当にみんな心から頼みにしてたし、時には寄りかかってしまった気がして反省している。それでも自分が苦しめることはおくびにも出さず、みんなのことを第一に考える姿勢はいつか壊れないかちょっと心配だけど、尊敬するし、見習いたい。

・ヒゲ生やしたおっさんかと思ったらメガネとったら意外とベビーフェイスな、でも頭の回転クッソ早くて様々なことを本当に深くまで知っていて、ミーティング中は口が止まらない博識変人。直感と理性の高度な現象学的融合を目指している（と思われる）。関西人だからユーモアのセンスもあって、憧れる。こいつと出会うために思想RTを作ったんだと思った。

これが将来どうなってるか楽しみ。三つ子の魂百までって言うし、そんなに変わってないことに賭けます笑。

「現代における思想の価値」分科会。名前を聞いてどのような議論が行われるか想像できるだろうか。この分科会は、大学に入った時から感じていた、全ての学問を縦横無尽に駆け巡り、想像力の翼を広げて世界を見てみたいという学生だからこそ許される青臭い思いから作った。どのような議論がなされるか、参加者の興味関心や得意分野によって無限に変化する。だからこそ面白いと思ったのだが、参加者からしたら丸投げされたかのように無責任な感じがすると思う。自分は参加者への絶対的信頼というのを言い訳にして、自分も一参加者のようにただただ面白がっていただけなのだが、参加者からすると、とんでもない無責任なコーディネーターのここに来てしまったと思ったかもしれない。とても申し訳ないです。でも、その無責任な思いを本当に分科会のメンバーは実現してくれた。

自分たちが議論に選んだテーマは、教育/女性の社会進出/思想対立の解消/コミュニティデザインであったが、それ以外にも防衛大研修のために安全保障の思想的な議論もしたし、ミーティングの後も自身の人生観についてなど、たくさんいろんなことについて雑談した。

事前準備活動も本会議も、毎回のミーティングは本当に楽しかったし幸せだった。みんなが分科会コーディネーターだからって特別扱いしたりなんかしなかった。だから思う存分意見が言えたし、自分もミーティング前には必死で読書して勉強した。

唯一心残りなのは、本会議中実行委員活動に追われて、なかなか分科会の議論に顔を出すことができなかったこと。一人のメンバーから、「いままでまっさんは当たり前のようにメンバーの一人としていたから、本会議に入って「実行委員ってそういう感じで関わるんだ」って感じた。」と言われ、それは自分も気づいていたことであったからこそ、ショックだったし、自分の無力さを痛感した。結局、自分の担当が第三サイトの三重だったこともあって、最後までなかなか顔を出すことができなかったが、しかしそれでも愛媛サイトのある夜、コテージのベンチで「自分は実行委員だけれども、一人の分科会メンバーとして接して欲しい」と打ち明けた次の日、RT ミーティングでいつものように遅れて顔を出しても自然に受け入れてくれて、気遣ってくれて、本当にこの分科会でよかったなと思った。

アメリカ側の参加者も本当にみんな優秀で、優しく、感謝している。口では「ぶっちゃけめんどくさくないですか?」とかいいつつ、日本人のアメリカ側参加者としての役割に悩みながらも向き合って、日本側を気遣ってくれた絵美華。RT のみんなを議論でもそれ以外の息抜きでもぐんぐん引っ張ってくれた仁。最年少にもかかわらず、ミーティング中のミスコミュニケーションにストレスアウトをこらえて大人な対応でRT をまとめてくれた Carolyn。みんなのことを大事に考えてくれて、最後には一人一人にそれぞれにあったプレゼントをくれた Duo。

RT のメンバーは、一人一人がそれぞれの壁にぶつかっていて、でも自分が何か手を差し伸べなくても、それぞれが自分の向き合い方で自分に向き合って、自分なりに答えを出しながらみんなで一歩ずつ前に進んで、本会議中はコーディネーターとして自分は用済みだなどまで感じた。でも、それはネガティブな意味ではなくて、みんなとても頼もしかった。

そして、最後にアメリカ側コーディネーターだった Eric。自分の分科会へのこだわりが強すぎて、分科会説明文を書く時に全然ニュアンスを伝えられなくて一人で暴れてたのを、(一回キレたけど) 文句も言わず本当に話を汲み取ってくれようと耳を傾けてくれた。本会議中も、頭良すぎていってることについていくのがいっぱいいっぱいだったけど、分科会の方針とかいろいろなことを深夜まで粘り強く議論してすり合わせた経験は、実行委員をやりながらも参加者のようなチャレンジ精神を持ち続けなきゃなと思い出させてくれた。本当に感謝しています。Eric と一緒にコーディネーターをやれてよかった。

これ以上書くと、内輪の痴話話みたいになるのでやめます。続きはまた reunion して話しましょ。いつまでも集まる RT でいたい。

この思想 RT の一員でいられたことが本当に幸せでした。みんな本当にありがとう。



“Media, Morality, and the Governance of the Press” Roundtable

「報道の倫理」分科会



コーディネーター
中川 奈津子



コーディネーター
Jennifer Lim



新井 英貴



大野 あゆみ



Jacques Chaumont



Xingshen Zhang



豊坂 竹寿



藤井 一樹



Christina Zhou

情報技術の発達は、報道の意義とそれを媒介するメディアの在り方に大きな変化をもたらした。2011年にはfacebook上で拡散された一つの映像がチュニジアにジャスミン革命を引き起こし、現在シリア周辺の難民はSNSで自ら世界にSOSを発信する。

今や情報は距離を問わず秒単位で世界中に広がり、個人の発言がもたらす影響力は急激に拡大した。しかし、だからこそデジタルメディアの隆盛は、私たちの倫理観を問う。より多くの情報を提供することが正義で、全てを知ることが人々の幸せか。権力の監視機関としての役割が求められるメディアだが、批判のみで物事は自動的に改善されるのだろうか。そうでないとすればどこまでが真のメディアの役割か。これまで絶対的な影響力を持ち続けてきたマスメディアに加え一般人による市民メディアが登場し、21世紀における報道のかたちは多様化する。

当分科会では、それらの異なるメディアを切り口に、変化し続ける現代社会においても普遍的に存在する報道の倫理を追求する。

■はじめに

▼本分科会の意義

国内外で起こる社会情勢の変動をめぐって、メディアの影響力は無視できない。私たちはメディアを身体延長のツールとして、遠い世界の出来事を知る。新聞社やテレビ局といったマスメディアがその役を担い、空間的・時間的に限りがある大衆へと情報を伝えてきたが、その際に真実性が問われる。フランスの思想家・ジャンボードリアールは「湾岸戦争は起こらなかった(1991)」にて、ニュースとして大衆に消費される戦争と、実際に爆撃の雨となった地との乖離を唱えた。ブラウン管上に映る油まみれにされた水鳥、ナイラなる少女が証言した、敵国兵士がもたらしたという悪逆な暴動の数々。事実と信じられてきた画面上の出来事は、プロパガンダによるものだった。さらに現代は、インターネットの発達でひとりひとりが情報発信の主体となることを可能にし、各人のリテラシーが問われている。フェイクニュース、ポスト・トゥルースが世界を席卷する中、情報を取り扱う基準が、世界の市民にどう科されるべきか。また表現の自由を天秤に、情報規制の在り方はどうあるべきか。本分科会ではその倫理を問う。

▼参加者の報道の倫理を応募した理由

本分科会の開催に当たって、各自それぞれの関心を抱いたメンバーが集った。表現の自由、著名人バッシング、松本サリン事件報道、プロパガンダ。トピックがバラエティに富む中、メンバーは各々PIP (Personal Interest Paper) に己の関心事項を書き、また「メディアとは何か」という根本の定義設定に取り掛かった。



■事前準備期間の議論・活動

▼事前合宿・研修・FT

春合宿

各自関心のあるテーマを出し合い、共通事項や差異を確認、分類した。メンバーの興味に従ってトピックが拡散していったが、最終的に何を分科会の中心として据えていくか話し合い「情報発信者が心掛けるべき核の基準とは何か」という一つの命題を基点として、各自のテーマを議論していくことに定めた。

FT：ジャーナリスト 下村 健一さん

【日時】5月26日(金) 【場所】日米会話学院(東京都四谷)

元TBSキャスターとして、また菅直人内閣期に内閣広報官としても活躍し、現在はリテラシー教育にも携わるジャーナリストの下村健一さんにお話を伺った。これまで働いてきた経験をまとめて聴講した後、各自報道関係に関わる質問をした。下村さんは松本サリン事件期、冤罪だった方に取材を行い、スクープをしたり、鳥インフルエンザ事件で各メディアから大規模なパッシングを受けた企業に対し一定の評価を行ったりと、メディアが誤ってもたらず情報の伝達や、報道被害の現場に精通した方だった。分科会のメンバーの関心(オウム報道や著名人のパッシング等)とも一致していたため、各々大きな知見を得ることになった。

【FT後の議論・考察】

下村さんは、メディアのレベルは国民のレベルであるとおっしゃった。なぜメディアは、踏み込んだ取材/インタビューに欠けたニュース、芸能人のスキャンダルや細かなプライベートに関する報道を行うようになったのか。視聴者がそれを求めるからである。理性や真実を追究する姿勢よりも、そのときどきの感情に重みを置く一般大衆。その構造が生まれた背景を見つめなおし、メディアの責任はそれを見る私たちの責任でもあることをより実感し、どうすればより良質な情報の伝達ができるようになるのか、という命題を得ていくことになり、後の議論にてもメンバー間で共有した。

▼隔週オンラインミーティング

メンバーひとりひとりが週一回の議論を担当し、トピックに沿った素材(動画や本)を提示し知識の共有を行った後、それをもとに意見の交流をし合った。

表現の自由

犯罪の加害者に表現の自由はあるのか、また加害者の家族というだけで様々な権利から疎外されるのは許されることなのか。今回は加害者の権利という問いに対して、地下鉄サリン事件を引き起こしたオウム真理教の教祖、麻原彰晃の娘アーチャーと、酒鬼薔薇事件を引き起こし獄中で『絶歌』を執筆した酒鬼薔薇聖斗に着目した。オウム真理教についてのドキュメンタリー映画を撮影した森達也を参照し、アーチャーこと松本麗華が、極悪事件の加害者の家族、麻原彰晃の娘、というだけで学力では合格した大学にも入学を拒否されるという事態は、日本社会の非寛容さそのものであり許されるべきではないという意見や、酒鬼薔薇聖斗の『絶歌』は犯行の動機などもなまなましく綴っており、被害者の家族の気持ちを著

しく踏みこむものではないか、しかし犯罪者といえど表現の自由は担保されるべきなど、活発な議論が行われた。

沖縄とメディア

本年度の自主研修(沖縄)を通して、基地問題を報道という観点から読み解くこととした。地元ローカル紙が基地建設反対に傾いている意向があるとして、メディア(情報発信者)として適切かどうか議論され、意見が分かれる場面が見られた。オスプレイ公開イベント(フライトラインフェスティバル)の報道をめぐって、あるメンバーは米軍側に寄り添い、現地住民と融和のために起こしているアクションにも関わらず十分にカバーされていないと指摘したのに対して、他のメンバーは当イベントをオスプレイの安全PRとして捉えつつ、その報道を違和感のないものとして受け止めていた。捉え方の違いが、お互いの経験から発生していることが分かり、ひとつの報道をめぐっても、一定の角度から見ていたことに気が付いた。

ナチスプロパガンダ、芸術家

ナチスのプロパガンダとはいかなるものであったのか。プロパガンダの先頭に立った宣伝大臣ゲッベルスと、それに協力した映画監督リーフェンシュタールの2人に着目して議論した。ゲッベルスを通しプロパガンダの実態を検討した。当初はナチス支持の新聞が少数だった事実を踏まえ、ナチスが編集長を規制する法律の制定や検閲等を行い、報道機関を自主規制に追い込み、最終的に政府と報道機関を一体化させた過程を追った。リーフェンシュタールについては、芸術家がナチスに加担した責任はどこまであるのかという問いの下、話を進めた。彼女の前半生や作品を概観し、彼女がナチスに映画製作を強要されたのではなく自らヒトラーに近づき、進んでプロパガンダに関与したこと、プロパガンダ映画の成功によって、芸術界での地位を築こうとしたことを明らかにした。この意味で協力した芸術家達にも道義的責任がある、という意見が多く出された。更に討論は「なぜ人々がプロパガンダに染まったか」という大衆心理にも及んだ。推論としてまとまったのはプロパガンダにおける空間の使い方と徹底した美意識である。集会・行事等の規模と群衆特有の雰囲気、またプロパガンダにおける視覚的な美しさが、熱狂を生み出したのではないかと考えた。

プロパガンダ/PR

「広報の父」と呼ばれる、米国出身エドワードバーネイズの功罪に焦点を当てつつ、PRやプロパガンダの起源や、その違いについて学ぶことを中心にした。彼はジークムント・フロイトの甥であり、叔父の心理学をもとに大衆を動かす術を身に付け、戦争の正義性を扇動したり、大規模なキャンペーンによって特定の商品の消費を拡大させたり、などを行った。プロパガンダはより拡大的に解釈され、教育や社会問題に関しての民衆の関心度、また芸術的価値観をも左右するとされた。メンバーの意見として、プロパガンダはより”メッセージ

性やアイデオロギーを秘めており、PRはどれだけ市場的価値があり、付加価値を与えるかにとどまる、というものだった。日米におけるそれぞれのプロパガンダ/PR事情も考察し、国ごとにおける発展の違いも話し合い、メディア学の考察を高めた。

戦争報道（クリミア危機）

NHKスペシャル『そしてメディアは戦争を煽った』をみて、戦争報道について議論した。クリミア危機のロシアとクリミアのそれぞれのマスメディアの動向を取材した番組であるが、お互いが相手を批判しあい、ナショナリズムを高めて戦争へと国民を駆り立てていく様子取材したものである。そして番組の内容から1「この番組にはテレビが絶大な影響力を持つという前提があるが、実際にテレビは我々にどこまで影響を与えていると思うか」2「客観的な報道とは。この番組自体客観的でありえているのか」という疑問を提示し議論を進めた。1については、夕食時に家庭ではいつもテレビがついており、親がテレビのいう事はすべて鵜呑みにするなど、テレビの及ぼす影響は今なお大きいとする意見が多かった。2については、中立公平な報道というものが不可能にしても、それから目を背けず向き合う姿勢が大切なのではという意見などが出た。

テレビと家庭

メディア学の祖とされるマーシャル・マクルーハンの理論をもとに、テレビが家庭や社会に与える影響を考察した。まず、各メンバーが幼少期をテレビと過ごしたかどうか、という問いから始まり、その中で学生時代の過ごし方に大きな影響を与えていることが分かった。メンバーはテレビがない家庭で育った者が多く、学校で同級生が話し合うトピック(お笑いやドラマなど、テレビが中心)についていくのに苦勞をした、という思いを各自再発見した。ゴールデンアワーという“時間の感覚”を共同体の中に創り上げ、また近代化された家庭を象徴する存在(三種の神器の一つ)としても絶大な影響力を持ち、SNSといったソーシャルメディアが勢力を上げる中でも、改めてその存在が大きいことを実感した。

■本会議中の議論・活動

▼参加者が定めた分科会の目標・方向性

「議論を通してお互いのバックグラウンドを知る」をコンセプトに、初段階からひとつの議題に絞って議論するよりも、メディアをめぐる多様なテーマをそれぞれ話し合うことを中心とした。その方向性を決定づけた要因として、メンバーそれぞれが異なる角度からメディアに対して興味・関心を抱いていたことによる。上述したように、日本側参加者においてもトピックが枝分かれしていたが、アメリカ側参加者においても同様だった。各自自分の

専攻分野から観る点が異なり(統計学や医学、ジャーナリズム等)、その中でひとつに絞って可能性を狭めてしまうよりも、各々が互いに話し合いたいことを追究すべきと判断した。

1. 京都

京都ではまず、互いの顔合わせにはじまり、各人が興味を持っていることについてシェアし合った。また、はじめからファイナルフォーラムありきに議題設定するのではなく、毎回異なるトピックに触れ、その蓄積を結果として集大成のフォーラムに繋げよう、と議論の方針を定めた。



2. 愛媛

▼3.11 東日本大震災

愛媛では、それぞれが興味を持つポテンシャルディスカッショントピックを出し合った。更にそれらのトピックを、「情報発信者としての報道機関」、「情報を規制、公開する政府」、「情報を受信、発信する市民」に分類し、それぞれの各トピックにおける役割を考察した。その後は全員が何らかの意見を持つディスカッショントピックとして東日本大震災を題材に取り上げ、震災当時自分が何をしてきたか、どのようにして震災が起きたことを知ったかという各人の体験から、震災というカオスな状況においてメディアはどのような対応を行うべきかについて批判的な検討を行った。またこの議題はファイナルフォーラムの主題ともなった。

▼SNS

エンターテイメント、インターネットメディアが社会に与える影響力について、アメリカで社会問題となった事例に着目して議論をした。

痩せていることを美德とする人々がダイエットの報告をするサイトがあり、1日何カロリー摂取したのか、どんなご飯を食べたのか等を書き込める。これらのユーザーは過剰なダイエットにより拒食症となってしまう、1日辺りに必要な食事、カロリーを大幅に下回るなど健康被害も出ている。この事例を用いて、インターネット掲示板の功罪を議論をした。特定の仲間と繋がれる安心感を芽生えさせる一方、そのネット空間上のコミュニティに依存してしまい視野を狭めてしまい得るという意見も出た。

3. 三重（プレゼン準備、リフレクション）

本会議の半分が過ぎ、ファイナルフォーラムに向けての発表とそのリハーサルが迫る中、メンバーたちは各自行なってきた議論の集約先を定めることにした。アメリカ大統領選挙で氾濫したフェイクニュースの嵐、日本の3/11大震災をめぐってのメディアの報道の在り方、日・米の事例に共通して「社会的混乱(social chaos)の中でのメディアの役割」という要素があることを認識し、その中でメディアは混乱を最小限に押さえるためにどう規範を定めるべきなのか、という課題発表を行うことにした。情報の発信者を三つの主体に分け(個人・報道機関・政府)、その中でそれぞれが求められるべき基準を議論し、発表用のスライド作りに取り組んだ。

3. Media's Role in Chaotic Experiences

- Media could mitigate the expansion of chaos by delivering quality information consistently to people
- Yet it could also promote chaos

Promotion of chaos by media

- Propaganda in war
- Rwandan Genocide
- Spread of incorrect information as triggered by fear of the mass
- Fake News, contaminated crops in Fukushima

▼リフレクション

個性豊かな9人の分科会、合意形成を得るのは非常に難しかった。議論に行き詰まったことから、私達は「リフレクション」を行った。

議論に割ける時間が限られ、円滑に進まないことに対しての焦りや不満を一同が感じ始めていたのが第3サイト三重県での分科会活動であった。アメリカ側参加者を含め全員の興味心、議論したい内容は京都、愛媛を通じて共有された状態ではあったが、議題に挙げた数々の興味深いテーマからどのテーマを議論するのか。ファイナルフォーラムの場では、私達の議論の成果として傍聴者に何を伝えるのか。これらの二つについての議論を繰り返し、悩み苦しんだ。この緊迫した雰囲気、余裕のない状況の中リフレクションを行うことは結果的に大変価値があり、私達の分科会の雰囲気を劇的に変えたきっかけにもなった。各々が分科会、議論経過に対しての想いを率直に伝える、皆がこの想いを受け止めた後に反省、内省する。二週間議論を行ってきた者達で黙り込み、互いに目を合わし、一人一人の想いに寄り添って話を聞く。たったこれだけのことではあるが、私達の分科会の繋がりをより一層強くした分科会活動中の最初で最後のリフレクションとなった。

4. 東京（ファイナルフォーラム）

三重サイトの終盤、リハーサルで完成させたプレゼンテーションを基点として、より質を高めるべく、発表の仕方を中心に全員で議論を重ねた。最初にテ



ーマの基幹となっている「メディア」と「社会的混乱」の定義を鮮明にさせ、イントロダクション・コンクルージョンのパートを作り順序を整理させた後、メンバーは各自のパートを補強するためにリサーチを重ね上げ、より説得力のあるものにした。全体として発表内容を完成させた後、グループでのスピーチ練習を幾度も重ねた後、本番に臨んだ。

■分科会としての結論・総括

出身も、置かれてきた家庭環境も、これまで見てきた景色も内で構築してきた価値観も異なる5人が集まり、メディアという一つのトピックを多方面から議論する。つきまとう「学生の議論でなにが成し得るのか」という疑問、言語の壁、直面する自己理解と他者理解の限界、メンバー間の温度差や興味分野の相違など、上げたらきりがなほどの障害や、もっと率直に言えば「面倒くささ」を抱えながらも議論を続けることを強いられるのが日米学生会議の分科会活動である。理解されることを諦めて内に抱えていた想いが受け入れられる感動もあれば、言葉を尽くしても伝わらないもどかしさや悲しさもある。そもそも自分の熱は本当にここに向いているのかという迷いや、これだけ異なるメンバー間で共通する思いを見つけたときの驚きなど、鮮明に残る感覚や未だに消化できない思いなどはそれぞれ異なるだろうが、それでも全員が内にも外にも葛藤を抱えながら必死に走り抜けた4ヶ月間だったのではないだろうか。

■分科会メンバーの声

▼新井 英貴

事前活動、日本側参加者の人々とは議論をする、扱うことがタブー視されていることも度々議論をした。白熱する議論の際には、何度も自問自答を繰り返した後に、自分の価値観を何度も疑い、自身の固定概念から抜け出そうともがき続けたのが分科会活動であった。分科会活動参加以前に抱いた「メディア」、「報道」等のテーマを扱うのであろうという予想とは大きく異なり、芸術、広告、扇動、人間心情等をの議論も行った。個性豊かな背景を持った分科会メンバーとは、幼い頃から抱いていた想い、違和感を共有することによって生まれる共感が何度も生まれ、当初は共有することに恐怖心を抱いていたにも関わらず、結果的に安心感、または喜びを感じる議論活動もあった。

さらに、本会議、アメリカ側参加者と議論する際には言語の問題、議論の方向性を定められない二つの問題が起きた。言語の問題を解決したのは、決して私達の英語力が急激に向上したわけではない。アメリカ側参加者が言語の壁、私達の言語能力について理解を示し、手を差し伸べてくれたからである。英語が理解できないと主張できる、英語から日本語の翻訳

に時間を割くことができる、これらを容易に頼める環境、関係作りをアメリカ側参加者が行ってくれたからである。英語を理解出来ないことを恥と捉え、相手の発言内容に対して「理解している態度を取る日本人」から「理解していないと主張する日本人」になれたきっかけは、アメリカ側参加者の協力があつた故だ。

また、議論の方向性を定める際には、個々人の興味関心、問題意識が異なるが故に難航した。自身の想いを主張する、「私は何故このテーマを議論したいのか」、相手の想いを理解する、「何故他の参加者はこのテーマを扱いたいのか」、この均衡を釣り合わせるために多くの時間を費やし、頭を悩ました。

しかし、これらの大きな二つの壁を乗り越えられることにより、報道の倫理分科会の中で「相互理解」という言葉が見え始めてきた、見つけ出した瞬間でもあつたのではないかと考える。個性豊かな集団だからこそ、合意形成には苦勞をした。文化、言語の違いがあるからこそ、理解に苦しんだこともあつた。しかし、日米の学生が互いに寄り添い合い、協力することによりこれらの問題も解決されたのである。

報道の倫理分科会の一員として数多の議論、困難を経験したことにより、学術的な議論の知識、知見を得たのみならず、新井英貴の今後の人生にも大きな影響を及ぼすであろう物事の見方、姿勢等の重要なものは、この分科会活動から学ぶことが出来たのだ。

▼大野 あゆみ

半年前。JASC のパンフレットをはじめて開いた自分を思い出す。分科会紹介ページを目で追い、「報道の倫理」に目が吸い寄せられた日のことを。

そこに記されていたことは、あまりに壮大で。自分が議論に貢献できるのか、私には予想さえつかなかつた。二次選考の前夜まで、漠とした不安が私を包み続けた。

だからこそ、面接では、自分の思いの全てをぶつけようと思った。全てをぶつけて駄目なら、それでいい。そんな覚悟で臨んだ。

そして、私が拙い言葉で語った情熱は、受け止めてもらえた。第一志望の分科会に、無事受け入れてもらうことが出来たのだ。そして、全く違う魅力を持った四人の同志との議論が始まった。

この中の誰が欠けても、分科会は成り立たない。そう、思えるメンバーに恵まれたと思う。議論を提起する人がいて、豊富な知識や冷静な視点を提供してくれる人がいて、そしてその議論をまとめて前に進めてくれる人がいる。誰も役回りが、驚くほどぴったりとはまっていた。毎週の分科会ミーティングは、いつだって弾んだ笑い声に包まれていた。

アメリカ側の参加者が来てからの本会議。私には思うにまかせぬ日々が続いた。英語の壁。

すれ違う人間関係。議論時間の不足。主体的に議論を引っ張っていけない自分が、たまらなくもどかしかった。

綺麗なまとめ方は出来なかった。三週間で、満足いく議論がし切れたとも思わない。

でもファイナルフォーラムの後、全員で円陣を組んだ時、ああ、ひとつになれたな、と思った。皮肉にも、ひとつになれたな、と心から思えたその時は、別れの時でもあった。

完全燃焼は出来なかった。やり残したことは、振り返っても私の胸を締め付ける。それでも、あの日、重ね合った手の温かさは、今も私の心から離れない。

▼藤井 一樹

二次選考の後に届いた通知メール。「合格」の二文字。

大いに喜んだ私。と同時に、想定していなかった一文が書かれていた。

「報道と倫理」の所属である、と。ここから私の日米学生会議はスタートした。

メディア RT は、実は私にとって志望外の分科会であった。

といっても会議に参加できること自体に重きを置いていたため、ほとんど気にしていなかった。

実際、日本側の定期ミーティングではお互いの意見を交換し合ったり、今まで知らなかったことに対して見識を深めることになり、とても楽しんでいた。

モチベーションの違いを意識し出したのは、7月頃だったかもしれない。

各メンバー各々、“報道”や“表現の規制”に関して、個人のバックグラウンドや経験を含め、自分自身のことと絡めて興味を抱いていた。その中で、自分の人生と密接に関わるほど、特別に“これが特に唯一”といえるものがなかった私にとって、立ち位置を見失うことが時折あった。英語力にはある程度の自信があったが、しかし大切なのは、話す内容にどれだけ関心があり伝えたいことがあるか、であることを強く実感し、本会議において議論に深く関わりきれず、消極的になりかけている自分を見つけたとき、その弱さを実感した。「自分はなぜここにいるのか。」目的があるからこそ、普段の中でも積極性を発揮できる。その目標設定が自分の中で曖昧だったことが、一つの心残りだ。日々の密なスケジュールをこなす中で、自身を反省する時間が取れずにおり、RT タイムをどう過ごすべきか、より深く見つめておくべきだったと思う。

そんな悩みもあった中、私の持つ Points of You という心理カードゲームをやろう、とメンバーのひとりが提案してくれた。ある一つのテーマのもと、計 65 枚ある写真の中から 1 枚を選び出し、個人の経験を語る、というものだったが、普段議論が中心になる中で、どこか新鮮な時間を創れたと思う。特に一人のアメリカ側参加者が自身のこれまでを熱く深く語っ

てくれたことが、私にとって大きかった。自分自身、そのカードゲームでどこまで人の内側の部分を引き出せるか半ば確信しきれていなかったが、今まで知らなかった彼女の熱意ある側面を見つけることができ、そこに一つのやりがいを感じた。議論をしていくこともそうだが、お互いのことを知り合うこと。その面でわずかだが自身が関わられたことに、嬉しさを感じた。私にとっての分科会は、アカデミックな議論も一面あるが、そこからの躓きであったり、互いを知り合おうとする事の意義深さであったり、を学び取れた経験として大きかった。

▼豊坂 竹寿

RT という、とことん同じメンバーと向き合って議論する空間の経験は、自分にとってかけがいのないものになったと思う。「よかった」の一言では語れない葛藤や反省が、RT で得た最大の収穫だ。

報道の倫理、マスコミュニケーションという分野は、選考を受けた時点で自分の最大の興味だった。しかしこの分野の問題点や、そこから発生する社会問題は、メディアという業界で働いてない人間にとって実際的な限界が存在することへの無力感から、自分のメディアに関する興味も次第にマーシャル・マクルーハンのメディア論や、オングの文字の文化のような、思想的なメディア研究へと変遷していった。

日本側でミーティングをする時は、自分がそのような議題を持ってきてもみなと共有することができたが、アメリカ側と合流した時に日本側で議論したことがほとんど使えなかったのが心残りである。

これは、言語の壁だけでなく、ディスカッション慣れし、発言することが存在価値であるようなアメリカ式の教育と、テストに追われ受け身の講義ばかりの日本の教育との差にも起因するのではないかと感じた。

またファイナルフォーラムのプレゼンテーション作成においても、日頃から授業でプレゼンテーションをすることに慣れているアメリカ側がほとんどの構成を担当し、自分の発表するスライドしか作れない自分の実力を頼りなく思った。

本会議3週間の間に生じたRT内の亀裂は、人間関係の難しさを覚えた。腹を割って話せないことへの苛立ちや、相手を信頼できない自分の器の小ささに何度も失望した。

このように書き連ねてみると、RT ディスカッションがどれほど辛かったのかと思われるだろう。しかし、RT のメンバーと結ばれた絆は確かなものであり、彼ら彼女らとの胸襟を開いた会話は一生でそう何度も経験できるものではないと思う。

人と向き合う。たったそれだけのことの難しさ、大切さ。何より、人と向き合うことを通

して見えた知らない自分。全てがこれからの人生においてかけがえのない財産となるだろう。

■分科会コーディネーターによる総括

▼中川 奈津子

概して活発で社交的な人が集まる日米学生会議では珍しく、集団の中での自分というものに常にどこか怯えたところを抱え、自分の強みを発揮することに不器用なメンバーが集まったのが当分科会の特徴だったように感じる。そんな彼らの、徐々に表情が緩み、自分を少しずつ肯定しながらのびのび羽を広げ始める過程を一番近くで目にすることができたことが私のコーディネーターとしての最大の喜びである。

議論内容としては、当初から「メッセージや物語を表象し得る全ての媒体」とメディアというものを限りなく広く定義し、その上で持ち寄った各人の興味分野を掘り下げて議論する形をとった。「報道の倫理」という名の通り、安易な解決策の提示に意固地になることよりも、簡単に答えの出ない問題に対し頭をひねり、自身の倫理観を問い、それを他者と照らし合わせ思考を深めることを目的に据えた。「メディアリテラシーってやっぱり大事だよね」というフレーズで思考停止し、議論の本質から逃げ腰になることに常に自己批判的な目を向けながら各参加者の選んだトピックは、犯罪者の出版の権利の是非から始まり、ナチスドイツを代表例にあげたプロパガンダ、表現の自由の観点から見たヘイトスピーチ、戦争報道の在り方等であった。本会議が始まりアメリカ側参加者と顔を合わせてからは、自然災害等の社会的混乱とメディアのなし得る役割、引き起こしうる弊害に焦点を当てることとなった。

社会問題を学生が議論することの意義を問う声も聞かれるが、「自分はここに引っかかったんだけど皆はどう思う？」と昼夜LINEで記事がシェアされ、日常の景色の中に転がるあらゆることに突起を見つけ、議論を楽しむメンバーの姿は、大義名分があったわけでもなければ誰かに押しつけられたわけでもない、常に純粋な好奇心をエネルギー源にしていた私たちの分科会をよく表している気がする。何かを生み出したわけではないかもしれないが、4ヶ月間内外の葛藤に徹底的に自分を苦しめ、答えのない問いに向かい合った一夏が、この先社会でなんらかの変革を起こす糧になることは、メンバーへの期待であり自分の意志でもある。

胸の内を抱えてきた葛藤を恐る恐る外に出してみても、それを丁寧に取り受け取り疑問や批判を加えてポジティブな形で返球する各人の姿勢は分科会議論でもリフレクションの間でも一貫していた。何気ないミーティング風景の中で、思い詰めて共有された悩みがきちんと共感された上で笑いに昇華されていく、メディア分科会独特のあたたかい空気感に触れるたび涙腺が緩みそうになることも何度かあった。「これまで属した集団に自分の居場所を感じた

ことがない」「自分と社会の接点を感じられない」「バックグラウンドの特殊性故に必死に感情を排除しようとするあまり、自分の意見に自信が持てない」。学問的な議論と並行して、他者の力を借りながら各参加者を縛ってきたものに足掻くことにより生まれる人間的な繋がりと、自己肯定、他者受容のプロセスも、日米学生会議の分科会活動の魅力であると感じる。

末筆となりましたが、フィールドトリップの申し出を快諾して下さった下村 健一先生を始めとする、ご協力くださった全ての方に心より御礼申し上げます。



“Reexamining Minorities and Realizing Ideal Society” Roundtable 「マイノリティとマジョリティ：公正公平な社会の実現は可能か」分科会



コーディネーター
吉川 久美



コーディネーター
Erin Norris



小島 直毅



佐々木 彩乃



Ethan Mattos



Paola Resendiz



リー ロイ



渡邊 まり



Stephanie Spear

戦後世界人権宣言が採択され、公民権運動やアファーマティブアクション、移民・難民保護、女性の地位向上、富の再分配など、歴史的・構造的に差別されてきた様々なマイノリティの地位を改善する運動や政策が世界中で広まり、施行されるようになった。しかし、このようなリベラルな動きが高揚していった影で、マイノリティの要求を社会が聞き入れることを逆差別と感じるマジョリティが増加していった。移民に対する国民の恐怖がフランスの極右政党の台頭やイギリスのEU離脱を助長したことに続き、移民や女性などに対する差別発言を繰り返すことで多数票を得た2016年米大統領選等によって、近年ついにその存在が明るみに出た。

立場の弱い者を積極的に引き上げることは公正なのか、不平等なのか。多数派の原理はどこまで適用されるべきか。リベラルに対する反動が起こっている現在、どの集団のどのような要求を社会は反映すべきか、我々はマイノリティとマジョリティ双方の実情を正確に捉えながら議論する必要があるのではないだろうか。当分科会ではマイノリティとマジョリティの実情を、現場も訪ね直接体感し理解した上で、双方が満足できる公正公平な社会とはどのような社会か模索する。そのような社会を実現するため、個人や企業はどのような行動を起こすべきか、それを受けて政府はどのような政策を施行すべきなのか、考察する。

■はじめに

二度の大戦を経て、人類はすべての人に平等な権利が与えられることの重要性を認識するようになった。戦後、徐々に、マイノリティにも権利が認められるようになっていったが、近年そのバックラッシュともいえる動きもマジョリティの側から生まれてきている。権利の衝突の中で、誰のどのような権利が、優先されるべきなのだろうか。正義、公平とは何か。この分科会では、このような権利や差別といった問題に向き合った。「人」に向き合うトピックであるため、メンバー各々の、マイノリティ/マジョリティとしての経験や、自分の信念や人生を話し合ったりした。4ヶ月の議論の中で、互いにどのような人間であるのか、苦勞を重ねながらも、理解を深めあった。



■事前準備期間の議論・活動

1. 事前活動期間中の過ごし方や目標

日常会話と異なり、会議とは用意された場である。枠組みや話し合いの向かう先、こうした場の在り方に対する合意が必要となる。準備期間においてこうした「議論の外枠」に対する注力を欠けば、議論とは必ずしも会議とはなり得ない。むしろ、時に散漫なものにすら落ちぶれてしまうという危機に対して、我々は強く問題意識を共有できていたのではないだろうか。その証として、日本側参加者の本会議前における勢いには目を見張るものがあった。まずは、本会議までにどのようなスケジュールで活動していたのかを、続いて、本会議前までに議論した内容を紹介する。

マイノリティ RT の本会議前プロセスは主に、オンラインミーティング、オンライン勉強会、フィールドトリップと合宿により構成されていた。マイノリティ RT の始まりは2017年4月11日に遡る。この日に行われたオンラインミーティング初回において RT メンバーの顔合わせを行った。以後は本会議までの間に1週間に1~2度のミーティングを行い、親交を深め合いながら議論の枠組みに関する話し合いを進めてきた。そんな走り出しから1か月弱、5月初旬に行われたのが春合宿であった。一部を除き初対面であった RT メンバーであるが、皆の個性がはじけ合うことで何か特別なものが築かれ始めたことは明確であった。これからの議論に関するブレインストーミングを行った際のあの躍動と混乱を今も忘れることはない。こうしてマイノリティ RT は本格的に歩み始めた。

(右) 思うがままにブレインストーミングをした図。
このあと、我々はポストイットを使いトピックを
洗い出し、綺麗に整理した。



合宿後の活動は、引き続き行われるミーティング
とフィールドトリップ、そして合宿となる。合宿に
おいて、各メンバーの興味分野が多様なこと、そし
て個別事例と社会全体のあり方の双方を入れ替わりに議論したいという合意から、RT内での勉強会も行われる運びとなった。アメドリ（アメリカ側参加者）とのジョイントミーティングも少しずつ始まっていった。フィールドトリップとして、LGBTの方々や女性としての母親、AV男優などと接点を持った。

こうしたRTの活動の中でも、最も重要な働きをもたらしたのは個人間の関係づくりであった。議論のみならず、個人間の電話にはかなりの時間を費やした。また実際に顔を合わせることも同時に重要と考えたため、フィールドトリップに合わせて合宿を行ったり、地方在住のメンバーに会いに向かったりと、とにかく活動的なRTであった。



北大の参加者（右奥）と
関東在住のコーディネーター（左手前）が、
九大の参加者（右手前）に会いに
福岡に行った時の様子。

2. 事前活動期間中の議論

議論では、「公正公平な社会の実現は可能か」という大きな問のもと、様々なトピックを扱い議論を進めてきた。この問いへの答えを探求するために私たちは議論を続けてきた。

議論の過程としてはまず「Minority and Majority: Is it possible to achieve the fair and equal society?」という私たちの分科会テーマに使われている言葉の定義を行った。次にテーマへの結論を導き出すためにその過程を3つに分けた。1つ目がマイノリティとマジョリティの現代社会における関係性の分析。2つ目に「何が正義か」「何が公正公平なのか」といったあるべき社会の価値観について。3つ目に1と2の現状でのギャップを埋めるためにいかに

すべきか、という仮定を置いた。またこの他にも話し合いたい議題が多々あることを考慮しフリートピックというものも用意していた。

社会におけるマイノリティとマジョリティについて考える際に定義すべき言葉はとて多い。しかし、一方で完全に定義化できない言葉も多いのだ。そもそも「マイノリティ」とは？「マジョリティ」とは？という問いに始まり、「公正・公平」、「正義」、「多様性」、「統合」、そして私たちの感情に基づく言葉、とかなり多くの言葉のさす意味を皆で考えた。確かに定義化することが難しい言葉たちであったが、この過程でいかに私たちの社会を示す言葉が表せる範囲に限りがあるのかということを知ることができたのではないかと考える。

その後先ほど述べたように、3つの過程に沿って議論を進めた。1つ目のマイノリティとマジョリティの関係分析は、一言に現状分析とは言えないほど多種多様な関係性があることに気付いた。例えば女性と男性のジェンダー問題、LGBTQ+の問題、宗教、年齢、障害、と様々な社会の側面にパワーバランスが取れていない部分が見つかった。またこの関係性をより深く理解するために色々な評価観点を考えた。例えば「歴史」「政策」「文化」等である。このような視点からいかにその問題が私たちの目に映るか、また社会が理解しているのかということについて議論を深めた。その後2つ目の過程にあるように、それぞれの問題の「あるべき姿」は何なのかについて考えた。そして、その私たちが考える未来の「あるべき姿」を実現するために今何をしていくことが大事なのかという形に議論を落とし込んでいった。

しかしこの話し合いを進めていて私たちが気づいたのは己の圧倒的知識不足である。ゆえに週に1回程度「勉強会」なるものを開いた。個人が皆に対して事前にリソースを提供し、全員がそのリソースに触れた状態で情報共有をおこなったり話し合いをしたりするというものだ。

このような過程を4月から本会議までの4か月間を通して行い、己の無知に向き合いつつも社会への理解を深め自分なりの問題へ取り組む姿勢を形成していった。

3. 事前活動期間中のフィールドトリップ

事前期間に行ったマイノリティ RT のフィールドトリップとしては、ホームスクーリングを実践しているクリスチャンファミリー、ゲイバー・レズビアンバー、AV男優などをマイノリティとして訪問したが（モルモン教関係の施設やイスラムのモスクも訪問予定だったが、スケジュールの関係で断念）、ゲイバー・レズビアンバーは特に強烈な経験だった。Kumi, Naoki, Roy, Mariの四人で参戦することとなった（Ayanoは遠隔のため断念）。

まずはレズビアンバー。そこには他にないコミュニティのあり方が存在した。あちらの側から積極的に話しかけてくれるわけではないが、こちらから話しかけるとなんでも答えてくれた。「楽しんでね」と幾らかのお金をこちらにくれた客もあった。ゲイバーのビジネスとして営まれている様子とは異なり、来るものは拒まず去る者は追わずの姿勢がそこにはあった（しかし、女性のみしか入店できない日もあるそうだ）。レズビアンバーに来る客は必ずしもレズビアンだけではなく、バイセクシュアルや性には特にこだわらないといった客もいた。特徴はやはり先に述べたようにそのバーを中心としたコミュニティであろう。そこで居場所を見出してきた客や店主の姿が強い繋がりを作り、そのコミュニティを中心としてその場が成り立っているように思われた。

次にゲイバーに参戦。ワンドリンク制だというのでそれぞれカクテルを注文し、ソファ一席にて待つ。各客に担当のゲイのスタッフがつき、軽い自己紹介を済ますと、積極的に恋愛の話や性の話などを振られる。またそのお店は「大人の関係」の経営もしており、聞くとそれぞれの男の子の得意なことやプロフィールの書かれたカタログを見せてくれた。ゲイバーでは、メンバーの1人は、「性」というトピックについてオープンであることにカルチャーショックを受けてしまったものもいた。おそらく彼らは営業時間内と外ではまた違った立ち振る舞い・側面を持っているのだろう。これはレズビアンバーとは大きく異なる点であった。

レズビアンバーとゲイバーで感じた違いは、前者はあくまで話しかけられれば対応するが突っ込んだことは特に聞いてこないというのに対し、後者はもっとオープンである印象、そして、前者では、異性のように振る舞う人が少なかったのに対し、後者では「それらしい」振る舞いがあるように、文化の違いを感じた。しかし、どちらも、アットホームで、優しい人がたくさんいらっシャっているように感じた。

性に関わることにあまり深く突っ込んだことは「一般社会」や「世間」では触れてはいけないものとして隠れているが、そこに確かに存在することを確認できるフィールドトリップであった。このフィールドトリップでは、新しい世界、自分たちが知らない世界がどれだけたくさんあり、それらのコミュニティが深く繋がっているものかということを改めて感じられるものとなった。マジョリティはマイノリティの詳細までよく知らず心無い発言や行動によって（政策も含め）そのコミュニティを潰してしまいがちだが、実際に彼らの生活や思いを知ることがどれほど大切か、ということはこのフィールドトリップは私たちに教えてくれた。

フィールドトリップのあとは、親睦合宿を行った。普段ミーティングはハンダウトを利用しているため、face to face のコミュニケーションの機会は貴重であった。



■本会議中の議論・活動

1. 日米の参加者が定めた分科会の目標・方向性

本会議で定めた分科会としての方向性は、以下の二つである。

1. マイノリティとマジョリティの議論の中で、メンバーの互いの価値観を共有し、新しい価値観を身につける
2. その過程でメンバーでの絆を深める

そして、議論の方向性を如何なるものにするかについては、マイノリティ・マジョリティに関する互いの関心と、なぜこの分科会に参加しようと思ったのかを共有した後に、そこからメンバー皆が関心のあるトピックをピックアップしながら進めていった。

まず、共有されたメンバーの興味関心や背景は以下ようになった。

アメリカ側 RT コーディネーターの Erin は、マイノリティの日米での差に関心があり、日本では認知が低いことに問題意識を持ち、日本側 RT コーディネーターの久美は、以前意図せずにマイノリティを傷つけてしまったことをずっと後悔しており、偏見や差別について関心を持っていた。

アメリカ側参加者の Ethan は、LGBTQ と Women Empowement に関心を抱いていた。Steph は、自身がハーフであることから、ハーフやナショナルアイデンティティに、Paola はアメリカにおいて人種的マイノリティであることから苦しい思いもしたことがあり、日米の人種のマイノリティに関心があった。

日本側参加者の彩乃は、中学時代に生徒会長を女子生徒として初めて勤めた経験から、なぜ女性はリーダーになりにくいのかと woman empowerment に関心を持っていた。日本側参加者で中国系アメリカ人のロイは、アメリカでも日本でも「マイノリティ」としての経験を持つことから、人種やセクシャリティ等様々なマイノリティに関心があった。



まりは、以前に参加した日本・イスラエル・パレスチナ会議の経験や身の回りの経験から、“conflict”と紛争解決、どうしたら違いをポジティブに乗り越えられるのかというテーマに関心があり、直毅は Inclusive Society とはどのような社会なのか、偏見の根元にある思想や心理、社会構造などに関心を持っていた。

このように多種多様な関心と背景を持つメンバーが集まり、分科会の中でも賑やかな分科会となった。



関心や背景を共有したのちに、いよいよディスカッショントピックを選定していくことになった。関心が少しずつ異なるため難航もしたが、以下の3つのマイノリティの例をあげながら、互いの興味分野に関連して話していくことに決めた。また、議論の際は、フィールドトリップなどを織り交ぜたり、実際に経験した人の話を聞いたりなどして、一次情報で他者を知る、ということを中心に心がけるようにした。

2. ディスカッショントピック・議論の内容について

①Racial Minorities について

議論：在日とか、アメリカにおけるメキシカン等

フィールドトリップ：在日コリアンNPO（京都報告文（by なおき）参考のこと）

マイノリティ RT の議論の中核の一つは、人種と移民に関する議論であった。これは RT 内において、出自がアイデンティティのよりどころとなっているメンバーが存在していたこと。そして国際社会において、トランプの移民規制の様な、一部の民族や国家、移民への働きかけが拡大していた事情より注目された。

アメリカに関しては、様々な人種が混在する社会の中における格差の多様性について議論が行われた。人種による賃金格差や移民間格差、バオラのパーソナルストーリーなどを経て、「人の間の違い」について考え議論し続けた。日本に関しては、在日韓国朝鮮人に関する議論や難民受け入れが議論された。中でも在日韓国朝鮮人に関しては、当事者である JASC メンバーとの対話や NPO 法人京都コリアン生活センターエルファ様への訪問により、実際の経験と議論を深く結びつけた議論を展開した。

1人1人が本当の自分らしく生きることのできる社会を実現するためには、何が必要なのか。マイノリティ RT はこの問いについて、様々な人々の視点から考え続けた。その結果得

られた結論として、全ての人の社会的包摂に向けて3種類の取り組みが必要であると議論した。

1つ目は政策レベルでの取り組みである。国家のみならず、様々な大きさの公的主体により市民に対して、共に同じ社会に住んでいるマイノリティの人々に関する情報提供を行うこと。また、マイノリティの当事者の方々に対して補助制度の情報提供を行うことが重要という結論に至った。中でも、これまで疎外されてきたマイノリティの方々に対し、新たな補助や政策が施行された場合に、そうした制度が当事者に知られ使われる体制を築くことが重要とされた。これは例えば、長らく疎外されてきた移民の第1、第2世代が政府に対する嫌悪感やバイアスを持っていることで、新たな政策を知らなかったり、そもそも補助されるという発想が生まれにくい環境にあたりするためだ。

2つ目はコミュニティレベルでの取り組みである。マジョリティやマイノリティといった立場に関わらず、コミュニティ内部における多様性を理解することは他者への配慮を行う上で重要である。これに加えて、マイノリティがどのような出自であるのかといった情報面を知るだけに留まらず、その心理状況を理解し「人として向き合う」ことが重要であると議論した。こうした過程を通して相互承認することが、多様性を実現する社会において欠かすことのできない共生方法なのではないだろうか。またマイノリティ個人に関し、ただの一度でもマイノリティだからという理由で差別的扱いを受けることが彼らの心を閉ざしてしまう可能性に着目した。マイノリティを集団としてではなく個人の集合体として捉えたとき、彼ら一人一人が自分らしく生きられるための方策を考える必要がある。従って社会に受け入れられているという感覚を得ることのできる経験を日常から地道に積み重ね、差別などの負の経験を可能な限り少なくする動きが求められる。そうすることで彼らが社会に住む自己を肯定できる素養を磨き、ひいては強固な自己を見出すことができると考えられた。

3つ目は我々1人1人の取り組みである。こうした議論の結論としてマイノリティ RT では、マイノリティの問題を「自分ごととする」ことが私たち個人にとって最も重要であるとする。情報の理解から感情の共有へ。集団としての理解から、個人への着目へ。社会に共生するマイノリティの姿を少しずつ明確に把握していくことで、個人間の関係に基づいた、偏見を解消した社会の実現に向かうことができるだろう。そのためにはマイノリティ当人の話に耳を傾け、彼らの生き立ちやマイノリティとして困窮したときの感情の揺らぎを体感していくことが重要である。そしてこれを個人として行うだけではなく、親しい人や友人と共有していく。そうやって他者を通すことで、マイノリティの方々に対して抱く問題意識や感情が正しいと理解していく事が重要であろう。



NPO 法人京都コリアン生活センターエルファの
南 珣賢様と記念撮影

② LGBTQ について

京都での自由行動の時間に「何か RT に関係することができないか？」ということから京都市のマイノリティと呼ばれる人々への取り組みは何かないのだろうかと京都市役所に電話をした。「今から伺って何かお話を聞かせていただくことはできませんか？」いきなり電話をして受け入れてくれる行政機関などあるのだろうか…。

そんな不安のもと担当者につながる間の「間」がとても長く感じられた。

「いいですよ、今から来ていただけるなら4人くらいなら受け入れられます。」京都市役所の担当の方から快い返事をいただくことができマイノリティ RT に喜びの歓声が上がった。結局、アメリカ・日本サイド二人ずつの参加者が京都市役所の関係部署に向かった。

関係部署では2里の職員の方が私たちを迎え入れてくださった。初めに京都市のLGBTQ+の人々を含めた「マジョリティ」に対して「マイノリティ」と呼ばれる人々に対する取り組みに関して簡単な説明を受けた。例えば、フリーペーパーを年に何度か発行することであったり、企業の管理職にいる方々を対象とした勉強会を開催したり、駅などのコミュニティスペースを利用した展示を行ったりとその内容は多様であった。

日本側参加者のリーが通訳をしてくれ日本側・アメリカ側参加者ともに理解をしながら京都市役所の職員のお話を聞くことができた。その後、質問の時間をとったのだがこれがとても盛り上がり時間が足りないほどであった。アメリカ側の参加者からの意欲的な質問を何とかリーと通訳しながら、京都市のマイノリティへの取り組みの理解を深めた。アメリカ側参加者は自分たちの住んでいる場所の状況と京都市の状況を比較しつつ様々な質問を投げかけていた。

マイノリティの問題を考えながら、質問をしながら、通訳をしながら、考えていたのは住んでいる国が違えど私達参加者は同じ問題に向き合っている、という当たり前の実感だった。私たちは、場所は違えど同じ問題意識を共有していて、同じような熱意でその問題の解決をしようと考えている。

きっと、それぞれの場所で同じ問題を解決しようとしてこれからも努力を重ねきつとある日どこかでまためぐりあうのだろう。そんな思いがあふれる帰路だった。

③ Gender について

マイノリティ分科会のメインとなったトピックの三つ目はジェンダー、つまり女性・男性という sex が社会にもたらしている状況についてだ。Ethan, Ayano が特にこのトピックに興味を持っており、したがって本会議前の日本側でのミーティングでもジェンダーの話は中心的にあがっていた。このトピックは8/14,15日と、19日に行った、RT ミーティング中に扱った big question の一つとして扱った。主に議論したものをあげると

- ジェンダーとは何か：

ジェンダーの定義づけとそのラベリングの必要性について

- 日本とアメリカにおける女性が直面している問題：

「女性が結婚・子育てをするものだ」という価値観から見た就職活動や会社での女性の地位と状況と家庭での fair とは到底呼べない役割分担

- 日本とアメリカにおける男性が直面している問題：

男性の家庭進出に対する社会のバイアスと、男性の社会的プレッシャーに起因する高い自殺率の問題

- 子供の夢：

夢を聞かれて、男の子は医師や政府関係の役職、消防士など体力や知的能力が求められるものを答えるのに対して、女の子はお花屋さんや看護師、可愛い奥さんなど伝統的に「女性らしい」と思われているものを答える傾向がいまだに根強い。

- 会社や組織内のジェンダー格差：

人種とともに、男女間で異なる給料や受ける待遇の状況

- 家庭でのジェンダー間の役割：

特に日本では、「女性の社会進出」の価値観はそれでもだいぶ進んできたが「男性の家庭進出」の価値観はまだまだ遅れているために、女性が二重の負担を負わなければならないという状況が発生している。

といったところだ。基本的にそれぞれの目指す最終ゴール、理想の社会像といったものはほとんど同じ方向性を向いていたため、無意識のうちに「ジェンダーや国籍や人種、宗教といったラベリングや expectation ではなく個人を知って、見て、理解しようとするのが大切だ」という軸を元にジェンダーの議論も行われていた印象だ。結論としては、生物学的な違いもそれはそれで大切にしつつ、「女性だからこうあるべき」「男性だからこうあるべき」というジェンダーを前提にした社会的役割は無くすべきであり、その方法は教育しかないと

ということ、男性も女性もそうでない人もどんな道を選ぼうと個人の自由な選択が尊重されるような社会になるように、特に家庭や労働環境で男女ともが生きやすくなるようなシステムづくりがなされるようにという二点になると思う。

3. ファイナルフォーラム

プレゼンテーションを作るに当たって、分科会メンバー1人1人の本音、またフィールドトリップなどを通じて出会った沢山の人々から預けられた大切な思いやメッセージを正しく、妥協せず伝えることに向き合うことに尽力した。激論の中、ただ、自分たちの考えをまとめるだけではなく、個人のメッセージを伝えるために、聞いた話しやパーソナルストーリーを編みながら、「公正、公平な社会とは何か」と言う問いに対して、マイノリティ分科会なりの答えを発表することにした。

全ての人の全ての人権を同様に尊重や守ることは時に難しいこともあり、あるグループのある権利を守ろうとする時、他のグループの権利を侵害することになることもあり得るからだ。このように、同じ「権利」でも矛盾が起きるということは我々マイノリティ分科会が活動の中で何回も実感した。そんな矛盾の中に、マイノリティ分科会は「権利のヒエラルキー」という概念を提示した。簡単に説明すると、「権利」というものが重要性の順位があることを認め、権利と権利が衝突する際優先順位が高い権利から守るべきということだ。時間の足りなさや勉強不足により、我々はこのヒエラルキーを具体化することはできなかったが、「生命、自由及び身体の安全」など最も基礎な権利を最上位に守るべきという風になる。このように身近にある「権利」という概念を、これまでのマイノリティの議論と結びつけて捉え直せたのは、メンバーにとって貴重な体験だったと言える。

個性豊かなメンバーが集まり、一番、本音でぶつかり合ったと言っても過言ではない「劇的な」分科会だったが、無事発表を終えることができ、長い議論に、文字通り幕を閉じることができた。



■分科会メンバーの声

▼小島 直毅

整理がつかないのである。私にとってRTが何を意味したのか。この問いに対する結論は、今でも思考の渦中に眠っているかのようだ。将来に背後を見返せばふと、あれはこういうことだったのだと納得できるのだろうか。しかし本会議が閉幕した現在、反省と学びを早期に得ることこそが参加意義だったのではないかと焦る。そうした理想は未だ実現できていない。なぜか。

事実、得たものは無数にあったではないか。RTの仲間とは今後長きに渡る友好を築けよう。フィールドトリップやRTタイムでは普段いけない場所で普段会えない人と話し、仲間と熱く議論を重ねた。JASCに向け自己設定した目標の実践にもRTは最適の場だった。「普段なら中々話しかけようとしなない人たちと本気で向き合う」という私の目標。これを通してメンバーと向き合ったりぶつかり合ったりする過程から見えてきた、自分の嫌いなところや小ささが今の自分を衝き動かしている。自分の殻を破る目標を実践したからこそ明らかになる、積み残し課題や新たな問題点といったネガティブな自己分析。本来なら自己嫌悪にも発展しそうなこれらが、むしろ今後の自分にとっての糧であると思えたのは仲間の存在が支えになってこそだ。

一方で得られず後悔したものもあった。自分の興味があるトピックに関しては、勉強不足もあり中々議論で触れることが叶わなかった。英語能力の不足で議論に対する貢献性が十分でないことも多かった。時には人と向き合いきれない葛藤を覚え、数度はRT外のメンバーと話していたいと思う裏に逃げている自分を意識した。議論の組み立て方や発表内容の作り方にも、もっと事前準備があればと思わずにはいられない。ただしどこまで改善したところで、まだ不十分であると反省し続けるであろう点は多い。その分、真に後悔したと思う要素があるわけではないと気付く。

結局得たものも後悔も、整理しようと思えば一つ一つを容易に言語化できるのだ。しかし私の中で、「これはRT全体を振り返っての集大成とは言いたくない」という自意識が働いている。ここまで書き進める中で、この私の傾向についてわかってきたことがある。それは、得られたこともそうでなかったことも、本会議に閉じて考える必要性が一切ないということだ。日米で離れていても、日本にメンバーが散在していても容易に連絡を取ることができる現代、本会議やRTという場と日常は努力次第で一続きに結びつけることができる。また人と向き合う私の目標は、JASCに閉じたものではなくむしろ今後も継続・発展させていくものだ。従って私は、JASCという枠で本経験を整理し固定化しない。この経験は確かに私の

生涯の一部を形成し、決してその前後と切り離すことができないものとして今後も考え続ける自分の基盤の一部となるだろう。

▼佐々木 彩乃

分科会どうだった？

正直に答えると「わからない」という回答になると思う。

決して良くはなかった。決して悪くはなかった。

でも、よく、わからない。

これが私の感想だ。だから何となく何を書けばいいのかわからなかった。

また「分科会すごくよかったです！」と嘘の感想を書きたくもなかった。

だからこれから私が書くのは、個人的な分科会の反省だ。

まず、議論の流れがきちんとならない議論は難しい。

難しいというのは、そこから何かを得ることも、何かを生み出すということも、という意味だ。

私たちの思考は常に流動的で形を持たない。

その思考がいかなるものかは自分の中で判断しつくすことはほぼ不可能である。

誰かと会話を通して、その思考は外気に触れて形を変え評価をされて自分の仮場所を知る。ここである。私たちの議論はいつもその場しのぎだった気がしてならないのだ。知っていることを共有して、そして？

マイノリティとマジョリティというものすごく深く、かつ広いトピックであるからこそその議論の方向性が定めきれずにいつも「議論」になり切れなかった気がしてならない。

かつ、マイノリティとマジョリティとしての個々のストーリーというのは数え切れないほど膨大にある。そこから何を心得、議論の洗浄に置いていくのか。とても難しい営みであり、やり切れたという感覚が残っていない。

次に分科会の参加者についてだ。

私はこの分科会で出会った友人たちは本当に人間的に面白く、20年間生きてきた中で出会ったことのない人種だと感じている。

だが、本会議中にチームとして成功したかと聞かされると素直に縦に首を振れない自分がいる。分科会のメンバーというのは日米学生会議の3週間の中で1番多くの時間を共有する仲間である。当然のことながら衝突だって起きる。しかし私は今夏のマイノリティ分科会では個人個人の間起きた衝突の可視化ができなかったがためにお互いが相手に対して正面からぶつかれない状況が生まれていたように感じる。

何が悪かったという話ではなくやはり人間関係は国境を越えても複雑なものであることは変わらないといったところであろうか。

そもそも人間関係に成功も失敗もなく評価基準すらないと私は考えている。だが、チームとしてもう少し良い関係を作れたのではないかと思わずにはいられないのだ。

私はこの分科会にてたくさんの素敵な尊敬する仲間たちに出会えたと思っている。

でも、もう少し違った何かが出来たのではないか？その感覚も同時に色濃く残っている。

今はまだその「何」がはっきりとわからず言語化できない。

だが幸運にも今年、第70回実行委員に選出してもらうことができた以上、いかに分科会運営が難しいものなのかということを感じつつも自分の経験を生かしていきたいと思っている。

▼リー ロイ

Minority RT is more than a RT to me, as I have established strong bonds and lasting friendships with its members. However, it didn't start out all friendly and cozy. In fact, Minority RT was a strange and uncomfortable place for me in May, when five members (including the RT coordinator) met for the first time in person. It's hard to describe why I felt that way, perhaps it was because of our differences in backgrounds and subsequent ways we viewed the world around us. We did have a few things in common, as each and one of us has strong and peculiar personalities, and ironically shared the sense of caution towards each other.

Ayano lived in Kyushu and Naoki lived in Hokkaido, so it was rather hard for us to gather everybody together. I somehow got close with Naoki and Kumi, and the three of us would have prolonged late night phone calls. Our call would start from 10pm, last deep into the night, starting off with a topic related to minority. but then spin off talking about our families, relationships, future plans, philosophy, and random things in our daily life until someone would fall asleep on the other side of the phone. We were a lonely bunch, wanting to share, but still kept a certain distance. It was almost like we wanted the other people to understand what we were thinking without saying it out loud. I also wanted to get to know Ayano and Mari better, but I didn't really know how.

In July we decided to have a RT sleepover in Tokyo for a weekend, we booked an airbnb and stayed near Asakusa. On the first night, we decided that in order to get to know each other better and truly "break the ice," we would have 1 on 1 conversations in separate rooms,

and rotate after 30mins. I thought I wouldn't have lasted more than five minutes with Mari, but we ended up talking for more than an hour, and so did all the other conversations that happened that night. Laughs were exchanged and tears were shed, some conversations stuck and some didn't, but the mutual feeling of understanding and empathy were shared. I don't think I've ever tried this hard to talk with and listen to somebody in my life, the experience that night was somewhat tiring yet fascinating, stressful yet emancipating.

One can never wish to understand another without sincere dialogue, time and effort sat down listening and probing at another's stories, emotions, and values. But in this time and age, such effort often appears luxurious if not futile. JASC provided us with time and a platform that was so precious and rare and oh boy did we use it for experimentation. While our RT's discussion was centered around questions such as "What is a ideal society," and "How can we achieve empathy towards others," our RT members, through our short but eventful 4 months together, have demonstrated an answer of our own. The road ahead is long and full of darkness, even within the main conference of JASC, I've personally experienced so much miscommunication, misunderstanding, distrust, and sadly relationships that were beyond repair. But thanks to Minority RT I retain hope, hope that people are capable of empathy and understanding, and that there will be beautiful and important people there for you in times of need, and things will turn out alright.

▼渡邊 まり

あまり大きな声では言えないのだが、マイノリティ RT は一番変化とドラマのあった RT ではないかと思う。人間関係としても、議論の方向性としても。エッセイというよりはどちらかというと回顧録に近いような形で思い出しながら時系列の順に書いていこうと思う。

初め（春合宿くらい）はそれぞれバラバラで、特にコーディネーターと私の間に透明な高い壁があった。同じ空間にいてもなんとなく居心地の悪い雰囲気があった。その後（春合宿～本会議）それぞれで電話や text などで仲を深め、ついにコーディネーターとの間の壁も3時間の電話で壊れ、一気に仲のいい RT へとなった。しかし距離と時間の問題で Ayano だけその輪から外れがちになってしまい、全 RT メンバーが心配していた。Ayano 以外は東京にいたので集まりやすかったが Ayano は九州という距離的にもなかなか集まらない距離であったこと、Ayano はとても健康的な朝方だったのに対し Ayano 以外の三人はひどく夜型であったという二点に起因するところが大きい。物理的な距離が精神的な距離に影響するものは決して小さくはないというのは一つの結論でもある。

その距離は埋まらないまま本会議を迎え、Ayano 本人もその距離を感じつつもアメデリを迎えることとなった。当初はアメリカ側と日本側で分かれ気味だったけれどもだんだん個人間で仲を深め、それぞれの側がどんな風に進めてきたのかもお互いに理解し、京都二日目には全体としても距離を縮めた状態でスタートすることができた。RT の自由時間には field trip をしようということになり、その場でマイノリティ関連の思い当たる施設を調べ、アポイントメントの電話。2 グループに分かれて、バスなど迷いながら（誰一人京都在住者がいなかった）京都市役所と在日韓国人の施設とに訪問させていただきブリーフィングをしていた。私にはあと質問をさせていただいた。私は在日韓国人のためのエルフという施設の方に行かせていただいたのだが、集団の中に埋もれてしまいがちな彼らの思いやいろんな制度の問題、いろんな事件の裏に起きていたものなどやはり当事者から直接ストーリーを聞くことは何かを理解するために何にも勝る価値があることだと改めて感じた。

愛媛では何人か今までの議論の流れに疑問を感じ、改めて RT のメンバーがなぜこの RT に参加したのかやこの RT で何を議論したかったのか、またコーディネーターに対してはなぜこの RT を作ったのかと言ったことをそれぞれシェアし、RT の方向性を決めた。この頃にはそれぞれ言いたいことを自由に言えるような雰囲気できてきており、だいたい RT が自分たちの RT になってきたのではないかと思う。ただ個人的には、ずっと notetaking をここまでしてきたために（議事録とりは得意なので自分からやってきたのだが）なかなか発言しづらく、他メンバーが代わるよと言ってくれている素直に交代することができなかった。議事録とりというわかりやすい役割がなくなってしまうことが怖かったのと、次第に自分からイニシアチブを取っていかうという自主性が失われていたのだと今振り返って思う。フォーラムの日には、素直になることができないために議論にうまく入れず途中で泣き出してしまうこともあった。その時に距離を感じていた Ayano やコーディネーターが助けてくれ、RT に戻ることができた。それぞれいろんな苦しい思いも抱えながら RT に向き合っていたのだなと確信した瞬間であった。受け身でひたすら議事録を取り続けるという役割を一旦 comfortable だと感じてしまうような順応が無意識にされてしまったがためにそれを変えるのが苦痛になってしまったり他人に任せがちになったり逃げがちだったりしたのは自分の中から自主性や能動的な姿勢が失われている証拠である。また、疲れも溜まってきて余裕がなかったのもあるんだと思う。当たり前のことが当たり前に楽しくできない、自分が自分らしくいられないフラストレーションを一番感じたのも愛媛だった。また、のちに生じる RT および数人を巻き込むことになるコンフリクトのタネも愛媛期間中であつた。

三重では RT および RT 縦断のコンフリクトが表面化する。数人が実質脱退状態のままファイナルフォーラムの準備を進めることとなった。私個人はなんとかコンフリクトがよくな

らないかと active listening に努めたつもりだ。人に寄り添うことがどういうことなのかということひしひしと考えさせられた。結局コンフリクトの解決は難しく、RT はバラバラのままだったが、なんとか巻き込まれた数人の支えにはなれたかと思う。三重の記憶はそれしか残っていない。

東京に帰ってくると、もうほとんど私の中で JASC は終了に等しかった。いつも暮らしている土地、バラバラの人間関係と溜まった疲労。集まる時間も逃げがちであった。またファイナルフォーラムの RT の発表の方向性に疑問を感じており、RT のメンバーに投げる。他メンバーも共感してくれ、方向性が変わる。マイノリティの story をシェアするという方向だったものを、マイノリティとマジョリティのバランスをとる上で、また相互理解をする上で大切なことは何か、という方向になった。それはコンフリクトの中で難しさを感じていたことそのものだった。理想論は RT で散々話し合っていたけれども、それを実際余裕のない状態で実践しようとするとなかなかうまくいかないということも同時に痛いほどよくわかっていた。幸いにもコンフリクトは EC 選挙をきっかけに収束を迎えた。特に後半は多くの人と色々な話をするよりもコンフリクトの active listening に時間を割くことになったため印象が薄いまま終わってしまった JASC メンバーも多くいるが、数少ない何人かものすごく濃い時間を過ごすことができたのでこれはこれで満足している。

ただ、もともととても親しかったのに JASC の期間全体を通して距離ができてしまったメンバーもいて、とても残念である。JASC が終わって、印象が薄かった人はまだともかくものすごく濃い時間を共有した RT のメンバーも疎遠になってしまっている。雑多な日常に追われて人ときちんと話すことはどうしてもおざなりになりがちだが、それこそが人生に置いて大切なことなのだ。余裕がない時こそきちんと時間を取って人と話したいなどこの文章を書きながら改めて思う。

また、他のメンバーも書いているようにこの RT のメンバーは非常にユニークな個性が集まっており、このメンバーから得たものも非常に大きい。JASC で一番得たものの大きいのはこの面々に出会えたことであることは間違いない。私を RT のメンバーに入れてくれて、大変な思いや苦労がありながらもこの RT をはじめ、一緒に作ってきてくれたコーディネーターには特に感謝しても仕切れない。本当にお疲れ様。

以上、稚拙な文章ではあるが、私なりの RT の回顧録とする。

■分科会コーディネーターによる総括

▼吉川 久美

人生で起こりうるありとあらゆるドラマを、ギュッギュッ、っと半年に濃縮したら、この分科会ができるだろう。そんな、カオスとドラマだらけの分科会だった。

会議が終わってすぐは、趣味に没頭したり、報告書の執筆もおさなりに済ませたりして、できるだけこの分科会での出来事を忘れようとしていた。思い出すと辛くて仕方がなかったからだ。

ようやく向き合えるようになったのは4ヶ月過ぎてから。だから、4ヶ月も経った今、編集権限でこの報告を書き直している。今回は逃げないで、しっかり、向き合ってみようと思う。

4月、最高のメンバーが集まった。

問題を抽象化して、理路整然と議論を進めてくれる、なおき。

ユーモアに溢れ、流暢な日本語と英語を使いこなし、人間観察が得意な、ロイ。

何かとやることに追われ、わたわたしているように見えるが、芯がしっかりしていて、誰よりも優しい、まり。

ディベートが上手く、責任感が強い、しっかり者の、あやの。

一人一人全く違う良さを持ち合わせ、全員が個性的だった。(あと私も含め全員B型だった。)

最初に気があったのは、なおきとロイだ。なおきと映画「ムーンライト」を見に行った後に、なおきとロイと私で、感想を述べあい、お互いのバックグラウンドについても話した。他人には言い難いもやもやとした感情も、このメンバーならば、気兼ねなく言えた。

私とまりの間は、すんなり仲良くなったわけではない。まりに関しては、実行委員としての立場上感じる不満があり、まりもそれを感じて、ギクシャクしてしまった。まりに伝えることができ、お互いの誤認は晴れ、一気に距離が縮まった。

彩乃は、他のメンバーも述べたように、地理的な理由と生活リズムの違いで、遅くまで電話したり、お泊まりしたりすることができなかった。なので、本会議になる前に、溝ができてしまっていたのが、心残りである。

週一で分科会議論があり、そこでは偏見や差別、マイノリティの問題について話し合った。そこで終わらないのが、このRT。むしろここからが本番で、議論の後は、大抵朝の4時くらいまで、人生のことや恋愛のことなどを語り合う。

これは、メンバーの多くが、ディスカッションそのものより、互いのことをどれだけ深く理解できるか、という相互理解にフォーカスしたいとお互い思っていた。ただのディスカッションメンバーではなく、より深い絆を構築していこうと、努力してた。「普段言えないけど、このメンバーなら話せるね」と言い合った。大概ロイか私の提案で（笑）、沢山アホなこともしたし、楽しかった。

と、ここで切れば、いい話なのだが、そうはいかない。

本会議中、あることをきっかけに、ジェンガが倒れた。積み上げてきたものが、一気にばらばらと崩れ落ちた。

どうしてこうなってしまったのだろうか、と、アメリカ側のコーディネーターのエリンと、夜中泣いたりもした。解決したいけど、権限もないし、たとえ権限があってもうまくいくものではない、どうしようもなかった。憤りが爆発して、こんな団体やめてやる、と逃げ出そうともした。

分科会自体は分解したが、分解してなお、支え合ったのも、分科会のメンバーである。特に、まりは優しくって、落ち込んでいる私にお弁当を持ってきてくれたことを今でも思い出す。

信じるとは。友情とは。愛とは。何が正解かわからない、そんな数週間が続いた。

「どうか、嫌い合わないで」

と泣きながら訴えたファイナルリフレクション。

ぐちゃぐちゃな感情を吐き出した。

2人のメンバーが手を握ってくれていた。

という、本会議の話は、もうだいぶ過去のことだし、懐かしい思い出だ。

のど元過ぎればなんとやら、で、そのときの辛さも、もうすっかり色褪せてしまった。

残ったのは、あのとき支え合った、仲間たちだ。今でも、たまに会ったり電話したりして、互いの近況など話す。

分科会という枠組みはどうでもいい。また5人で仲良くしたいと思う。

“Understanding Cultural Significance and Identity” Roundtable

「個人と社会における文化の意義」分科会



コーディネーター
河崎 涼太



コーディネーター
Ehenneden Idehen-Amadasun



川崎 明宙



下吹越 愛莉



Andrew Fischer



Emlyn Mio Lee-Schalow



松村 謙太郎



諸星 渚



EvaMarie Olson

「文化」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。古風な伝統建築や独創的な絵画といった形を有するものから、日本古来の武士道やアメリカに深く根付くキリスト教といった形而上的なものまで、文化の形態は様々である。

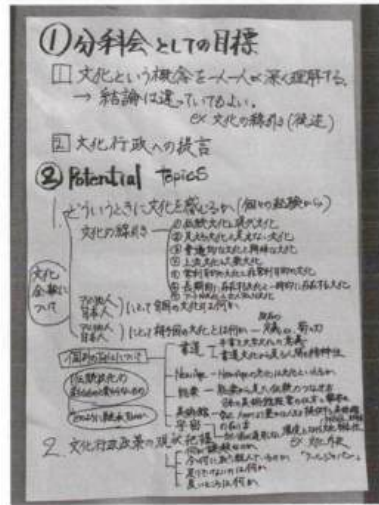
だが近年のグローバル化は地域を超えて文化の変化や融合、統合を推し進めてきた。日本の伝統食である寿司は世界の各地域でその形態を変え、それぞれの文化に融合している。なお、日本の「イエ制度」を土台に形成されたと考えられる同性愛差別、或いは移民や奴隷制度などに端を発するアメリカの人種差別のようなその国特有の歴史的・文化的背景は、当分科会で文化の変遷を議論するにあたって、欠かせない論点となるだろう。また一方では「クールジャパン」のように、固有文化への回帰も強く望まれる。しかし私たちは、文化の統合は時に価値観の相違による争いを招き、「消費」される伝統文化はその本質を失いがちであるということにも目を向けなければいけない。当分科会では時代の変化に伴い、私たちが本当に守り、変えるべき文化は何か、またその是非を検討し、評価する。

■分科会概要及び意義

はじめに。「個人と社会における文化の意義」と銘打った当分科会には、文化というトピックに対して一風変わった、また切れ味鋭い独自の視点を持った参加者らが集った。全体を見渡しても異色であった当分科会の強みは、やはり各自が興味関心を体現していることであつたろう。書道に始まり、美術館巡り及び絵画鑑賞、ゲームなどのポップカルチャーや茶道、そして能。各自のバックグラウンドを最大に活かしつつ、「文化の意義」という難題に挑んだ参加者らを、誇りに思う。



春合宿にて



春合宿分科会議論の成果

■事前準備期間の議論・活動

a. 全体の概要・流れ

参加者が全国に散らばった当分科会では、春合宿、防衛大学校研修、自主研修、直前合宿での合同ミーティングのほか、オンラインにて各週、ミーティングを行った。本会議までに計二十度ほどの日本側ミーティング、四度の合同ミーティングが行われ、参加者は発表や議論を通して各自、互いの興味関心の深化に務めた。

「文化」とは何か、その正体を捕捉しようとなんとか枠組みをひねり出した春合宿。沖縄関連のトピックに加え、「軍人の精神的支柱としての文化について、古来から兵士が精神的な支え、根拠としてきた文化的要素やその変遷」と題して「日本人らしさ」とは何か、考えた防衛大学校研修。全メンバーは参加できなかったものの、沖縄に実際に赴いて基地問題に立ち向かった自主研修から、怒涛のテスト期間を経て直前合宿、そして本会議を迎えた。本会議を迎えるにあたっては、先述したオンラインミーティング等に加え、各人で適宜フィールドトリップを行った。諸々につき、詳細を以下に述べてゆく。

b. 文化の7つの分け方

文化とはあまりに大きな概念であり、身の回りのもの全てを包摂する議論になりかねない。例えば、我々が「文化」と聞いて、ある人は「西洋画」のような芸術的要素の強いものをイメージするかもしれないし、ある人は「部屋に上がる時靴を脱ぐ」というような習慣的要素の強いものをイメージするかもしれない。数回オンラインMTGを行う中で、構成員5人の文化の捉え方が大きく異なることに気がついた我々は、文化を以下の7つの切り口からとらえ、文化という「形のないものに形を与え」て議論を具体的なものに落とし込もうと努めた。

- ① 伝統文化と現代文化
- ② 見える文化と見えない文化
- ③ 普遍的な文化と特殊な文化
- ④ 上流文化と大衆文化
- ⑤ 営利目的の文化と非営利目的の文化
- ⑥ 長期的に存在する文化と、一時的に存在する文化
- ⑦ アートの文化と、カスタムの文化

普段我々が耳にする文化的トピックは、この7つのものさしだとどちらに属するのか。例えば先ほどの「西洋画」であれば、伝統、見える、不明、不明、営利目的、長期的、アートのという分類ができる。ここで「不明」となるのもポイントで、いざ新たなものさしで考え直してみると「これ、時代によって違う分類になるな」など様々な気づきを得られるのだ。MTGを重ねるうちに各々のPre RTなどに時間を取られてこの議論は不完全燃焼で終わってしまったが、本会議が始まってからもこの7つの分類という視点は、我々の議論が路頭に迷わないための予防線として活躍してくれた。一方でアメリカ側の考える文化と比較した際に、我々の考える文化というものは芸術に関連する要素が多いのだ、と気づく材料となった。

c. 発表① (担当：松村)

伝統文化の担い手の人口が減っている中で、ポップカルチャーと混ぜた紹介の仕方では若者の注意を引こうとする動きが活発化している。しかし、それは果たして「伝統」文化と言えるのか？どこまで守り、どこから変えれば、多くの人々に受け入れられるものとなりうるのだろうか。京都での伝統文化の家元訪問から三重サイトのものづくりパネルに至るまで様々なヒントを得て、文化のイノベーションには二つの形があると結論づけた。一つ目は、必要とされた (needed) イノベーション。人々が望んだ変化を、文化に付与する。外国人の茶道への興味を汲み取り、立礼式を考案した茶道。女性からの能への興味を汲み取り、女流能を

形成した能。二つ目は、付加的な (additional) イノベーション。人々の人気を引きつけようとして、付加的な要素を既存の文化芸術に与える行為である。和の伝統芸術を題材にしたアニメ。着物を着てのファッションショー。一つ目は、多くの人々が望んだ変化であるので、反発が起きるはずはない。京都で学んだ、伝統の継承と変わらない。大事なのは、これから先多くの人にリーチしたいと思う伝統文化は、イノベーションが二つ目の「付加的な」変化に初めはならざるを得ないことを自覚した上で、どれだけ一つ目の「必要とされた」変化に近づけることができるかを、謙虚に考え続ける必要があるという点である。

d. 発表② (担当：川崎)

日本の伝統文化が関わる産業では、需要の不足・後継者不足が訴えられている。その根底にあるのは産業が経済的に自立することが難しくなっているという現状がある。伝統文化の本質が何かを考え、それを継続させることを行いつつ、経済的に成り立たせるための方策を考える必要があるという報告を行なった。また、和える Aeru など、先進的な取り組みを行う企業の紹介を行なった。

e. 発表③ (担当：諸星)

愛媛県松山市での「坂の上の雲ミュージアム」見学の経験から、松山市の「フィールドミュージアム構想」を通して、文化と行政との深い結びつきを学んだ。

もちろん、「文化が行政を動かした」と一概にはいえず、様々な要素が松山市の「フィールドミュージアム構想」へと結びついたことは考慮すべきである。しかし、地元の方々に愛され、彼らのアイデンティティ形成の一翼を担う「坂の上の雲」という作品だったからこそ、民間までも巻き込んで、大規模な計画が実現したのではないだろうか。

同じように文化と政策が結びついた例の一つとして、アメリカの「アングル・サム」を見ることができよう。

このように、日米学生会議でのサイト見学を通して、改めて文化が行政を動かす「引き金」たり得る可能性を垣間見ることができた。

f. 発表④ (担当：下吹越)

私は、日本書道を世界に浸透させたいとの思いで、これまで書道をコミュニケーションツールとして多岐にわたる国の方と国際交流を続けている。しかし、彼らとの交流を通して日本書道の本質的な部分が伝わっていないのではないかという違和感を抱いていた。そこで今回は、しばしば「書は人なり」と言われるような、書道における日本人の精神性を考察した。

この議論において、精神性という曖昧なトピックに対して、個々人の持つ多様なバックグラウンドや、思考性、価値観を反映させるために、タレントショーでの書道リレー（一人一画担当して1つの作品を仕上げる）の経験に特に焦点を当てた。これに関し、本会議において特に印象的だった意見は、「あの作品はわざと汚く書いたのか」という意見である。内に秘めることを美とされるような側面を持つ日本文化において、大きな筆で大胆に体を動かして書く、書道に込められた感情の部分には、あまり視点が向けられていないように思われた。その一方で、書き手の感情や思いをダイレクトに紙にぶつける様子に心を動かされたというアメデリもいた。

この要素の1つに、東洋思想と西洋思想の違いが大きいだろうという結論が出た。このことをふまえた上で、異なる思想を持つ人にどのように日本書道の良さを伝えていくべきなのかを考えることが今後の課題である。

■本会議中の議論・活動

a. 京都

京都は日本の伝統文化の中心地とも言える地である。日本側としては当初、この地の利を活かして文化、特に伝統文化についての理解を深めて行く方針を考えていた。はじめの議論で、日本側とアメリカ側の参加者が考える、文化の捉え方が異なることが分かった。日本では文化という言葉には、芸術も当然含まれていて、伝統文化や現代文化などとして、芸術が区分されている。しかしながら、アメリカでは Culture と Art は完全に区別されており、Culture とはより人間の生活における価値観などに近い意味合いがあるというのが分かった。また、京都フォーラムでの有識者のパネルディスカッションは我々の議論に対して、実際に現場で文化に関する課題に取り組む人々の考えや取り組みについて理解することができたという点で大きな影響を与えた。

b. 愛媛

愛媛では、主にこれから具体的な議論を進めていくための個々のトピックを全体で共有した。それぞれが持つ独自の視点を最大限に活かすために、トピックを選ぶ範囲を JASC での生活やレクチャー、フィールドワークなどに限定した。特に愛媛サイトで訪れた松山市や坂の上のミュージアムでの経験が、この後議論する個々のトピックに反映された。

また、文化 RT の特徴として愛媛サイトでは特に、リフレクションタイムの時間を意識的に多くとったことが挙げられる。文化 RT のアメデリの中には、個々の持つ多様なバックグラウンドが、しばしばアイデンティティーの衝突で、精神的に苦しめる場面もあった。我々は、

議論だけではなく、議論の進め方や少しの違和感をリフレクションを通してその都度共有し、文化 RT としての結束力を高めた。

c. 三重

三重県での文化 RT に関わる活動としては、やはり日本の精神性を強く宿している伊勢神宮の公式参拝や、鳥羽の地に古くから根ざす海女文化とのふれあいが挙げられるだろう。また、3日間泊まった宿が日本ならではの旅館だったこともあり、温泉という文化（全員裸、湯船を共有。アメリカは個人シャワーが基本）についても再考する機会を持つことができた。分科会の議論に関して言えば、三重サイトがファイナルフォーラム前のリハーサルを実施する場所に選ばれていたこともあり、ここで発表の枠組みを決定する必要性に迫られた。アメリカ側の Andrew を中心に「こぎれいに発表をまとめよう」とする動きと、いや、それでは発表の意義がない、もっと掘り下げるべきという意見がぶつかり合い、結果的に中庸の意見に落ち着いたが、この時点で分科会としての動きの難しさを各自で痛感することとなった。

d. 東京

京都サイトにてアメリカ側と日本側の「文化」の概念を整理した後、愛媛サイトからは JASC での実体験をもとに各参加者が取り上げたトピックについて一つずつ議論したが、東京サイトでは一通り全員分のトピックの議論が終了した。

その後、似たようなトピックを結合したり、削ったりすることで最終発表の制限時間内に収まるよう調整・整理し、リハーサルやスライド作成に取り掛かった。

最終的なプレゼンテーションでは、日本とアメリカの文化の概念の違いから始め、JASC 中の具体的な経験（松山市のフィールドミュージアム構想、西予市の“伝統的な”旅館など）から学んだ「文化」について発表する形となった。



議論の様子（日本側参加者）

Communication Challenges

• Our definitions of *culture* are very different

- **American side:** culture is everything that constitutes a certain demographic, focus largely on everyday customs we take for granted
- **Japanese side:** culture is both culture and tradition, focusing on traditional artistic cultures of Japan such as *noh* or *shodo*



皆で作ったファイナルフォーラム発表資料

■分科会としての結論・総括

「文化」という言葉を聞いて、あなたは何をおもい浮かべるだろうか。我々が議論をはじめて間もなく直面した壁は、日本とアメリカの二国間にある「文化」の概念に関する認識の違いであった。そのことを身をもって実感した我々はまず、お互いの文化の概念に関する違いを明らかにすることに努めた。ここで初めて、アメリカ人は、文化と社会や政治、人種問題が密接な関係を持っていること、日本人は文化から書道や能などの伝統芸能を想像する傾向にあることを、互いに認識した。定義が曖昧な「文化」について議論しようとするとき、はじめに共通の文化における概念の定義をしようとする我々の試みは、自然な段階のように思える。しかしながら、先にも述べたようにこれは非常に困難の伴うことであった。

しかし我々は、分かり合えないと諦めるのではなく、その違いを明らかにし、お互いの文化に関する認識の差をみとめ、それと同時に、日本人としての文化に対する思考の傾向を客観的に認識することに成功した。このことによって、意見がただ単に、その人から独立された表面的なものとして捉えるのではなく、アウトプットとしての意見の言葉に潜む価値観やバックグラウンド、思考性を含むものとして、立体的に意見を捉えることが可能になった。

同じように、文化の概念の整理の後、特に取り扱った具体的な議論の内容としては、①時代に変化を迫られた「needed」なイノベーションと、自ら人気を得ようと変化した「additional」なイノベーションの違い、②伝統文化を継承しつつも、どのように経済社会に組み込んでいくか、その際を守るべき本質とは何か、③芸術としての文化が行政・政策へどのような影響を与えるのか、④書道という文化から見る精神性、などであるが、ここでも議論は思うように進まなかった。

その原因として、内容の抽象度の違いや、アメリカ側と日本側の議論の進め方の違い（「ゴール」を目指す日本側と、「プロセス」を味わうアメリカ側）などでつまづいたことが挙げられる。しかし、それだけ私たちは様々な価値観をもち、いろいろな「議論」の形が存在することを学べたのではないだろうか。繰り返しになるが、これこそが「日本人としての文化に対する思考の傾向の客観的認識」であり、私たちの大きな学びとなったのだ。さらには、「日本とアメリカの考え方の違い」という二項対立の衝突もあれば、その先にある、国籍をも超えた「一人一人」の考え方の違いを直接感じられたことも大切な気づきである。

このように、「文化の議論」を通じて、私たちは「文化」についてだけを学んだのではなく、コミュニケーションや考え方など、さらに幅広く深い学びを得ることができたのである。

■分科会メンバーの声

▼川崎 明宙

JASCでのRTの経験は自分にとって貴重なものだった。

大学での講義が完全にInputを目的としたもの、取り組んでいる発明活動がOutputを目的としたものだとすると、JASC期間中の活動はその間に位置するだろう。何かの具体的な成果を求めるものではないから、Outputを求めるものではない。また、過度にInputをできるものでもない。体系化された何かを習得するというものではないからだ。

そのどちらでもない、JASCは私にとって最初は気持ち悪いものだった。掴み所がないもの、目に見えた成果やフィードバックがないものである。これは今まであまり、経験してこなかったことであった。ここに参加することは正しいのだろうか、というのは当時よく思っていたことである。

けれども、今だから分かること。それは、この形がないもの自体が自分にとって必要だったということである。なぜその人はそう考えるのか？なぜ、今みんなはこういう方向に流れていっているのか、その背景にはどのようなものがあるのか？それを細かくみて自分なりに理解することがJASC期間における最も大切なことだったと思う。

集団で何かを進めて行く際に自分の考えが全て通るなどということはありません。また、自分には思いもつかないアイデアが他の人から生まれることもある。RTではこういったことの大切さに気づくことができた体験であった。

▼下吹越 愛莉

初めての分科会ミーティングは、日本側参加者の顔合わせとなる春合宿の時に行われました。初めてのミーティングを終えた当時の私は、正直、この環境でやっていけないと思いました。これから一緒に議論をしていく仲間の圧倒的な頭の回転の速さや雰囲気によって圧倒されたからです。しかし、手探りながらも一生懸命にぶつかっていくうちに、この議論にどのように自分が貢献できるのかを次第に考えられるようになり、自分の所属する文化RTという居場所にやっと自分がいていいんだという実感が湧いてきたように思います。議論に限らず、一人ひとりと真剣に向き合ったからこそ、どんなに対話をしても交わらない価値観があるのだと知りました。このことは、自分が日頃どんな価値を重視しているのか、また、自分が思っていることは相手も理解してくれるだろうという考えが自分の頭の中に潜在的にあったのだということに気づかせてくれました。最初は英語力に不安もありましたが、分科会議論内でも外においても、一人ひとりの少しの気遣いと優しさのおかげで、みんなと一緒に達成感を味わうことができました。誰よりも一人ひとりと向き合い、この分科会をコーディネー

トしてくれた文化 RT コーディネーターをはじめとする、文化 RT のみんなには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう。

▼松村 謙太郎

文化 -- それは、あまりにも多くの要素を包摂する。

「それも、文化やんね。でも、あれも、文化やと思うのね。だから、僕たちで議論をいかようにでも料理できる。興味あるトピックは何?……日本人のアイデンティティ?最高。僕はすごく、この分科会をお勧めしたい。」

だからこそ、青山学院で河崎 涼太から熱烈な招待を受けた時、素直に挑戦してみたいと思った。別に、議論がまとまらなくたっていい。ただ、本会議の1ヶ月間、僕は「日本人」を何度も何度も問答して、相対化したかった。全く背景の異なるアメリカ代表団に、「国って何?」と、問うてみたかった。それは、自分が知りたかったからに他ならない。この日本という国を、理由もなく愛する自分の気持ちの正体を、一部でもいいから、解き明かしたい。そんな好奇心に、抗うことができるはずもなかった。

蓋を開けてみれば、予想通り、いや右斜め上のレベルで、議論は困難を極めた。そもそも、事前に日本側が用意した流れが、アメリカ側と全く合致しない。彼らの捉える文化と、僕たちの捉える文化には大きな隔たりがあり、まずはその違いをわかり合う時間に多く議論を割かざるを得なかった。

また、このトピック特有の「曖昧さ」は、英語で語る難しさを特にわかりやすく僕たちに痛感させた。文化は、あらゆるものを包摂する。言うなれば、generalized されすぎたトピックなのだ。捉えどころのない概念のような説明を行うときは、何度も何度も「Tマーク」の応酬があった。第3サイトあたりの、議論中の、両代表団の疲労感溢れる表情とやりとりを、今でも鮮明に思い出せる。

正直、あともう1回分会議の期間が欲しかった。僕たちはファイナルフォーラムに追われ、結論を焦り、全ての要素に触れつつも全てが浅い結論に至ってしまったように思う。2倍の時間があれば、もっとトピックを絞り込み、より具体的な議論が行えたかもしれない。

だが、この不完全燃焼も、また、僕が「文化」をこれからも探求し続ける燃料となりうるのだろうと、今は思う。「形のないものに、形を与える」-- 分科会の議論を通して、僕がずっと志していた思考は、果たして今の僕が生きるための道しるべになってくれている。このタフな、しかし語るに惜しい実りある議論を与えてくれた、日米学生会議のすべての仲間たちに、心から感謝したい。

▼諸星 渚

私がRTでの議論を通じて印象に残っている点は2点ある。

一つは、日本人とアメリカ人の「文化」に対する考え方の違いだ。私たち日本人が「文化」という言葉を聞いた時、能や歌舞伎、書道、日本画といったいわゆる伝統芸能・ファインアートを思い浮かべる。しかし、アメデリたちは「文化」という言葉に対して、言語や多様性、人種といった社会文化的で側面を連想すると言ったのだ。

私たちジャバデリは、本会議が始まる以前には芸術などを中心として議論を進めていたが、その前提を覆すような発見であった。後から考えると、新しい国と古い国、単一民族国家と多様な人種のいる国家といった違いがあるので、文化の概念の違いは当たり前のことかもしれない。

しかし、文化という考え方の違いを肌で感じたことは私にとって大切な新しい視点であった。グローバル化が進む中、文化政策や文化交流といった言葉はよく耳にするが、改めてその言葉の意味をじっくりと考えることが必要かもしれない。相手が考える文化とは何か、様々な文化の議論が行われる今日匂いて、この点を明確にする大切さを学んだ。

もう一つは、議論の本筋とは直接関係していないが、日本人とアメリカ人の議論の進め方の違いである。ジャバデリ側は、議論を始める際、まずはそのゴールや疑問を具体化していた。「〇〇の解決策を考える」、「〇〇という現象が起こったその原因を考える」など、今何に向けて議論を行っているのかを見失わないよう意識するのだ。他方、アメデリ側は単語レベルであっても一つ抽象的なテーマを設定し、そこから発展する議論の過程を注視していた。例えば、「日本人と神道」といったテーマを設定し、各々がその主題に対する意見を述べるうちに問題を発見し、少しずつ議論を形作るといった流れである。

答えを大切にすると日本人と、答えには至らなくとも過程を大切にするとアメリカ人、どちらが良い悪いということではなく、その違いがとても刺激的であった。もちろん、この違いが足枷となり議論が膠着したこともあった。しかし、違いがその議論の違いを認知し、乗り越えることはとても達成感があり、深い学びとなったのだ。

この2点以外にも、沢山のことを学んだRTであった。国も環境も大学も異なる学生が集まり、それぞれの知見を活かしながらディスカッションを進めることは時に難しく、時にワクワクする体験である。RTにて学んだことを糧に、これからの学問や生活にいかしていきたい。

■分科会コーディネーターによる総括

▼河崎 涼太

さあ、感想文を書こう！と言えども、どこから手をつければ良いのか全く見当がつかないというのが、今の正直な気持ちである。やりきったのだという気持ちと虚無感、それに新たなことへの渴望、これらの同居する心が、会議が終わって2週間が過ぎた私の中で依然とある。思い返せば、心の底から悔しかった分科会活動を終えた昨年、特別な思いを持って取り組んできた分科会活動は、あっけなく終わった。それぞれの参加者にとって、文化分科会はどのような場となったのだろうか。

美術に書道、能にポップカルチャーと、素晴らしい個性が集ってキックオフを迎えた当分科会。各々の分野を楽しみ、また苦悩する彼らはとても眩しく、毎回の刺激的なミーティングの時間では、日々のジャスクワークを忘れるほどであった。週ごとに執り行われたミーティングでは、それぞれの近況を共有したり、各研修に向けての議題を設定したり、また本会議が近づくと各々のRTペーパーについての発表を重ねたりするなど、本会議に向けて着実にディスカッショントピックに対する知識やクエスションの蓄積を目指した。

本会議に入ると、一旦議論のペースは落ちたように思う。だが、日米間の「文化」に対するイメージの共有を経て、議論は一層深化を遂げた。7人が集まり、収集しきれないディスカッショントピックを前に、このままでは埒が明かないと、会議を通して皆が感じた違和感や疑問点をトピックとすることとしたのは三重でのことだったか。「伝統とは何か」「文化とアイデンティティの関わり」「書道文化」「本音と建前」「美術と町興しの関係」など魅力的なトピックが並ぶ中、短い時間を縫って議論を重ねたメンバーたちには、心から喝采を叫びたい。だが一方で、様々な問題が惹起して止まなかった当分科会は、「第三サイトで崩壊する」とまで囁かれたこともあった。分科会議論の内外で起こる様々な問題に対応するため、かけがえのない議論の時間を割いて行ったリフレクションの数々。またその中でも忘れられないのは、日本側メンバーのうち2人が、ささやかな口論をきっかけに互いを省み、理解しようとしていた愛媛での時間である。小雨が降りしきる中冷たい地面に座り、（私を入れた）3人で文字通り頭を突き合わせて話し合った夏の夜。自分は何を思い、相手はそれをどのように受け取るのか。年の差を、価値観の差を超えて真剣に理解しようとする二人の間で、眠気と疲労で朦朧としていた私の頭は、一気に冴えていた。

議論はいつだって、難しいものだとつくづく思う。真剣に相手を理解するって言ったって、「相手」が、「理解」がなんなのか、考えれば考えるほどわからなくなる。愛媛でのあの夜は、2人に互いへの理解をもたらしたのだろうか。分科会のメンバーは、議論を通してどのような「理解」を為したのだろうか。議論の結果、互いを理解できなくとも良い、と思う。

ただ、この世に溢れる「文化」という安易な言葉に対してメンバーたちががっぷりと勝負を挑み、その容貌を、意義の欠けらを、少しでも手にできたのなら、または手にできずとも、理解できなくとも、分科会がそのように取り組める場であったならば、コーディネーターとしてそれ以上のことはない。





■□第 6 章

事後期間中の活動報告

第6章 事後期間中の活動報告

【12月】第69回会議報告会 兼 第70回会議説明会

～人生を変える夏、覗いてみませんか～

■概要・目的

毎年冬に行われる日米学生会議の恒例イベント、報告会が12月2日（土）に明治大学にて開催された。お世話になっている方々に感謝を示すとともに、日米学生会議が持つ様々な魅力をこの一日に凝縮してお伝えする場が報告会である。当日は、日米学生会議のアラムナイ、日米学生会議に興味のある学生、日米学生会議にご支援くださった方々、参加者のご家族、ご友人など様々な方にお越しいただいた。また Facebook にてライブ配信することにより来場できない方々に対しても発信することができた。

■スケジュール

【日時】2017年12月2日（土）12:30～17:30

【場所】明治大学リバティタワー リバティホール

【タイムスケジュール】

- 12:00 開場、受付
- 12:30 開演
- 13:10 日米学生会議概要説明
- 13:30 基調講演（講演者：第50/51回会議参加者
原田 曜平氏、山崎 蘭加氏）
- 14:50 第69回日米学生会議報告
- 16:20 タレントショー
- 17:00 第70回日米学生会議概要説明
- 17:30 来場者と日米学生会議参加者との交流（質疑応答）



■各プログラムの詳細

▼開会

一般財団法人国際教育振興会 代表理事の向後純一氏、明治大学学長の土屋 恵一郎氏、第69回日米学生会議実行委員長の塩崎 諒平より挨拶をいただいた。また河野 太郎外務大臣よりいただいたメッセージを以下に掲載する。



▼日米学生会議 OB・OG による基調講演

第50回参加者/51回実行委員であられる原田曜平氏、山崎 繭加氏をゲストにお迎えし、モデレーターを第69回実行委員の有田 彩子が務めた。第50/51回会議当時の思い出をざっくばらんにお話ししていただいた中では、20年経っても変わらない日米学生会議の特徴、魅力などが垣間見られた。また博報堂にて若者研究をされている



原田氏、コンサルティング会社に勤務後現在は華道家として活動されている山崎氏、お二方のキャリアについても伺いました。お二方の素敵なお人柄、息のあったトークに会場は終始笑いに包まれ、質疑応答ではゲストに対して沢山の質問が飛び交った。

▼第69回日米学生会議報告（全体報告）

第69回日米学生会議の報告はパネルディスカッション形式で行われた。第69回会議の参加者である新井 英貴、古賀 彩、野間 康平、松村 謙太郎が登壇、モデレーターを実行委員長の塩崎 諒平が務めた。登壇者の自己紹介にはじまり、第69回会議にどのような思いで取り組んだか、印象に残っていることなどが話された。また終盤には「何が JASC を Life-Changing Experience たらしめているのか」というテーマのもと個性あふれる登壇者それぞれが日米学生会議に対する思いを語った。



▼タレントショー

日米学生会議におけるコミュニケーション手段は言語のみにとどまらない。毎年日米学生会議では本会議中に、タレントショーという参加者が自分の趣味や特技を発表する場を設けている。この度はそうしたタレントショーを再現すべく、第69回日米学生会議参加者である金澤 つき美によるフルート演奏、長谷川 信寿によるマジック、伊藤 江理華によるヴァイオリン演奏、下吹越 愛莉による書道パフォーマンスの説明が行われた。



▼第69回日米学生会議報告（分科会報告）

第69回日米学生会議参加者で「21世紀の都市の在り方と個人の生き方」分科会のメンバーである伊藤 江理華、金澤 つき美、阪上 結紀、戸嶋 寛太が登壇、モデレーターを分科会コーディネーターの齊藤 和平が務めた。分科会とはなにかという説明にはじまり、具体的にどのような議題で議論したか、英語のレベル、議論の進め方、分科会の雰囲気など、分科会活動のリアルが伝わる報告となった。



▼第70回日米学生会議概要説明

2017年8月にアメリカで開催される第70回日米学生会議のテーマ、開催地、分科会、選考試験概要について初めて披露する場となった。第70回実行委員が創り上げてきた会議の構想を発表し、次年度会議がどのようなものになるのかご来場の皆様に伝えた。



【第69回日米学生会議報告会に寄せて河野外務大臣よりメッセージ】

この夏日本で開催された第69回日米学生会議が成功裏に修了し、本日、明治大学で報告会が開催される運びとなりましたことに心からお喜び申し上げます。

今から80年以上も前に日米両国の学生により開始された日米学生会議は、日米間に現存する最古の民間交流プログラムであり、外務省も50年以上もの長きにわたり様々な形でその活動を支援して参りました。

本日は、来年度開催の日米学生会議の説明会を兼ねているとお聞きしています。ご参集の皆様におかれては、日米学生会議への参加を御検討中の方々も多いでしょう。私は、日本の将来を担う若い方々には、日米学生会議のように諸外国の若者と直接対話し議論を重ねることに、是非とも挑戦していただきたいと思っています。自分とは異なる文化圏で育ち異なる価値観を有する人の考えを率直に話してもらい、そしてまた相手には自分の考えを真摯に伝え理解してもらうことは、大変な努力が必要です。しかし、社会に出てからも必ず求められる能力でもあります。多くの人から理解と信頼、そして支援を得られなければ、あなたが考えていることを実現することはできないからです。相互理解、相互信頼を得るための真の対話力が、今求められているのです。

私は、これまで一国会議員として、また就任後は外務大臣として、国内外の様々な価値観や意見を持った方々と胸襟を開いて語り合うことがいかに重要であるかを痛感してきました。そして、自分にとっては、若い頃に米国へ留学し、世界中から集まった、バックグラウンドも多種多様な学生達と共に学び、自分の言葉で率直に議論を重ねた経験が大いに役立っていると自負しています。学生の皆様には、日米学生会議のような有意義なプログラムに挑戦し、様々な価値観に触れ、新しい時代を形作るための経験と能力を身につけて頂きたいと思っております。

平成29年12月1日

日本国外務大臣 河野 太郎



■□第7章

第70回会議 概要

第7章 第70回会議 概要

7-1. 第70回会議 テーマ

異なる価値観との邂逅～対話をもたらす成長への探求～

Exchange and Growth: Nurturing Relationships in a Global Society

「邂逅から対話へ、対話から学びへ」なぜ今”日米学生会議”なのか。創設当時と比べると日本の取り巻く環境は大きく変わり、今やインターネット技術も発達し、虚偽のニュースがアクセス数を稼ぐために流され、それが拡散され信じられてしまうという事象も見られるようになった。オックスフォード英語辞典は、2016年を象徴する言葉として「ポスト・トゥールース」を選んだ。「真実の後」という意味のこの言葉は、世の中が、何が真実なのかではなく、感情や個人的な信念により動いていくことを指すのだという。ポスト・トゥールースの時代には、人々は、情報の真偽を見極める能力を問われている。そんな時代こそ対話による学びは欠かすことの出来ないものである。何もしがらみもない日米を代表する36人ずつの学生が3週間にわたる共同生活を通して、世界が抱えている課題を真剣に討議する。互いに衝突を恐れず、面と向かい本音をぶつけ合うことで、自分とは違う個性や価値観があることを認め、その過程を通して、自己を見つめ変革する。これこそが日米学生会議の醍醐味であろう。日米学生会議を通して、国を超えて生涯の友情を築き、社会の各分野で活躍してきた諸先輩たちの姿、それこそが、この学生会議の意義を如実に物語っている。

全世界を席捲した急速なグローバリゼーションは、同時に社会に様々な対立を生み出した。欧州では中東やアフリカ諸国から移民、難民が殺到したことで、その対応を巡り欧州内に亀裂を生み、イギリスはEU離脱を決定した。アメリカでも同様にグローバリゼーションは経済格差を広げ、その反動として「米国第一主義」を掲げるトランプ政権が誕生した。同政権は米国内の雇用や産業を守るためにTPPから脱退を表明し保護主義的傾向を強めている。

人間誰しも自分とは異なった価値観や信条を持つ人を理解することは難しい。自分にとって心地の良い情報の中だけで仲間意識を強め、異なるグループに懐疑心や敵意を抱きがちである。しかしこのような時代だからこそ、人種や言葉の壁を超えて人と人とが対話を続けることが必要なのではないだろうか。

我々実行委員はみな、本会議を企画するにあたり、この混沌とした時代が生み出している様々な対立を前に葛藤した。価値観は生きる人の数だけ多様に存在し、己の価値観と相入れない価値観を持つ人との対話は困難を極める。しかし、それら一つ一つが素晴らしい学びの機会となる。理想に燃ゆる者、あくまで現実を直視するもの、それぞれが理想と現実の狭間で揺れる。対立した者同士が歩み寄るのは容易なことではない。しかし我々は対話を通して深く内省し、お互いの立場を学びあうことで、その溝を埋められると信じている。対話は邂逅から始まり、そして対話を通じて成長が促されるのである。

7-2. 第70回会議 開催概要

【主催】一般財団法人国際教育振興会

【企画・運営】第70回日米学生会議実行委員会

【会議開催期間】2018年8月6日～2018年8月28日（帰国日含む）

【事業実施期間】2018年4月1日～2019年3月31日

【開催地】マディソン（ウィスコンシン州）・レキシントン（バージニア州）
ワシントンD.C.・ポートランド（オレゴン州）

7-3. 第70回会議 活動内容

▼分科会（Round Table, RT）

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米各5名の学生（実行委員各1名を含む）が議論を重ねる。事前活動では自主的に定期ミーティングを開き議論を重ねるほか、各自の興味に沿い、その分野の第一線で活躍されている方々のもとを訪ねる。本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。以下が7つの分科会テーマである。

- (1) テクノロジーによる社会変革の可能性
- (2) 人間の「精神」を考える～社会における心の健康～
- (3) 今日における働き方と家族の在り方
- (4) 環境と人類～持続可能な共生社会とは～
- (5) 人間社会における宗教の意味
- (6) アイデンティティ～グローバル社会における単一化と多様化～
- (7) 教育の意義と改革

▼フィールドトリップ

分科会の議題や各開催地についての理解を深めるため、政府機関、国連機関、企業、大学、NGO、NPO および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動における訪問研修と同様に、問題の対象となっている現場や現状を実際に体感できる貴重な機会であり、議論に必要な具体的視点を得るために重要な活動である。

▼スペシャルトピックディスカッション

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、多角的な議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見能力や議題設定能力を養うばかりでなく、参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。

▼リフレクション

参加者が一同に集い、3週間の共同生活で、分科会における議論の対立や人間関係の葛藤から生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことにより、参加者間に相互理解が生まれ、信頼構築の一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより、参加者に会議の充実や円滑な運営のために努力していく姿勢が生まれることを目的としている。

▼フォーラム

第68回日米学生会議の各開催地で、サイトテーマに関する問題や日米両国に深く関わるトピックについて、一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や学生を交えたパネルディスカッションなどを行う。これにより、参加者が各開催地で学んだ知見を深め、新たな問題意識や興味を持つ機会になることを期待する。

▼ファイナルフォーラム

最終開催地で行われるファイナルフォーラムでは、3週間の総まとめを行う。主として分科会における議論の内容や活動を発表することにより、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの見解や視点を第68回日米学生会議において得られた会議の成果として社会に発信する。

7-4. 第70回会議 実行委員名簿

■日本側実行委員



長谷川 信寿 (実行委員長)

学習院大学 経済学部経営学科 3年



佐々木 彩乃 (副実行委員長)

九州大学 法学部 2年



伊藤 江理華

東北大学 医学部医学科 2年



押切 彩

明治大学 経営学部経営学科 3年



金澤 つき美

中京大学 総合政策学部総合政策学科 3年



豊坂 竹寿

東京外国語大学 言語文化学部言語文化学科 2年



藤本 ミケイラ

青山学院大学 文学部フランス文学科 3年



李 呂威

国際教養大学 国際教養学部グローバル・ビジネス学科 4年

■米国側実行委員



Emlyn Lee-Schalow (Chair)

Rutgers University



Ethan Mattos (Vice-Chair)

Hobart and William Smith Colleges



Carolyn Hoover

Duke University



Christina Zhou

University of California, Los Angeles



Emika Otsuka

Carleton College



Jacques Chaumont

Williams College



Kitanna Hiromasa

Washington and Lee University



Nicole McNevin

Wheaton College



■□第8章

後援・協賛・贊助・協力

第8章 後援・協賛・賛助・協力

8-1. ご賛助頂いた企業・団体様（順不同）

国際教育振興会賛助会 会員企業様



日米学生会議 賛助企業・団体様



8-2. ご協力頂いた方々

■主催者

一般財団法人国際教育振興会

代表理事 向後 純一

代表理事 伊部 正信

事務局 金野 洋

後藤 明子

参与 稲田 脩

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃久子殿下

会長 橋本 徹

事務局長 伊部 正信

事務局 伊部 亜理子

International Student Conference, Inc

理事長 Kristy Holch

事務局長 Linda Butcher

■後援団体

外務省

国際交流審議官 宮川 学

大臣官房人物交流室

課長補佐 三浦 恵子

村上 浩子

文部科学省

国際統括官 川端 和明

大臣官房国際課長 里見 朋香

大臣官房国際課総務係長 高田 安隆

米国大使館

首席公使 Joseph M. Young

広報・文化交流部 三橋 乃佑里

一般社団法人 日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 渡辺 隆

公益財団法人 国際通貨研究所

理事長 行天 豊雄

公益財団法人 国際文化会館

理事長 明石 康

■広報活動

北海道大学

国際交流課 専門員 石黒 公美
大学院工学院 環境フィールド工学専攻
修士2年 布川 敦士

国際教養大学

企画課 研究・地域連携支援チーム(RCOS)
三浦 登志枝
国際教養学部
グローバル・スタディーズ学科3年
中澤 きなり(第68回会議参加者)

東北大学

グローバルラーニングセンター
国際交流室・国際交流課
工学部 建築・社会環境工学科4年
毛利 涼楓(第68回会議参加者)
工学部 機械知能・航空工学科4年
小濱 和宙(第68回会議参加者)

群馬大学

医学部学事 学生支援課 青木 厚美
国際課 福島 健太

群馬県立女子大学

文学部英米文学科2年 木村 朱里

日米研究インスティテュート

日本オフィス代表 若松 智明

Fulbright Japan

Executive Director Matthew S. Sussman

青山学院大学 国際政治経済学部

教授 武田 興欣

お茶の水女子大学

国際課 丹羽 恵美

学習院大学 国際交流センター 野田 佳代

慶應義塾大学 法学部

教授 奥田 暁代
教授 常山 菜穂子
教授 岡山 裕

慶應義塾大学 外国語教育研究センター

教授 Colin Skeates

国際基督教大学 教養学部

アーツ・サイエンス学科

上級准教授 Stephen R. Nagy
助教 松田 浩道
4年 村井 咲絵(第67回会議参加者)
4年 梅原 彩花(第67回会議参加者)
4年 宇都木 大樹(第68回会議参加者)

芝浦工業大学

大宮学事部 学生課 矢部 みどり

上智大学 総合グローバル学部

教授 前嶋 和弘

多摩美術大学 国際交流室 石田 一郎

中央大学

法学部 政治学科2年 木村 穂乃
(第68回会議参加者)

津田塾大学

学外学修センター
副センター長/特任教授 敦賀 和外
学芸学部 国際関係学科 4年 稲垣 葉子
(第68回会議参加者)

東海大学

国際教育センター 主査 関根 広太
山本 碧

東京外国語大学

副学長 武田 千香
総合国際学研究院 教授 吉富 朝子
英語学習支援センター 井之川 睦美
英語学習支援センター 金子 麻子
佐藤 陽太郎 (第67回会議参加者)

東京大学 本部 国際交流課 東郷 太郎

一橋大学 学務部国際課

学生交流係長 出口 啓介

法政大学 グローバルラーニング課

江原 裕一朗

武蔵野美術大学 学生支援グループ

国際チーム 小出 彩子

明治大学

理事 青柳 勝栄
中野教務事務室 内田 則之
教学企画部 教学企画事務室 藤田 直樹

立教大学 異文化コミュニケーション学部

教授 川崎 晶子

アメリカ大使館後援学生団体 JAZ

新潟大学 広報室

名古屋大学

海外留学室 学生交流課 村山 かなえ

三重大学

理事 鶴岡 信治
副学長・国際交流センター長 堀 浩樹
学長補佐・国際交流副センター長
吉松 隆夫

学術情報部 国際交流チーム

国際交流課長 秋保 聡

係長 井澤 貴代美

コーディネーター 黒田 恵

関西学院大学

経済学部経済学研究科 教授 神崎 高明
文化総部 英語研究部 部長 山口 友規

京都大学 教育推進・学生支援部
国際教育交流課交流支援係 植村 五枝子
国際教育交流課 廣瀬 泰子

同志社大学 スポーツ健康科学部
スポーツ健康科学研究科 采野 正明

立命館大学 BKC 国際教育センター
亀田 直彦・白崎 雄也・植木 泰江

大阪府立大学 国際交流課
栗林 知美・寺迫 正廣

神戸大学
国際部国際企画課 課長補佐 有働 雄二
国際連携推進機構 米州交流室
室長 下村 研一

愛媛大学 国際連携支援部 国際連携課
課長 山内 和美
瀧本 笑子

九州大学
言語文化研究院 教授 中里見 敬
基幹教育院 教授 稲葉 美由紀
学務部 留学生課 波多江 真理子

熊本大学 学生支援部 国際教育課
国際学生交流チーム 端羽 広憲

鹿児島大学 研究国際部
国際事業課 留学生係 友岡 雅子

沖縄科学技術大学院大学 名取 薫
沖縄国際大学 国際交流センター

琉球大学 総合企画戦略部 国際連携推進課

■選考活動

京都文教大学総合社会学部総合学科
教授 島本 晴一郎

国際医療福祉大学 医療福祉経営専攻
教授 高橋 泰

国際ウェールズ環境総研 代表 竹本 秀人

日本女子大学 文学部日本文学科
教授 田邊 和子

日米学生会議 常任幹事 秋間 修

東京学芸大学 名誉教授 金谷 憲

立命館大学 客員教授 今井 義典

東海大学
国際教育センター 主査 関根 広太
山本 碧

同志社大学 スポーツ健康科学部
スポーツ健康科学研究科 采野 正明

日米学生会議アラムナイ

川邊 拓也、川部 好輝、熊添 由季
庄司 玲菜、田勢 奈央、寺尾 昌人
中山 悠太郎、野地 雄太、萩原 夏花
松本 秀也、村井 咲絵、吉田 知史
モンタニョ・ミチエル・ルイス
Hanae Miyake

■春合宿

独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立オリンピック記念青少年総合センター

一般社団法人 パーラメンタリーディベーター
人財育成協会 代表理事 中川 智皓

国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科
上級准教授 Stephen R. Nagy

■防衛大学校研修

防衛大学校

学校長 國分 良成
人文社会科学群
国際関係学科 佐々木 智弘
防衛学教育学群
戦略教育室 平山 茂敏
国防論教育室 井手 達夫
総務部 総務課 社会連携推進室
連推進専門官 常井 重志
143小隊 渡邊 雄二郎

向川 友理絵（第62回会議参加者）

■沖縄研修

【協賛】

那覇商工会議所
沖縄都市モノレール株式会社

【協力】

エルドリッチ研究所
代表・政治学博士 Robert D. Eldridge

第9航空団司令兼那覇基地

司令空将補 川波 清明

第9航空団司令部

総務班長 1等空尉 荒木 啓史

監理部総務班 准空尉 相原 弘介

第三海兵遠征軍司令官及び

在日米軍沖縄地域調整官

Lawrence D. Nicholson 中将

在日米軍沖縄調整事務所長

ジョン ホ・ジャン大佐

在沖米国総領事館 総領事 Joel Ehrendreich

元沖縄県知事 仲井眞 弘多

外務省参与 又吉 進

沖縄タイムス社

編集局 局長 石川 達也

名護市長 稲嶺 進

海上へり基地建設反対・平和と名護市政民主化を求める協議会 共同代表 安次富 浩

辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議
事務局次長 志喜屋 盛隆

沖縄県

知事公室 広報課 主幹 石井 淳一郎
知事公室 辺野古新基地建設問題対策課
班長 新垣 耕
知事公室 基地対策課
調査班 班長 島袋 秀樹
企画部 企画調整課 班長 武村 幹夫

株式会社がちゆん

代表取締役社長 国仲 瞬
教育旅行コーディネーター 平仲 稚菜

沖縄尚学高等学校

副理事長補佐 與座 宏章
中高教頭 金城 英和
高校国語科 豊平 美奈子
高校国語科 百次 智仁

NHK 沖縄放送局 放送部

アナウンサー 中道 洋司
記者 島田 有希子

NHK 佐賀放送局 放送部

記者 市毛 裕史

南の島の建築アドバイザー

医師 城所 望

のぐち社会保険労務士事務所

ファイナンシャルプランナーAFP

野口 安計

名桜大学 国際学群 大城 美樹雄

日米学生会議アラムナイ

下地 邦拓

山田 晃永

ザー・ホアン・ミン

■サイト活動

▼直前合宿・京都サイト

【後援】

京都市役所

【賛助】

三洋化成工業株式会社

【協力】

元全権特命大使 天江 喜七郎

一般社団法人茶道裏千家淡交会総本部

運営企画部 主査 有田 外喜彦

国際部部長 弘田 佳代子

国際部 鈴木 和佳

国際部 Michael Hardy

株式会社のぞみ 藤田 功博

賀茂御祖神社（下鴨神社）

権禰宜 衣笠 崇

祭儀課長 禰宜 清水 洋直

管理部 岡部 訓亮

京炎そでふれ！おどりっつ

京都市

市長 門川大作

総合企画局 国際化推進室

室長 牧 敬二

副室長 山口 ひかり

照沼 健史

総合企画局 総合政策室 大学政策部長

奥井 拓史

公益財団法人稲盛財団

理事 事務局長 経理財務部長 姫田 和仁

事務局次長 事業推進部長 博士（理学）

田中 治雄

事業推進部 広木 清香

金剛龍能楽堂

若宗家 金剛 龍謹

Pellecchia Diego

電通株式会社京都支社

文化事業構想部プロデューサー 各務 亮

同志社大学

学長 松岡 敬

副学長 圓月 勝博

企画課 寺本 正芳

スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学

研究科 事務長 采野 正明

日米学生会議

同窓会会長 今井 義典

同窓会副会長 竹本 秀人

アラムナイ 田勢 奈央

ヴァー・ホアン・ミン

横田 真彩

モンタニョ・ミチエル・ルイス

福助

藪中塾塾長 藪中 三十二

臨濟宗大本山妙心寺退蔵院 松山 大耕

臨濟宗妙心寺派本山塔頭春光院

副住職国際交流担当 川上 全龍

立命館大学 BKC 国際教育センター

次長 植木 泰江

課長 亀田 直彦

白崎 雄也

クラーク・コンサルティング・グループ

代表取締役社長 Clifford H. Clarke

▼愛媛サイト

【後援】愛媛県、松山市、西予市

【協賛】第69回日米学生会議 in 愛媛サポート委員会（以下構成組織）

愛媛大学国際連携推進機構

愛媛県商工会議所連合会

愛媛県商工会連合会

松山商工会議所

愛媛経済同友会

松山青年会議所

(公財)愛媛県国際交流協会

(公財)松山国際交流協会

今治市国際交流協会

松山容器株式会社

(以下役員)

松山市 産業経済部 観光・国際交流課

国際交流担当課長 芳野 昌宏

西予市 総務企画部 総合政策課

課長 藤井 兼人

(公財)愛媛県国際交流協会

専務理事 高岡 亮

(公財)松山国際交流協会

事務局長 福本 正行

今治市国際交流協会

事務局長 片上 正行

愛媛大学 国際連携推進機構

国際連携支援部 国際連携課

課長 山内 和美

愛媛県商工会議所連合会

事務局長 塩崎 桂

愛媛県商工会連合会 事務局長 高橋 章司

愛媛経済同友会 事務局長 川平 明生

松山青年会議所 副理事長 近藤 譲治

愛媛県庁 経済労働部長 菅 豊正

愛媛県庁 経済労働部

観光交流局長 宮本 泉

愛媛県庁 国際交流課長 谷口 敏久

(以下事務局)

愛媛県庁 経済労働部 観光交流局

国際交流主幹 松浦 和仁

国際交流係長 村上 暢章

愛媛県庁 国際交流課長 谷口 敏久

【協力】

愛媛県知事 中村 時広

愛媛県副知事 原 昌史、上甲 俊史

愛媛県経済労働部観光交流局 宮本 泉

愛媛県経済労働部国際交流課

課長 谷口 敏久

主幹 松浦 和仁

係長 村上 暢章

主査 佐々木 比呂

愛媛県東京事務所 所長 田中 英樹

愛媛県営業本部の皆様

愛媛県農林水産部ブランド戦略課の皆様

松山市長 野志 克仁

松山市産業経済部 部長 大崎 修一

松山市産業経済部 観光・国際交流課

国際交流担当課長 芳野 昌宏

前国際交流担当課長 重信 美樹

観光戦略担当 副主幹 高橋 潤一郎

主査 垂水 洋

主事 峯森 恵梨

前主査 上甲 亮介

松山市道後温泉事務所 池田 剛典

松山市総合政策部坂の上の雲まちづくりチ
ームの皆様

松山観光コンベンション協会の皆様

観光ガイドの皆様

坂の上の雲ミュージアム 館長 松本 啓治

日米学生会議アラムナイ 堺谷 真人

大和屋本店 取締役専務 奥村 敏仁

西予市長 管家 一夫

西予市総務企画部総合政策課政策調整係

係長 清家 祐一

橋本 直美

西予市産業建設部経済振興課町並み推進係

係長 都築 卓郎

河野 温

一般社団法人 Zenkon-nex

代表理事 齊藤 正

馬淵 好司

山岸 彩夏（株式会社ライヴス勤務）

日米西予座談会にご参加いただいた皆様

着物の着付け体験をご担当いただいた皆様

明治の授業体験をご担当いただいた皆様

衆議院議員 塩崎 恭久

秘書 早瀬 隆土

愛媛県商工会議所連合会

事務局長 塩崎 桂

松山商工会議所

樋谷 将広

三好 博

高市 貴久

愛媛経済同友会 清水 進

公益社団法人 松山青年会議所

理事長 今城 靖浩

副理事長 近藤 譲治

白石 哲夫

和泉 明子

公益財団法人 愛媛県国際交流協会

専務理事 高岡 亮

村上 太郎

公益財団法人 松山国際交流協会

業務課長 敷村 弥生

愛媛大学

学長 大橋 裕一

副学長 安川 正貴

学長特別補佐（国際）大上 博基

国際連携支援部 国際連携課

課長 山内 和美

瀧本 笑子

社会連携支援部 社会連携課

課長 和田 和敬

坂本 世津夫

教育・学生支援機構

副機構長・教育企画室長 小林 直人

生活協同組合

フードサービス統括店長 浅野 圭司

企画運営パートナー学生

法文学部 2年 尾崎 美和

医学部 3年 萩原 彩

社会共創学部 2年 福永 晃

大学院医学系研究科

地域医療学講座 准教授 熊木 天児

医学部学生

医学部 5年 伊藤 恭

医学部 4年 本田 遼佑

医学部 3年 山手 敦志

医学部 2年 玉井 葉奈

法文学部 3年 豊坂 奈巳

社会共創学部 教授 牛山 眞貴子

社会共創学部

地域資源マネジメント学科 浅海 咲彩

教育学部 教授 池野 修

アカペラサークル「オレンジ」

渉外担当 安原 光里

松山大学 国際センター事務局

次長 阿部 起仁

日米学生会議同窓会幹事長 富川 秀二

愛媛県立松山東高等学校

SGH 事業課 教諭 稲葉 麻衣

愛媛県立宇和島水産高等学校

水産食品科長 鈴木 康夫

伊予鉄道 観光営業課 森野 一成

今治タオル工業組合 専務理事 木村 忠司

コンテックス株式会社

代表取締役社長 近藤 聖司

横山 治雄・美枝子

三洋興産株式会社 芳香事業部

専務取締役 飯尾 健一

日米学生会議同窓会副会長 竹本 秀人

加賀工業株式会社 常務取締役 村上 徹

住友化学株式会社

常務執行役員・愛媛工場長 丹 一志

別子銅山記念館 館長 永井 誠治

新居浜市 企画部秘書広報課

副課長 山本 知輝

新居市教育委員会

事務局長 武方 弘行

関 福生

新居浜市商工会議所

専務理事 秦 誠一

産業振興部 副部長 仙波 学

岡崎 美和・岡崎 安由美・岡崎家の皆様

衆議院議員 三原 朝彦

生命の碧い星 理事長 松崎 修明

【ホームステイにご協力いただいた皆様】

天野 清子、石村 多賀子、片岡 寛人

木下 春馬、栗田 由美子、栗林 幸

佐々木 和枝、杉原 真紀、武安 友里恵

谷口 敏久、對馬 文代、中田 智津子

中田 陽三、永井 紀之、長野 誠

野本 典英、浜川 知子、東岡 幸江

兵頭 美穂、福本 鮎美、堀内 祥子

前谷 泰三、松本 かおり、三好 祐吾

村上 暢章、山岡 傳一郎、山本 真理子

吉田 真也、渡部 千春

▼三重サイト

【後援】三重県、桑名市、四日市市、津市、伊勢市、鳥羽市、多気町、皇學館大学

【共催】(ものづくりパネルディスカッション) 国立大学法人三重大学

【協賛】津商工会議所、四日市商工会議所、伊勢商工会議所、松阪商工会議所、鈴鹿商工会議所、桑名商工会議所、上野商工会議所、亀山商工会議所、尾鷲商工会議所、名張商工会議所、鳥羽商工会議所、熊野商工会議所、三重県商工会連合会、多気町商工会、JA全農みえ

【賛助】株式会社三重銀行、九鬼産業株式会社、住友電装株式会社、三岐鉄道株式会社、日本トランスシティ株式会社、伊勢志摩鳥羽インバウンド協議会、相差海女文化運営協議会

【協力】

三重県 雇用経済部 国際戦略課

青木 智

大平 和輝

八太 淳之介

森田 倫果

山根 菜月

伊勢志摩 鳥羽 扇野の里 扇芳閣

副支配人 大田 浩平

谷口 優太

富山 聡史

三重県商工会議所連合会

神宮司廳

割烹大喜

海の博物館

三重県立相可高等学校

万協製薬株式会社

代表取締役社長 松浦 信男

浅井農園株式会社

代表取締役 浅井 雄一郎

蒼築舎株式会社

代表取締役 松木 憲司

パイロットインキ株式会社

文具事業部 部長 印田 孝雄

執行役員 生産部長 太田 義之

みて株式会社

代表取締役 森口 英智

吉田本家山林部

当主 吉田 正木

四日市公害と環境未来館

四日市市立博物館

六華苑

三重県立四日市高等学校

四日市公害語り部 野田 之一

桑名の千羽鶴を広める会

三重県立桑名高等学校

四日市港管理組合

株式会社プラトンホテル四日市

営業部 宿泊課 五十嵐 康輔

学校法人津田学園

宮澤 正明

鎌田 雄介
奥山 秀朗

日米学生会議アラムナイ
近藤 文樹

▼東京サイト

【協力】

外務省

大臣官房人事課 課長補佐 川口 耕一朗
国際文化交流審官 宮川 学
人物交流室 課長補佐 三浦 恵子

ISC 代表 Linda Butcher

国際教育振興会代表理事 伊部 正信

ハフィントンポスト日本版
編集長 竹下 隆一郎

早稲田大学 国際教養学部 准教授 陳 天璽

12代目 都一中

日米学生会議同窓会

幹事長 富川 秀二
常任幹事 秋間 修
常任幹事 乗竹 亮治

日米学生会議アラムナイ
米本 大河

米国国務省 東アジア太平洋局
日本・韓国担当 Greg Aurit

在日米国大使館

首席公使 Joseph M. Young
広報・文化交流担当公使
Margot Carrington
政治部一等書記官 Jonathan Lee Yoo
Political-Military Affairs Officer
Heather Hwalek
広報・文化交流部 三橋 乃佑里

米国先端政策研究所

上級研究員 グレン・S・フクシマ

青山学院大学

国際政治経済学部 教授 羽場 久美子
国際政治経済学部 教授 武田 興欣
庶務部施設課 朝比奈 由美子

Youth Forum JAPAN 代表理事 山本 東生

日米学生会議アラムナイ

teamLab カタリスト 竹内 正人

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

国立オリンピック記念青少年総合センター

■分科会活動

▼21世紀の都市の在り方と個人の生き方

三重県庁 県土整備部

都市政策課 都市計画班 松本 一彦
伊勢神宮 外宮参道発展会 山本 武士
小布施町 特別職主任研究員 大宮 透

▼国際社会における統治と外交：21世紀のテロリズム

防衛大学校 人文社会科学群 国際関係学科
国際交流センター長 兼 教授 宮坂 直史

▼社会の健康と個人の役割

英国スチュアートロード診療所 澤 憲明

▼報道の倫理

ジャーナリスト 下村 健一

▼マイノリティとマジョリティ：公正公平な社会の実現は可能か

NPO法人京都コリアン生活センター
副理事長 事務局長 南 珣賢

■その他

▼日米学生会議同窓会事務局

日米学生会議常任幹事会 (括弧内は参加回)

会長 今井 義典 (17)

副会長 竹本 秀人 (16)

山田 勝 (18)

梅崎 涉 (19)

岡本 実 (22)

常任幹事 橘・フクシマ・咲江 (22, 23)

秋間 修 (25)

和田 昭穂 (25, 26, 27)

竹内 幸美 (28)

岸田 守 (30)

井伊 雅子 (34)

福谷 尚久 (36, 37)

木ノ上 高章 (36)

武田 興欣 (39)

大塚 雄三 (42, 43)

平竹 雅人 (44, 45)

大和 亜基 (51, 52)

乗竹 亮治 (54, 55)

加藤 道子 (56, 57)

竹内 友里 (60, 61)

幹事長 富川 秀二 (32, 33)

監事 寺田 恭子 (41, 42)

飯田 智紀 (55, 56)

▼日米学生会議同窓会

青柳 勝栄、安藤 歩美、飯島 千咲
 市毛 裕史、稲垣 葉子、井上 裕太
 今井 けい、植田 真衣、宇都木 大樹
 梅原 彩花、大蔵 嶺冠、大谷 慧
 大西 由起、大沼 雄貴、大宮 透、岡崎 栞
 加藤 優一、兼子 莉李那、川口 耕一朗
 河島 慧美、川野 さりあ、川邊 拓也
 川部 好輝、菅家 万里江、木村 穂乃
 木村 優吾、熊添 由季、倉持 あゆみ
 小濱 和宙、小林 勇貴、小松崎 遥平
 古村 大和、堺谷 真人、佐藤 陽太郎
 澤 晃太郎、島本 晴一郎、下地 邦拓
 庄司 玲菜、白石 拓也、杉本 夏来
 鈴木 健司、鈴木 良祐、関口 響
 竹内 智洋、竹内 正人、竹内 友里
 伊達 佳内子、千代 明弘、附田 玄也
 辻村 志帆、寺尾 昌人、中澤 きなり
 中山 悠太郎、野澤 知亜、野地 雄太
 野間 雄大、萩原 夏花、原田 有理子
 東影 喜子、藤井 一衆、藤島 悠貴
 松居 純平、松本 秀也、村井 咲絵
 毛利 涼楓、森田 修弘、森 鞠乃
 モンタニョ・ミチエル・ルイス
 八木澤 龍大、安川 皓一郎、矢島 ショーン
 山田 晃永、吉田 知史、米本 大河
 Hanae Miyake

▼Youth Forum Japan

Youth Forum Japan 会長
 元外務次官 柳井 俊二
 Youth Forum Japan
 代表理事 山本 東生
 Youth Forum Japan
 特別顧問 愛知 和男
 津田塾大学 理事長 島田 精一
 笹川平和財団 特任研究員 渡部 恒雄
 週刊現代 編集次長 近藤 大介
 青山学院大学国際政治経済学部
 教授 羽場 久美子

■ 賛助

▼ 国際教育振興会 賛助会 (順不同)

伊藤忠商事株式会社
株式会社オリエンタルランド
オリックス株式会社
株式会社アルコパートナーズ
キッコーマン株式会社
キャノン株式会社
新日鐵住金株式会社
株式会社セブン&アイ・ホールディングス
禅林寺
ダウ・ケミカル日本株式会社
デルタ航空会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
一般財団法人凸版印刷三幸会
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
株式会社ニコン
日産自動車株式会社
株式会社日本政策投資銀行
日本生命保険相互会社
日本電信電話株式会社
野村ホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
富士ゼロックス株式会社
丸紅株式会社
株式会社みずほフィナンシャルグループ
株式会社三井住友銀行
三井物産株式会社
三井不動産株式会社

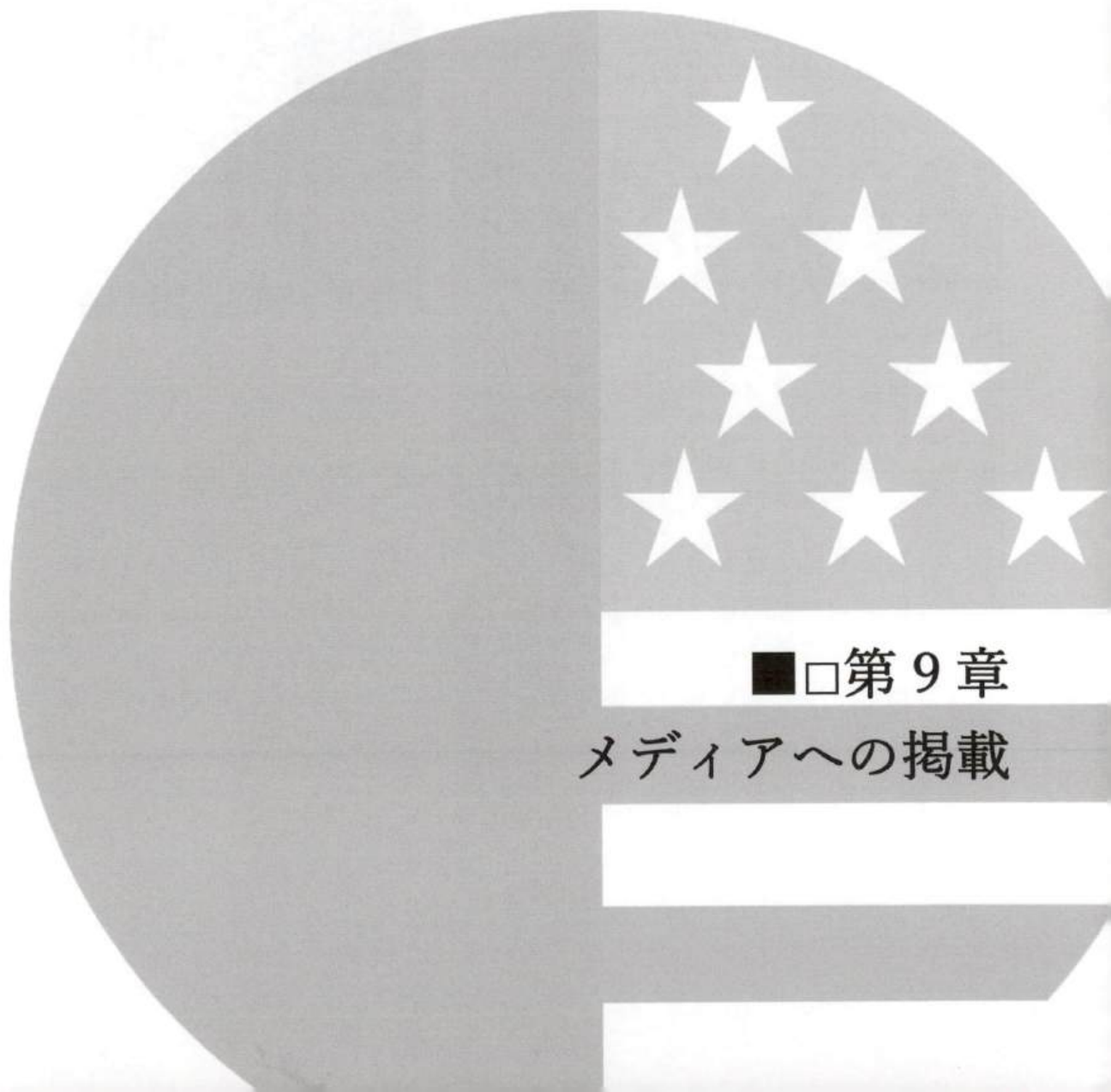
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
三菱UFJリース株式会社
メリックス株式会社
森ビル株式会社
今井 義典、岡本 実、北城 恪太郎
橋・フクシマ・咲江、富川 秀二、橋本 徹
平竹 雅人、山田 勝、和田 昭穂

▼ 日米学生会議 賛助財団・団体 (順不同)

公益財団法人 三菱UFJ国際財団
公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 平和中島財団
一般財団法人 日米協会
大阪日米協会
京都日米協会
アレンマイナー財団
日米学生会議同窓会

▼ 日米学生会議 賛助企業 (順不同)

日本たばこ産業株式会社
ANAホールディングス株式会社
住友商事株式会社
日本航空株式会社
東日本旅客鉄道株式会社
協和発酵キリン株式会社
楽天株式会社



■□第9章

メディアへの掲載

第9章 メディアへの掲載

9-1. 沖縄研修

① NHK 沖縄 7月2日ニュース

②(右)『日米の学生31人 辺野古の海視察

「自然環境の視点大事」

: 沖縄タイムス7月2日朝刊

③(下)『学生30人、基地学ぶ 瀬高浜に

日米学生会議』: 琉球新報7月2日朝刊

日米の学生31人 辺野古の海視察
「自然環境の視点大事」

日米の学生が1カ月間の共同生活で国際理解や学術的な議論を深め合う「日米学生会議」のメンバー31人が1日、名護市辺野古を訪れ、新基地建設が進む海をグラスボートで視察した。写真。大浦湾のサンゴを見つめた国際基督教大3年の渡邊



まりさん(21)は「日米と沖縄の政治的な問題だけでなく、将来を目標えた自然環境の視点から考えることも大事だ」と思ったと話した。同会議は、6月30日から2泊3日の日程で沖縄の基地問題を学んでいる。初日は沖縄タイムス社の石川達也編集局長や仲井真弘多前知事の講話、1日は稲嶺進名護市長の講話を聞いた。最終日は沖縄尚学高校でグループディスカッションを行う。

琉球新報 7月2日朝刊

学生30人、基地学ぶ 瀬高浜に日米学生会議



全国の学生で構成される第69回日米学生会議の30人が1日、名護市の瀬高浜を訪れ、ヘリ基地反対協議会の安次富浩共同代表から新基地建設が行われているK9護岸の作業の様子や、沖縄の基地問題の現状などの説明を受けた。写真。安次富浩共同代表は学生らに「本土にはなかなか届かない沖縄の声を感じてほしい」と呼び掛けた。

日米学生会議は米国と日本

本が学生が両国の問題について学びを深めるため結成した団体。74人が所属する。今回は日本の学生のみで「沖縄研修」を行った。実行代表委員の慶応義塾大学3年の吉川久美さん(22)は「沖縄の現状が詳しく分からなかったが、基地問題は騒音や危険性だけではなく、沖縄戦などの歴史的背景も関わっていることが分かった」と語った。

同団体は、2日には那覇市の沖縄尚学高校で、学生ら30人と「基地問題」や「沖縄の理想とする未来像」について討論会を予定している。

琉球新報 7月2日朝刊

④(右)『平和への思いを活発に意見交換 学生会議、沖尚高生と議論』

: 琉球新報 7月3日朝刊



**平和への思いを
活発に意見交換**
学生会議、沖尚高生と議論
第69回日米学生会議に向け県内で研修している全国の大学生ら30人は最終日の2日、沖縄尚学高校で同高校の生徒と「米軍基地問

題」や「県内と県外との溝」などのテーマで活発な意見交換を行った。写真。九つのグループに分かれて行われた議論の中では高校生から「一人一人が平和について考え行動することが平和につながると思う」や「基地問題だけでなく貧困問題を取り上げるべきだと思つ」など率直な意見が出た。一方、県外の大学生からは「沖縄の『でもあなただけは県外の人でしょ』という排他的な姿勢が(本土との)溝を生んでいる」「既存のメディアにとらわれてはいけない」といった意見も上がった。

⑤ (左)『本土と沖縄 寄り添おう』

学生が辺野古視察 米軍基地問題学ぶ

: 東京新聞 7月9日朝刊

『本土と沖縄 寄り添おう』

学生が辺野古視察
米軍基地問題学ぶ
来月「日米学生会議」

八月の「日米学生会議」に参加する日本側の大学生ら約二十人が米軍基地問題の事前学習のため沖縄県を訪れた。米軍普天間飛行場(宮野崎市)の移設作業が進む名護市辺野古を視察。地元高校生との討論では本音をぶつけた。本番の米国会との議論では、複雑な「沖縄の声」を代弁できる

か。
学生は七月二日、沖縄尚学高校を訪問。「本土と沖縄の溝」をテーマにした討



論で「沖縄の人は「県外の人にはどうせ分からない」と壁をつくっていかないか」と率直に問い掛けた。これに対し高校生は「沖縄では「他県の人は沖縄の

ことを知る気がない」と思っている」と反論。「お互いに歩み寄ることができない」と指摘し、討論は次第に熱を帯びた。立教大三年の小倉匠海さん(三)は討論後、「相手に寄り添って考えられるかが重要だと思つ。未来を良くするためにどうすべきか、建設的な議論ができた」と話した。

学生は沖縄で、在沖米軍トップのニコルソン沖縄地域調整官、辺野古沿岸部の埋め立てを承認した仲井真弘多前知事、移設に反対する

米軍基地問題などについて討議する沖縄尚学高校の生徒と日米学生会議に参加する大学生ら二二名、那覇市で

る稲嶺進名護市長らの考えを聞いた。
日米学生会議は一九四四年に発足し、今年日米の大学生ら約七十人で構成。京都、愛媛、三重、東京で開かれる本会議で約二週間にわたり共同生活をしながら安全保障などについて議論する。

『沖縄の基地は本土で負担を』

沖縄県に集中する在日米軍基地の県外移設を考えるシンポジウムが八日、東京都新宿区で開かれた。各地で「基地引き取り運動」を展開するメンバーが登壇し「基地押し付けは差別。沖

9-2. 愛媛サイト

①(右)『日米学生会議 8月愛媛で 四国初 文化や都市のあり方議論』

：愛媛新聞朝刊3月7日16面

34年から開催されている
日本と米国の間で19
「日米学生会議」の実行委
員会は6日、2017年の

日米学生会議 8月愛媛で

四国初 文化や都市のあり方議論



「日米学生会議」を愛媛県で初めて開催することを明らかにした斎藤和平実行委員(中央)ら—6日午後、県庁

会議の開催地の一つに愛媛県を選び、8月11~17日の日程で実施することを明らかにした。「明治の歴史と地方創生」をテーマに、文化や都市のあり方などさまざまな議論を通して、四国の大学生らが交流を深める。

高松第一元首相やキッシンジャー元米国防務長官が学生時代に参加したことが広く知られる日米学生会議が四国で開催されるのは初めて。17年の第69回日米学生会議自体は8月6日に開幕し、愛媛や京都、三重、

東京の4都府県を開催地に選んで、28日まで行う。愛媛でのコーディネートを務める、8日に県庁で取材に応じた斎藤和平実行委員(九州大3年)によると、会議には日米の学生70人が参加。フォーラムや分科会を通じて愛媛への提言をまとめるほか、ホームステイや農林水産業の現場視察などを検討しており、斎藤実行委員は「新鮮な視点の提言ができることを期待している」と話した。

(加藤大啓)

②(下)『日米学生会議のサポート委設立 来月開催で県内11団体』

：愛媛新聞7月12日朝刊7面(総合)

日米学生会議のサポート委設立

来月開催で県内11団体

各地を巡りながら日本と米国の大学生らがさまざまなテーマで議論する「日米学生会議」の開催地の一つに四国で初めて愛媛が選ばれ、8月11~17日の来県を前に、県内の産官学11団体が11日、サポート委員会を設立した。参加者の食事や宿泊、広報などを支援する。

日米学生会議は1934年に始まり、69回目。今回は8月6~28日、愛媛、京都、三重、東京の4都府県で開催される。愛媛では日米の学生68人が「愛媛の現

状を知り、未来のビジョンを語ろう」をテーマに、松山市でのホームステイや西予市民との対話などに臨み、フォーラムを通じて愛媛への提言をまとめる。愛媛大生が運営に協力する。サポート委は県が発起人となり、松山と西予両市や経済団体、愛媛大などで構成。県庁であった設立式で、県の菅正経済労働部長は



日米学生会議の愛媛でのプログラムを説明する塩崎諒平実行委員長(左)

11日午前、県庁

③(下)『日米学生会議 視察で西予に 地方活性化考える』：8月14日朝刊 総合面



日米学生会議で意見交換する学生と西予市関係者
11日午後、西予市

日米学生会議 視察で西予に

地方活性化考える

日本と米国の大学生らが社会問題や文化、安全保障などをテーマに議論して交流を深める第69回「日米学生会議」(実行委員会主催)の参加者67人が13日、西予市を訪れた。町並み視察や地元関係者との意見交換を通じ、地方の人口減少対策や活性化を考えた。

会議は1934年にスタート。今年は8月の約3週間、日本に滞在する日程で

11、17日は松山市や西予市を拠点とする。四国での開催は初めて。

西予市では国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された宇和町卯之町地区で江戸時代から昭和初期の古い商家が並び町並みを歩き、贈物の着付けを体験。宇和米博物館では、8人のグループに分かれ、市職員やまちづくり関係者に地域の特徴や課題を質問した。

実行委員の斉藤和平さん(23)「九州大4年」は「米国も人口減少に悩む地域があると感じた。西予市の人々の声を聞かせてくれた」と感謝した。米国側副実行委員長のジョン・フォイツァさん(23)「ジョンズホプキンス大高等国際関係大学院2年」は「西予市で小さな神社を訪れた際、言葉に表せないほど感動した」と笑顔。外交に携わるため日本研究を専攻しており「外交で一番大切なのは人と人のつながり。人生を一変させる経験になると思う」と期待していた。

会議は16日午後1時から松山市文京町の愛媛大で、愛媛での活動を総括するフォーラムを開く。無料。

(森田康裕)

⑥ (下)『日米学生会議 愛媛で討論』：愛媛朝日テレビ 8月16日

県内ニュース

ニュース投稿

2017年08月16日(水) 19:25

日米学生会議 愛媛で討論

日本とアメリカの学生が、議論して互いの理解を深める日米学生会議の討論会が、四国で初めて愛媛大学で開かれました。日米学生会議は、1934年・昭和9年に発足した日本初の国際的學生交流団体で、夏休みに日米の学生らが共同生活を送りながら、様々な社会問題について意見を交わっていて、今年は愛媛を含む4都府県を巡っています。16日は、日米あわせておよそ70人の大学生らがパネルディスカッションを行い、愛媛の観光地を巡り、歴史や俳句、サイクリングなどによる地方創生を視察した体験をベースに、地方活性について意見を交わしました。参加者からは、「独自の伝統文化や豊かな自然など多様な魅力が愛媛の良さ」だとして、体験型の観光などで、県外の人に新たな楽しみや幸せの形を提示してはどうかといった意見が出されていました。

⑤(下)『滞在を通して考える 地域振興策など議論 松山で日米学生会議』:愛媛新聞 ONLINE
8月17日 (URL : <https://www.ehime-np.co.jp/article/news201708162957>)

愛媛新聞 ONLINE 2017年
8月17日(木)

ホーム > ニュース > 愛媛 > 愛媛 記事一覧

滞在を通して考える 地域振興策など議論 松山で日米学生会議

2017年8月16日(水) (愛媛新聞)

日本と米国の大学生ら約70人が社会問題などをテーマに議論し交流を深める「第69回日米学生会議」(実行委員会主催)の愛媛フォーラムが16日、松山市文京町の愛媛大であった。学生らは1日からの滞りで感じた愛媛の魅力や課題を振り返り、意見を交わした。



滞在を通して考えた愛媛の課題や魅力について意見を交わしたフォーラム=16日午後、松山市文京町の愛媛大学



YouTube 視聴 URL : <https://www.youtube.com/watch?v=d-7zzyPXnbQ>

⑥(下)『日米の学生が愛媛の魅力で議論』：NHK 松山放送局 8月17日

日米の学生が愛媛の魅力で議論

08月17日 08時48分



日本とアメリカの学生らが、地域の活性化について考えるフォーラムが松山市で開かれ、両国の学生が、愛媛の魅力や課題について意見を交わしました。

このフォーラムは、日本とアメリカの学生どうしの交流活動を進める団体が毎年行っている「日米学生

生会議」のプログラムの一環として開かれ、会場の松山市の愛媛大学には両国の大学生など合わせておよそ70人が参加しました。

はじめに学生らは8月11日から5日間、愛媛県内を視察した際の様子を報告し、松山城を中心に豊かな緑が広がる松山市のまちづくりや、古い建物が暮らしに根付いて残る西予市の町並みなど、印象に残った場面を述べ合いました。

このあと、愛媛の魅力や課題について意見が交わされ、このうちアメリカの学生は、「愛媛は自然が豊かで歴史もある。地元の雰囲気大切にしながら外国人も温かく迎えてくれる」と評価した一方、ガイドブックに載っていない地元の酒蔵で地域の文化や歴史に触れる体験をしたことを踏まえ、「海外からの観光客を増やすにはその土地でしか体験できないことを積極的に情報発信する必要があるのではないか」などと指摘しました。

日米両国の学生たちは、17日からは三重県と東京都を訪れ、地域の活性化に向けた議論をさらに深めることにしています。

9-3. 三重サイト

①(下)『日米学生会議の学生たち 伊勢で神道に触れる』：中日新聞朝刊 8月19日

日本と米国の大学生六十八人が二十三日間の視察旅行を続けながら、さまざまな社会問題を議論する「日米学生会議」の一行が十八

日米学生会議の学生たち 伊勢で神道に触れる



日、伊勢市の伊勢神宮や皇学館大を訪れた。日本人の信仰や思想を、神社や神道を題材に学んだ。

桜井さん(左)から神道の考え方を聞く日米の学生たち＝伊勢市神田久志本町の皇学館大で

参加者からは「神道

は始祖がはっきりしないが、どのように始まったのか」「式年遷宮に費やす五百五十億円はどうやって集めるのか」といった質問が盛んに出た。内宮を参拝し、神宮の博物館「徴古館」も見学した。

44 (大島康介)

日米学生会議は国際教育振興会(東京)の主催。六―二十八日の日程で京都、愛媛、三重、東京を巡っている。県内への滞在は初めて。十九日は鳥羽市、二十日は多気町と津市、二十一日は四日市市と桑名市を訪れる。

学生が県内で学んだことを報告する「三重フォーラム」が二十一日午後二時から、桑名市民会館で開かれる。聴講は申し込みが必要。◎県国際戦略課＝059(224)28

大葬祭展開催!
 8/20(日) 桑名市中央町4-27
桑名愛昇殿
 8/27(日) 四日市市堀本2-1-3
堀木愛昇殿
お問い合わせは
0120-51-5940

④(下)『和の精神世界にふれ 日米学生会議が感想発表』：中日新聞朝刊8月22日



鈴木知事（左から2人目）の司会で意見発表する日米の学生たち＝桑名市のNTNシティホールで

和の精神世界にふれ

桑名 日米学生会議が感想発表

十八日から県内で開く十一日、桑名市中央町「重フォアラム」を開かれている「第六十九のNTNシティホール」は二で、締めくくりに「三回日米学生会議」は二で、締めくくりに「三

国際教育振興会が主催する交流プログラム

で、日米の大学生ら六十八人が参加。六日から京都府、愛媛県を巡ってきた。県内では伊勢神宮で神道、鳥羽市で海女文化など、日本人の精神世界をテーマにし、二十一日は四日市の四日市公害と環境未来館、桑名市の六華苑を視察した。

フォアラムでは鈴木英敏知事の司会で、日米の四人が県内の訪問先で学んだこと、感じたことを発表した。

カリフォルニア大バークレー校四年谷崎仁

さんは、浅井農園（津市）の浅井雄一郎さんとの交流を振り返り「伝統的な農園で革新を図ってきた人。私はバイオエンジニアリング（生物工学）を専攻しており、参考になった」と話した。

鈴木知事は「これからさらに変化が激しい時代になる。変化するものだけでなく、変わらないもの、大事にすべきものにも目を向けてほしい」と述べた。

このほか、伊勢神宮を主題にしたドキュメンタリー映画「うみやまあひだ」の宮沢正明監督、鎌田雄介プロデューサーが基調講演。桑名高の生徒たちが市の名物を紹介する映像や舞の演奏を披露してもてなした。

（遠藤康訓）

■編集後記

297 ページというおそらく過去最厚の報告書、お楽しみいただけたでしょうか。

我々、第 69 回日米学生会議実行委員会は、2016 年 8 月 22 日の実行委員会発足から本会議終了まで丸 1 年間、報告会・報告書まで含めると 2018 年 1 月まで活動してきました。そして、第 69 回日米学生会議、という場は、もう二度と戻ってはきません。思い出も記憶も、どんどんと色褪せていくその前に、消えていかないようにとなんとか今ある記憶を手練り寄せて表現し、後世に第 69 回会議の記憶を残そうと試みたのが本報告書でした。記録を読むことで、後世の人間は、昔の人の目に見えない思考や感情に対して思いを馳せることができますが、今までの人生においてその意義をこれほど深く感じたことはありませんでした。

本報告書を読まれた皆様に、何かしらの思考や感情が生まれて、日々善く生きる糧となりましたら、編集者としてこれほど嬉しいことはありません。そして、たくさんの方の想いがつまった本報告書に宿る魂を感じて、大切に保管していただけたなら、なお嬉しく存じます。

本報告書をお読みいただきまして、本当にありがとうございました。

ご意見・ご感想は以下のアドレスまで：kazuhirasaitoh@gmail.com（齊藤）

第 69 回日米学生会議 日本側報告書

発行月	2018 年 1 月	
編集長	齊藤 和平	
副編集長	吉川 久美	
編集委員	塩崎 諒平	新郷 雅大
	有田 彩子	河崎 涼太
	中川 奈津子	藤本 アベリーノ
校閲	稲田 脩	後藤 明子
発行	日米学生会議 報告書編集委員会 〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-50 一般財団法人国際教育振興会内 日米学生会議事務局	
印刷	北新印刷(株)	

Japan-America Student Conference
Since 1934

主 催：一般財団法人 国際教育振興会

企画・運営：第 69 回日米学生会議実行委員会